

宇茂佐古島遺跡

—宇茂佐第二土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査—



1999年
沖縄県名護市教育委員会

宇茂佐古島遺跡

—宇茂佐第二土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査—

1999年
沖縄県名護市教育委員会

序 文

ここに『宇茂佐古島遺跡発掘調査報告書』を発刊することができ、たいへん喜ばしく思います。

宇茂佐古島遺跡は現在の屋部や宇茂佐の故地として伝えられ、古くからその存在は知られており、特に区画整理直前まで残っていた3つの井戸は、旧正月のカーウガミに古島の子孫たちが参拝に訪れ、歴史のつながりを物語っていました。

今回の発掘調査は、宇茂佐第二土地区画整理事業に伴うもので、平成7年度から実施され、高倉跡と思われる柱穴や畑跡と思われる小穴群などが発見されました。出土した遺物は、15世紀～17世紀の陶磁器が主で、屋部や宇茂佐のムラ移動伝承の時代とほぼ一致することなどが明らかになりました。さらに、「高麗系瓦」と呼ばれる沖縄の古瓦の発見と分析は、未だわかっていない生産地を探すためのよい資料を提供できたと思います。

このように「遺跡」を発掘することは、私たちの祖先の歴史を少しずつ明らかにしていく大切な仕事です。それと同時に、常に遺跡をどう保存するかという課題に直面しているのです。遺跡を発掘し、歴史の重みを知り、さらに未来の人々にその遺跡を保存し、伝えていくことは、今日の私たちに課せられた仕事です。そのためにも本報告書が少しでも多くのみなさまにご活用いただければ幸いに思います。

最後に、この発掘調査に関わった多くのみなさまに感謝申し上げ発刊のあいさつといたします。

平成11年（1999年）2月

名護市教育委員会
教育長 比嘉 敏雄

例　　言

1. 報告書は、平成7年度から平成9年度にかけて実施した宇茂佐古島遺跡緊急発掘調査の内容を記録したものである。
2. 発掘調査は宇茂佐第二土地区画整理事業に伴うもので、名護市宇茂佐第二土地区画整理組合から依頼を受け、名護市教育委員会が実施した。
3. 本書を作成するにあたり、それぞれの専門分野において、下記の方々のご協力・ご指導を賜った。記して謝意を表す。

近世畠跡遺構・・・・・・工楽善道（奈良国立埋蔵文化財センター）
" ・・・・・・安里 進（浦添市教育委員会）
" ・・・・・・呉屋義勝（宜野湾市教育委員会）
石器の石質同定・・・・・・神谷厚昭（沖縄県立博物館）
獸骨種の同定・・・・・・川島由次・小倉剛・仲本政貴（琉球大学農学部亜熱帶動物学教室）
陶磁器の同定／分類・・・金武正紀（那覇市教育委員会）
知名定順（宜野座村教育委員会）
家田淳一（佐賀県立九州陶磁文化館）
藤原友子（佐賀県立九州陶磁文化館）
宮城弘樹（今帰仁村教育委員会）
高麗系瓦の同定／分類・・・上原 静（沖縄県教育委員会）

4. 自然科学による各種分析は、「株式会社パリノ・サーヴェイ」に分析委託を行った。
また、分析結果の比較検討を行うために以下の教育委員会より資料提供を賜った。
浦添市教育委員会・沖縄県教育委員会・勝連町教育委員会・那覇市教育委員会（五十音順）
5. 発掘調査・資料整理などの調査体制については、第1章第1節に記してある。
6. 本書にかかわる図面・写真・遺物などの一切の資料は、名護市教育委員会社会教育課文化財係の資料室に保管してある。
7. 各章の扉の図画は、ていーとくみね（徳嶺朝直）によるものである。初出は、社会教育だより「美」第57号（平成8年12月）から同誌「人」第69号（平成9年12月）掲載中の図画を用いた。

本文目次

序 文	第20節 玉 類	98
例 言	第21節 金属製品	98
本文目次	第22節 錢 貨	99
挿図目次	第23節 木 片	101
挿表目次	第4章 まとめ	102
第1章 経過と概要	付 編	105
第1節 発掘調査経過	第1節 宇茂佐古島遺跡出土の哺乳類の歯について	106
第2節 概 要	第2節 宇茂佐古島遺跡の自然科学分析報告	107
第2章 層序と遺構	図 版	135
第1節 層 序	報告書抄録	178
第2節 遺 構		
第3章 出土遺物		
第1節 土器・土製品	30	
第2節 白 磁	33	
第3節 青 磁	38	
第4節 青 花	51	
第5節 黒釉天目茶碗	61	
第6節 赤 絵	61	
第7節 色 絵	61	
第8節 翡翠釉	61	
第9節 黄釉小皿	61	
第10節 韓国産象嵌青磁	61	
第11節 三 彩	61	
第12節 褐釉陶器	63	
第13節 タイ産陶器	66	
第14節 本土産陶磁器	69	
第15節 産地不明陶磁器	73	
第16節 高麗系瓦	75	
第17節 沖縄産陶器	80	
第18節 石 器	91	
第19節 煙 管	95	

挿図目次

第1図	名護市の位置図	3
第2図	遺跡の周辺地形とグリッド設定図	5
第3図	遺跡周辺の小地名図	6
第4図	宇茂佐古島遺跡周辺の遺跡分布図	8
第5図	琉球の歴史展開図	10
第6図	柱状模式断面図	11
第7図	遺構配置図	12
第8図	井戸跡の平面図及び断面図	13
第9図	FG・HI-22・23 柱穴群平面図	14
第10図	小ピット列群平面及び断面図	16
第11図	小ピット列群①平面図	17
第12図	小ピット列群②平面図	18
第13図	NO-21・22 IIa～IIb層珊瑚砂利敷き遺構 ・地山面小ピット列群③平面図	19
第14図	小ピット列群④平面図	20
第15図	FG・HI-35～37 集石遺構・柱穴群平面図	22
第16図	NO・PQ-17・18 焼土だまりと柱穴群平面図	23
第17図	VW・XY-34・35 柱穴群平面図	24
第18図	NO・PQ-28～31 柱穴群平面図	25
第19図	DE-23～26 炉跡と柱穴群平面図 RS・TU-39 柱穴群平面図	27
第20図	土器・土製品	32
第21図	白磁①	36
第22図	白磁②	37
第23図	青磁①	46
第24図	青磁②	47
第25図	青磁③	48
第26図	青磁④	49
第27図	青磁⑤	50
第28図	青花①	56
第29図	青花②	57
第30図	青花③	58
第31図	青花④	59
第32図	青花⑤	60
第33図	黒釉天目茶碗・赤絵・色絵・翡翠釉 韓国産象嵌青磁・三彩	62
第34図	褐釉陶器①	64
第35図	褐釉陶器②	65
第36図	タイ産褐釉陶器	67
第37図	タイ産褐釉陶器・鉄絵合子	68
第38図	備前陶器・すり鉢	69
第39図	肥前陶磁器①	71

第40図	肥前陶磁器②	72
第41図	产地不明陶磁器	74
第42図	高麗系瓦①	77
第43図	高麗系瓦②	78
第44図	高麗系瓦③	79
第45図	沖縄産無釉陶器①	82
第46図	沖縄産無釉陶器②	83
第47図	沖縄産無釉陶器③	84
第48図	沖縄産無釉陶器④	85
第49図	沖縄産施釉陶器①	87
第50図	沖縄産施釉陶器②	88
第51図	沖縄産陶質土器	89
第52図	沖縄産瓦質土器	90
第53図	石器・石製品①	93
第54図	石器・石製品②	94
第55図	煙管①	96
第56図	煙管②	97
第57図	玉類・金属製品	98
第58図	錢貨	100
第59図	木片	101

挿表目次

第1表	小ピットの直径	15
第2表	土器集計一覧	30
第3表	土器観察一覧	31
第4表	白磁集計一覧	34
第5表	白磁観察一覧	34～35
第6表	青磁集計一覧	40
第7表	青磁観察一覧	41～45
第8表	青花観察一覧	53～55
第9表	高麗系瓦集計一覧	76
第10表	平瓦「大天」銘と格子模様集計	76
第11表	沖縄産無釉陶器観察一覧	81
第12表	陶質土器集計一覧	89
第13表	石器集計一覧	92
第14表	石製品観察一覧	92
第15表	煙管雁首観察一覧	95
第16表	煙管吸い口観察一覧	95
第17表	煙管集計一覧	96
第18表	錢貨観察一覧	99

第一章 経過と概要



第1節 発掘調査経過

1. 経 過

昭和62年度（1987年度）

名護市宇茂佐第二土地区画整理組合設立準備委員会から区画整理事業に伴う文化財の有無の紹介。

昭和63年度（1988年度）

名護市の遺跡分布調査（昭和57／表面採集）において、周知の遺跡である「宇茂佐古島遺跡」試掘調査を行い予想以上に保存の良い遺跡であることが明らかとなった。

平成2年度（1990年度）

遺跡の範囲と性格を把握するために、国・県の補助を得て、範囲確認調査を実施。その結果、「ブルジマ」と呼ばれる谷間に約1万m²にわたり遺跡の範囲が広がっていることが判明し、13世紀から17世紀末頃の陶磁器が多く出土した。また、柱穴も数カ所で見つかり、集落跡が見つかる可能性もあることが想定された。さらに、高麗系瓦が出土し、未だ産地が特定されていない窯跡の発見も示唆された。

平成3年度（1991年度）

前年度に引き続き、範囲確認調査とその成果を示す報告書（『名護市文化財報告書10・宇茂佐古島遺跡－宇茂佐第二土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財範囲確認調査報告書－』1992年3月31日、名護市教育委員会発行）の作成を行った。その中で県内の数カ所から出土する高麗系瓦の胎土分析を行った。

平成7年度（1995年度）

名護市宇茂佐第二土地区画整理組合との協議の結果、遺跡の現地保存は難しく、「記録保存」のための発掘調査を行うことになった。平成7年8月15日協定書を締結し、平成7年度～9年度に調査を実施することになった。

平成7年10月23日に本年度の契約を締結。宇茂佐古島原557番地（1,708m²）を中心に発掘を実施した。その結果、柱穴・集石遺構（用途不明）・溝跡等の遺構と、青磁・青花等の中国の焼物、肥前焼等の本土の焼き物、壺屋焼等の沖縄産の焼き物が掘り出された。それに伴って高麗系瓦が出土した。

平成8年度（1996年度）

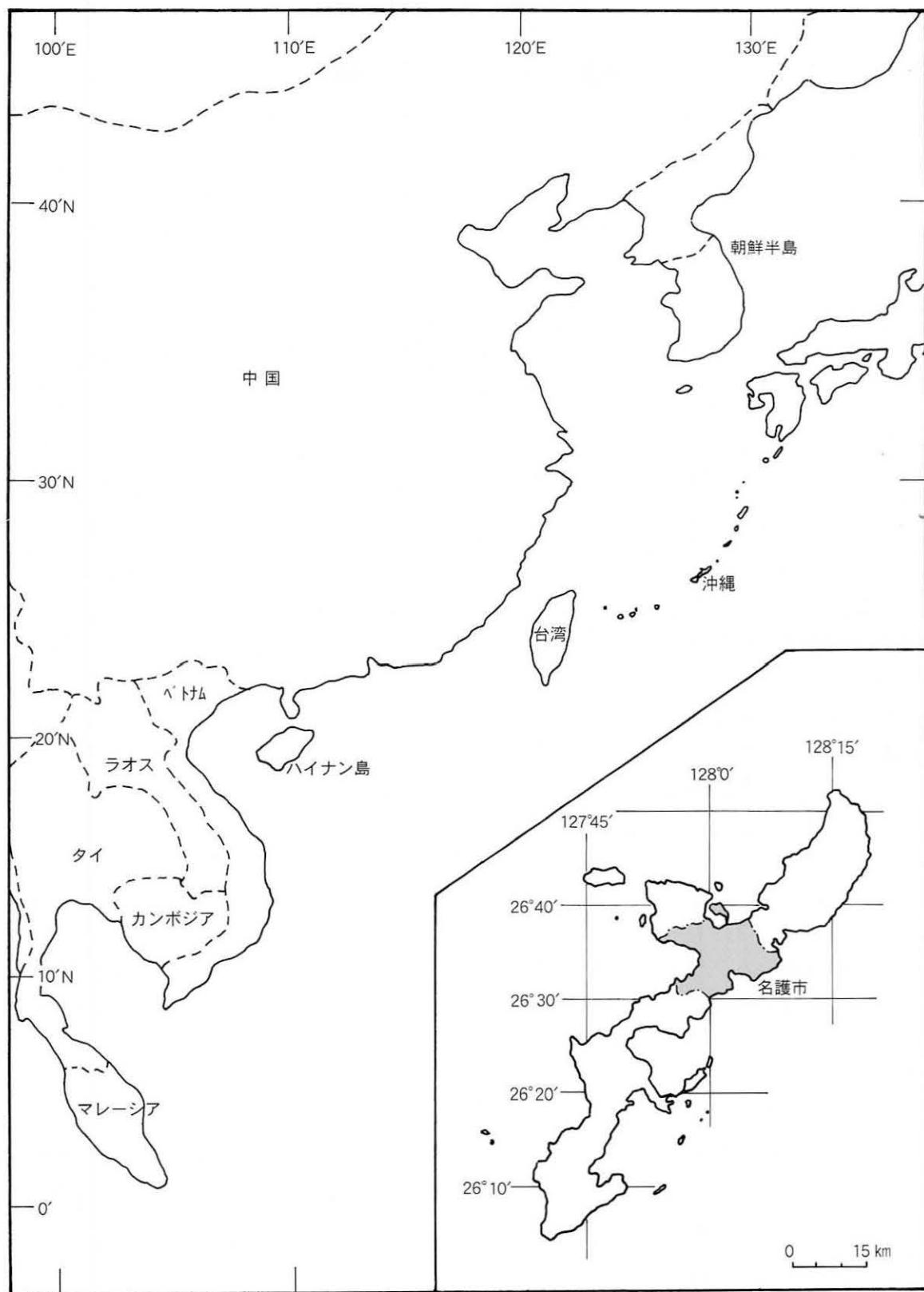
平成8年8月1日に本年度の契約を締結。本年度は昨年度にキビ作を行っていたために実施できなかった宇茂佐古島原570番地（325m²）、571番地（372m²）、572-1番地（538m²）、572番地（1,125m²）、518番地（1,760m²）を中心に発掘調査を行った。その結果、前年度同様の遺構や遺物の出土に加え、高倉の柱穴や遺跡を縦断する溝、そして畑跡が検出された。特に、畑跡は県内で確認されたのが2例目であるが、これほどの面積で発見された例はなく注目を集め、次年度も引き続き畑跡の確認調査を行うことになった。

平成9年度（1997年度）

平成9年7月7日に本年度の契約を締結。本年度は、前年度に出土した近世の畑跡を中心に発掘調査を実施した。その結果、国内及び近隣諸国でも希な畑跡の遺構であることが示唆され、計画の一部を変更し、畑跡の表土をはぎ取り保存・加工を施した。一方で出土遺物の整理作業及び自然科学分析を進め、次年度の報告書印刷に備える。

平成10年度（1998年度）

報告書作成年度。



第1図 名護市の位置図

2. 調査体制

平成7年度～平成9年度の発掘調査と平成10年度の資料整理及び報告書の刊行は、以下の体制で行った。

調査総括：名護市教育委員会教育長 比嘉敏雄
調査責任者：社会教育課長 伊差川政男（平成7～9年度）
平良芳一（平成10年度）
総務責任者：文化財係長 比嘉武則（平成7～9年度）
島福善弘（平成10年度）
総務：社会教育課庶務 比嘉文子
担当：文化財係 比嘉 久・渡口 裕
調査員：上原政昌・岸本利枝・仲宗根 穎
調査補助員：仲村美代子・島袋尚美・徳嶺朝直・津波米子・宮里 牧
調査協力：近世畠跡遺構 工楽善通（奈良国立埋蔵文化財センター）
” 安里 進（浦添市教育委員会）
” 呉屋義勝（宜野湾市教育委員会）
獸骨鑑定 川島由次（琉球大学）
発掘作業員：稻嶺盛功・岸本 勝・翁長福松・田里 宏・宮城千代・大城ウト・比嘉 初
具志堅ヒロ・具志堅シズ・新垣義常・宜寿次信子・具志堅節子・幸地ミサ
徳嶺朝直・佐藤暢明・細川太郎・名嘉真可守・比嘉安清・崎浜茂雄・宮城 篤
古波ひとみ・津波米子・宮里 牧・諸喜田初美・知念 恵・宮城良勝・具志堅 心
仲村 宏・松田優美・上間 瞳・岡山 清・新里あや子・宮城弘樹・仲宗根 穎
宮城貞典・比嘉敬明・平良和男・山川信子・屋部 計
資料整理：岸本利枝・仲村美代子・仲宗根 穎・宮里 牧・徳嶺朝直・津波米子

3. 期間

平成7年度／平成7年10月23日～平成8年3月31日

平成8年度／平成8年8月1日～平成9年3月31日

平成9年度／平成9年7月7日～平成9年9月14日

平成10年度／平成10年11月2日～平成10年2月26日

4. 調査対象面積（調査面積）

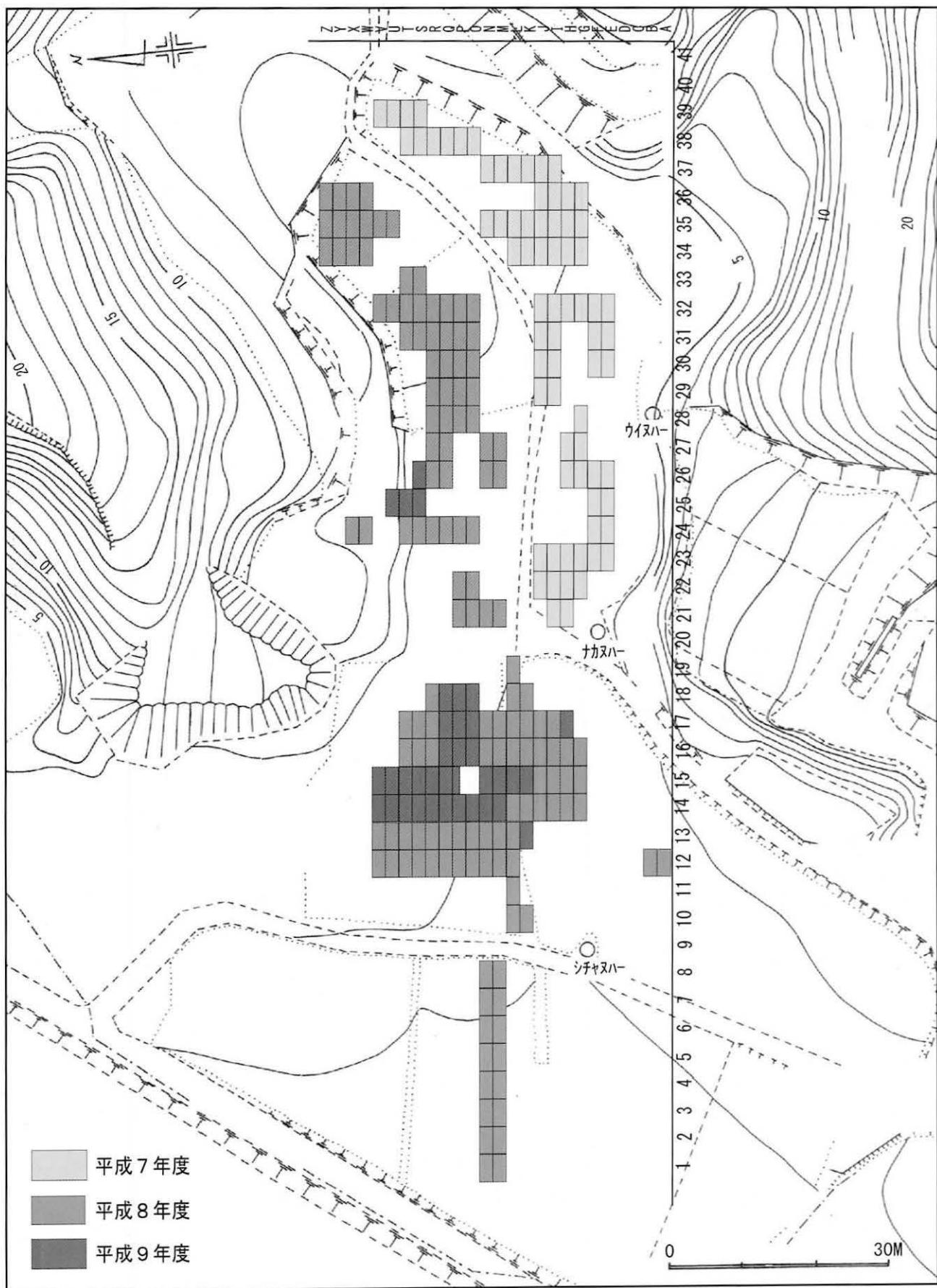
平成7年度＝1,708m²

平成8年度＝4,120m²

平成9年度＝2,885m²

5. グリット設定

平成7年度～平成9年度のグリットは、平成2年～3年の範囲確認調査時に設定したグリットを復元し用いた。南北軸にアルファベットを使用し、南から「A～Z」を付し、東西軸に算用数字を用い、西から東に向かって「1～41」の番号を付した。



第2図 遺跡の周辺地形とグリッド設定図



第3図 遺跡周辺の小地名図 ※網掛け部分が調査地点

- ①トウンチマガイ(唐船曲がり:唐船が停泊したという) ②クガニムイ(黄金森:シーサが祀られている) ③シンドウガニク(船頭兼久) ④ウンサムイ(宇茂佐森:宇茂佐の拝所がある) ⑤ウタキ(御嶽:宇茂佐御嶽とも) ⑥ウラシカンジャヤー(浦添鍛冶屋) ⑦ベーシグチ(?) ⑧シキジン(船着場:山原船などが荷を積みおろした場所) ⑨リングド(?) ⑩メニブルジマ(前古島) ⑪フシヌクラ(後古島) ⑫シチャヌハ(下の井戸) ⑬ナカヌハ(中の井戸) ⑭ウイヌハ(上の井戸) ⑮クラマター(倉又) ⑯フシヌクラ(後の倉) ⑰アジムイシ(アジム石:杵のような形をした岩が川の中にあり、船を繋ぐのにちょうどいい形をしていたという) ⑱ビーザン(火山:風水地名。この山の木を切ってはいけないという) ⑲ナビクブ(鍋のくぼみ:鍋の底のように窪んだ場所) ⑳ドゥルマター(泥又:湿地帯) ㉑ボージガード(坊主泉:坊主が使用してたという泉) ㉒ボージブルヤシキ(坊主古屋敷) ㉓ボージアナ(坊主穴:坊主が住んでいたという) ㉔ブーミチャー(大神:屋部大一門の先祖の墓、古島に住んでいた人々の子孫だと伝える) ㉕ナナシキムイ(七月森:頂上付近に墓がある) ㉖ユフタヤ(河川敷の湿地帯) ㉗ヤブウェーキ(屋部ウェーキ:屋号を久護という) ㉘アジミチヤー(屋部大一門の宗家) ㉙トワヤー(渡波屋:屋部の拝所) ㉚ウイヌヤー(屋号:古島から移ってきたとう家) ㉛ウンサウエーキ(屋号:ウェーキは豪農) ㉜イームイ(石灰岩の岩山) ㉝仲栄屋跡(屋敷跡) ㉞宇永屋跡(屋敷跡:戦後直までそこに住んでいた)

第2節 概 要

1. 位 置

宇茂佐古島遺跡は、屋部川河口にかかる屋部橋から東、屋部川の左岸を約300mさかのぼった所にある二つの谷間を中心に位置している。対岸に屋部小学校、北・東・南は丘陵に囲まれている。北側の谷間を「ブルジマ」、南側の谷間を「メープルジマ」という。北側の谷間は南側の谷間に比べ平坦で大きな谷間になってい、「ウイヌハー（上の井戸）」「ナカヌハー（中の井戸）」「シチャヌハー（下の井戸）」という三つの井戸があり、いずれも採まれている。

遺跡の北東約1km上流に「プーミチャー」と呼ばれる墓地があり、伝承で、先祖が古島に住んでいたというプーイチムン（大一門）が採んでいる。

2. 伝 承

遺跡付近のことを「ブルジマ（古島）」と呼ぶ。今帰仁城の落城に伴い、今帰仁城に関わる一門が逃げ延びてそこに住み着いたという。最初に住んだのは7軒で、現在の屋部が徐々に陸地になり住めるようになったので移っていったという。その一門は現在でも、一門の墓であるというプーミチャーの前で5年に1度牛を屠り共食している。

3. 古文書

屋部の久護家に残る「久護家文書」の中の「元祖歴代日記」に、

（前略）

順治十一年頃

一代 崎山按司長男

一、按司加那志

一、御屋敷ハ宇茂佐古島ニ居住セリ

但字名ハ宇茂佐地頭ト名付ケリ

一、思妹トニ男ハ読谷山村字長浜屋号大殿内ニ越ス

一、按司加那志ヲナザラ御骨ハ浜ノ伊豆味御墓ニアリ

一、御墓ハ大土原ニアリ

但シ按司加那志並ニ高良子共ニ御骨アリ

一、御川、三カ所

但シ宇茂佐古島ニアリ

（以下略）

という記述がある。「元祖歴代日記」は明治17年の日記を昭和5年に写し替えたもの。順治十一年は1654年である。

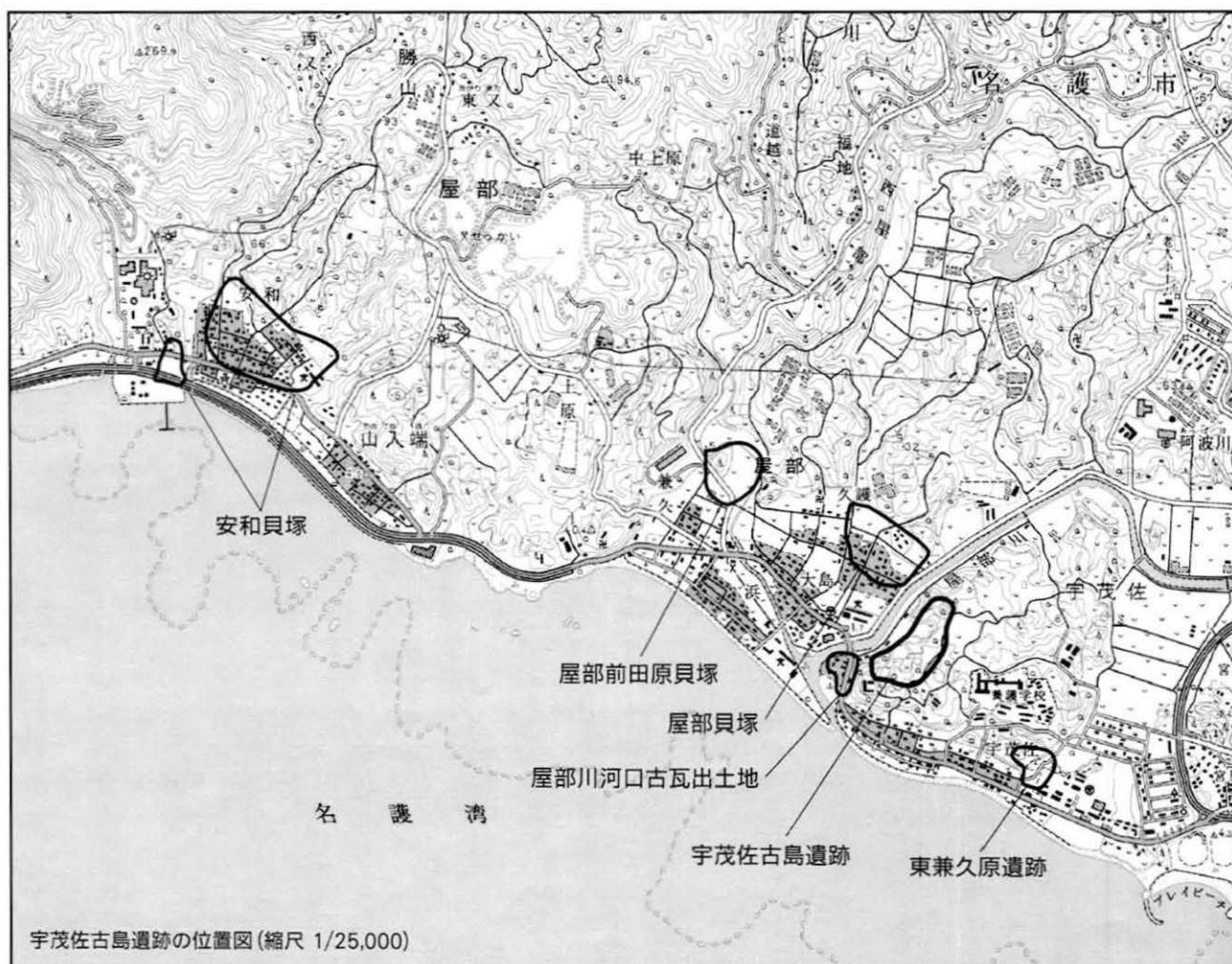
4. 遺跡の発見

宇茂佐古島遺跡が確認されたのは、1979年度（昭和54年度）～1981年度（昭和56年度）に実施された名護市内の遺跡分布調査においてであるが、多和田眞淳氏が記した「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」（『文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会1956年）や、1960年の大川清氏の現地調査で報告されている屋部川河口古瓦出土地は宇茂佐古島遺跡のすぐ近くであり、すでに遺跡の存在は示唆されていたものと思われる。

5. 時 代

宇茂佐古島遺跡からは、グスク時代の土器や中国産の青磁・青花、南蛮陶器、高麗系瓦、沖縄産陶器が出土している。そのことからグスク時代後期～近世にかけての遺跡であろうと推察されている。

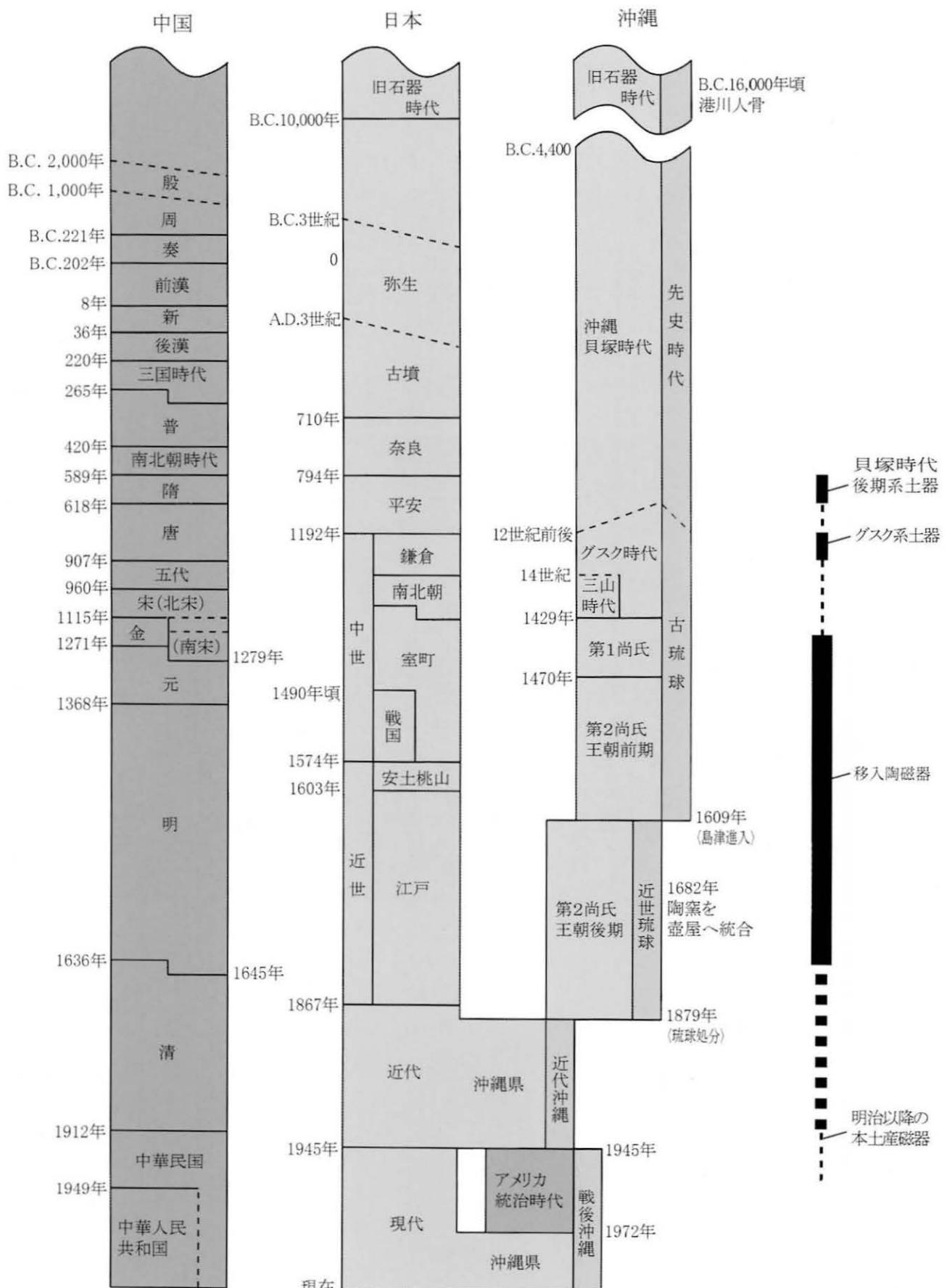
日本史では鎌倉後期・南北朝・室町・江戸前期の時代に相当し、名護市内では屋我地の「シマヌハ一御嶽遺跡群」「屋我グシク遺跡群」、羽地では「瀬洲村跡遺跡」、名護では「宮里古島遺跡」、久志では「嘉手苅村遺跡」がほぼ同時代の遺跡だと思われる。その頃の県内の主な遺跡として、大里村の「稻福遺跡」や、今帰仁村の「今帰仁グスク」などがある。



第4図 宇茂佐古島遺跡周辺の遺跡分布図

第2章 層序と遺構





第5図 琉球の歴史展開図

第1節 層序

これまでの調査の結果、調査地域はキビ畑や休耕地であり、大がかりな攪乱を受けておらず、層序は良好な状態をとどめていた。遺物包含層はⅠ～Ⅲ層に分けられ、更にⅠa・Ⅰb層、Ⅱa～d層に細分された。以下、基本的な層位について述べる。なお、時間的制約があったためⅠa・Ⅰb層はバックホーにより除去したが、場所によっては層が残る箇所もある。また、Ⅱc・Ⅱd層は調査地域全体にみられるのではなく、中央部分RS-33からNO・PQ-21あたりのみに見られる。

Ⅰa層 客土。

Ⅰb層 灰褐色土、耕作土。

Ⅱa層 明褐色土、近世の遺構と思われるものが検出された。

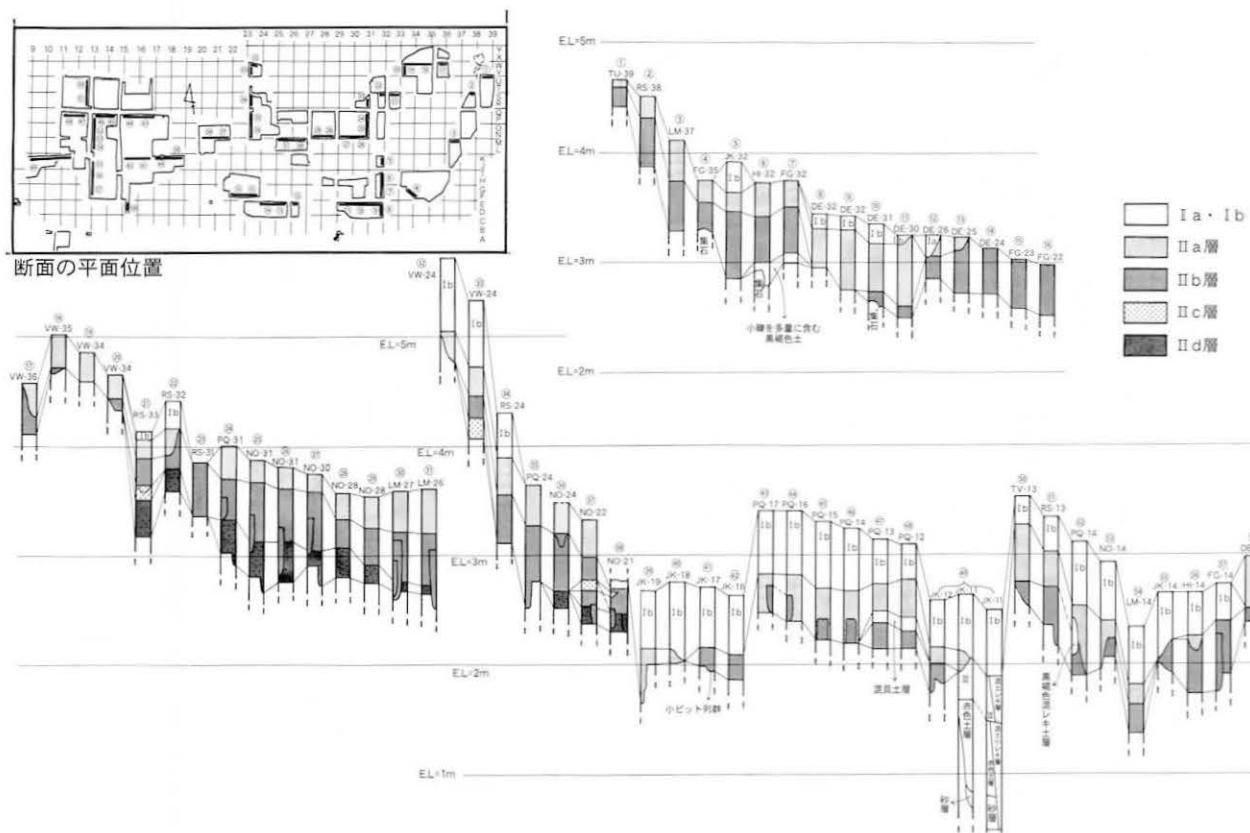
Ⅱb層 黒褐色土、少量の砂が混入する。炭化粒と焼土粒を多量に含む。柱穴などの遺構はこの層から下層にかけて検出される。

Ⅱc層 黄褐色土で赤土がまだら状に混入し、小石が混じる。

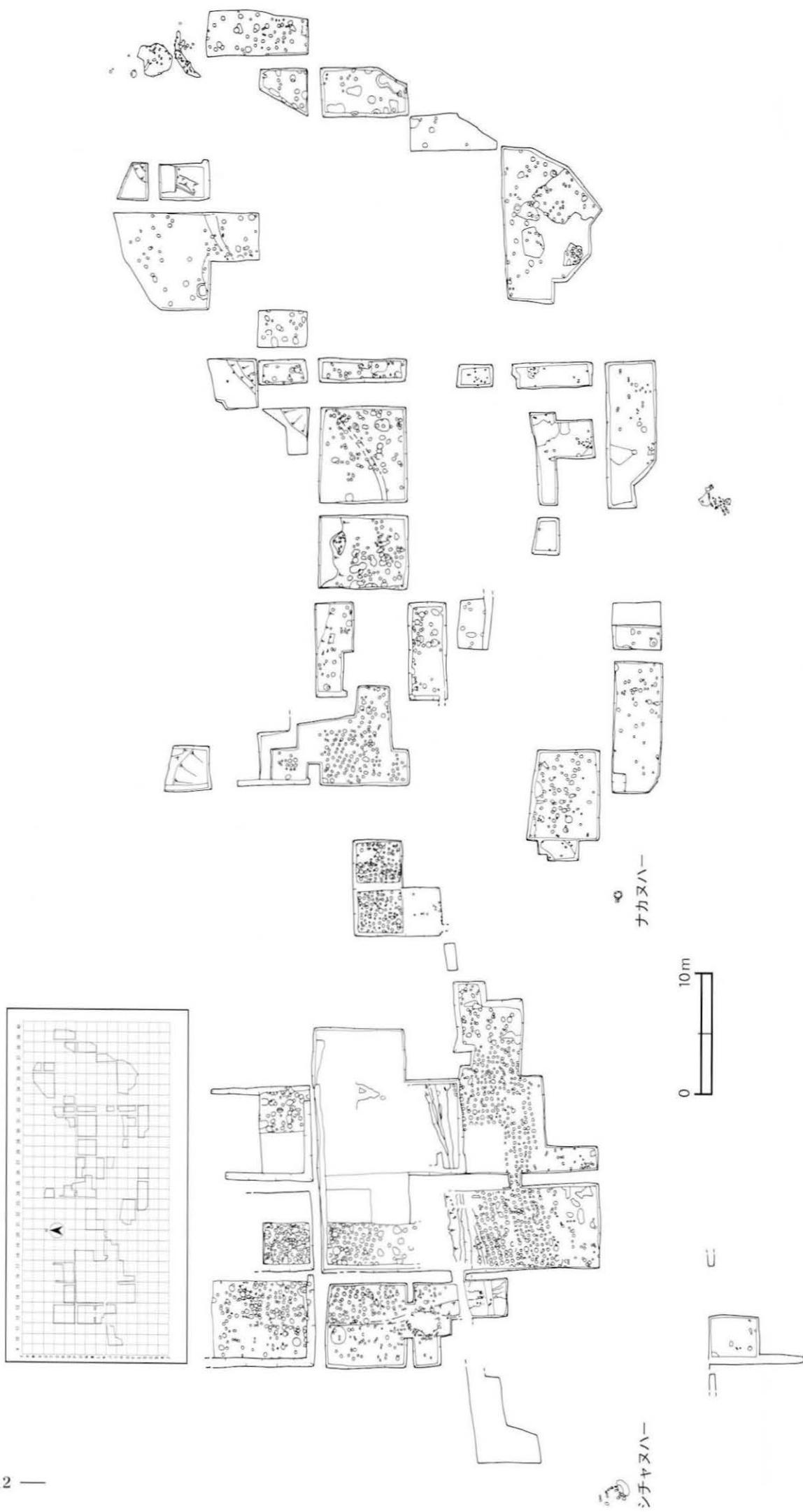
Ⅱd層 暗褐色土、シルト質。細かい砂が混入しサラサラする。

Ⅲ層 いわゆる地山。黄褐色を呈するが、部分的に赤褐色となる。シルト質。

各地域の層序の堆積状況は、第6図の「柱状模式断面図」の通りである。



第6図 柱状模式断面図



第7図 遺構配置図

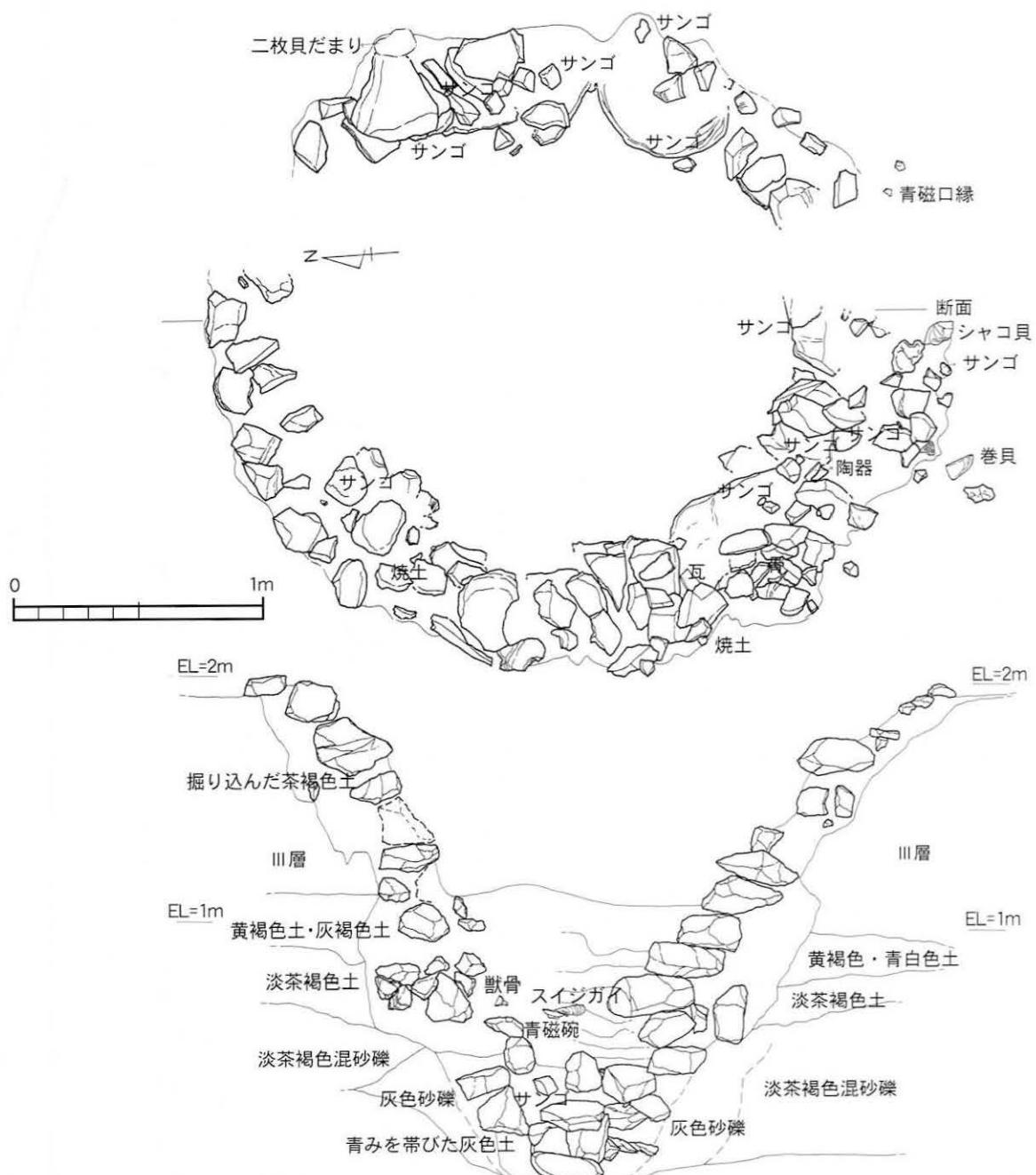
第2節 遺構

1. 井戸跡

直径は南北3m、東西2.7mのほぼ円形を呈する。深さは2.1m。地山を掘り込んで底から壁面にそって石を積み上げている。断面はV字形を呈する（断面図 第8図）。

石は石灰岩塊主体であるが、サンゴ石やチャートなどもみられる。これらの石はすべて自然石で、拳大のものから30cm前後のものがある。井戸口には50cm前後の比較的平らな踏み石を並べ、その周囲に小さな石を入れてある。井戸跡から検出された遺物は陶磁器や獸骨、バーキ（編み物製品）、木片で、多く見られたのは貝類であった。これらは井戸が破棄されたのちに覆土といっしょにまぎれ込んだと思われる。

この井戸は地山を掘り込んでいるが、平面の掘り込み線、その周辺のプラン、井戸内の断面などをみると、小ピット列群のⅡ b層より若干新しく、Ⅱ a層の頃のものと思われる。また、井戸跡の周り南北方向の溝状遺構は井戸に伴うものではなく、小ピット列群に伴うものと思われる（平面図 第8図）。



第8図 井戸跡の平面図及び断面図

2. 瑞珊瑚砂利敷き遺構

砂利・サンゴ枝・貝類がびっしりと敷き詰められており、固く引き締まっている。発掘範囲内では、FG・HI-21 (第9図)、NO-21・22 (第13図) のみから検出され、長さやどの方向に向かっているかは判別不可能である。

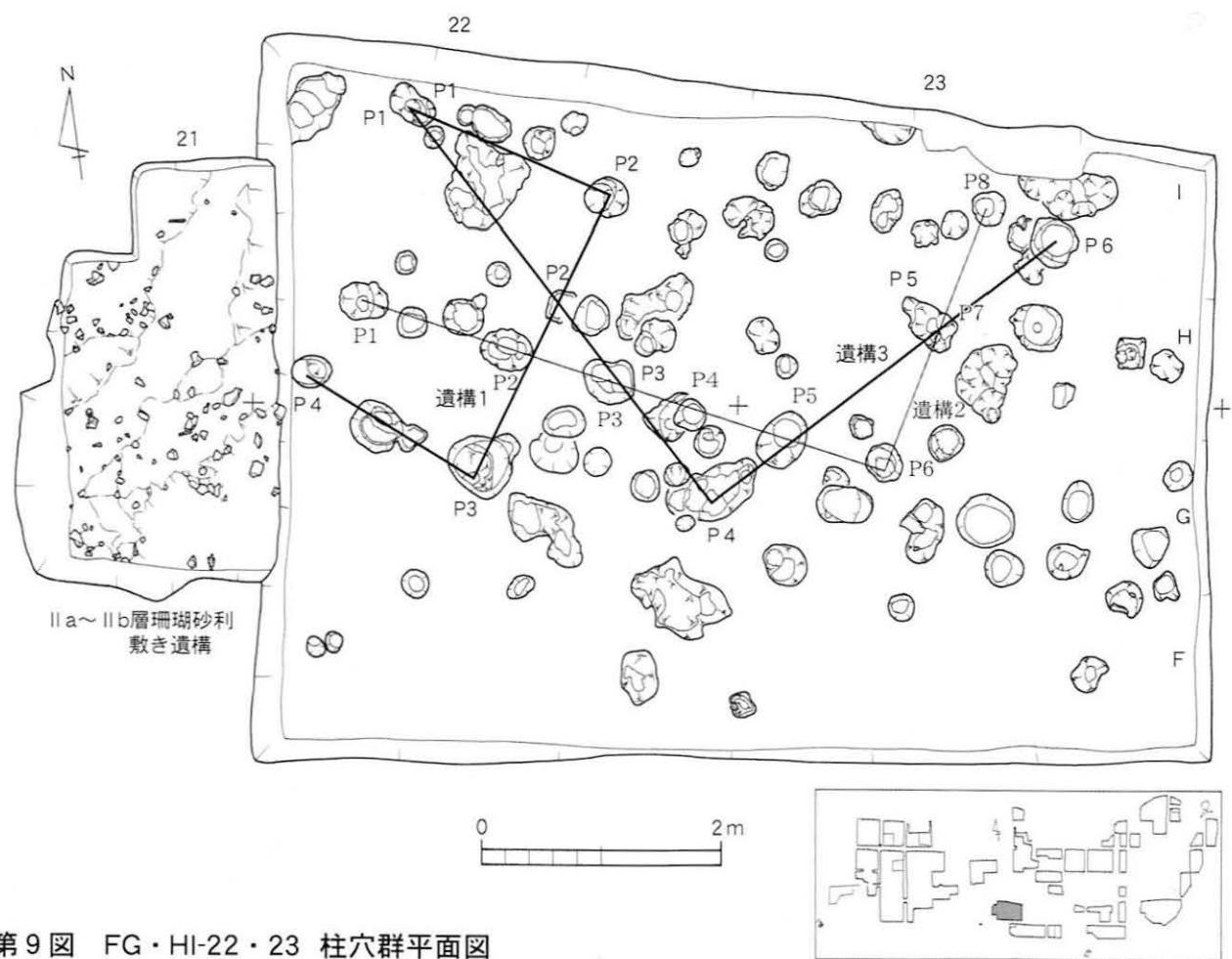
層序や遺物などより II a b 層の頃で、17世紀ごろの道と思われる。

FG・HI-21のサンゴ砂利敷き遺構の下層からは第9図のように柱穴群が現れた。その中で3基の遺構が検出されたが、3基とも完全な形は求められなかった。

遺構1 4コの柱穴がみられ、長方形の建物が想定される。P4のみ極端に浅い。

遺構2 8コの柱穴で長方形をなし、検出されたプランの中で最も大きなものである。

遺構3 6コの柱穴がみられ、ほぼ正方形を呈する。



3. 小ピット列群

発掘範囲中央より西側へ広がる（第6図）。グリットはFG～TU-26～12。約660個の小ピットが検出された。深さ6～20cm、直径20～30cm余り（第1表）の円形状や不定形をなすが、細かく観察すると、一角が10cm前後の多角形となっている（第10図）。これは10cm前後の直刃耕具で垂直に掘られたためと思われる。底面はほとんどが平坦であるが、まれにU字形あるいはV字形の形のはっきりしないものがある。V字のものは一辺がほぼ垂直に落ち、その下部から底面は無作為になる。これは耕具（鍬かヘラ）入れ口とその引き寄せた痕と考えられるが、耕具による引き寄せはピット内におさまる。小ピットは6～28cm幅できちんと並んで列をなし、この小ピット列がある程度整然とならんでいる。すべて一定方向ではなく列の向きが異なる。

この遺構は住居に接した場所に形成され場所によっては溝で仕切られる。層序をみるとⅡb層下部（パリノ・サーヴェイの細分によるとⅡb-3-1の灰色粘土質シルト）より地山まで掘り込まれている。これらのことや遺物などから15・16世紀ごろの遺構と思われる。また、この小ピット列群は、水路・畦畔・独特的な土壤・水平な床面など「水田遺構の特徴」がみられないことより「畑遺構」の可能性が高い。しかし、残念ながら、鍬・ヘラなどの耕具類は出土していない。

以下、各地区ごとに特徴を述べる。

① NO・PQ・RS-12～14の遺構（第11図）

北北東～南南西方向の列が4列確認され、それ以外は西北西～東南東方向に延びる列が24列見られた。両方の列の分かれ目はピットがかさなり合って様相がはっきりしない。

RS・TU-12・13では南北の溝によって仕切られる。南側は自然に数が減り、消滅し、東側は未発掘のため不明である。

② FG・HI・JK-14～18の遺構（第12図）

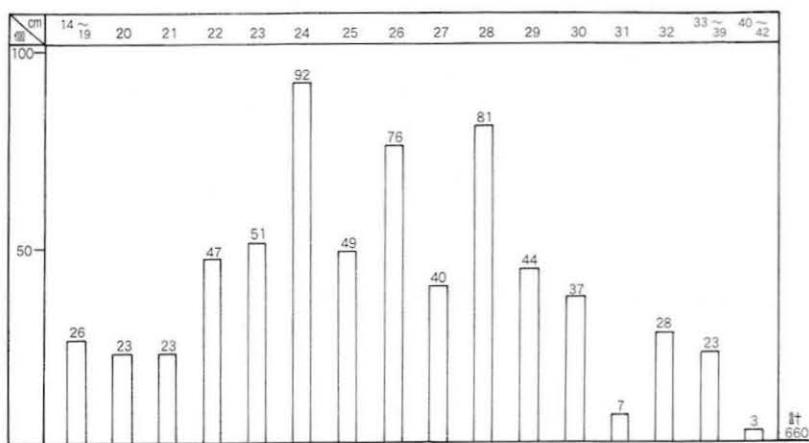
北～南方向と東方向の列がみられる。前者は12列確認され、JK-18あたりでピットの数が減少し、列の終わりとなる。後者は17列みられるが、断面観察用あぜを境に西南西方向に向いている。その終点も他と同じようにピットの数が減り終わっている。北側は東西の溝によって仕切られ、南側は中途半端な終わり方になっているが、それは断面でみられるようにピット列群の終わるあたりから緩やかに上がって山の斜面になっているためであろう。

③ NO-21・22の遺構（第13図）

調査範囲が小さいためグリット全面に小ピット列群がみられる。そのためピットの広がりは把握できない。住居柱穴につぶされた面が多いが、8列確認でき、方向は西北西～東南東で一定している。

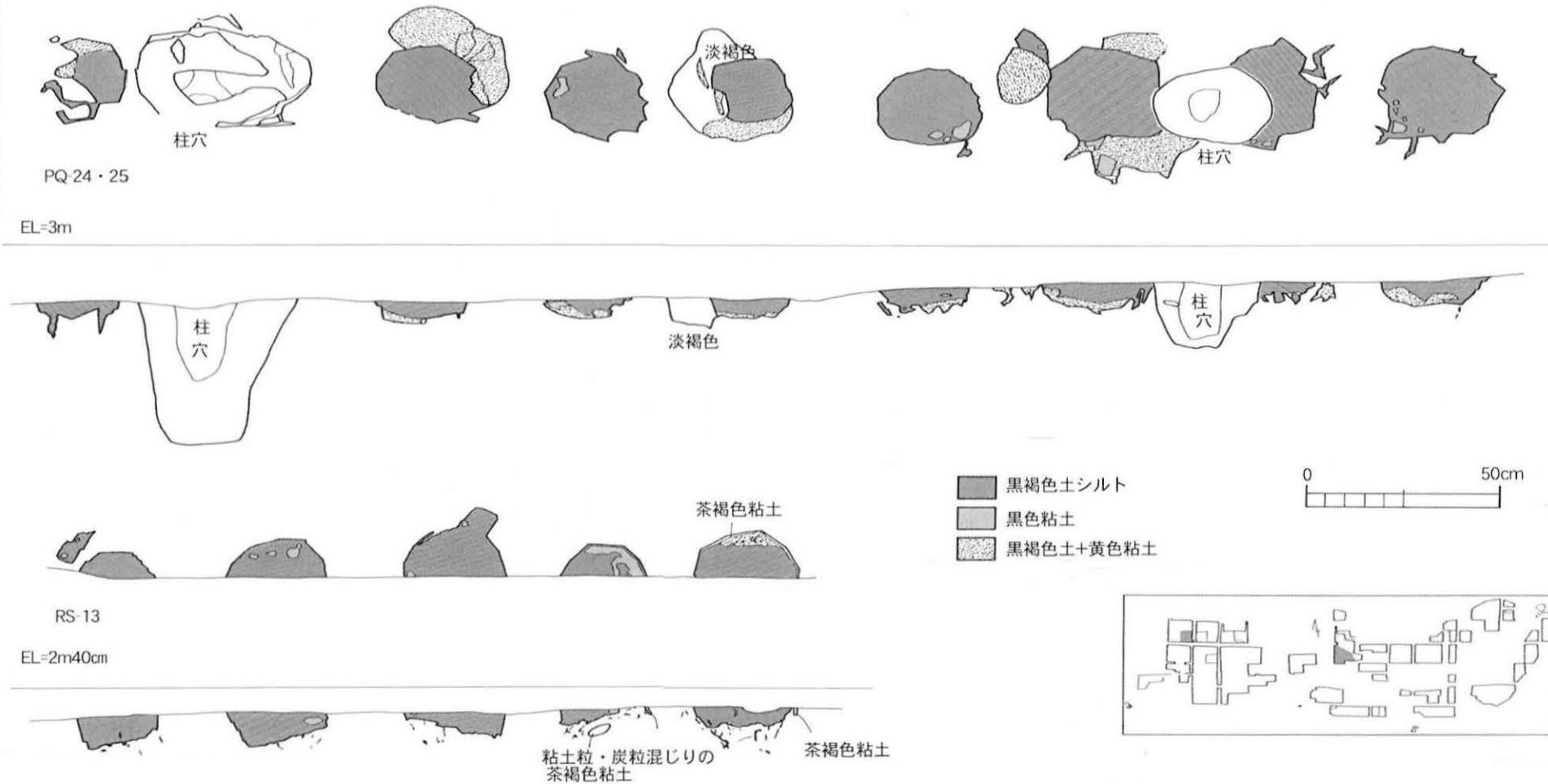
④ NO・PQ-24～26（第14図）

北西～南東方向の列が11列みられる。グリット内で北から南にいくにつれて南側の列が北西～南東から西～東方向へ、山の斜面にそういう形でカーブしている。ピットの広がりは北・東・南側は数が減り、自然に終わるものと思われる。西側はNO-21・22から続いている可能性がある。



第1表 小ピットの直径（東西軸を計るが、計測不可能なものは南北軸を計る）

第10図 小ピット列群平面及び断面図

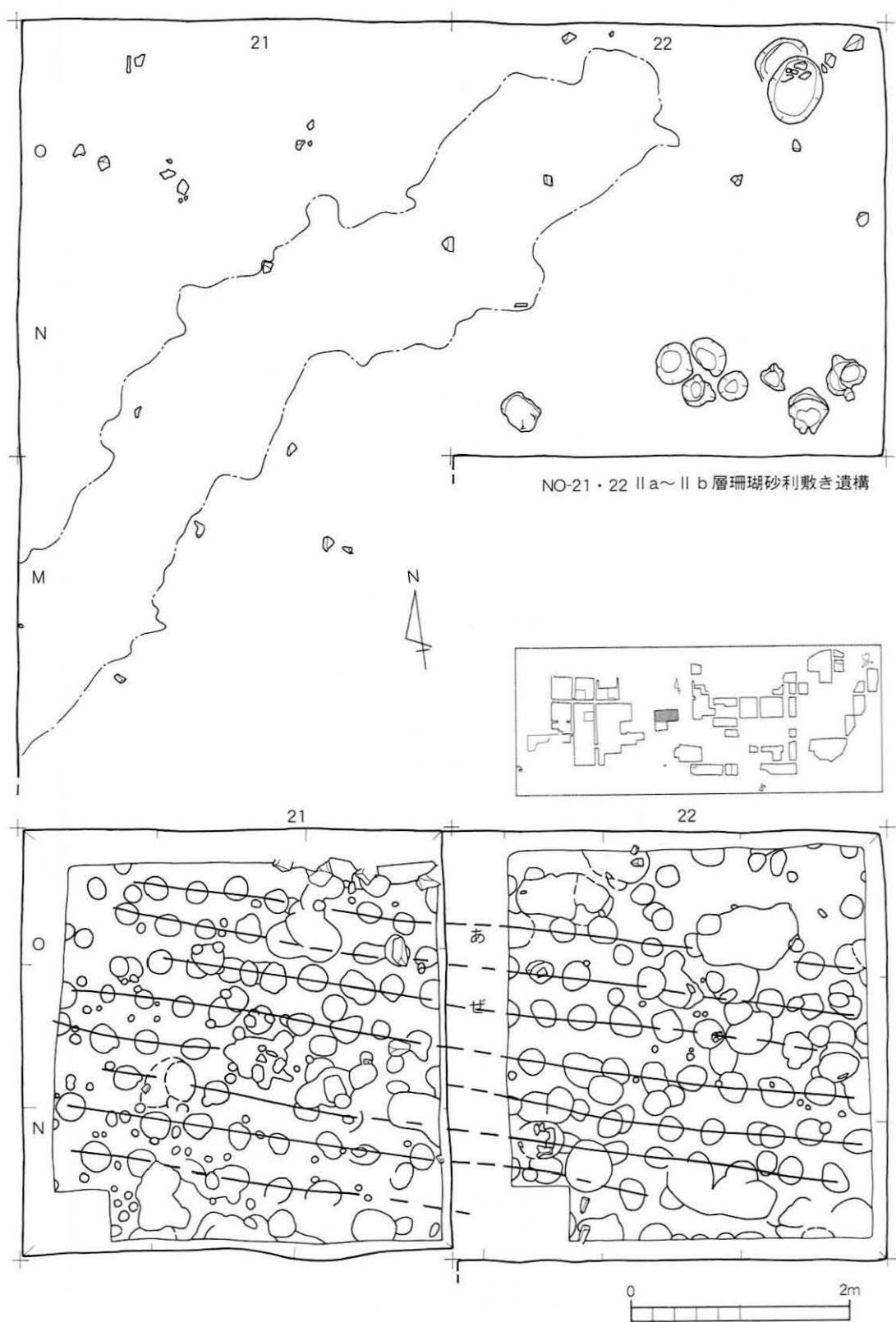


第11図 小ピット列群①平面図





第12図 小ピット列群②平面図



第13図 NO-21・22 IIa～IIb層珊瑚砂利敷き遺構・地山面小ピット列群③平面図



第14図 小ピット列群④平面図

4. 集石遺構 (第15図)

調査区の南東側一帯の山のふもとに自然の石灰岩塊を無造作に積んだ場所が検出された。南東側の集積は拳大から大きなものは50cm程の自然石が約30cm程の厚さで積まれる。傾斜面に沿って延びているようである。またこの集石より数メートル南西側の集積は、前記のものに比べ、小規模で自然石も拳大以下の小さいものばかりである。集石は平坦で10~15cm程の厚さがみられる。双方ともⅡb層時代のもので、地山面にそのまま石を積んだようで、地山面への掘り込みなどはみられなかった。また、集石内は土の混入や遺物などみられない。しかし、HI-36の集石直上より千枚岩の多量に混入された器壁の薄いグスク系土器が出土している。性格不明。

また、集石遺構の北東側に柱穴が集中してみられる。その中で北西-南東に長軸をもつと思われる長方形の建物跡が検出された。柱穴は数が少なく、切り合ったものも少ない。柱穴の大きさは28~43cm、深さはP1~P4が41cm、56cm、43cm、5cm、65.5cm、P6が42cmと深く、他の2基はP7が16.5cm、P8が24cmと比較的浅い。

径間は左記のとおり。

径間 (cm)	P1P2	P2P3	P3P4	P4P5	P5P6	P6P7	P7P8
113	113	103	152	152	148	126	

遺物はP7の柱穴より鉄製品、青磁、動物の骨が出土した。またこの遺構と若干かさなるような3基の柱穴が並ぶが、軸方向が東西向きとなる。調査区内に対応する柱穴がないため、北側にプランが続くと思われる。柱穴の大きさは40~43cmほぼ同形で、深さはP1-29cm、P2-19cm、P3-55cmを測る。径間はP1・P2で158cm、P2・P3で170cmである。

5. その他の遺構

発掘調査区のほぼ全面から建物の柱穴が多数検出された。Ⅱb層から出始めて、地山面までみられる。何度かの建て替えが予想され、柱穴間の距離は等間隔ではなく、明確にその規模・プラン等を把握するのは困難であった。

① NO・PQ-17・18焼土だまりと柱穴群 (第16図)

時間的制約のため、Ⅱb層より掘り込まれた柱穴群の調査はNO・PQ-17・18のみであった。わずかな範囲であったが、4基のプランが確認された。

遺構1 7基の柱穴で正方形状にみられる。

径間 (cm)	P1P2	P2P3	P3P4	P4P5	P5P6	P6P7P
175	180	148	180	178	234	

	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7
柱穴直径(cm)	22	24	22	26	26	18	19
深さ(cm)	29	30	25	26	35	54.5	11

遺構2 6基の柱穴で長方形の建物が想定される。

径間 (cm)	P1P2	P2P3	P3P4	P4P5	P5P6
323	245	212	214	212	

	P1	P2	P3	P4	P5	P6
柱穴直径(cm)	31	22	22	34	22	23
深さ(cm)	49.5	25	25	30	35	21

遺構3 6基の柱穴で長方形の建物が想定される。

径間 (cm)	P1P2	P2P3	P3P4	P4P5	P5P6
206	205	293	197	425	

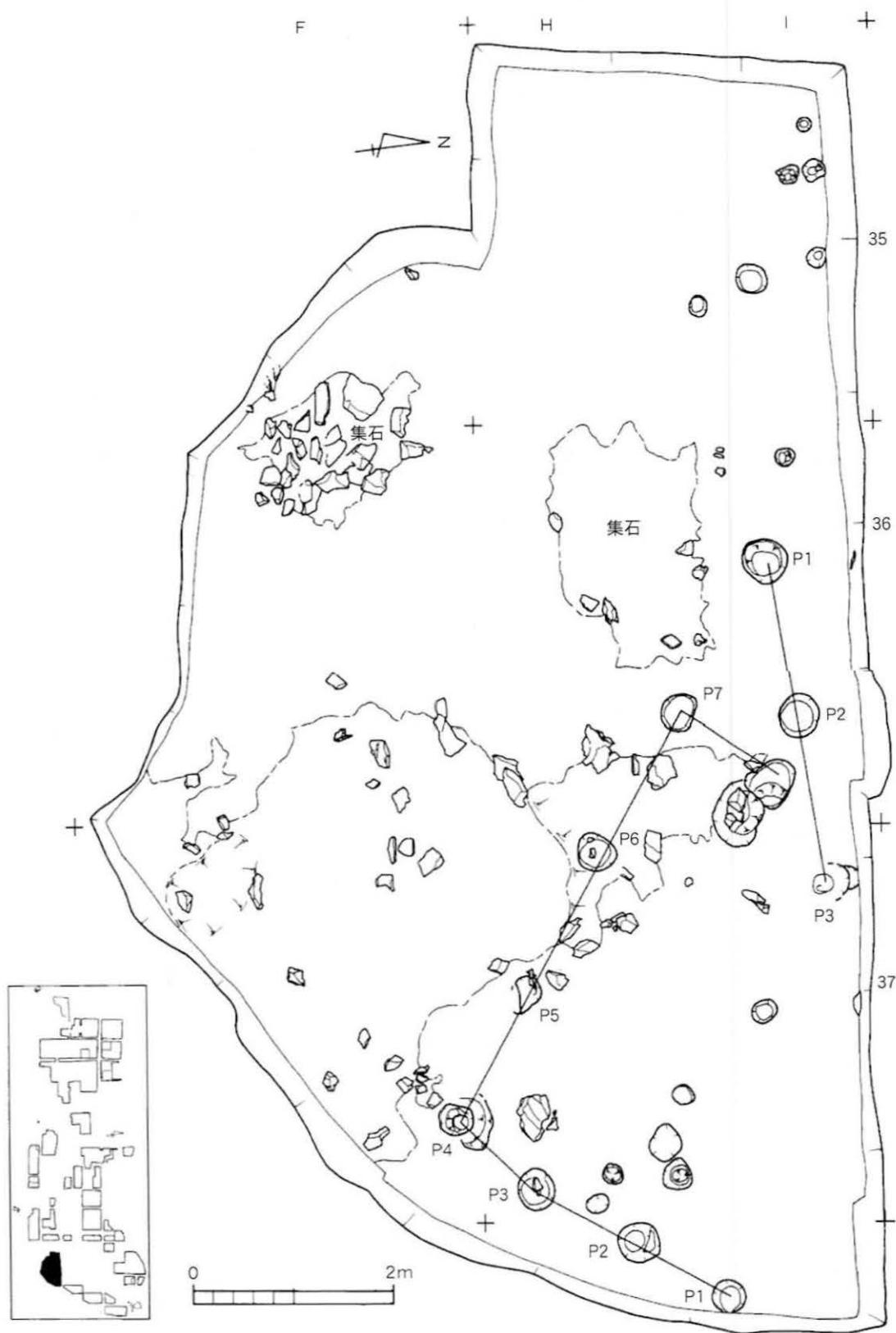
	P1	P2	P3	P4	P5	P6
柱穴直径(cm)	24	16	22	34	26	19
深さ(cm)	30	19.5	39	30	26	11

遺構4 5基の柱穴で長方形の建物が想定される。

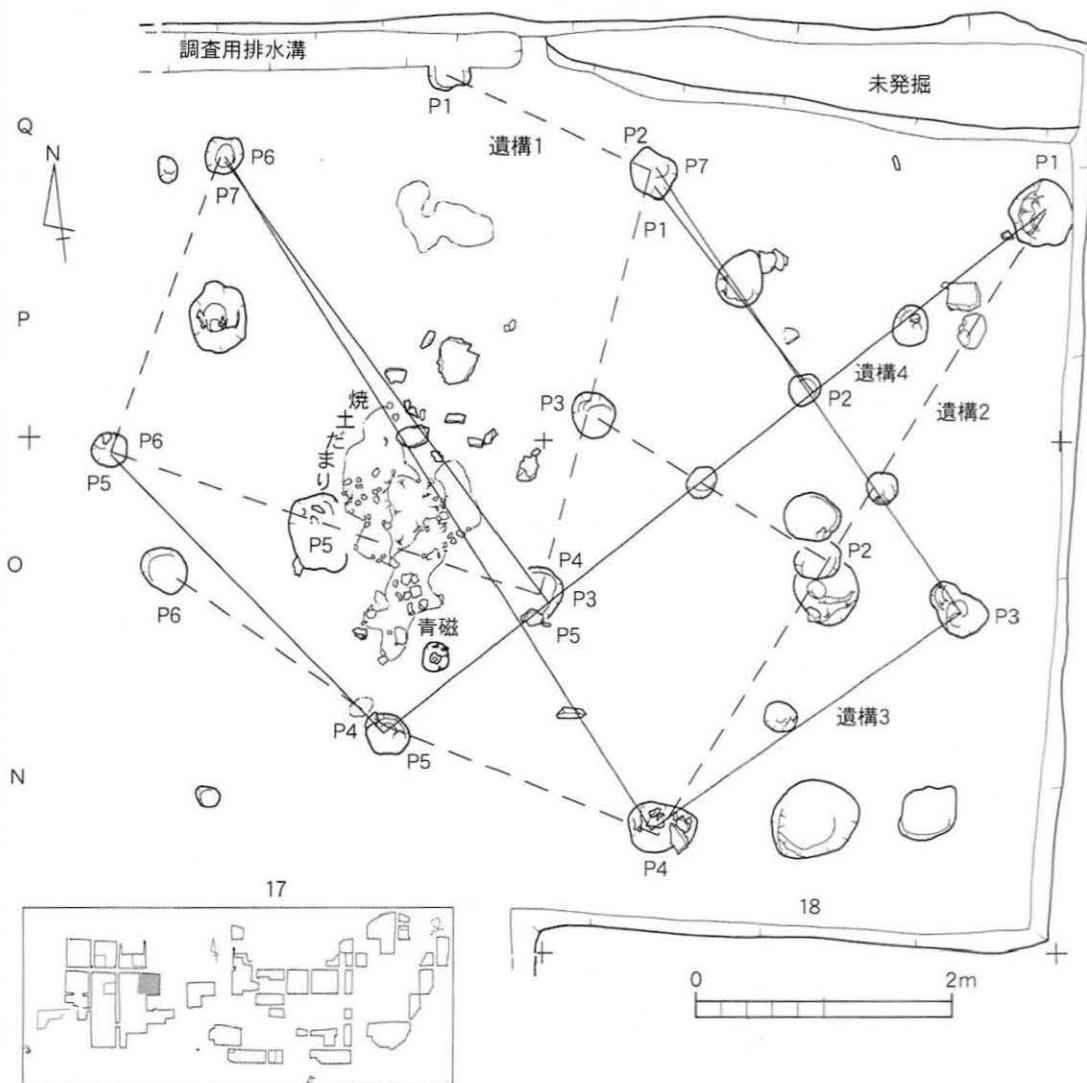
径間 (cm)	P1P2	P2P3	P3P4	P4P5
227	260	163	307	

	P1	P2	P3	P4	P5
柱穴直径(cm)	31	16	26	22	18
深さ(cm)	49.5	19.5	26	35	54.5

これらの遺構が検出された面は砂利混じりの土が遺構面に敷かれた状態となっていた。また、その調査区中央には多量の焼土が出土した。その状況は、炉跡をつぶして敷きならしたように平面的な出土であった。焼土だまりの南東側には青磁の皿(第26図62)が25×22cmのピット内にふせられた状態で出土している。この皿の口縁部は左右対称に2ヶ所を打ち欠いており、何らかの意味をもっていると思われる。



第15図 FG・HI-35~37 集石遺構・柱穴群平面図



第16図 NO・PQ-17・18 焼土だまりと柱穴群平面図

② VW・XY-34・35柱穴群 (第17図)

他の地区に比べ、柱穴の数は少なく、切り合ったものも少ない。その中で2基の建物跡が検出された。2基とも地山面からの検出で、新旧関係については判然としない。また、時代を示す遺物の出土もない。

建物1は長方形。建物2は台形状を呈し、2基とも柱は4本で、その規模と周辺に炉跡のないことから、人の住居というより高倉的な建物であったと思われる。

建物1

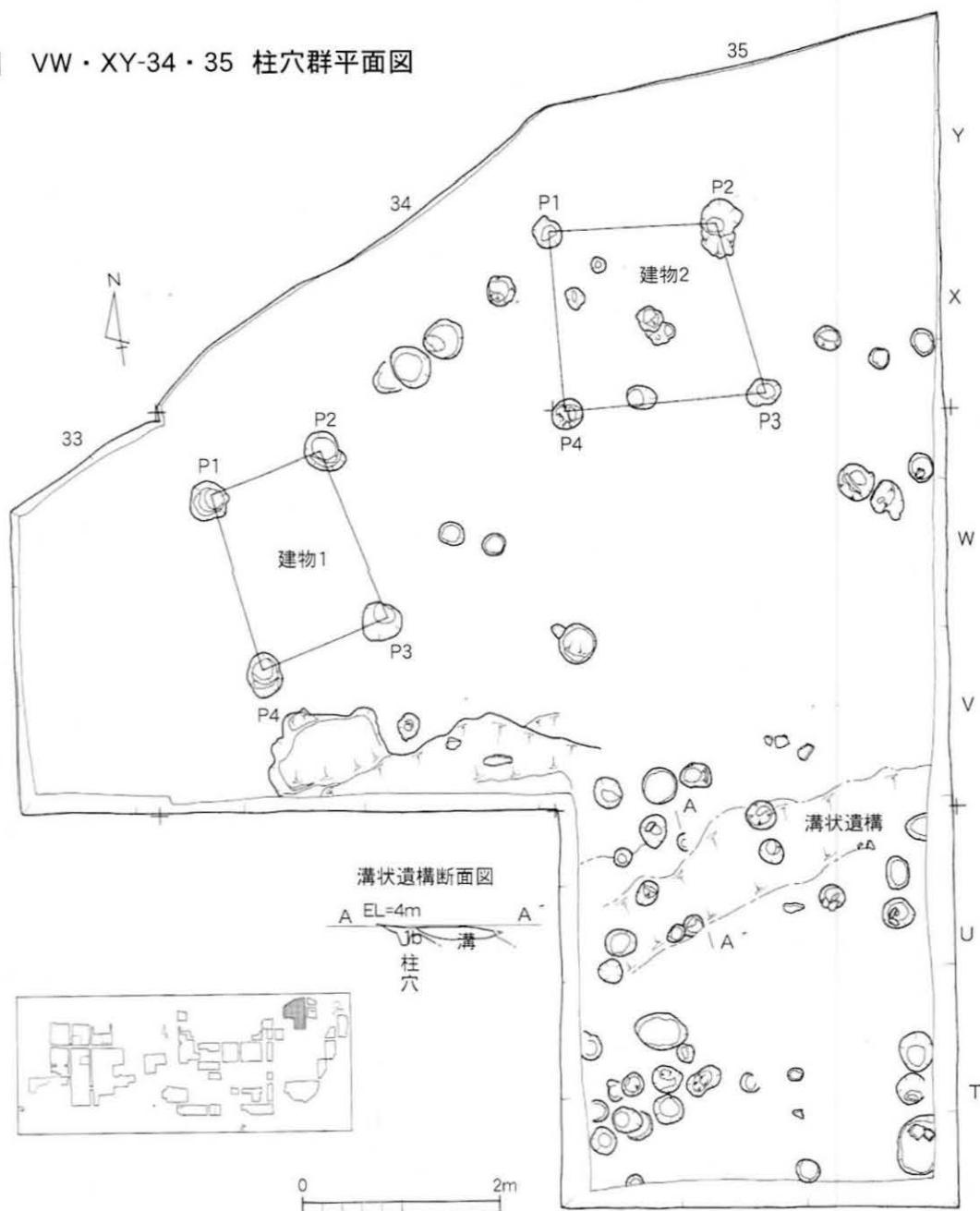
	径間	柱穴の直径	深さ(cm)
P1・P2	169	P1-30×25	20
P2・P3	179	P2-56×36	48
P3・P4	200	P3-38×26	42
P4・P1	185	P4-30×30	38

建物2

	径間	柱穴の直径	深さ(cm)
P1・P2	124	P1-40×36	43
P2・P3	181	P2-42×33	48
P3・P4	147	P3-40×38	53
P4・P1	175	P4-43×35	43

これらの建物の前庭部は急傾斜をなし、溝状遺構が伴っている。底の形は浅いボール状を呈し、深さは約13.5cmを測るが直線的ではなく若干蛇行している。

第17図 VW・XY-34・35 柱穴群平面図

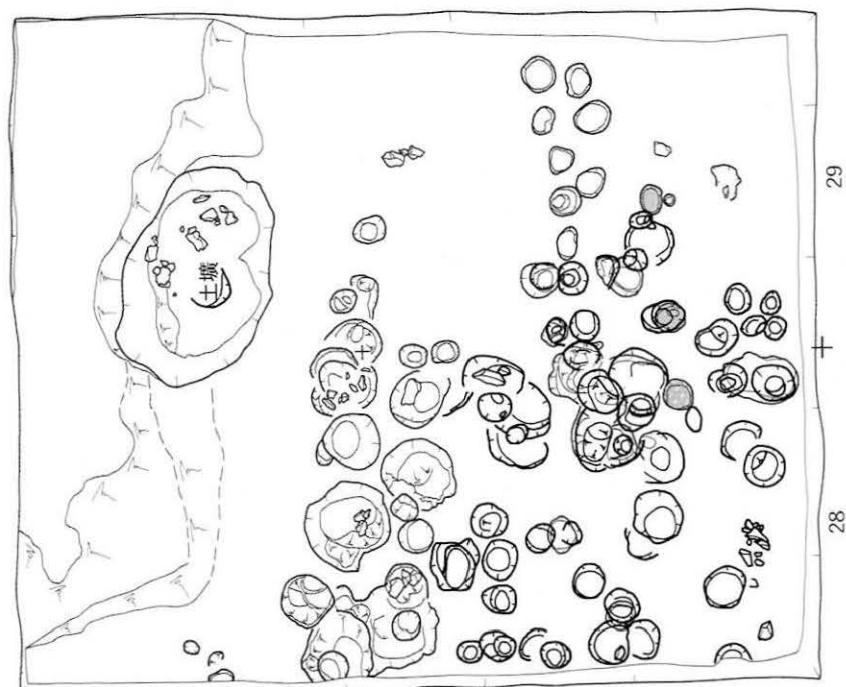
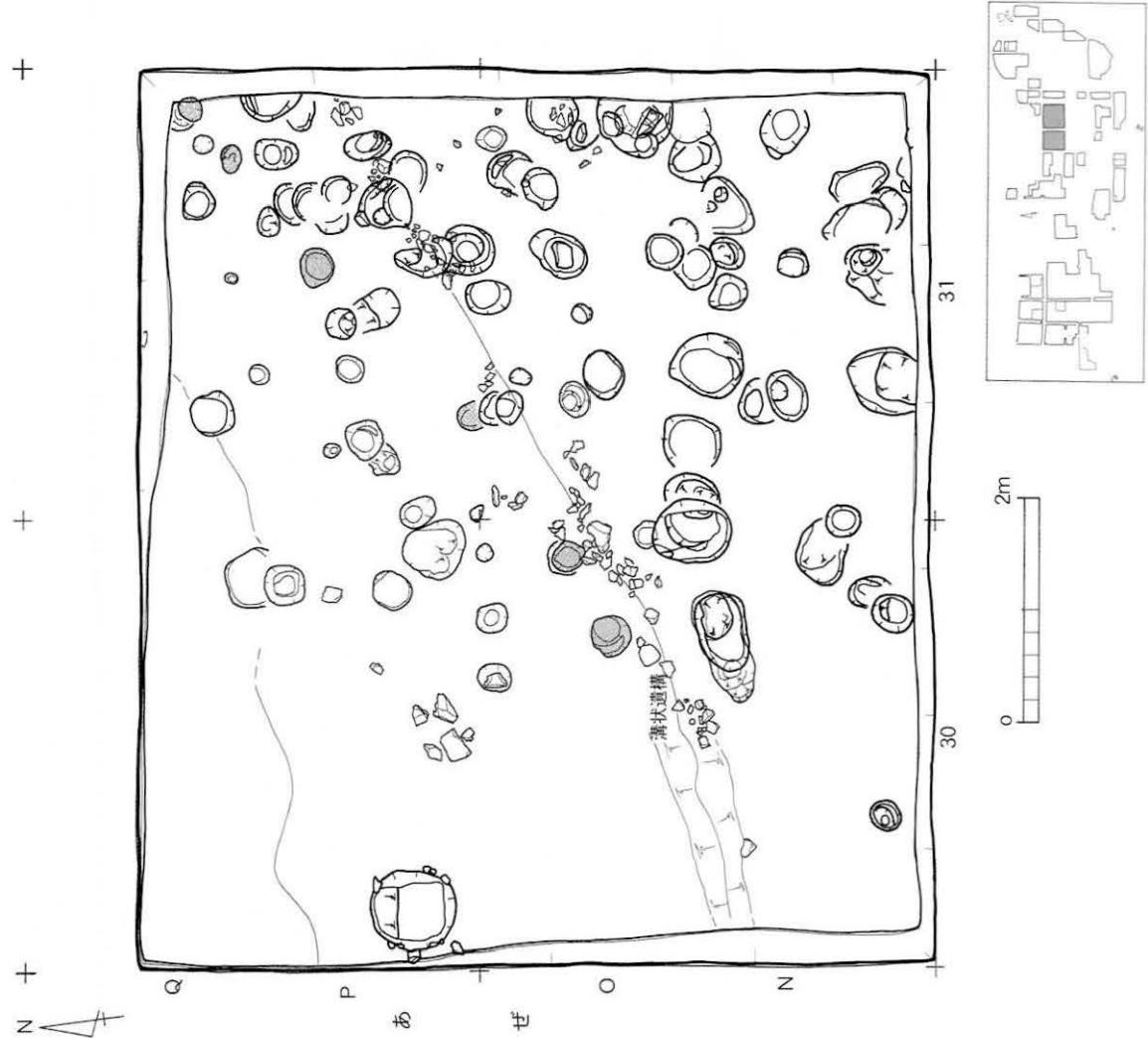


③ NO・PQ-28~31柱穴群 (第18図)

集中して柱穴がみられ、切り合いが多くはっきりとしたプランをつかむことはできなかった。

前記のVW・XY-34・35柱穴群に伴う溝状遺構がここにもみられ、その溝は北側に、距離は等間隔ではないがピットが列をなした状態でみられる(スクリーントーン部分)。溝底はV字状になり、小石や瓦・焼き物などの遺物が底にたまつた状態で出土した。ピットの大きさは24~44cm、深さは5~26cmとなる。

また、この柱穴群の北側に深さ45cmの土壙が掘り込まれている。底は鍋底状で長さは210×116cmの不整楕円形を呈する。土壙の片壁は地山面をそのまま利用している。埋土は暗褐色土の中に焼土や炭が混入し、第Ⅱa層から掘り込まれている。遺物は瓦質土器(第52図1)・青磁・陶器がみられる。この瓦質土器の出土は他ではみられない。



第18図 NO・PQ-28~31 柱穴群平面図

④ RS・TU-39柱穴群（第19図）

北北西-南南東に長軸をもつ建物跡と思われる。柱穴の大きさは34~46cm、深さ30~40cmを測る。地山面からの検出で、柱穴内からの遺物の出土はない。径間は140・130cm。柱穴の大きさは北から40×40cm、56×50cm、42×42cmで、深さはそれぞれ72cm・73cm・42cmを測る。

またこれらの柱穴群と共にグリットの南東隅に歯鋸（ニ又）の跡と思われるものが検出された。緩やかな斜面に沿って階段状にみられ、平面形に規則性がなく、深さも一定ではない。

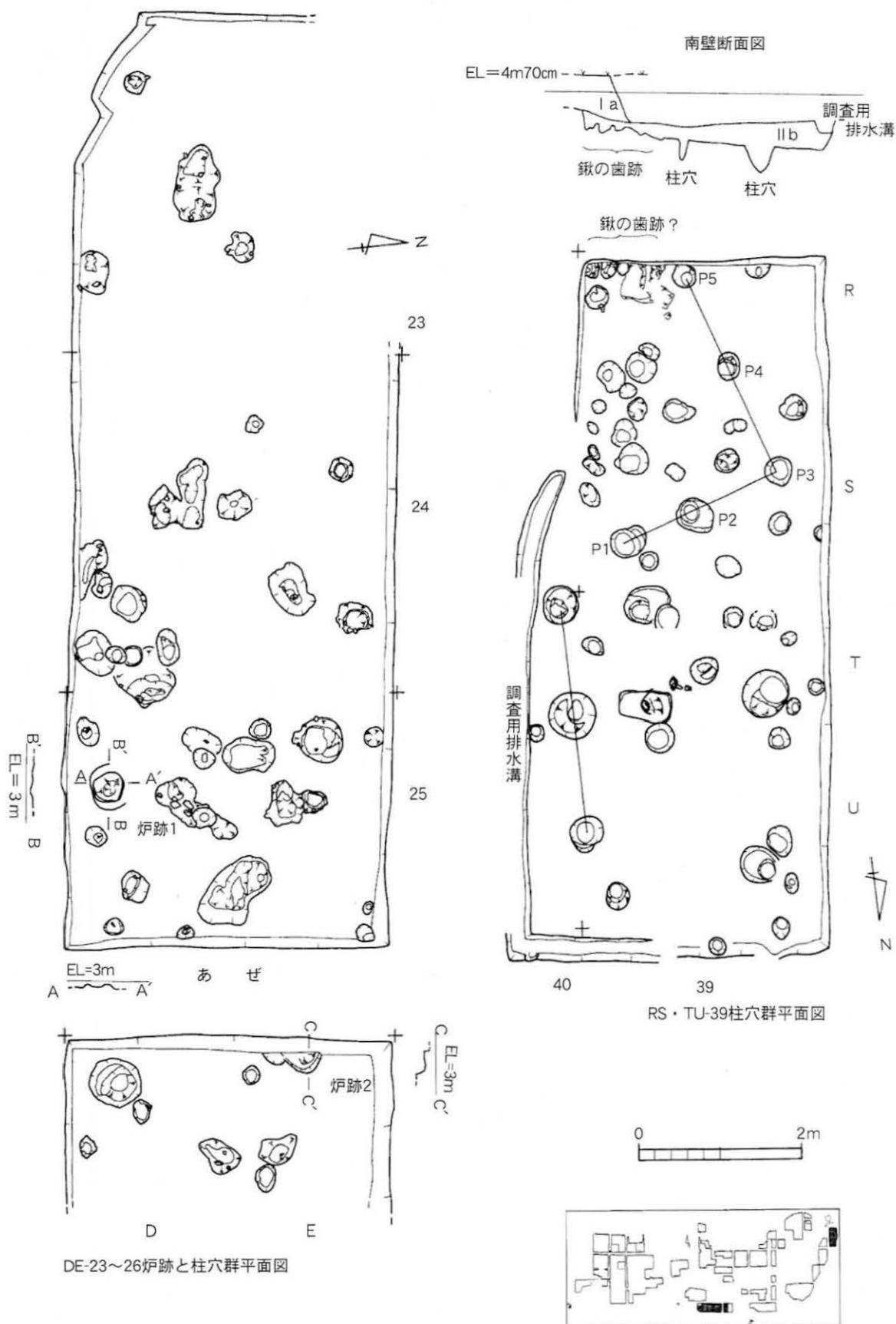
⑤ DE-23~26炉跡と柱穴群（第19図）

柱穴と共に炉跡と思われるものが2基検出された。炉跡1の平面形は33×35.5cmを測る馬蹄形を呈する。深さは4~6cm。炉跡2は1より北東側に位置し、390cm離れた場所にある。これも馬蹄形を呈し、深さは4cm程である。2基とも中央が若干くぼみ壁面は黒褐色土と焼土で堅緻である。

炉跡の周辺には数十個の柱穴がみられるが、プランをつかむには至らなかった。柱穴は深さ5~49cmとまばらな中に71cmの深さをもつ柱穴がみられた。DE-36南西隅にあり、大きさは57×63cmで壁がほぼ垂直に落ちる。遺物は後期系土器の胴部が上面より出土するのみであった。柱穴内の覆土は、炭まじり黒褐色・赤土・黒褐色土と黄土まじりの土が層をなしており、他の柱穴とは若干異なる。

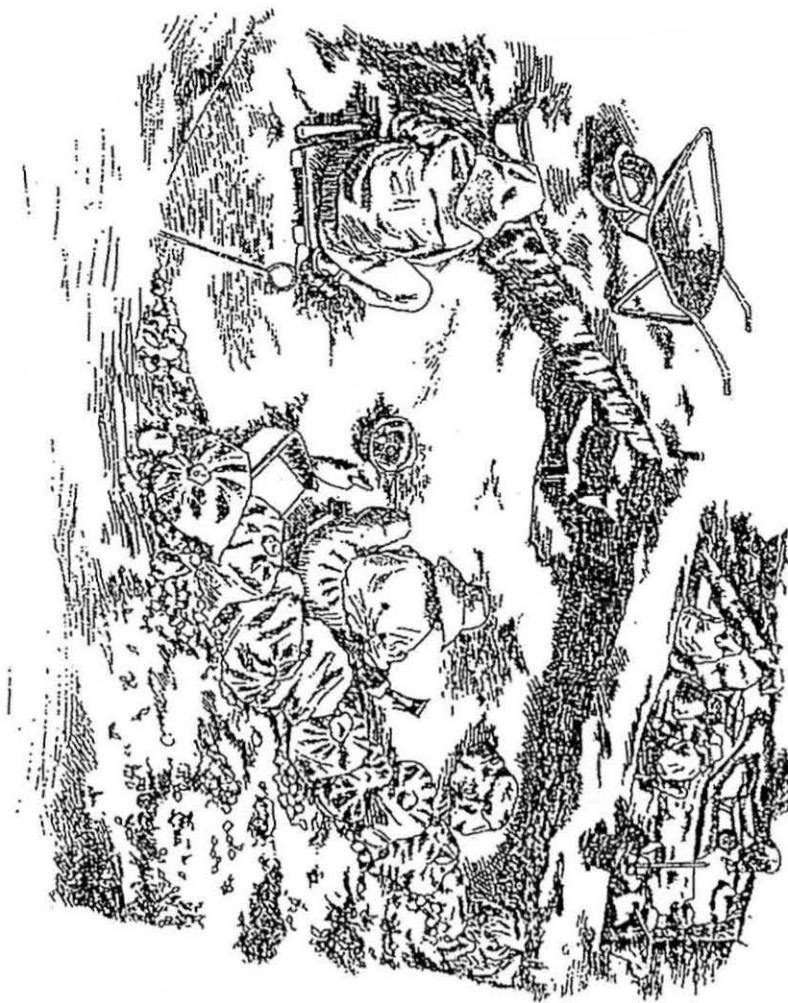
参考文献

- 宜野座村教育委員会 『漢那福地川水田遺跡』 宜野座村文化財10・11 1993
" 『漢那遺跡』 宜野座村文化財 (4) 1984
" 『漢那ウェーヌアタイ遺跡』 宜野座村文化財 (9) 1990
那覇市教育委員会 『ヒヤジョー毛遺跡』 那覇市文化財報告書第26集 1994
" 『那崎原遺跡』 那覇市文化財調査報告書第30集 1996
" 『銘苅原遺跡』 那覇市文化財調査報告書第35集 1997
" 『議名シーマ御嶽遺跡』 那覇市文化財調査報告書第34集 1997
嘉手納町教育委員会 『屋良グスク』 嘉手納町文化財調査報告書第1集 1994
石川市教育委員会 『伊波城跡北西遺跡』 石川市文化財調査報告書 1996
勝連町教育委員会 『平敷屋古島遺跡-発掘調査報告書-』 勝連町の文化財第13集 1991
宜野湾市教育委員会 『上原瀧原遺跡発掘調査記録-普天間飛行場基地内陸軍送油管新設工事に係る緊急発掘調査』
宜野湾市文化財保護資料第43集 1995
西原町教育委員会 『我謝遺跡』 西原町文化財調査報告書第5集 1983
豊見城村教育委員会 『高嶺古島遺跡』 豊見城村文化財報告書第4集 1990
具志頭村教育委員会 『具志頭村の遺跡』 具志頭村文化財調査報告書第3集 1986
平良市教育委員会 『住屋遺跡（俗称・尻間）発掘調査報告』 1983
上野村教育委員会 『宮国元島-宮国元島遺跡発掘調査報告-』 1980
石垣市教育委員会 『ビロースク遺跡-沖縄県石垣市新川・ビロースク遺跡発掘調査報告書-』
石垣市文化財調査報告書第6号 1983
沖縄県立博物館 『特別展「グスク」-グスクが語る古代琉球の歴史とロマン-』 1985
沖縄県教育委員会 『糸福遺跡発掘調査報告書』 沖縄県文化財調査報告書第50集 1983
" 『松田遺跡』 沖縄県文化財調査報告書第76集 1986
" 『阿波根古島遺跡』 沖縄県文化財報告書第96集 1990
" 『安仁屋トウンヤマ遺跡』 沖縄県文化財調査報告書第105集 1992



第19図 DE-23~26 炉跡と柱穴群平面図/RS・TU-39 柱穴群平面図

第3章 出土遺物



第1節 土器・土製品

全グリットの土器総数は97点で、その内訳は口縁部5点、胴部71点、底部16点を数え、出土状況は第2表となっている。ほとんどの資料は小破片で、全形を知り得る土器は得られていない。そのため分類は主に胎土や混入物により分類を行った。以下、分類基準を記し、個々の資料の観察は第3表にまとめた。

I類 沖縄貝塚時代後期系土器

- I a 砂質・・・器面の手触りがサラサラあるいはザラザラしており若干脆い。混入物が多く、器面の混入物がよく観察できる。
- I b 泥質・・・胎土が細かく若干粘性を持ち、微量の混入物を含む。

II類 グスク系土器

- II a 混入物が器面に浮いたようになり、手触りがザラザラする。混入物には千枚岩が多量に見られる。胎土は砂質。胴部資料のみ出土。
- II b 胎土は微粒子で、手に粉末が付く砂質である。とても軽い。
- II c 器面が細かいボーラス状になり、非常に細かい石灰質砂粒が含まれる泥質の土器。胴部資料のみ出土。

III類 産地不明土器

胎土はきめが細かく泥質となる。肩部に沈線文と波状文が交互に5段施文される。

土製品

土製品と思われるものは2点出土している。2点とも形が異なり、用途不明である。1点は破損しているため割愛する。

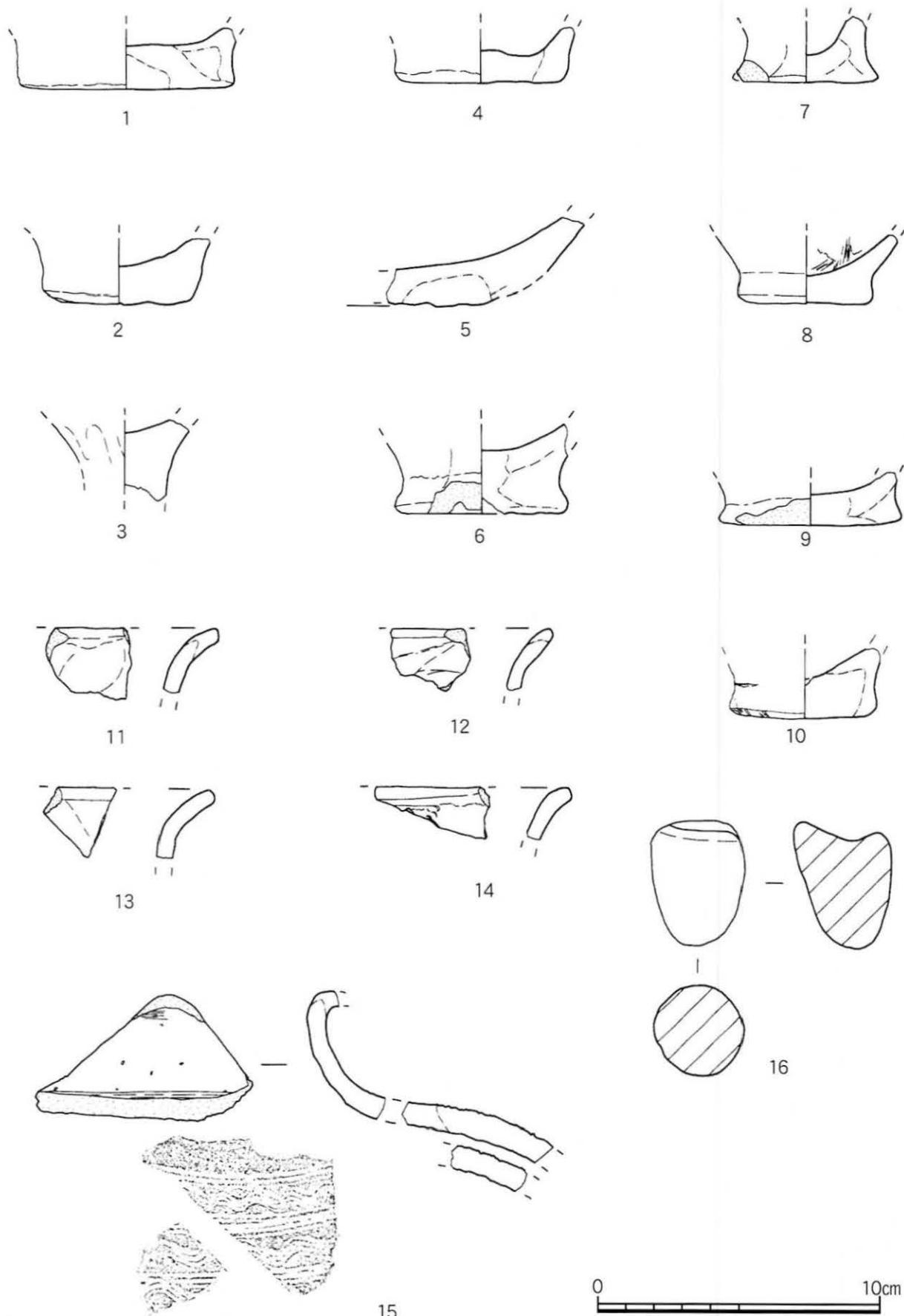
第20図16は円錐状を呈している。下の部分は丸みをおび、上部の中央部は若干窪んでいる。混入物に赤色粒、石灰質砂粒、ガラス質の鉱物がみられ、胎土は泥質で、焼成は良好である。色はほぼ全面褐色を呈し、上部の窪み部分のみ黒褐色となる。出土場所はO-13 II b層。直径3.4cm、重さ45.5gを測る。

第2表 土器集計一覧

類	部位	I b	I b・II a	I b・II b	II 不明	II a	II b	II c	II d	II ab	II bd	表採	不明	合計
I類 後期系土器	胴 部						3		4				2	9
	平 底						2					1		3
	乳房状尖底						1						1	2
	不 明 底 部	1												1
	胴 部	1					2			2		1		6
	平 底						1	2			1			4
II類 グスク系土器	くびれ平底			1		4								5
	胴 部	1					1	11						13
	口 縁 部						3		1		1			5
	胴 部				1		16	1	5	1				24
	平 底						1							1
III類 産地不明土器	胴 部	1	1			1	6			2		1		12
	頭 部						1							1
土製品							1							2
不 明							1					1		2
合 計		4	2	1	1	11	51	1	10	8	2	3	3	97

第3表 土器観察一覧

挿図番号	出土場所	分類	器種	法量(cm)			特徴	器面調整	器色	焼成	混入物
				器壁	底厚	底径					
第20図1	TU-12、IIb	I a	平底	-	1.5	7.6	底面の粘土を何度も重ねる。重量感がある。	内外面ともナデ。	外面褐色、内面黄褐色。部分的に黒褐色	良好	赤色粒、石灰質砂粒、石英・長石少量
第20図2	RS-12、IIb 柱穴内	I a	平底	-	1.3	5.4	内底面が丸みをおびる。	内外面ともナデ。	外面灰褐色、内面淡黄褐色。	良好	赤色粒、石灰質砂粒、石英・長石。
第20図3	NO-31、IIb	I a	乳房状 尖底	0.6~0.8	-	-	器面がサラサラし、粉がおちる。乳房部分が大きい。	内外面ともナデ。	外面赤褐色、内面黄褐色。	やや 良好	石灰質砂粒、石英・長石。
第20図4	NO-29、IIab	I b	平底	0.8	1.1	6.2	内底面の中央部が若干盛り上がる。	内外面ともナデ。	外面赤褐色、内面黄褐色。	良好	石灰質砂粒、石英・長石。
第20図5	FG-35、IIb	I b	平底	0.8	1.2	-	内底面が丸底状を呈する。	内外面ともナデ。内面丁寧	外面黄褐色、内面黒褐色。	良好	赤色粒、石灰質砂粒少量。
第20図6	PQ-24、Ib・ IIb	I b	くびれ 平底	0.7~1.0	2.3	6.2	底面が厚く、どっしりとする。	内画面とも指ナデ。	外面黄褐色、内面黒褐色。	良好	赤色粒、角閃石と石英・長石微量。
第20図7	VW-34、IIa	I b	くびれ 平底	0.6~0.8	1.0	5.2	全体的にこじんまりしている。	内外面とも工具調整後指なででナデ消し。	内外面とも黄褐色、部分的に黒褐色。	良好	赤色粒、角閃石と石英・長石少量。
第20図8	LM-15、IIa	I b	くびれ 平底	0.6	0.9	4.6	丁寧な作り。	ヘラ状工具調整後、指なででナデ消し。	内外面とも黄褐色で底面赤褐色。	良好	赤色粒、角閃石、石灰質砂粒少量。
第20図9	HI-30、IIa	I b	くびれ 平底	-	1.1	6.6	作りが雑。	外面横方向の擦痕あり。他は指ナデ。	外面赤色、内面灰褐色。	良好	赤色粒、角閃石。
第20図10	RS-13、IIa	I b	くびれ 平底	0.6	1.4	5.2	全体的にこじんまりしている。くびれが若干弱い。	内外面とも工具調整後ナデ消し。	内外面とも赤褐色。	良好	赤色粒、角閃石と石灰質砂粒微量。
第20図11	NO-28、IIb	II b	鉢形	0.7	-	-	11~14の4点とも口縁部が強く外反する。口唇部も角が丸みを帯びた方形を呈する。	内外面とも指ナデで外面に指頭圧痕が残る。	外面褐色で若干煤が付着。内面淡黄褐色。	良好	赤色粒、石英・長石、石灰質砂粒は少量。
第20図12	NO-28、IIbd	II b	鉢形	0.6	-	-	口唇形状は舌状で、外反口縁の小片。	内外面とも指ナデ。頭圧痕が残る。	内外面とも淡黄褐色。	良好	赤色粒、石英・長石。
第20図13	NO-28、IIb	II b	鉢形	0.6	-	-	他の点より口唇部の稜がはつきりする。	内画面とも指ナデ。	内外面とも灰褐色。断面に黒褐色。	良好	赤色粒、石英・長石。
第20図14	NO-28、IId	II b	鉢形	0.5~0.8	-	-	口唇形状は舌状で、外反口縁の小片。	工具調整後、指ナデで消すが、内面に稜が残る。	内外面とも淡黄褐色。	良好	赤色粒、石英・長石は少量。
第20図15	PQ-16・17、 Ib・IIa O- 12、IIb	III	壺形	0.6~0.8	-	-	頸部から口縁にかけてすぼまり、胴部が大きく張る。口唇が強く外反する。肩部に沈線文が加わる。	内外面とも横方向の細かい擦痕がみられるが、部分的に器面がアバタ状になる。	内外面とも淡黄褐色、部分的に褐色。	良好	赤色粒、粒の粗い石英・長石。



第20図 土器・土製品 (S=1/2)

第2節 白 磁

白磁は中国陶器の中で青磁・青花に次ぐ出土量で、碗・皿・杯・小杯・壺・瓶などの器種が得られた。以下、分類基準を概述し、個々の資料については第4表の観察表にまとめた。

1. 碗

I 類 ビロースクタイプ碗

厚手の内湾する碗で、口唇部が丸みをもつ^{註1)}。13c末～14c中葉。(第21図1)

II 類 内底面が凹み、外底面の削りが浅い碗。未報告であるが、同タイプの碗が今帰仁城跡から出土している(註2)。14c。(第21図2)

III 類 口縁部が外反する碗を、形態により下記の4種類に分けた。

III a 無文外反碗 (第21図3)

グスクから最も多く出土するタイプの碗。腰部が張り体部上位で内側に若干すぼまるが、口縁部で外反する。

III b 体部から口縁部にかけて直線的に開き、口端部で若干外反する。舌状につくった口唇部の内側を斜めに削るため、内側に明瞭な稜をもつ。15c後半。(第21図4・5・6)

III c 口縁部が外反するが、III b 類と異なり口唇部が尖る。(第21図7)

III d 器高に対して口が大きく開く大振りの碗。口縁部が肥厚する。(第21図8・9・11)

IV 類 口縁部が直口する碗 (第21図10)

第22図12～14は上記のいずれの類に属するのか不明な碗の底部資料である。その内、13・14は見込みにスタンプによる文字を配し、今帰仁城跡出土のIX類(厚手の直口碗)に類似する。

2. 皿

I 類 口縁部が直口する皿。(第22図15・16)

II 類 外反口縁の皿を、底部の形態により以下のa・bに細分した。

II a 口縁部が外反し、高台を持つ皿。15c後半～16c代。(第22図17・18)

II b 口縁部が外反するがII a 類と異なり、朝顔状に開く。底部は碁笥底。(第22図19)

III 類 底部が平底になる皿。(第22図20)

3. 杯

I 類 口縁部が外反する杯。(第22図21)

II 類 八角杯。(第22図22)

4. その他器種

第22図23は小杯で口縁部が朝顔状に開く杯。

第22図24は蓋。第22図25・26は壺と考えられる資料が3個体相当出土している。その中から2点を図示した。

第22図27は瓶で、細首の器形。

第22図28は器種不明の底部資料。

註

註1 金武正紀「ビロースクタイプ白磁碗について」
『貿易陶器研究No.8』日本貿易陶器研究会 1988

註2 金武正紀氏(那覇市教育委員会)より御教示を頂いた。

参考文献

那覇市立壺屋焼物博物館『陶磁器に見る大貿易時代の沖縄とアジア』那覇市教育委員会 1997

今帰仁村教育委員会『今帰仁城跡発掘調査報告書I』1983

第4表 白磁集計一覧

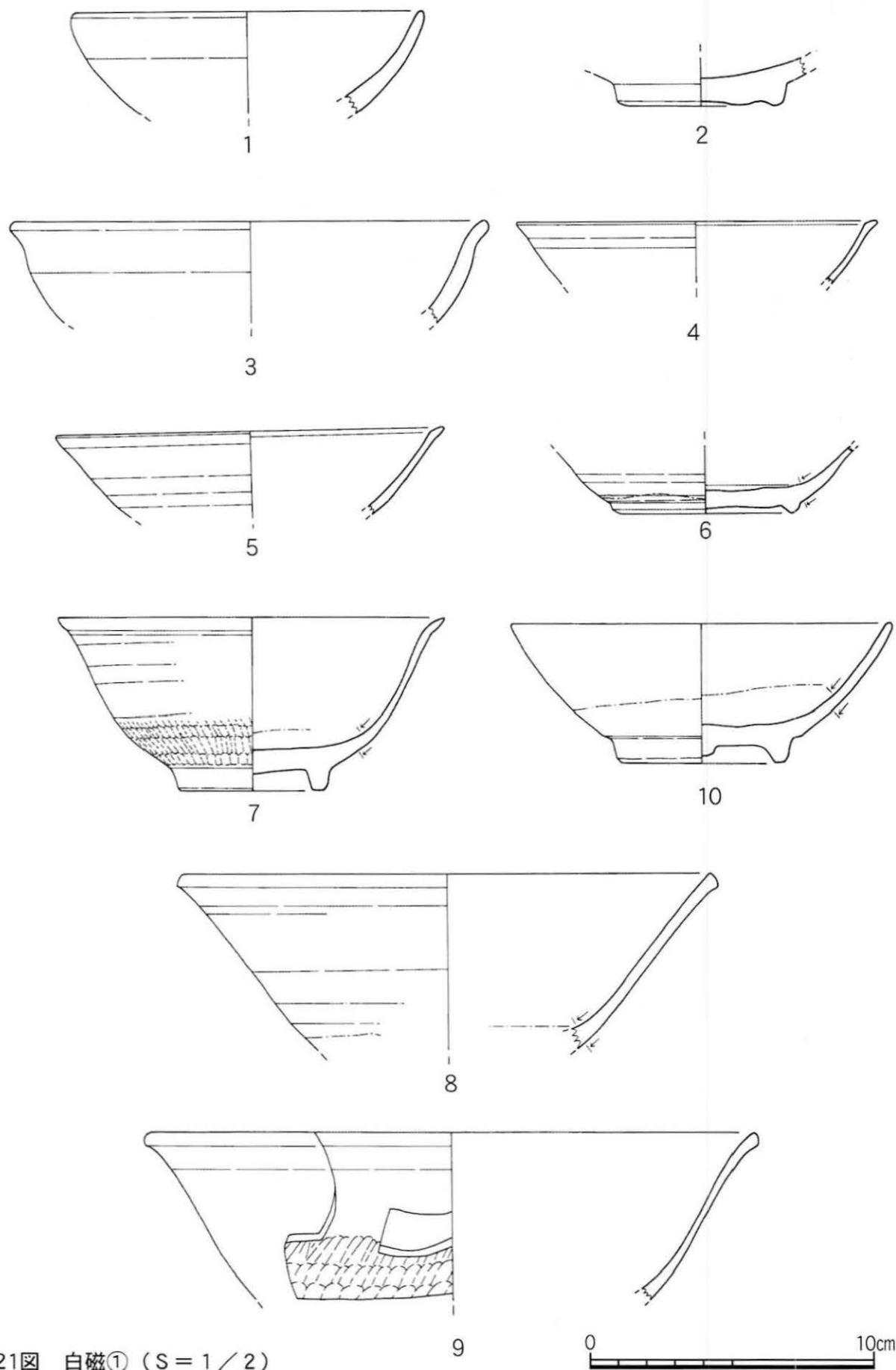
器種	名称又は仮称	類	部位	表土層	I b層	II a層	II b層	II c層	II d層	計
碗	ピロースクタイプ	I	口縁部				1			1
		II	底部				1			1
	外反碗	III a	口縁部				3			3
			底部				1			1
		III b	口縁部	1	7	16	28		2	54
		III c	口縁部		1					1
		III d	口縁部	1		11	17			29
			底部				1			1
	直口口縁碗	IV	口縁部	7	1	30	7			45
			底部	12	9	19	18			58
皿	直口口縁皿	I	口縁部		5	14	15			34
	外反皿	II	口縁部	1	6	26	24			57
			底部	1	1	16	15	1		34
		III	口縁部		2	5	1			8
			底部				5			5
		不明	底部	1	4	7	4			16
杯		I	口縁部		1	1				2
	八角杯	II	口縁部			1				1
小杯				1	3	4	1			9
				1		1				2
蓋			合わせ口部			3				3
壺			口縁部			4	1			5
		底部			1				1	
瓶			口縁部			3	3			6
器種不明			口縁部	1	1	4	1			7
			底部		1	1	2			4
合計				27	42	167	149	1	2	388

第5表(1) 白磁観察一覧

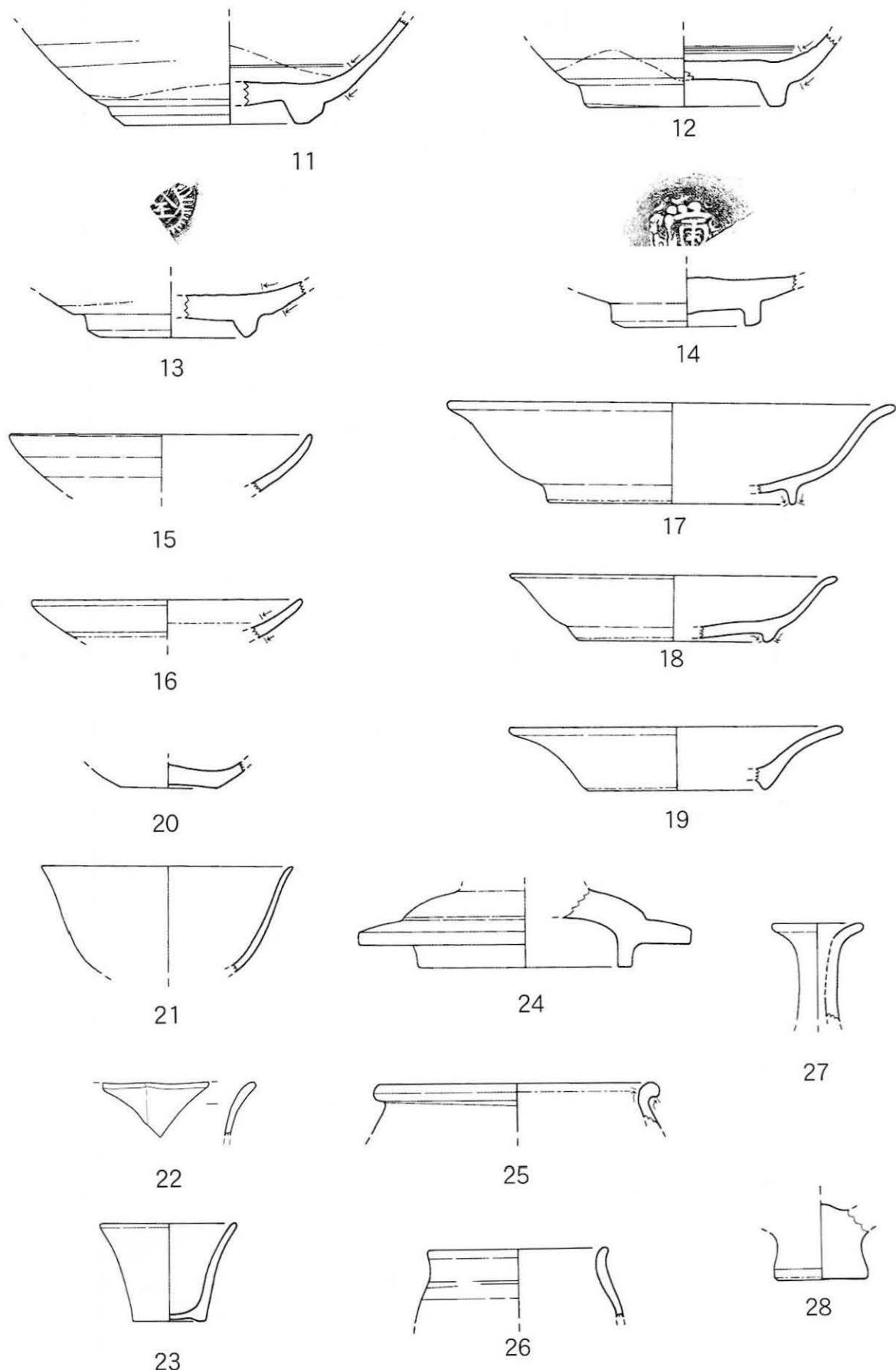
挿図番号	器種	類	口径 器高 底径 (cm)	特徴	出土地点
第21図1	碗	I	12.3 - -	口縁部が内彎する。内外面に淡灰白色の釉薬を施す。素地は灰白色の細粒子。貫入なし。	VW-36、II b
第21図2	"	II	- - 5.9	見込み中央部が窪み、高台内の削りが浅い。外面は露胎。内面に淡灰色の釉薬を施すが部分的に露胎となる。素地は灰色で素粒子。貫入なし。	LM-27、II b
第21図3	"	III a	16.8 - -	やや厚手の口縁部が外反する碗である。内面に淡灰色の釉薬を施す。素地は灰白色で素粒子。	NO-17、II b
第21図4	"	III b	12.8 - -	口縁部内側に明瞭な稜を持つ。内外面に淡灰白色の釉薬を施す。素地は白色。貫入なし。	NO-30、II a
第21図5	"	"	13.7 - -	口縁部内側に明瞭な稜を持つ。内外面に透明釉を施す。素地は淡黃白色。貫入なし。	NO-31、II b
第21図6	"	"	- - 6.1	高台を逆台形状に整形するが、低く小さい。青みをおびた白色の釉薬を施す。外面は高台脇で止まり、内底面にもおよぶが重ね焼きの痕が残る。素地は白色で堅緻密。貫入なし。	PQ-30、II a

第5表 (2) 白磁観察一覧

挿図番号	器種	類	口径 器高 底径 (cm)	特徴	出土地点
第21図 7	碗	IIIc	13.7 6.1 5.1	口縁部が外反し、口唇部が尖る。畳付けは平坦。灰白色の釉薬を施すが、内底面を拭き取り、外面は腰部で止まる。体部下位にはカンナ削り痕が残る。素地は白色。貫入なし。	PQ-16、IIa
第21図 8	"	IIId	19.2 - -	口縁部が肥厚する大振りの碗である。淡い緑色みをおびる釉薬を施す。見込み及び外底面は露胎となる。素地は黄白色。貫入あり。	LM-26、IIb
第21図 9	"	"	21.5 - -	口縁部が肥厚する大振りの碗である。内外面に灰白色の釉薬を施す。外面腰部にカンナ削りによる製形痕が残る。素地は白色。貫入あり。	LM-17、IIb
第22図 10	"	IV	13.5 4.9 5.8	口縁部が直口する碗である。内外面に透明釉を施すが、両面とも胴部半ばで止まる。素地は黄白色。貫入なし。	RS-33、IIb
第22図 11	"	IIId	- - 6.3	高台を逆台形状に低く作り、畳付けは平坦。内外面に乳白色の釉薬を施すが、見込み及び外底面には及ばない。素地は黄白色。貫入あり。	NO-30、IIb
第22図 12	"	不明	- - 6.7	畳付けは平坦。灰白色の釉薬を施す。見込み及び外底面は釉薬がかからず露胎となる。素地は黄白色。貫入なし。	NO-14、Ib
第22図 13	"	"	- - 5.1	内外面に白色の釉薬を施すが、見込み及び外底面には及ばず露胎となる。見込みに「全」の文字を持つ。素地は黄白色。貫入なし。	FG-22、IIb
第22図 14	"	"	- - 4.2	残存部には施釉がみられず露胎である。見込みには「蒲」の文字を持つ。素地は乳白色。	DE-25、IIa
第22図 15	皿	I	10.3 - -	直口口縁。内外面に透明釉を施す。素地は黄白色。貫入あり。	TU-12、IIb
第22図 16	"	"	9.3 - -	直口口縁。灰白色の釉薬を施すが内外面とも胴部半ばで止まる。素地は白色。貫入あり。	PQ-18、IIab
第22図 17	"	IIa	15.3 3.5 8.4	口縁部が外反する皿。畠付は狭く、砂粒が付着する。内外面に灰白色の釉薬を施し、畠付のみ露胎となる。素地は白色で堅緻。貫入なし。	RS-14、IIa
第22図 18	"	"	11.2 2.3 6.0	"	RS-14、IIa
第22図 19	"	IIb	11.5 2.2 6.1	外反口縁であるが IIa類と異なり、朝顔状に開く。底部は碁笥底状を呈す。釉色は灰白色。素地は白色で堅緻。貫入なし。	FG-15、IIb
第22図 20	"	III	- - 3.4	平底の皿？内面に灰白色の釉薬を施す。外面は露胎。素地は黄白色。貫入あり。	NO-28、IIa
第22図 21	杯	I	8.6 - -	口縁部が僅かに外反する杯である。内外面に透明釉を薄く施す。素地は白色。貫入あり。	RS-15、Ib
第22図 22	"	II	- -	八角杯の口縁部である。内外面に透明釉を施す。素地は黄白色。	DE-31、IIa
第22図 23	小杯		4.7 3.4 2.5	底部から口縁部にかけて朝顔状に開く小杯である。内外面に釉薬を施すが、畠付のみ露胎となる。素地は白色。細かい貫入あり。	TU-14、IIa
第22図 24	蓋		9.3 - -	外面は底部まで透明釉が施される。素地は白色。貫入あり。口径は合わせ口の径を測った。	PQ-18、IIa
第22図 25	壺		9.4 - -	内外面に透明釉を施すが、口縁部内外は露胎となる。素地は白色。貫入あり。	RS-14、IIab
第22図 26	"		6.0 -	小型の壺。内外面に透明釉を施す。素地は白色で堅緻。貫入あり。	NO-17、IIab
第22図 27	瓶		5.1 - -	灰白色の釉薬を施す。白磁として扱ったが、肥前磁器の可能性がある。素地は白色で堅緻。貫入あり。	RS-33、IIb
第22図 28	不明		- - 3.0	底部資料であるが器種は不明。外対面に透明釉を施す。素地は白色。貫入あり。	LM-27、IIb



第21図 白磁① (S = 1 / 2)



第22図 白磁② (S = 1 / 2)

第3節 青 磁

中国陶磁器の中で最も多く検出されたのが青磁である。器種は碗・皿・盤・杯・壺・香炉・瓶などが得られており、中でも碗における種類の多さが注目される。以下、各器種ごとに分類基準を概述し、図示した個々の資料については第7表の観察表にまとめた。

1. 碗

I類 鎬蓮弁文碗

蓮弁に明瞭な鎬を持つ。鎬を削り出したあと、蓮弁の周りを籠で片切り彫りを行っている。(第23図1)

II類 無鎬蓮弁文碗

蓮弁の輪郭を籠により描いているが、鎬を持たない。

II a 外反口縁。蓮弁の周りを籠で削り出しているが、鎬を持たない。(第23図2)

II b 外反口縁。蓮弁の輪郭のみを片切彫りで描く。(第23図3)

II c 口縁部が直口する。蓮弁を二重に描く。(第23図4)

III類 無文外反碗

口縁部が外反する碗である。内外体面に文様がないため無文と呼んでいるが、内底には印花文があるのが多い。(第23図5~7)

IV類 無文直口碗

口縁部が直口する碗である。内外体面は無文となる。(第23図8~10)

V類 玉縁外反碗

いわゆる佐敷タイプと称されている碗。口縁部が玉縁状に肥厚し外反する。(第23図11・12)

VI類 雷文帶碗

口縁部の外体面及び内体面に雷文帯を廻らす直口口縁の碗。(第23図13~第24図18)

VI a 口縁部の外体面に籠描きによる雷文帯を廻らし、その直下にも文様を描く。(第23図13・14)

VI b 外体面及び内体面にスタンプによる雷文帯をらす。内体面には型押しによる文様が施される。(第23図15~第24図18)

VII類 細蓮弁文碗

VII a 外体面は籠描きによる蓮弁文が廻り、内底面には捻花文やその中に文字が配されるものもある。高台内は全面施釉後、蛇の目状に釉剥ぎを行っている。(第24図19~22)

VII b 細い線描きによる蓮弁文と弁先が描かれる。内体面は無文。(第24図23・24)

VII c 細い線描きによる蓮弁のみが描かれ、弁先を持たない。内体面は無文。(第24図25)

同図26は細蓮弁文碗の底部資料と考えられるが、見込みを釉剥ぎしているため上記の類からはずし、図示した。

VIII類 波濤文帶碗 (註1)

口縁部が直口するタイプの碗。外面に波濤文と蓮弁文が廻り、両文様帯の間には不明瞭な一条の圏線が廻る。(第24図27~30)

VIII a 単籠で波濤文を描いたもの。(第24図27~29)

VIII b 4本1組の櫛状施文具で波濤文を描いたもの。(第24図30)

IX類 幅広高台碗 (註2)

器高に対して口径が大きく開き、口縁部は直口するものから外反するものまである。高台は低く、幅が広い。内底面には幅広の蛇ノ目状に釉が剥ぎ取られる。(第25図31~34)

X類 櫛描細蓮弁文碗

口縁部が直口し、口縁部内面のつくりが若干凹み稜を持つ。外体面に櫛描きで縦に施文し、内体面は無文。見込みは露胎となる。(第25図35~37)

XI類 内彎碗

口縁部が内彎する碗である。高台と外底面は露胎。素地には黒色の粒子を多く含む。1個体のみの出土である。(第25図38)

第25図39~45は類不明の底部資料である。

2. 皿

I 類 口折皿

口縁部が逆「L」状に折れるタイプの皿。

I a 口折部内面の稜線が明瞭で、外面に鎬連弁文が廻る。(第図46)

I b 口折が緩やかになり、外面に無鎬連弁文が廻る。(第26図47~49)

I c 口縁部が屈曲するが、口折部が丸みを持つ。外体面に一条の圈線がめぐる。(第図50)

I d 無文の口折皿。(第26図51)

II 類 穂花皿

口縁部にラマ式連弁の弁先形の稜花が刻まれる外反皿。文様は刻花文と唐草文を描くものが主流だが、中には無文の穂花皿や見込みを釉剥ぎする穂花皿もみられる。(第26図52~54)

III 類 外反皿

腰部で屈曲し、口縁部にかけて外へ開く皿である。(第26図55~57)

III a 内面に籠描きによる文様を持つ外反皿。(第図55)

III b 無文外反皿。(第26図56・57)

IV 類 直口皿

口縁部が直口するタイプの皿。(第26図58~62)

IV a 内面に連弁文が廻る有文直口皿。(同図58・59)

IV b 無文直口皿。(同図60)

IV c 外面の胴部に明瞭な稜線が一条廻る。(同図61)

IV d 腰部から口縁部へ直線的に開く無文の直口皿。(同図62)

V 類 菊花皿

内・外面に花弁文が廻る。底部は基筒底。(同図63)

3. 盤

盤は口縁部の形態により以下の3種に分けることができる。

I 類 内面に先端の丸い3~5本の櫛描きによ

る連弁文が配される。(第27図64・65)

II 類 口縁部の鎬を平坦にし、鎬端を稜花形にする。内外面は有文。(第27図66・67)

III 類 口縁部が直口し、鎬を持たない盤である。(第27図68)

同図69・70は高台を持つ盤の底部である。

4. 酒会壺

酒会壺の身の部分と、蓋の部分が得られた。

両者の口径や合わせ口の径、釉色、素地の特徴から対になるものと推測される。(第27図71・72)

5. 杯

I 類 口縁部が緩やかに外反する厚手の杯。外体面に無鎬連弁文が廻る。(第27図73)

II 類 胴部で緩やかなくびれを持ち、口縁部が外反する薄手の杯。(第27図74)

6. 香炉

円筒形の三足香炉と推測されるが、底部は不明。口唇部が凹む寄口口縁で、外面に弦文が廻る。(第27図75)

7. 瓶

口縁部と底部資料を3点を図示した。(第27図76~78)

8. 器種不明

基筒底の資料であるが、口縁部が不明であるため器種不明として扱った。(第27図79)

註

註1 南風原町教育委員会『クニンドー遺跡』 1996

註2 那覇市教育委員会『銘苅原遺跡』 1997

参考文献

今帰仁村教育委員会 『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅰ』 1983

沖縄県教育委員会 『首里城跡-京の内跡発掘調査報告書 (I) -』 1998

金武正紀 「沖縄の中国貿易陶磁器」『考古学ジャーナル』 6月号 №320 1990

第6表 青磁集計一覧

器種	名称又は仮称	類	部位	表土 (I a)層	I b層	II a層	II b層	II c層	II d層	計
碗	鎬連弁文碗	I	口縁部				1			1
		II a	口縁部			1				1
	無鎬連弁文碗	II b	口縁部			1				1
		II c	口縁部			1				1
	無文外反碗	III	口縁部	4	41	43	1	3	92	
			底部	1	2	11	1	1	16	
	無文直口碗	IV	口縁部	4	14	20	45	3		86
			底部	2		11	6		1	20
	玉縁外反碗	V	口縁部			4	2			6
			底部		1	1	4			6
	雷文帶碗	VIa	口縁部			4	3			7
		VIb	口縁部		4	10	16			30
			底部		1		1			2
	細連弁文碗	VIIa	口縁部		1	4	14			19
			底部			3	2			5
		VIIb	口縁部	3	21	95	149		7	275
			底部	2		11	13		1	27
		VIIc	口縁部		2	3	7			12
	波濤文帶碗	VIIIa	口縁部			3	11			14
			底部				2			2
	幅広高台碗	VIIIb	口縁部			2				2
		IX	口縁部	1	3	23	35			62
			底部	2	6	5	8			21
	柳描細蓮弁文碗	X	口縁部			5	4			9
			底部			1	1			2
	内彫碗	XI	口縁部			1				1
	類不明		底部	1	5	15	17			38
皿	口折皿	I a	口縁部			2	1			3
		I b	口縁部		2	2	2			6
			底部		2	4	2			6
		I c	口縁部			1				1
			底部				1			1
		I d	口縁部			1	3			4
	菱花皿	II	口縁部	3	10	58	73		1	145
			底部		2	12	13	1		28
	外反口縁皿	IIIa	口縁部			1				1
		IIIb	口縁部		1	6	9			16
			底部			1	1			2
	直口口縁皿	IVa	口縁部		2	6	3			11
			底部			3				3
		IVb	口縁部			7	4			11
			底部				1			1
	菊花皿	IVc	口縁部			1	3			4
		IVd	口縁部			1				1
	菊花皿	V	口縁部				1			1
			底部		1					1
	類不明		底部	1	1	5	12			19
盤	鍔縁盤	I	口縁部	1	2	5	6			14
			底部		3	3	8			14
	直口口縁盤	II	口縁部		1	2	7			10
		III	口縁部			1				1
	類不明		底部			3	2			5
壺	大型壺蓋		合わせ口		1		1			2
	大型壺		身	1		2	3			6
杯		I	口縁部			2	1			3
		II	口縁部			1				1
香炉			口縁部	2	1					3
			底部	1	2					3
瓶			口縁部			1	1			2
			底部			2				2
器種不明			口縁部		1		2			3
			底部		1		1			2
合計				21	96	403	556	6	14	1094

第7表 (1) 青磁観察一覧

挿図番号	器種	名称 又は 仮称	類	口径 器高 底径 (cm)	器形及び文様等の特徴	施 軸	出土地点
第23図 1	碗	鎬蓮弁文碗	I	— — —	口縁部が若干外反し、外体面に鎬蓮弁文を持つ。	内外面施釉。	FG-32、 II b層
第23図 2	〃	無鎬蓮弁文碗	II a	11.8 — —	口縁部が外反する蓮弁文碗。蓮弁の周りを箆で片切り彫りを行っているが、鎬を持たない。	〃	LN-21、 II b層
第23図 3	〃	〃	II b	11.2 — —	口縁部が外反する碗。蓮弁の輪郭を單箆で描き、弁先が尖る。	〃	NO-14、 II a層
第23図 4	〃	〃	II c	11.8 — —	口縁部が直口し、蓮弁を二重に描く。	〃	PQ-15、 II a層
第23図 5	〃	無文外反碗	III	— — 5.4	疊付は平坦。内底面に文様がみられるが判然としない。	疊付・高台内は露胎。	LM-17、 II ab層
第23図 6	〃	〃	〃	17.6 — —	体部が張り、口縁部が外反する碗。内外面は無文。	内外面施釉。	FG-15、 II c層
第23図 7	〃	〃	〃	16.6 — —	〃	〃	FG-22、 柱穴No.4
第23図 8	〃	無文直口碗	IV	11.8 6.1 3.8	口縁部が直口する無文碗。素地は赤褐色を呈す。	疊付・高台内は露胎。	LM-27、 II 層柱穴 No.16
第23図 9	〃	〃	〃	13.6 8.1 5.2	焼成不良。素地は赤褐色を呈し、釉薬は淡灰色をなす。	〃	PQ-12、 II b層
第23図 10	〃	〃	〃	12.8 6.3 4.2	素地は灰色を呈すが、釉色は灰緑色の失透明釉。	〃	PQ-16、 II a層
第23図 11	〃	玉縁口縁碗	V	16.0 — —	口縁部が玉縁状に肥厚する無文外反碗。	内外面施釉。	PQ-24、 II b層
第23図 12	〃	〃	〃	— — 4.8	疊付は平坦。見込みに印花文を持ち、釉薬を搔き取っている。	疊付・高台内は露胎。	PQ-15、 II ab層
第23図 13	〃	雷文帶碗	VIa	12.2 6.0 5.0	外面に箆描きの雷文帯が廻る。その下に草花文?が描かれる。	疊付にも釉薬が及ぶ。	RS-13、 II a層
第23図 14	〃	〃	〃	14.3 — —	外面に箆描きによる雷文帯が廻り、内面にも文様が見られるが、詳細は不明。	内外面施釉。	PQ-16、 II ab層
第23図 15	〃	〃	VIb	15.6 — —	外面に雷文帯と草花文?、内面には雷文帯と型押しによる人物文が見られる。	〃	NO-21、 II b層
第23図 16	〃	〃	〃	16.7 — —	外面はスタンプによる雷文帯。内面には型押しによる雷文帯と花文が見られる。	内外面施釉。釉色は淡灰緑色。	JK-13、 東西溝内

第7表 (2) 青磁観察一覧

挿図番号	器種	名称 又は 仮称	類	口径 器高 底径 (cm)	器形及び文様等の特徴	施 軸	出土地点
第24図 17	碗	雷文帶碗	VIIb	19.4 - -	外面はスタンプによる雷文帶。内面には型押しによる雷文帶と馬文が見られる。	内外面施釉。釉色は淡黄色。	TU-35、IIb層
第24図 18	〃	〃	〃	- - 6.4	内面に型押しによる文様がみられるが、判然としない。	全面施釉後、高台内の釉薬を蛇の目状に搔き取っている。	LM-17、IIb層
第24図 19	〃	細蓮弁文碗	VIIa	15.0 - 8.8	外面に籠描きによる蓮弁文。内面には捻花文が見られる。	〃	PQ-30、IIb層
第24図 20	〃	〃	〃	14.0 8.8 5.4	〃	〃	RS-14、IIab層
第24図 21	〃	〃	〃	11.3 - 4.8	外面には籠描きによる蓮弁文。内面には捻花文の中に文字を持つ。	〃	RS-17、IIab層
第24図 22	〃	〃	〃	- - 4.3	外面は籠描きによる蓮弁文。内底面には捻花文の中に「福」の字を持つ。	〃	RS-26、IIa層
第24図 23	〃	〃	VIIb	13.2 8.8 5.4	外面に線描きによる蓮弁文。弁先は弧を描く。内面は無文。	疊付・高台内は露胎となる	NO-22、IIb層
第24図 24	〃	〃	〃	13.6 6.7 5.0	外面に線描きによる蓮弁文。弁先は平坦になる。内面は無文。	〃	PQ-12、IIb層
第24図 25	〃	〃	VIIc	13.2 6.7 4.6	外面に線描きによる蓮弁文が描かれるが、縦の線のみを描き、弁先は見られない。内面は無文。	〃	HI-32、IIb層
第24図 26	〃	〃	不明	- - 4.5	外面には籠描きによる蓮弁文がみられるが、見込みは釉薬が搔き取られている。	見込み・高台内は露胎となる。	PQ-24、IIb層
第24図 27	〃	波瀾文帶碗	VIIa	13.6 6.0 6.0	外面に波瀾文帶と細蓮弁文を描き、内面は無文。高台の内側は「ハ」の字状になる。	疊付・高台内は露胎となる。	RS-33、IIb層
第24図 28	〃	〃	〃	13.6 - -	外面に波瀾文帶と細蓮弁文を描き、内面は無文。	灰緑色の釉薬を内外面に施す。	RS-33、柱穴No.24
第24図 29	〃	〃	〃	- - 5.9	口縁部に波瀾文帶を持つ碗の底部資料である。素地は灰色で堅緻。	疊付・高台内は露胎となる。	TU-35、IIb層
第24図 30	〃	〃	VIIb	13.5 - -	外面に4本の櫛描きによる波瀾文が廻る。	緑色の釉薬を内外面に施す。	PQ-24、IIab層
第25図 31	〃	幅広高台碗	IX	15.8 5.5 6.4	内外面無文。見込みは施釉後、蛇の目状に釉薬を搔き取る。露胎部分は赤色をおびる。	疊付・高台内は露胎となる。	TU-12、IIb層
第25図 32	〃	〃	〃	11.6 4.5 5.5	外面には重ね焼きにより別個体の口縁部が熔着している。見込みは蛇の目状に釉薬を搔き取る。露胎部分は赤色をおびる。	〃	RS-14、IIa層
第25図 33	〃	〃	〃	16.0 - -	見込みは施釉後、蛇の目状に釉薬を搔き取る。露胎部分は赤色をおびる。素地は灰白色で堅緻。	内外面に緑色の釉薬を施す。	NO-29、IIb層

第7表 (3) 青磁観察一覧

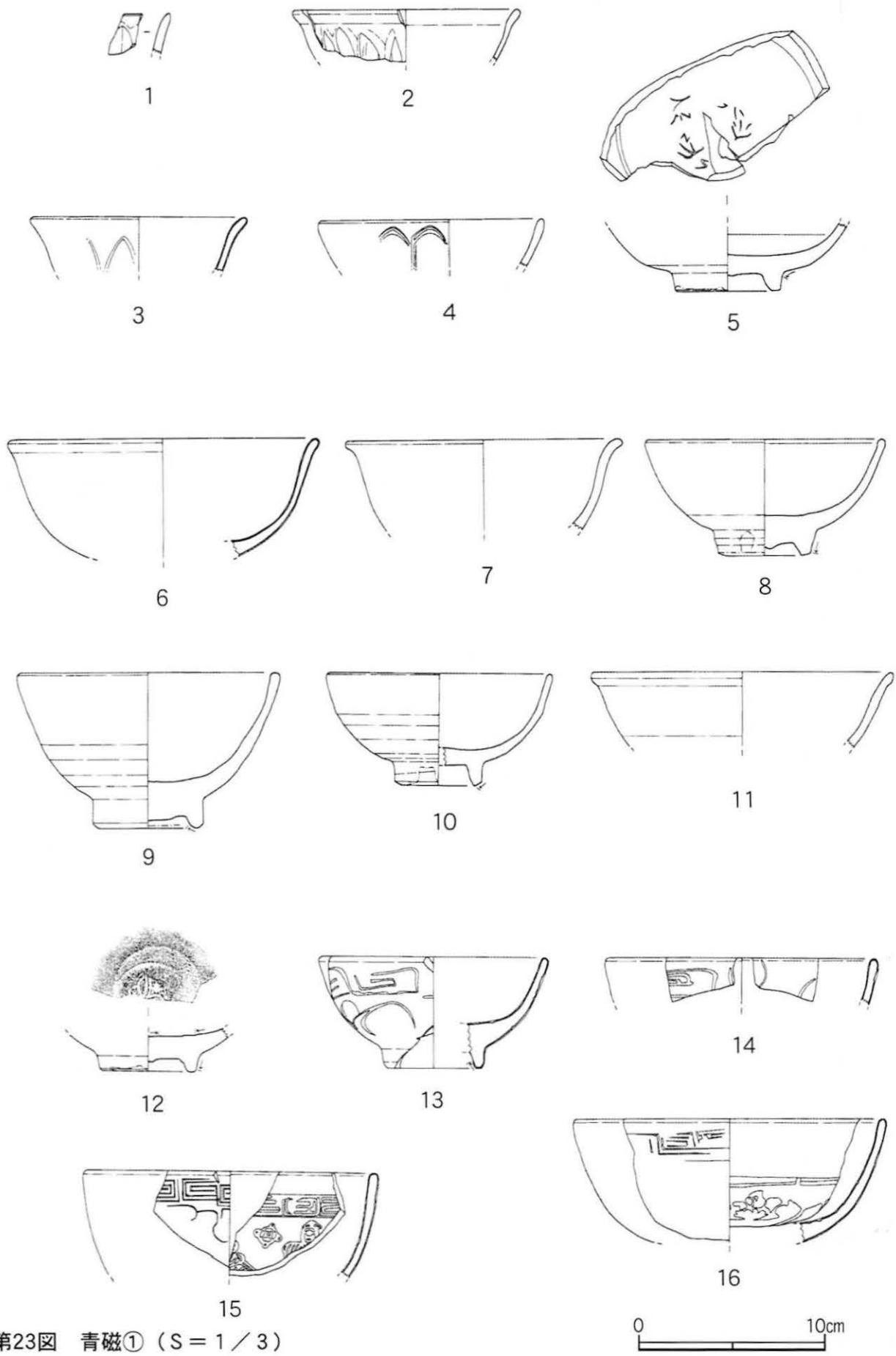
挿図番号	器種	名称 又は 仮称	類	口径 器高 底径 (cm)	器形及び文様等の特徴	施 紬	出土地点
第25図 34	碗	幅広高台碗	IX	16.6 - -	口縁部が外反し、口クロ成形痕が明瞭に残る。素地は灰白色で堅緻。	内外面に緑色の釉薬を施す。	NO-29、IIb層
第25図 35	"	櫛描細蓮弁文碗	X	12.7 - -	外面に7本～14本単位の櫛描き文を施し、内面は無文。見込みは釉薬を搔き取っている。素地は灰白色で堅緻。黒色の粒子を含む。	内外面に緑色の釉薬を薄く施す。	PQ-29、IIa層
第25図 36	"	"	"	12.9 - -	外面に櫛描き文を持ち、内面は無文。素地は黄白色で、堅緻。黒色の粒子を含む。	内外面に釉薬を薄く施し、釉色は透明に近い。	PQ-17、IIab層
第25図 37	"	"	"	- - 4.6	X類の底部と考えられる資料である。見込みは釉薬を搔き取っている。素地は黄白色で堅緻。黒色の粒子を含む。	やや緑色をおびる透明釉を施す。高台内は露胎。	PQ-13、IIa層
第25図 38	"	内彎碗	X I	13.4 5.7 4.4	口縁部が内彎する碗である。露胎となる高台内は赤色をおびる。素地は灰色で堅緻。黒色の粒子を多量に含む。	緑色の釉薬を厚く施す。疊付・高台内は露胎。	JK-13、東西溝内
第25図 39	"		類 不 明	- - 5.6	高台外面に段を有し、内底面の中央部が膨らむ碗である。素地は灰色で堅緻。黒色の粒子を多量に含む。	釉薬が疊付までおよび、高台内は露胎。	HI-17、Ib層
第25図 40	"		"	- - 4.4	残存部に文様は認められない。底部が厚みを持つ。素地は白色で堅緻。	"	VW-34、IIb層
第25図 41	"		"	- - 5.2	見込みに菊花状の印花文を持つ。素地は灰色で堅緻。	疊付・高台内は露胎となる。	NO-31、IIa層
第25図 42	"		"	- - 3.7	見込みに印花文を持ち、底径の小さな碗である。素地は黄白色で陶質。	高台のみ露胎となる。	LM-16、IIa層
第25図 43	"		"	- - 5.6	見込みに印花文。外体面に文様が見られるが判然としない。素地は灰白色で堅緻。黒色の粒子を含む。	全面施釉後、高台内を蛇の目状に搔き取る。	NO-17、IIab層
第25図 44	"		"	- - 4.5	見込みに印花文を持つ。素地は黒色の粒子を含む黄白色を呈し、陶質に近い。	疊付・高台内は露胎となる。	LM-16、IIa層
第25図 45	"		"	- - 7.5	大型の碗底部として扱った。素地は白色で堅緻。	釉薬を内外面に施し、高台内を露胎とする。	HI-14、IIb層
第26図 46	皿	口折皿	I a	13.3 - -	薄手の口折皿。外面に鎬蓮弁文が廻る。素地は灰白色で堅緻。	釉薬を内外面に施す。	NO-29、IIb層
第26図 47	"	"	I b	10.9 - -	口折皿。外体面に無鎬の蓮弁文が廻る。素地は灰色で堅緻。	内外面に釉薬が厚く施される。	RS-13、柱穴No.13
第26図 48	"	"	"	12.3 3.6 5.8	厚手で口折部が緩やかになる皿。外体面に無鎬蓮弁文が廻る。素地は灰白色で堅緻。	全面施釉後、高台内を搔き取っている。	HI-36、IIa層
第26図 49	"	"	"	11.0 3.1 5.5	口折部が緩やかになる皿。外体面に無鎬蓮弁文が廻る。素地は白色で堅緻。	全面施釉後、高台内を蛇の目状に搔き取る。	LM-14、IIa層
第26図 50	"	"	I c	9.9 - -	口縁部が緩やかに外へ折れる皿。外体面に1条の圈線が廻る。素地は灰白色で堅緻。	残存部全体に釉薬が施される。	PQ-13、IIa層

第7表(4) 青磁観察一覧

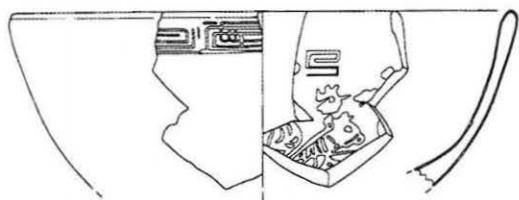
挿図番号	器種	名称 又は 仮称	類	口径 器高 底径 (cm)	器形及び文様等の特徴	施釉	出土地点
第26図 51	皿	口折皿?	I d	13.0 4.0 6.4	口折部が緩やかになり、稜線を持たない。内外面無文。素地は白色で堅緻。	全面施釉後、高台内を搔き取る。	RS-17、II b層
第26図 52	"	稜花皿	II	12.0 3.5 5.6	内体面に唐草文を、見込みに印花文を持つ稜花皿。素地は灰白色で堅緻。	"	FG-31、II a層
第26図 53	"	"	"	13.2 3.5 5.6	"	"	LM-16、II b層
第26図 54	"	"	"	11.2 3.0 5.4	内体面に唐草文を、見込みに梵字印を持つ稜花皿。素地は灰白色で堅緻。	"	RS-12、II b層
第26図 55	"	外反口縁皿	III a	11.1 - -	内体面に篦描き文、外体面は無文。素地は白色で堅緻。	内外面に釉薬を厚く施す。	NO-16、II a層
第26図 56	"	"	III b	13.4 - -	内外面無文の腰折外反皿。素地は灰白色で堅緻。	"	NO-18、II a層
第26図 57	"	"	"	12.8 4.0 6.4	内外面無文。見込みに印花文を持つ。素地は灰白色で堅緻。	内外面に淡灰緑色の釉薬を施す。疊付・高台内は露胎。	NO-24、II b層
第26図 58	"	直口口縁皿	IV a	7.8 2.9 3.8	内体面に3本1組の蓮弁文が廻る。外体面は無文。素地は灰白色で堅緻。	全面施釉後、高台内を搔き取る。	RS-14、II ab層
第26図 59	"	"	"	7.8 2.9 5.0	内体面に5本1組の細蓮弁文が廻り、見込みに文様が認められるが判然としない。素地は灰色で堅緻。	"	PQ-14、II a層
第26図 60	"	"	IV b	7.5 3.2 4.6	内外面無文の直口口縁皿。素地は灰白色で堅緻。	"	LM-37、II b層
第26図 61	"	"	IV c	8.9 - -	外体面胴部に隆起線状の稜線が1条廻る。素地は灰色で堅緻。	内外面に釉薬を施す。	HI-22、II a層
第26図 62	"	"	IV d	8.8 2.9 3.6	内外面無文。口縁部の2ヶ所を意識的に打ち欠いた感を受ける。素地は灰色。	疊付・高台内は露胎。	NO-17、II 層焼土 だまりに伴う。
第26図 63	"	菊花皿	V	- - 5.4	内外面に蓮弁文が廻る菊花状の皿。底部は碁笥底状になる。素地は灰白色。	高台内ののみを露胎とする。	RS-14、I b層
第27図 64	盤	鈇縁盤	I	26.0 5.0 11.2	内体面に4~6本単位の櫛描きによる細蓮弁文が廻る。素地は灰白色。	高台の内側は露胎となる。	RS-14、II ab層
第27図 65	"	"	"	- - 8.8	内体面に4~6本単位の櫛描きによる細蓮弁文が廻る。素地は灰白色。	高台内ののみ露胎となる。	NO-30、II b層
第27図 66	"	"	II	- - -	鈇を平坦に仕上げた稜花盤。外体面には篦描きによる蓮弁文、内体面には牡丹唐草文が描かれる。素地は淡灰白色。	内外面施釉。	LM-16、II b層
第27図 67	"	"	"	- - -	鈇を平坦に仕上げた稜花盤。口縁部内面に僅かに文様が見られる。素地は淡灰白色。	"	RS-32、I b層

第7表(5) 青磁観察一覧

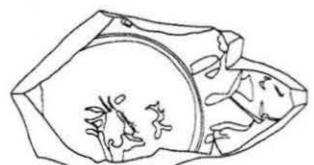
挿図番号	器種	名称 又は 仮称	類	口径 器高 底径 (cm)	器形及び文様等の特徴	施 程	出土地点
第27図 68	盤	直口口縁盤	III	— — —	鍔を持たない直口口縁の盤である。口縁直下の内外面に浅い削りを持つ。素地は灰白色。	内外面施釉。	TU-12、柱穴No.52
第27図 69	〃		不明	— — 8.2	高台を持つ内外面無文の底部資料。素地は淡灰白色。	全面施釉後、高台内を蛇の目状に搔き取っている。	TU-35、IIb層
第27図 70	〃		不明	— — 12.6	高台を持つ底部資料。見込みには七宝繋ぎ文を描く。素地は灰白色。	全面施釉後、高台内の釉薬を搔き取る。	FG-21、IIa層
第27図 71	蓋	大型壺の蓋		14.6 — —	酒会壺の蓋である。断面を観察すると文様が入るようであるが、外面からは確認できない。素地は淡灰白色。	釉薬は底の端部まで及び、内面は露胎。	NO-14、IIb層
第27図 72	壺	大型壺		16.8 — —	肩部に文様がみられるが、小破片のため判然としない。素地は淡灰白色。	内外面に釉薬を施し、口縁部は搔き取られる。	PQ-14、IIab層
第27図 73	杯		I	6.4 — —	外体面に片切り彫りによる無鎬蓮弁文が廻る。素地は灰白色。	内外面施釉。	PQ-18、IIab層
第27図 74	〃		II	— — —	張り出した胴部には明瞭な稜線が1条廻る。素地は灰白色。	〃	LM-27、IIa層
第27図 75	香炉			8.0 — —	口唇部を僅かに壅ませた寄口口縁の円筒形香炉。素地は淡灰白色。	〃	TU-15、Ib層
第27図 76	瓶			3.9 — —	瓶の口縁部資料として扱ったが、肥前産の磁器の可能性も考えられる。素地は白色。	〃	HI-32、IIb層
第27図 77	〃			— — 6.8	袋物の底部資料である。内面には輻轆による成形痕が残る。	内外面に釉薬を施し、高台内は露胎となる。	NO-29、IIa層
第27図 78	〃			— — 6.2	〃	〃	PQ-16、IIa層
第27図 79	不明			— — 4.8	底部が碁笥底を呈する。素地は灰白色。	外底面が露胎となる。	PQ-32、Ib層



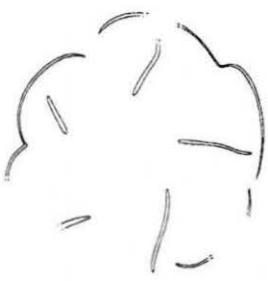
第23図 青磁① (S = 1/3)



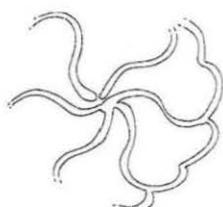
17



18



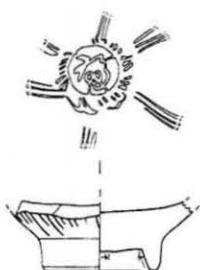
19



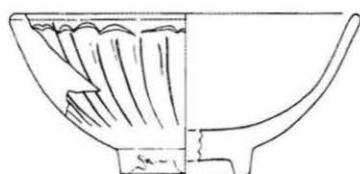
20



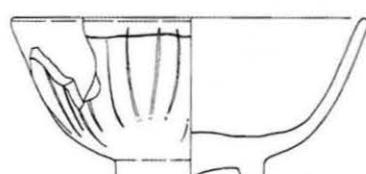
21



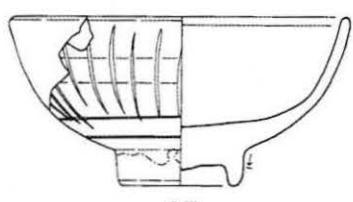
22



23



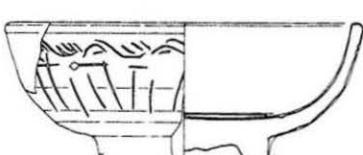
24



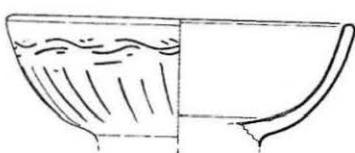
25



26



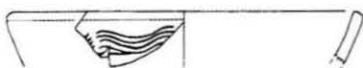
27



28



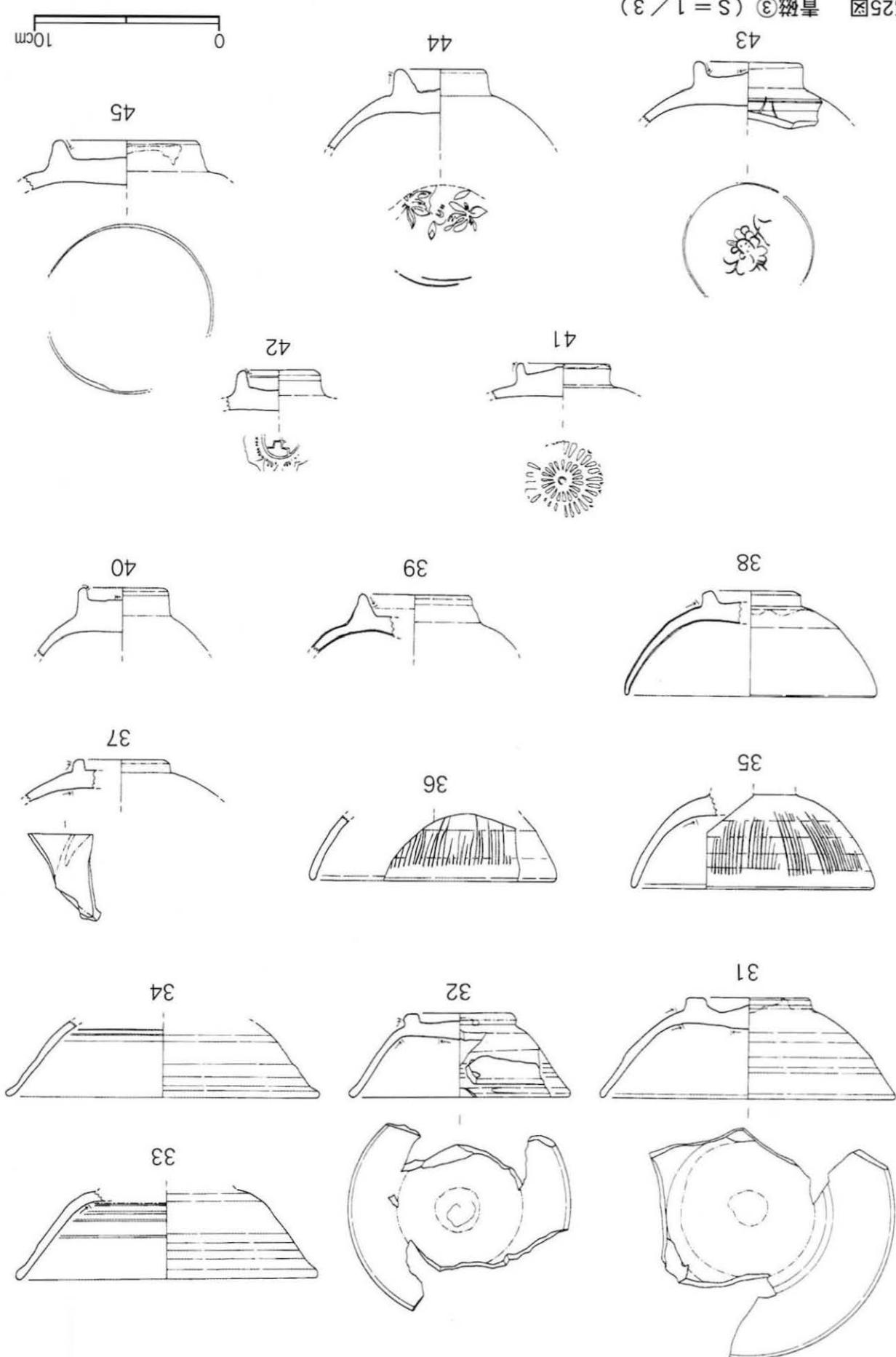
29

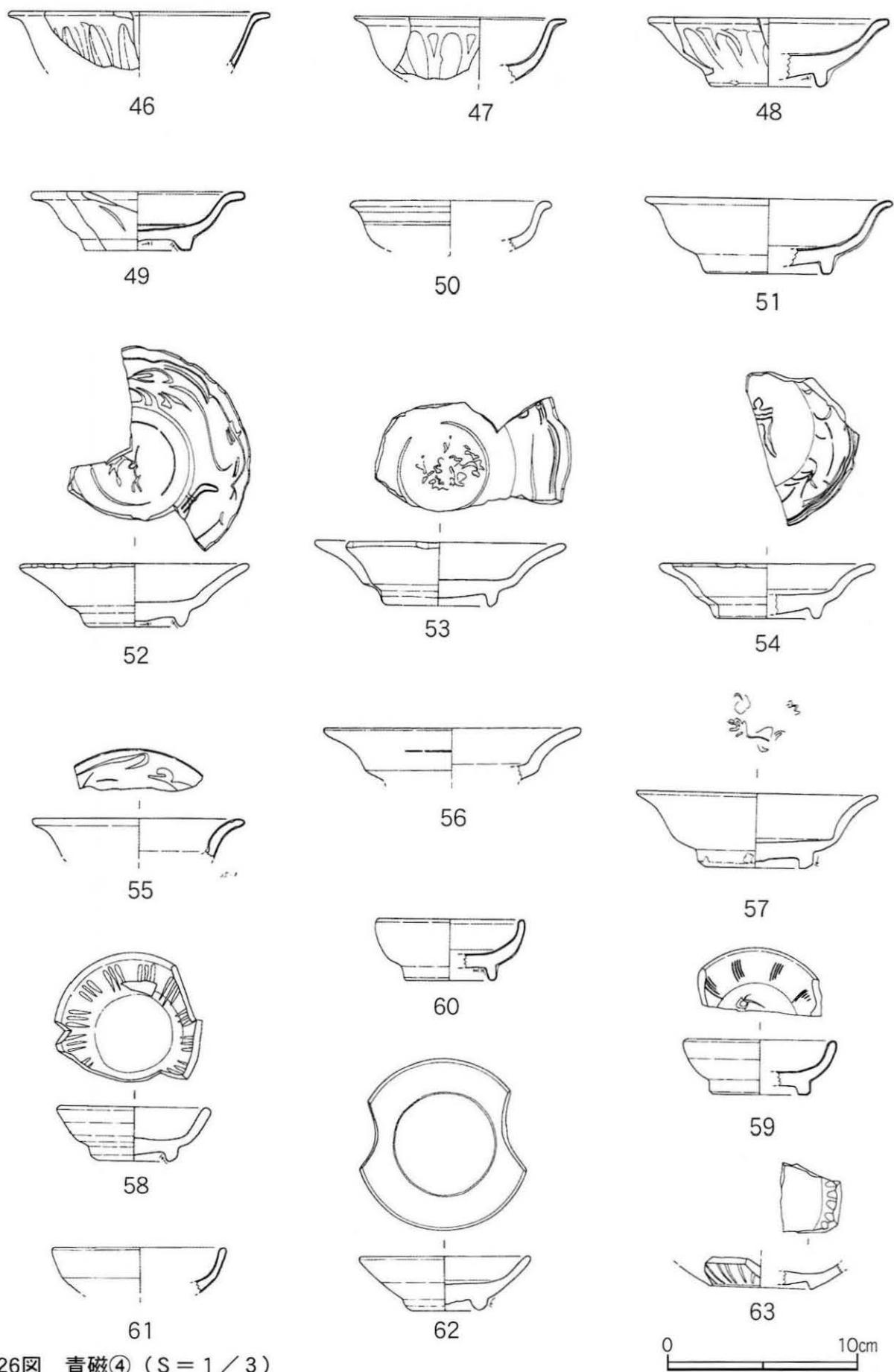


30

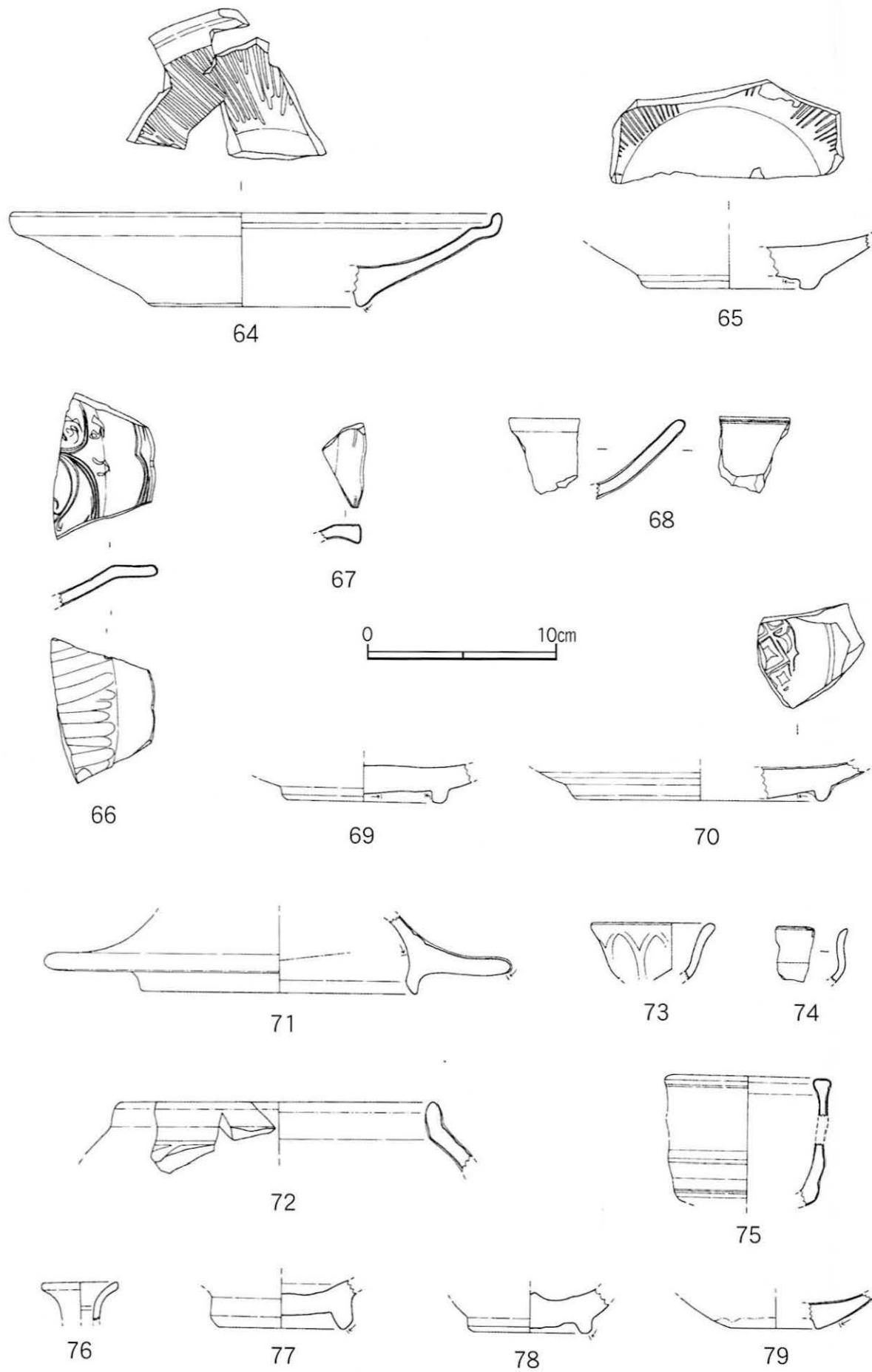
第24図 青磁② (S = 1 / 3)

第25图 青磁③ ($S = 1/3$)





第26図 青磁④ (S = 1 / 3)



第27図 青磁⑤ (S=1/3)

第4節 青 花

本遺跡から出土する青花は大別して中国明時代の青花と、それ以降の清時代に属するものがある。器種は碗、皿、杯、小杯、瓶、器種不明の6種類が認められた。以下、各器種ごとに分類基準を中心に概述し、個々の遺物の詳細については第8表にまとめた。

1. 碗

I類 (第28図1・2)

腰部がはり、口縁部が外反する端反りの碗である。外体面胴部にアラベスク文、口縁直下に波濤文帯、内体面には唐草文を描く。

II類 (第28図3~6)

体部は内湾しながら大きく開き、見込みが高台内に凹む形の蓮子型となる。高台は低く小さいものが多く、畳付はヘラで面取りされている。高台内にも釉薬が施される。

III類 (第28図7)

ゆるやかに体部が内湾し、口縁は外側に強く折れる。底部は蓮子型で高台が外側に開く器形である。文様は外体面に馬士文、見込みに観月図を配す例が多い。

IV類 (第28図8・9)

腰部が屈曲する碗である。胴部は腰折れ部から直線的に開き、直口口縁になる。高台は高く、見込みは広く平坦に作られる。

V類 (第29図10)

体部はゆるやかに内湾しながら大きく開き、見込みが高台内に凹む蓮子型で薄手の碗である。高台は低く小さいものが多く、畳付はヘラで面取りされている。高台内にも釉薬が施される。文様構成は外体面胴部に鳥草木文、内体面の口縁直下に四方櫛文を描き、見込みに花、高台内に文字を配す。描技法は文様の輪郭内を塗りつぶすいわゆる「ダミ」の技法を用いている。

VI類 (第29図11)

体部が内湾しながら開く碗である。外体面に注目すると、II類で扱った「蓮子型」の碗と同様の列点文あるいは豹皮文と称されている文様である。しかし、II類の碗とここで扱うVI類の碗を比較すると、前者は精製で器高に対して口径が大きく、見込み

まで施釉される。これに対し、後者は粗製で口径が小さく小振り、見込みが露胎となる。これらの相違点からII類と分けVI類として扱った。

VII類 (第29図14・15)

体部が内彎しながら立ち上がり、見込み及び高台が露胎となる碗である。外体面の文様に注目すると、ベトナムのホイアンから検出された中国の彰州窯系の碗に類似している(註1)。

VIII類 (第29図16)

体部がやや内湾しながら開き、見込み及び高台が露胎となる粗製の碗である。内外体面の口縁部と腰部、見込み脇に界線がめぐる。同様の碗が湧田古窯跡から出土しており、福建・広東系の粗製碗で、16世紀後半~17世紀前半の年代が与えられている(註2)。

IX類 (第29図17)

腰部で屈曲し、口縁部にかけて直線的に開く粗製の碗である。見込み及び高台は露胎となる。外体面口縁直下に簡略な文様を描く。17世紀~18世紀代。

X類 (第29図19)

口縁部の内側が窪み、内側に若干折れる碗である。内外体面に簡略な文様を描くが、小破片であるため判然としない。小量ではあるが、精製と粗製の口縁部がそれぞれ2個体ずつ出土している。

XI類 (第30図21・22)

腰部がやや膨らみ、口縁部が直口あるいは若干外反する福建・広東系の印判手と称されている碗である。器高に対して口径と底径が大きい。見込みを蛇の目状に釉剥ぎを行い、高台が露胎となる。

不明 (第30図23~30)

底部破片資料のため、口縁部の分類と整合することはできないため不明とした。第

29図12・13、第30図23は口縁部資料で外反する資料。
第30図24～30は底部資料である。

2. 皿

I類 (第31図31～34)

体部がゆるやかに内湾し、口縁端部が外反する端反りの口縁を持つ皿である。文様構成は外体面に宝相華唐草文、見込みに十字花文や玉取獅子を描くものが多い。

II類 (第31図35)

いわゆる「碁笥底」の皿である。体部がゆるやかに丸みを持ち、口縁が直口あるいは内彎気味になる皿である。文様構成は外体面に波濤文帯と蕉葉文、見込みに花鳥やねじ花文を描く。

III類 (第31図36)

口縁部が直口し、高台を持つ皿である。内体面口縁直下に四方櫛文、見込みに文様を描くが詳細は不明である。

IV類 (第31図37)

大振りの皿で、ゆるやかに内彎する胴部から斜めに鍔がつくものである。

V類 (第31図38・39)

四角形あるいは多角形になる皿である。

3. 蓋 (第31図40)

水注あるいは瓶の蓋になるものである。1個体出土。同様の蓋が湧田古窯跡から出土している(註2)。15～16世紀代。

4. 瓶 (第31図41～第32図44)

瓶は11個体相当の資料が出土している。その内4点を図示した。

5. 杯 (第32図45)

短筒型を呈する腰折れの杯で、外体面中位に一条の隆起線がめぐるものである。

6. 小杯 (第32図48～50)

小杯はかなりの数が出土しているため、器形と施釉方法により分類を試みた。その結果、以下の3類に分けることができた。

I類 (第32図48)

直口口縁で、内外体面及び高台内を施釉し、疊付は露胎とする小杯。

II類 (第32図49)

直口口縁で、内外体面を施釉し、疊付及び高台内を露胎とする小杯。

III類 (第32図50)

口縁部が外反する小杯。

7. 器種不明 (第32図51)

1個体相当の資料が出土している。全形を窺い知ることができないため、器種不明として扱ったが、断片的な資料からある程度器形を推測することができる。頸部を持ち、その下部が球体状に丸く大きく膨らむことから、小型の壺あるいは瓶になると考えられる。

註

註1 昭和女子大学国際文化研究所『ベトナム・ホイアン考古学調査報告書』国際文化研究所紀要 Vol. 4 1997

註2 沖縄県教育委員会『湧田古窯跡(1)』

沖縄県文化財調査報告書 第111集 1993

参考文献

小野正敏 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」
『貿易陶磁研究』No.2 貿易陶磁研究会 1982

上田秀夫 「16世紀末から17世紀前半における中国製染付碗・皿の分類と編年への予察」『関西近世考古学研究Ⅰ』
関西考古学研究会 1991年

第8表(1) 青花観察一覧

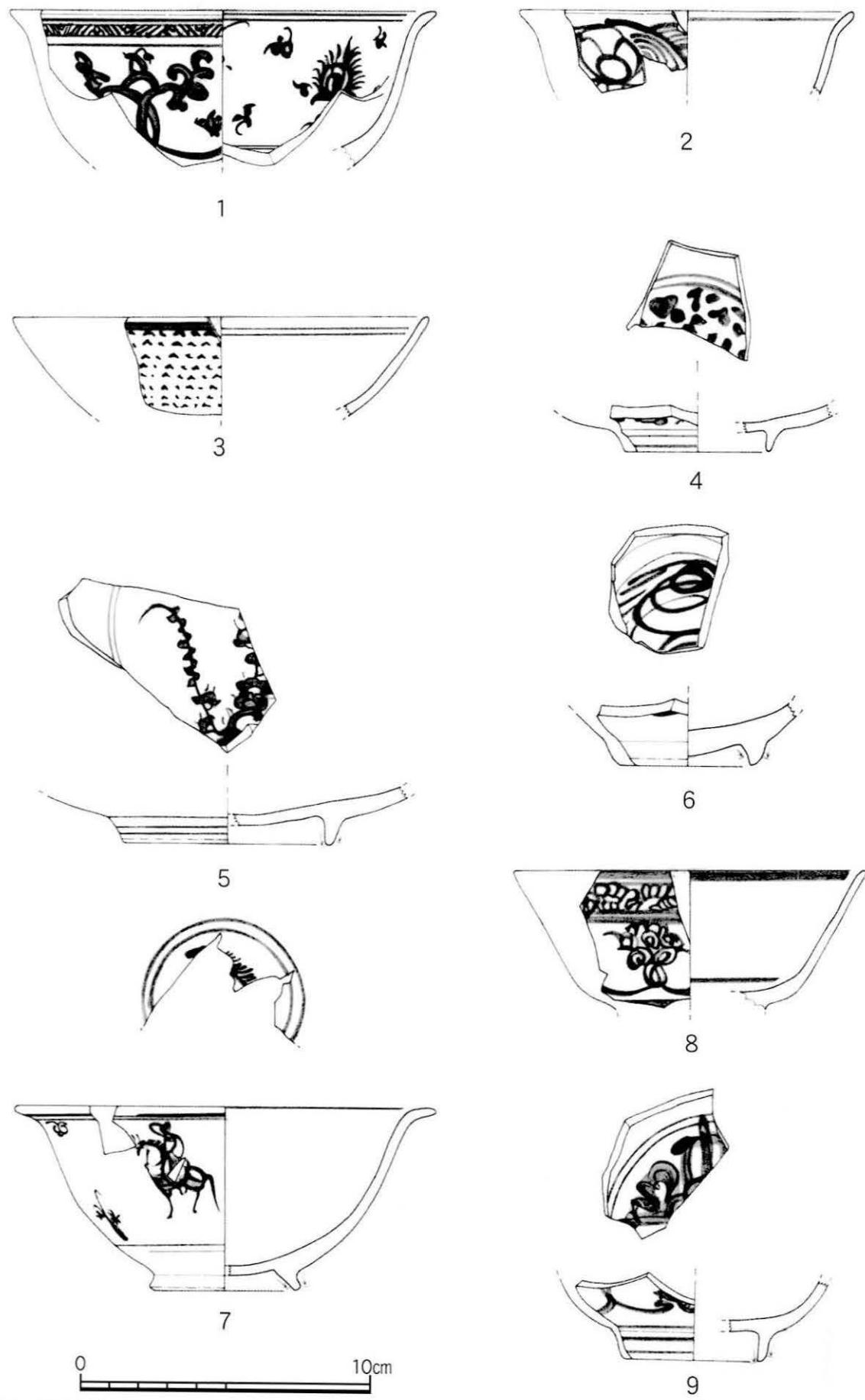
挿図番号	器種	類	口径 器高 底径 (cm)	器形及び文様等の特徴	呉須(藍色)の発色	出土地点
第28図 1	碗	I	14.6 - -	端反りの碗。外体面に波濤文帯、アラベスク文を、内体面には宝相華唐草文を描く。素地は白色で堅緻。	発色は最も良く、鮮明。	NO-22、IIb層
第28図 2	"	I	11.4 - -	端反りの碗。外体面に文様を描くが、詳細は不明。素地は白色で堅緻。	発色は良く、鮮明。	PQ-17、IIa層
第28図 3	"	II	14.2 - -	蓮子型の碗。外体面に豹皮文を、口縁部内面には界線が廻る。素地は白色で堅緻。	発色は良く、呉須と共に器面は緑色味をおびる。	JK-27、柱穴No.1
第28図 4	"	II	- - 5.0	蓮子型の碗。外体面及び見込みに豹皮文を描く。疊付にも施釉され、熔着した痕がみられる。素地は白色で堅緻。	発色は良く、鮮明。	RS-33、IIb層
第28図 5	"	II	- - 7.2	蓮子型の碗。見込みの文様は樹木のようであるが、詳細は不明。全面施釉後、疊付を削り出し露胎となる。素地は白色で堅緻。	発色は良く、鮮明。	PQ-14、柱穴No.18
第28図 6	"	II	- - 4.1	蓮子型の碗?。見込みの文様は法螺貝文と考えられる。全面施釉後、高台を削り疊付は露胎となる。素地は白色で堅緻。	発色はやや鈍く、器面全体が緑色味をおびる。	RS-33、IIa層
第28図 7	"	III	14.6 6.4 4.9	口縁部を外に屈曲させ、高台が「ハ」の字状に開く碗。外体面に馬士文。見込みに観月図を描く。素地は白色で堅緻。	発色は良いが、器面全体が淡く、やや鮮明さを欠く。	TU-35、IIb層
第28図 8	"	IV	12.2 - -	腰折れ碗。外体面に波濤文帯、アラベスク文を描く。素地は灰白色で堅緻。	発色は良く、呉須は緑色を呈し鮮明。	PQ-14、IIa層
第28図 9	"	IV	- - 4.8	腰折れ碗。外体面にアラベスク文を、見込みに十字花文を描く。疊付は削り出しにより露胎となる。素地は白色で堅緻。	発色は良く、鮮明。	RS-33、柱穴No.24
第29図 10	"	V	12.5 4.2 4.8	蓮子型の薄手の碗。外体面と見込みに花文を、口縁部内面に四方襟文を描く。高台内には字款を配す。素地は白色で堅緻。	発色は良く、鮮明。	NO-29、IIb層
第29図 11	"	VI	11.7 - -	外体面に豹皮文を持つ碗であるが、内体面の中程で施釉が止まることから、見込みは露胎になると考えられる。素地は黄白色で軟質。	発色は良く、緑色を呈す。	TU-13、IIb層
第29図 12	"	不明	12.4 - -	口縁部が外反する薄手の碗。外体面に豹皮文を描く。素地は白色で堅緻。	発色は良く、鮮明。	RS-14、Ib層
第29図 13	"	不明	13.6 - -	口縁部が外反する碗。外体面に折枝文を描く。素地は白色で堅緻。	発色は良く、鮮明。	RS-32、IIa層
第29図 14	"	VII	15.4 - -	口縁部が直口する粗製の碗。外体面に唐草文と宝文の崩しを描く。素地は灰色で堅緻。	発色は鈍く、灰色がかる。	NO-28、IIa層
第29図 15	"	VII	- - 7.0	外体面と見込みには釉薬が及ばず露胎となる。外体面に宝文の崩しを描く。素地は白色で堅緻。	発色は良く、緑色味をおびる。	NO-18、IIa層
第29図 16	"	VIII	12.8 5.3 5.0	内外面に界線のみを描く粗製の碗。外底面及び見込みは施釉されず露胎となる。素地は白色で軟質。	発色は良く、緑色を呈す。	PQ-15、IIa層
第29図 17	"	IX	14.6 - -	口縁部外面に簡略な文様を描く粗製の碗。見込み脇で施釉が止まる。素地は灰色で堅緻。	発色は良く、灰緑色を呈す。	PQ-15、IIa層

第8表(2) 青花観察一覧

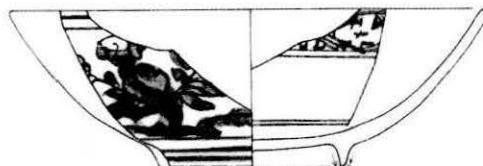
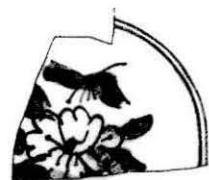
挿図番号	器種	類	口径 器高 底径 (cm)	器形及び文様等の特徴	呉須(藍色)の発色	出土地点
第29図 18	"	不明	12.8 4.1 5.5	IX類に類似する簡略な文様を描くが、浅い碗である。施釉範囲も狭い。素地は灰色で堅緻。	発色は淡く、不鮮明。	PQ-30、IIb層
第29図 19	"	X	16.1 - -	口縁部の内側を窪ませ、内側に若干折れる碗。内外面の文様は不明。素地は灰白色で堅緻。	発色は良く、呉須と共に器面は淡緑色を呈す。	HI-14、IIb層
第29図 20	"	不明	14.0 - -	口縁部外面に波瀬文と類似する文様を描くが、下位の文様については不明。素地は灰白色で堅緻。	発色は良く、緑色を呈す。	PQ-31、IIb層
第30図 21	"	XI	14.2 6.2 7.8	外体面と見込みに花文を描く直口口縁の碗。見込みは蛇の目状に釉剥ぎを行う。疊付は露胎。素地は白色で堅緻。	発色は良く、鮮明。	PQ-31、IIa層
第30図 22	"	XI	12.1 4.5 6.7	外体面の四方に花文を描く直口口縁の碗。見込みは蛇の目状に釉剥ぎを行う。疊付は露胎。素地は白色で堅緻。	発色は良く、鮮明。	TU-14、IIa層
第30図 23	"	不明	- - -	口縁部が外へ強く屈曲する碗。口縁内面に四方櫛文を、外面は亀甲文に類似する。外体面の文様は竹と松枝か?。素地は灰白色で堅緻。上村遺跡で類似の碗が出土している。	二次的に火を受けたためか、器面が変質している。	LM-17、IIb層
第30図 24	"	不明	- - 5.2	内底面の中央部が盛り上がる碗であるが、饅頭心型とは若干異なる。見込みの文様は不明。素地は灰白色で堅緻。	発色は良く、鮮明。	PQ-26、IIb層
第30図 25	"	不明	- - 4.6	見込みに花文のような文様を描くが詳細は不明。高台内にも2本の界線を描く。素地は白色で堅緻。	発色は良く、鮮明。	VW-24、II層
第30図 26	"	不明	- - 4.7	見込みに「福」の字を記す。疊付のみを露胎とする。素地は白色で堅緻。	発色は良く、鮮明。	NO-18、IIa層
第30図 27	"	不明	- - 5.0	外底面に「大明」の字款を記す。厚みのある碗。疊付のみ露胎となる。素地は灰白色で堅緻。	発色は良く、鮮明。	NO-28、II層
第30図 28	"	不明	- - 6.8	底径が大きく高台が低い碗で、厚みがある。見込みの文様は不明。疊付、高台内は露胎となる。素地は灰白色で堅緻。	発色は良く、鮮明。	PQ-29、IIa層
第30図 29	"	不明	- - 5.8	見込みに花文のような文様を描くが、詳細は不明。素地は灰白色で堅緻。	発色は良く、緑色を呈す。	LM-16、IIb層
第30図 30	"	不明	- - -	外体面にラマ式蓮弁文を描く。素地は白色で軟質。文様及び胎土からベトナム産の可能性があるとの教示を金武正紀氏よりいただいた。	発色は良く、鮮明。	DE-32、IIa層
第31図 31	皿	I	11.5 3.0 6.0	端反りの口縁を持つ皿である。外体面に宝相華唐草文、見込みに玉取獅子を描く。高台内側に砂粒が付着し、疊付のみ露胎となる。素地は白色で堅緻。	発色は良いが、やや不鮮明。	PQ-14、柱穴No.22
第31図 32	"	I	- - 8.7	"	発色は良く、鮮明。	NO-29、IIbd層
第31図 33	"	I	9.2 2.3 4.4	外体面に宝相華唐草文、見込みに十字花文を描く。疊付のみ露胎。素地は白色で堅緻。	発色は良く、鮮明。	FG-35、IIa層
第31図 34	"	I	9.4 2.2 4.2	文様構成は上記と同様。高台付近に砂粒が付着し、疊付のみ露胎となる。素地は白色で堅緻。	発色は良く、やや鮮明。	LM-16、IIa層

第8表(3) 青花觀察一覧

挿図番号	器種	類	口径 器高 底径 (cm)	器形及び文様等の特徴	呉須(藍色)の発色	出土地点
第31図 35	"	II	9.8 2.5 3.0	基筒底の皿である。外体面に蕉葉文、見込みに菊花文を描く。疊付のみ露胎。素地は白色で堅緻。	発色は良く、鮮明。	NO-14、IIb層
第31図 36	"	III	11.3 2.4 6.2	口縁部内面に四方櫛文を、外面は界線のみを描く。見込みの文様は不明。疊付のみ露胎となり、砂粒が付着する。素地は白色で堅緻。	"	PQ-16、IIa層
第31図 37	"	IV	- - -	大振りの皿である。口縁部外面には界線のみを、内面の文様については不明。素地は白色で堅緻。	"	RS-10、IIb層
第31図 38	"	V	- - -	口縁部の形態から八角形になると思われる皿である。内面の文様は不明。疊付に砂粒が付着する。素地は白色で堅緻。	"	TU-14、Ib層
第31図 39	"	V	- - -	底部が四角形となる皿である。内面の文様は不明。素地は白色で堅緻。	発色は鈍く、鮮明さに欠ける。	NO-21、IIb層
第31図 40	蓋		3.4 - -	外体面は底部で施釉が止まる。文様については不明。素地は白色で堅緻。同様の資料が湧田古窯跡から出土している。	二次的に火をうけたためか、器面が変色している。	NO-21、IIb層
第31図 41	瓶		- - -	瓶の肩部資料である。外体面には唐草文を描く。素地は白色で堅緻。	発色は良く、鮮明。器面は黄色味をおびる。	VW-24、IIa層
第31図 42	"		- - 9.5	高台内及び外面に2条の界線、腰部にラマ式蓮弁文、胴部に葡萄文を、その上位に如意頭文、唐草文を描く。素地は白色で堅緻。	発色は良く、鮮明。	NO-30、IIb層
第32図 43	"		- - -	腰部から頸部に向かいラマ式蓮弁文、唐草文?、折枝文、雷文帶、蕉葉文?を描く。内外面施釉。素地は白色で堅緻。	発色は良く、鮮明であるが、器面全体が灰色がかかる。	RS-33、IIb層
第32図 44	"		- - 7.9	腰部にラマ式蓮弁文を描く。呉須と共に器面全体の発色が非常に良い。素地は灰白色で堅緻。	発色は良く、鮮明。	RS-32、IIa層
第32図 45	杯	I	8.4 5.2 4.1	短筒型の腰折れ杯。隆圓線の下位に如意頭文、上位に花鳥折枝文を描く。見込みには梅の図。素地は白色で堅緻。	"	RS-17、IIb層
第32図 46	"	I	8.0 - -	短筒型の腰折れ杯。外体面には草花文を描く。素地は白色で堅緻。	"	RS-39、IIb層
第32図 47	"	II	- - 3.2	外体面に唐草文を描き、高台内に「大明造年」の字款を持つ。見込みは花卉文か? 詳細不明。素地は白色で堅緻。	焼成不良。	DE-26、IIab層
第32図 48	小杯	I	3.2 3.2 1.9	口縁部が直口し、疊付が露胎となる小杯。外体面に界線が廻る。素地は白色で堅緻。	発色は良く、鮮明。	PQ-31、IIab層
第32図 49	"	II	4.2 2.7 1.6	口縁部が直口し、高台内及び疊付が露胎となる小杯。外体面の文様は不明。素地は白色で堅緻。	"	PQ-18、IIb層
第32図 50	"	III	5.8 - -	口縁部が外反する小杯。内外面に界線が廻る。素地は白色で堅緻。	"	NO-29、IIb層
第32図 51	不明	-	- - -	頸部を持ち、胴部が球体状に丸く膨らむもの。外体面に獸文を描く。素地は白色で堅緻。	"	LM-26、IIb層

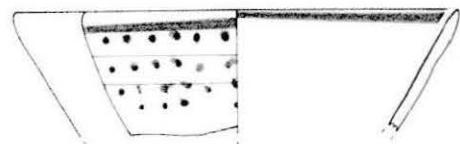


第28図 青花① (S = 1 / 2)

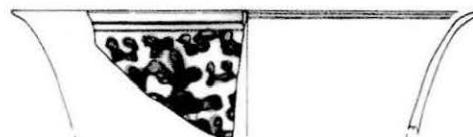


圖

10



11



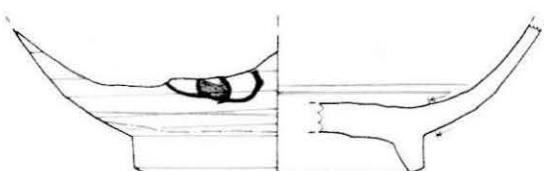
12



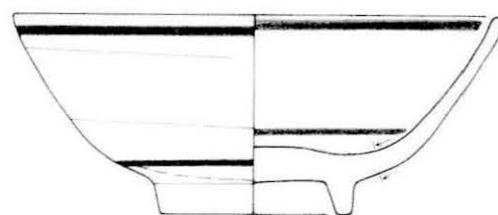
14



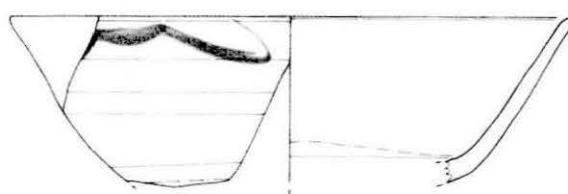
13



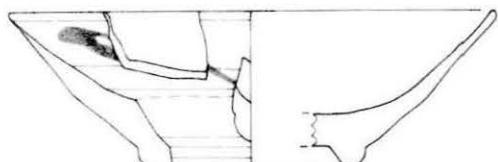
15



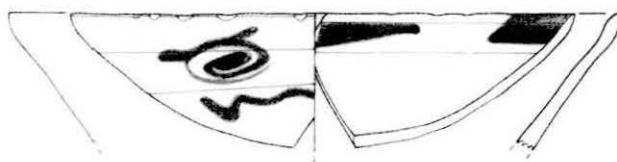
16



17



18



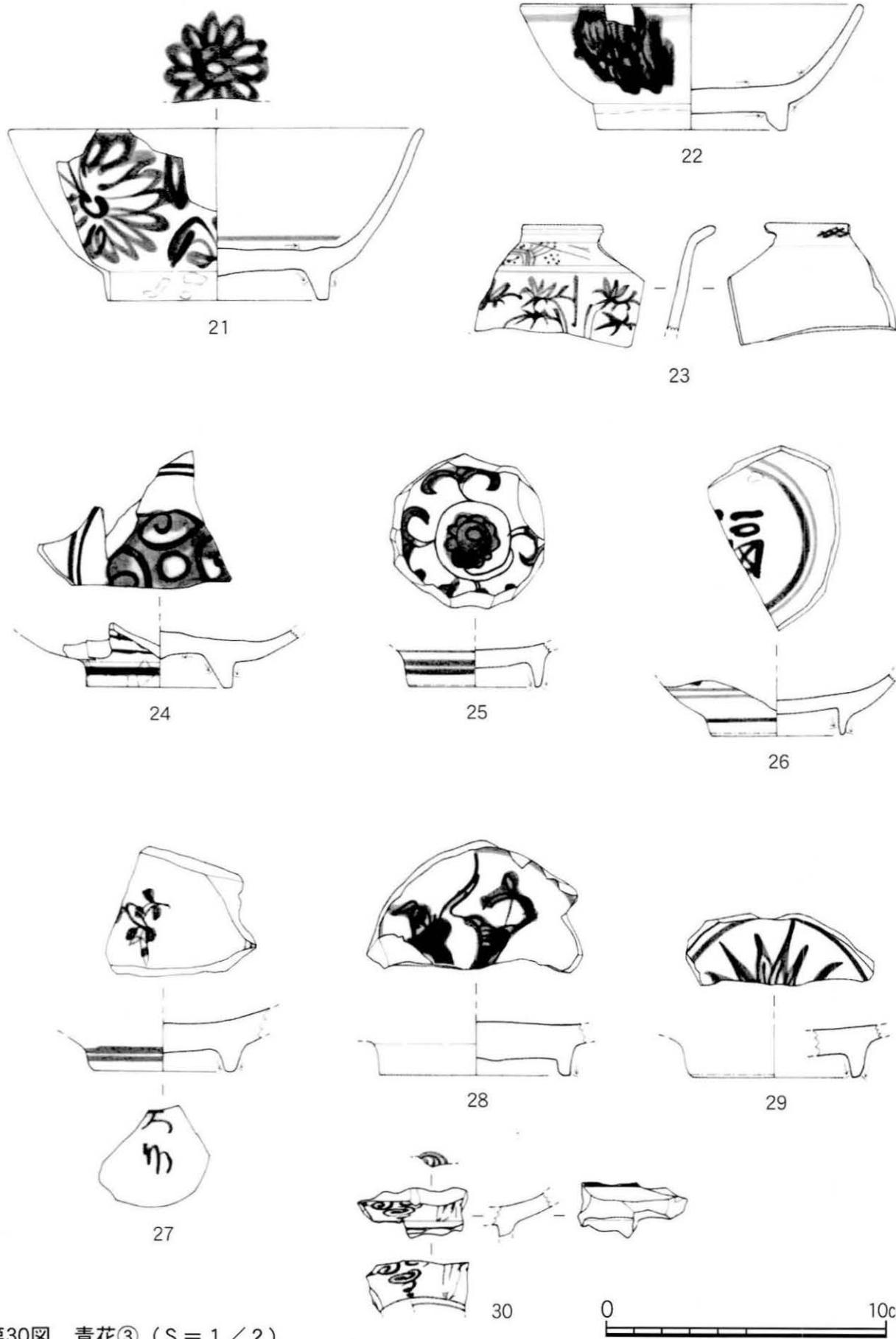
19



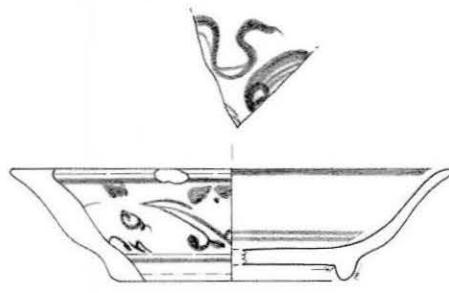
20



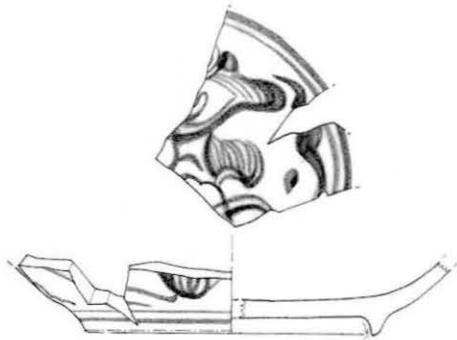
第29図 青花② (S = 1 / 2)



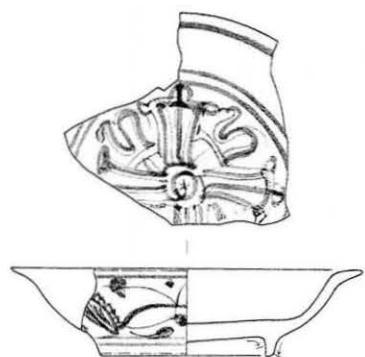
第30図 青花③ ($S = 1/2$)



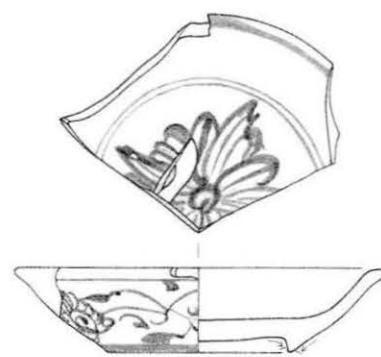
31



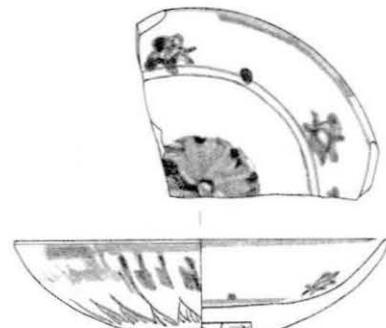
32



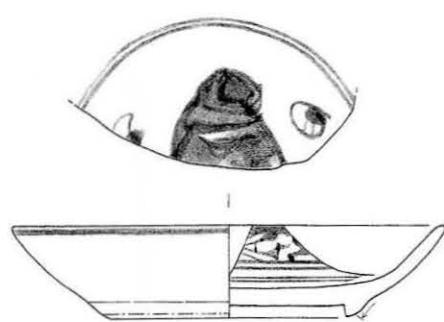
33



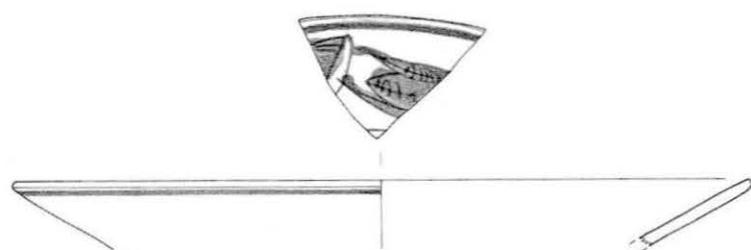
34



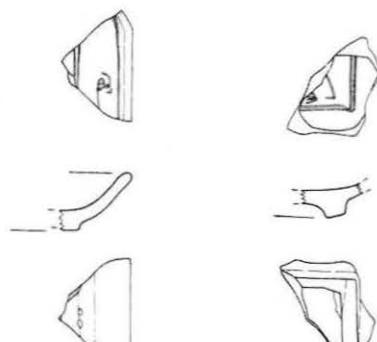
35



36



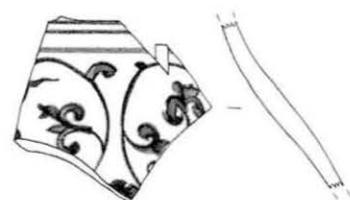
37



38



39



40



41



第31図 青花④ (S = 1 / 2)



42



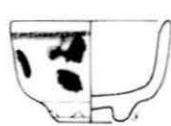
43



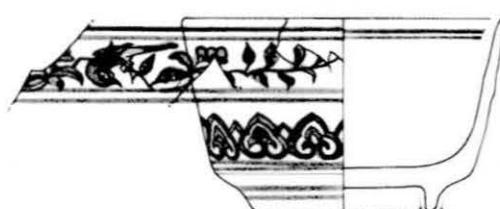
44



46



49



50



51

48

0 10cm

第5節 黒釉天目茶碗

黒釉天目茶碗は、2個体相当が出土している。第33図1は体部が若干丸みを持ち、口縁部で軽く内側に角度を変え立つ。素地は淡灰白色の細粒子である。口径12.6cm、HI-17地区、第IIb層出土。

第6節 赤 絵

5個体相当の資料が出土しており、全て皿と考えられる。第33図2は端反りの皿である。外体面には唐草文を描き、内面には口縁部と見込み脇に2本の界線がめぐる。素地は白色で堅緻。口径11.6cm、PQ-28地区第IIb層出土。

第7節 色 絵

赤色を主体とし、緑・黄色を用いて絵付けを行っているものを色絵として扱った。4個体相当出土している。

第33図3は腰折れの碗である。内外面の文様は失色している。RS-33地区第IIb層出土。

第33図4は皿の底部である。文様は失色し、高台に砂粒が付着する。素地は白色で堅緻。底径7.4cm、LM-21地区表採。

第33図5は口縁部資料である。素地は白色で堅緻。表採。

第8節 翡翠釉

翡翠釉の小皿が1個体検出された。第33図6、口径8.2cm、器高1.3cm、底径4.6cmの稜花縁で、菊花形に型打ち成形されている。外底の高台内は角印様になる。NO-30地区、第IIb層出土。17世紀前半。

第9節 黄釉小皿

第33図7は鮮やかな黄色を呈し、楕円形になると思われる小皿である。器面全体に釉薬が及ぶ。素地は黄白色で軟質。佐賀県立九州陶磁文化館の家田淳一氏によると、中国の交趾焼である可能性が高いとの教示を戴いた。VW-35地

区、第IIa層出土。

第10節 韓国産象嵌青磁

韓国産の象嵌青磁が1個体検出された。韓国嶺南大学校文科大学文化人類学科（考古学）の副教授である李清圭氏に資料を見ていただく機会を得た。李氏によると、李氏朝鮮時代前期（15～16世紀頃）の粉青沙器であるとの所見をいたいた。外体面には圓線の間に如意頭文と雨点文が施される。片面だけに文様がほどこされる。器種については判断し難いが、南西諸島から出土している器種のほとんどが碗・皿であることから、本遺跡出土の資料もいずれかの器種に含まれるのであろうか。NO-14・16地区、第IIa・IIb層出土。第33図8

第11節 三 彩

第33図9～14に示した6点が三彩である。鶴型水注の破片と考えられ、緑、黄の二彩が確認できる。この鶴型水注の伝世品が豊見城村内で確認され、報告されている（第33図15 註1）。16世紀。

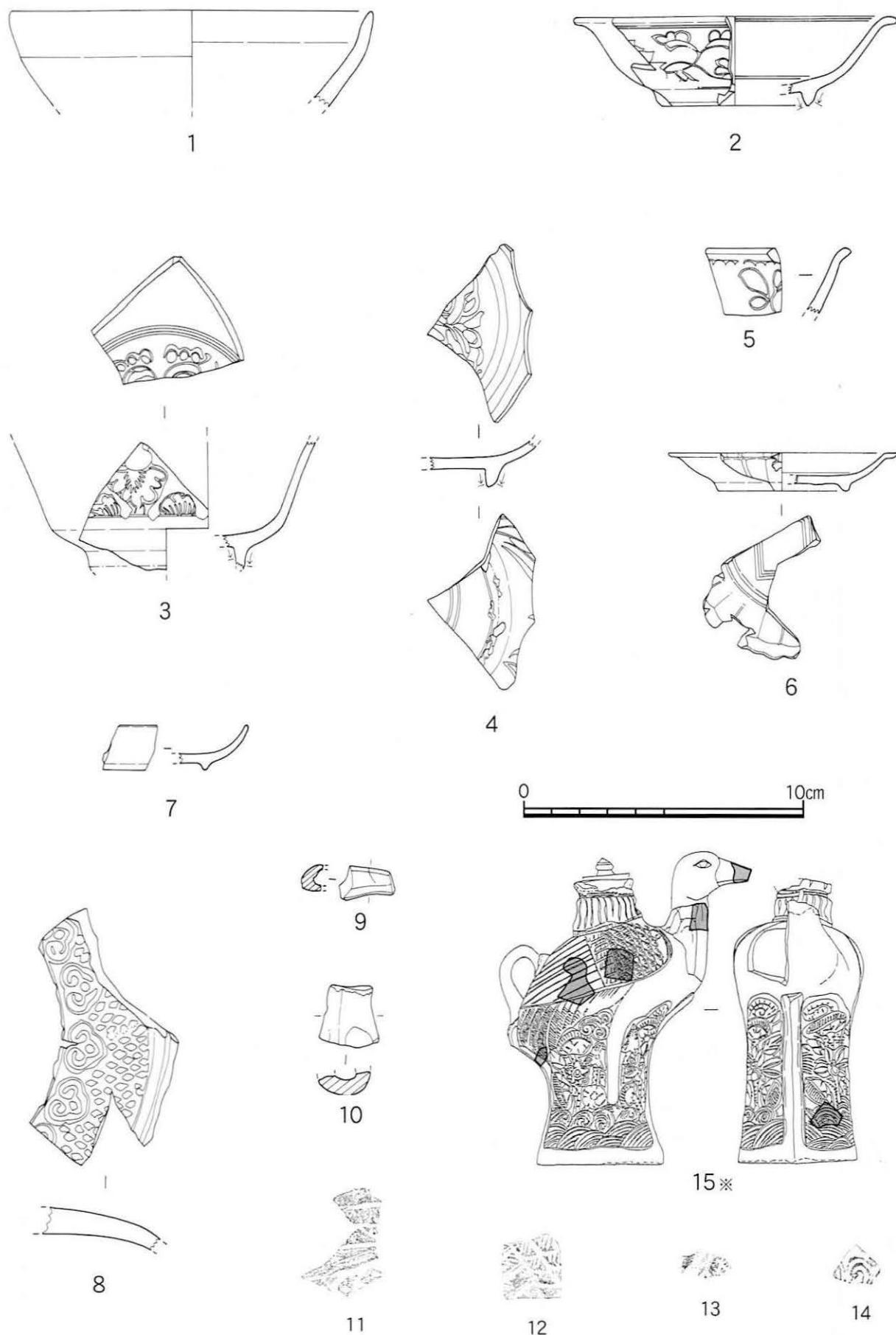
同図9は嘴の部分である。RS-14地区IIa層出土。同図10は首の部分と考えられる。RS-12地区IIa層出土。同図11はNO-21地区IIb層出土。同図12はNO-22地区IIb層出土。同図13はHI-31地区IIa層出土。同図14はNO-31地区IIb層出土。

註

註1 金城亀信 「豊見城村内確認の明代三彩鶴型水注」
『文化課紀要 第6号』沖縄県教育委員会
文化課 1990

参考文献

沖縄県教育委員会 『首里城跡一京の内跡発掘調査報告書
(I) -』 1998
亀井明徳 「明代華南彩釉陶をめぐる諸問題・補遺」
『日本貿易陶磁史の研究』 同朋舎 1986



第33図 黒釉天目茶碗・赤絵・色絵・翡翠釉・韓国産象嵌青磁・三彩 (S = 1 / 2)
※参考資料

第12節 褐釉陶器

本節で扱う褐釉陶器とは中国産の褐釉陶器であり、タイ産の褐釉陶器と区別している。褐釉陶器の器種として、壺、鉢に加え環耳状の資料が検出された。以下、分類基準を概述する。

1. 褐釉陶器壺

褐釉壺を口径や底径などから便宜的に大型壺、中型壺、小型壺の3群に分け、口縁の形態や肥厚などからI～VI類に分類した。

(1) 大型褐釉壺

I類 (第34図1～4)

I類は褐釉陶器の中で最も多く出土した壺である。口縁断面が方形状に肥厚し、肩部から胴上部が外側に強く張り出すものである。同図1は肩部に目痕が付く。口径15.9cm、TU-35地区II b層。同図2は口径14.2cm、VW-36地区II b層。同図3は口径13.6cm、TU-14地区I b層。同図4は口径16.8cm、RS-32地区II a b層。

II類 (第34図5)

口縁断面が方形状に肥厚するが、I類に比べ肩部の張りが弱く、なで肩になる。口唇部は施釉後拭き取り、露胎となる。口径15.0cm、PQ-12地区II b層。

同図6～8は大型褐釉壺の底部資料である。図6は底径15.0cm、PQ-30地区柱穴No.5より出土。図7は底径14.5cm、VW-36地区II b層。同図8は底径15.1cm、PQ-17地区II層。

(2) 中型褐釉壺

III類 (第34図9)

口縁部断面が大型壺のI、II類と同様に方形状をなすが、器壁の厚さから中型壺として扱った。9は口唇部に目跡がみられる。口径14.2cm、JK-19地区II a層出土。

IV類 (第35図10・11)

口縁部が玉縁状に肥厚する無頸の四耳壺。10は口径11.0、PQ-17地区II a層。11は底径13.5cm、LM-17、II b層。

V類 (第35図12～19)

本類は中型褐釉壺の中で、III・IV・VI類に含まれないものを一つのまとまりとして扱った。

12は口径14.6cm、RS-24地区II a b層出土。

同図13は口径10.1cm、PQ-27地区II b層出

土。14は口径14.0cm、NO-17地区I b層出土。15は口径10.6cm、PQ-14地区柱穴No.17より出土。16は口径8.8cm、NO-21地区II a層出土。17は口径7.8cm、NO-21地区II b層出土。18は底径10.0cm、PQ-31地区II a b層出土。19は底径13.1cm、NO-29地区II a b層出土。

VI類 (第35図20・21)

口縁部の形態が特徴的な壺であり、口唇部に重ね焼きの目痕を持つ。断片的な資料をみると、頸部から底部までほぼ均一な厚みを保つようである。本類と同形態の資料がヒヤジョーモー遺跡（註1）や宮崎県都城市の久玉遺跡（註2）で出土している。同図20は口径13.8cm、LM-26地区II b層。同図21は口径10.8cm、PQ-29地区II a層出土。

(3) 小型褐釉壺

小型の褐釉壺が1点検出された。第35図22は内外面に茶褐色の釉薬を施し、口唇部は露胎となる。PQ-16地区II a層出土。

2. 鉢

鉢は2個体検出された。第35図24は内面から口縁部外面にかけて釉薬を施す。PQ-27地区II a層出土。同図22は内外面に釉薬を施す。口径22.0cm、RS-38地区II a b層出土。

3. 環耳状製品

第35図25は褐釉を施した環耳状の資料であり、PQ-16地区II a b層から1点検出された。

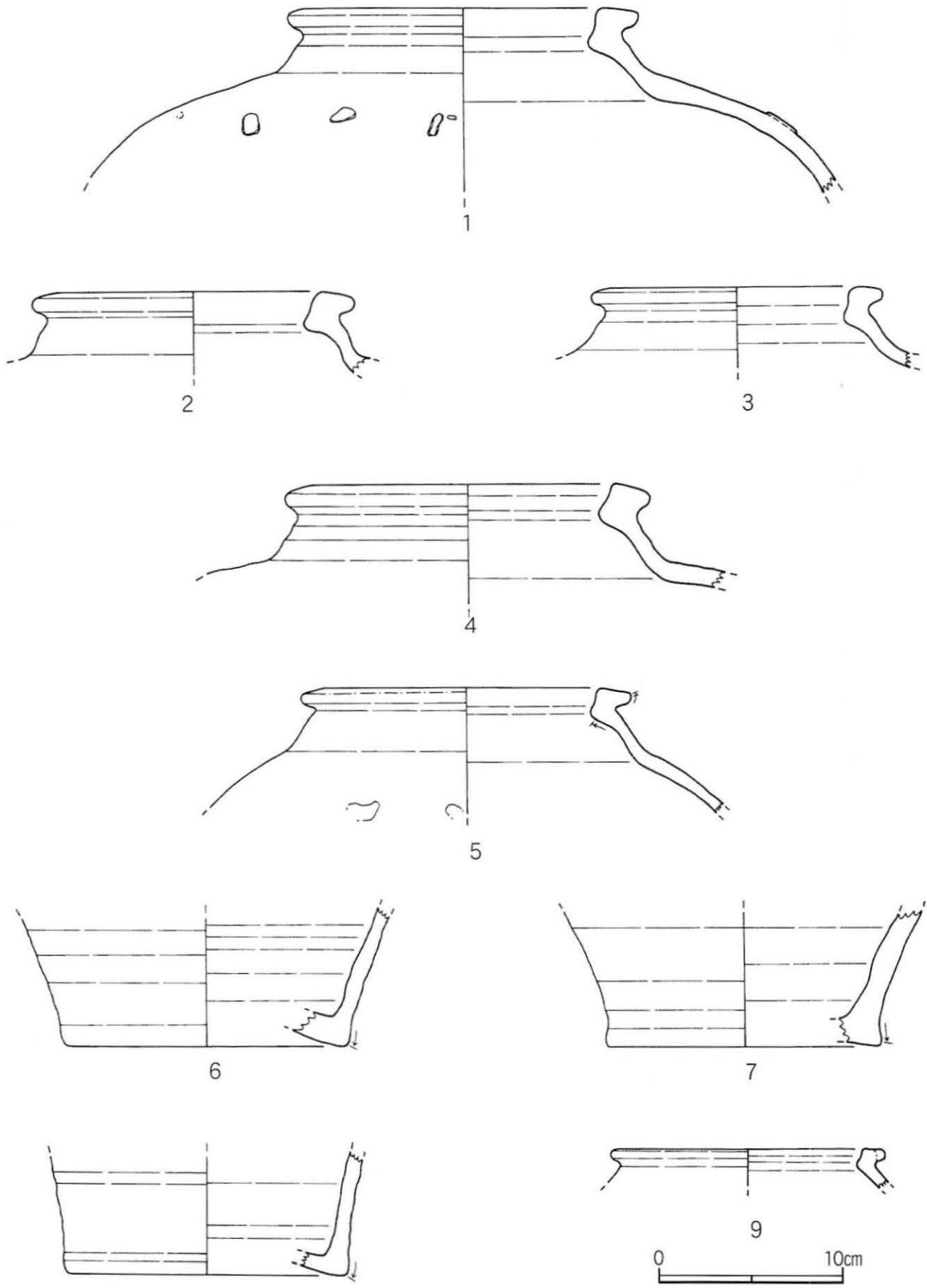
註

註1 那覇市教育委員会『ヒヤジョーモー遺跡』

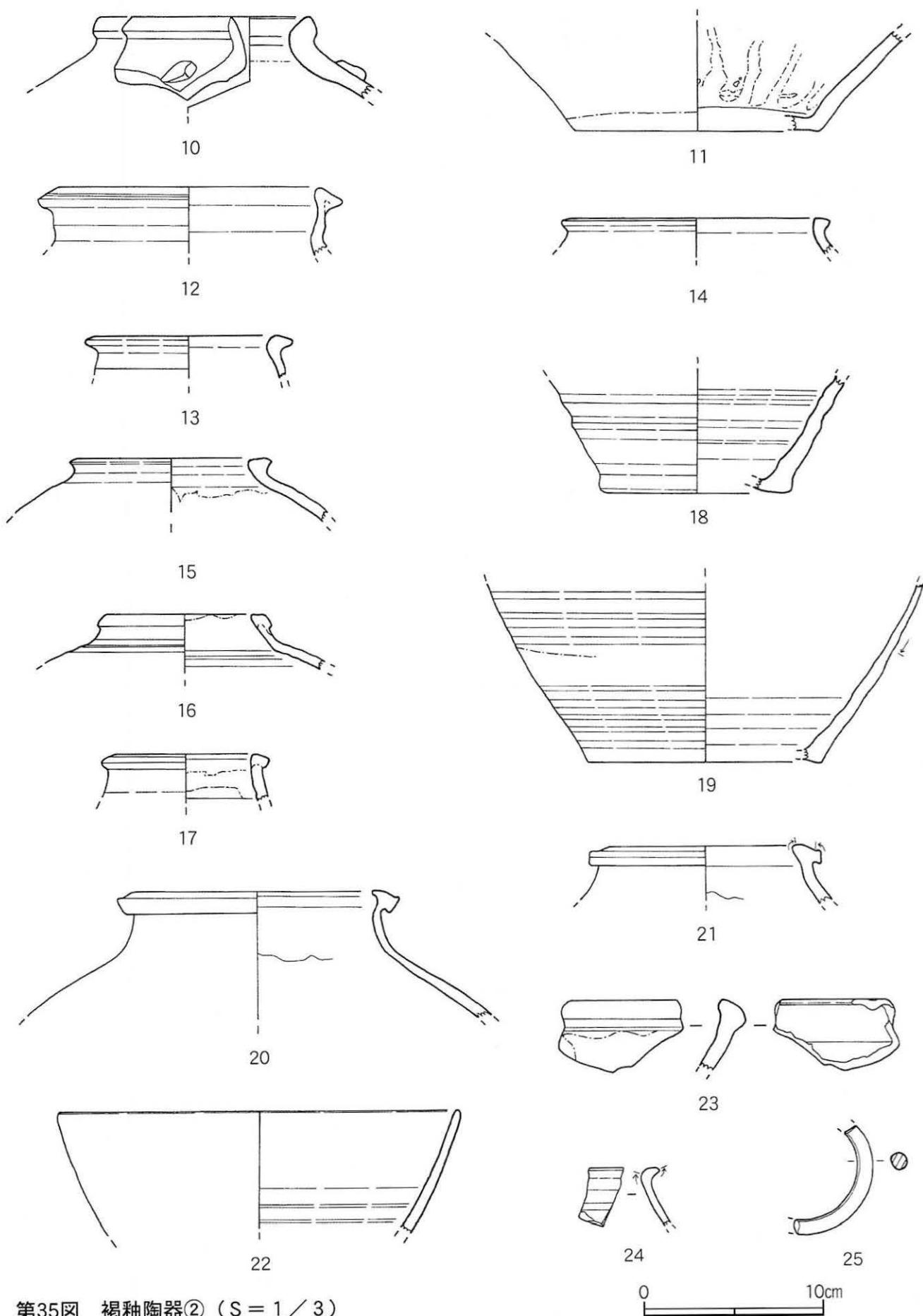
那覇市文化財報告書第26集 1994

註2 宮崎県都城市教育委員会『久玉遺跡第5次発掘調査』

都城市文化財調査報告書第25集 1993



第34図 褐釉陶器① (S = 1 / 3)



第35図 褐釉陶器② (S = 1/3)

第13節 タイ産陶器

タイ産陶器として、褐釉壺、鉄絵合子の2種が検出された。以下、各種ごとに分類基準と個々の資料に対する所見を記述する。

1. 褐釉壺

褐釉壺を大型壺と中型壺の2群に大別した。I、II類を大型壺。III～VII類を中型壺としてあつかった。

(1) 大型褐釉四耳壺

I類 頸部から垂直方向に立ち上がり、口縁端部が外側に折れ玉縁状に肥厚する大型の四耳壺である。(第37図1～3)

1は口径16.0cm、LM-15地区第IIa層出土。図2は頸部で施釉が止まり、口縁部は露胎となる。口縁部の内面に重ね焼きの目跡が残る。口径16.8cm、RS-33地区第IIb層出土。3は他の資料に比べ薄でのものである。口径14.0cm、PQ-17地区第IIa層出土。

II類 頸部から口縁にかけて緩やかに外へ大きく開く大型四耳壺である。口縁端部が肥厚し、縁部内面の縁辺部に浅い窪みがめぐる。(第37図4・5)

4は頸部の半ばで施釉が止まり、口縁部は露胎となるが、内側は自然釉がかかる。口径19.0cm、RS-17地区第IIb層出土。図5の口縁部は露胎で釉薬はかかっていない。RS-12地区第IIa層出土。

同図6は大型褐釉四耳壺の底部資料である。上記のいずれの類に属するかは不明である。内外面とも釉薬がからず露胎となっている。底径23.2cm、LM-14地区第Ib層出土。

(2) 中型褐釉壺

III類 口縁部が外反する短頸の長胴四耳壺。(第37図7)

7の口縁部外面まで釉薬が及ぶが、所々拭き取られている。口縁部内面は露胎となる。

口径11.6cm、PQ-29地区第IIa層出土。

IV類 口縁部がゆるやかに外反する薄手の中

型壺。(第37図8)

8は内外面に釉薬が施されるが、口縁端部はふき取られている。口径12.0cm、表採。

V類 口縁部断面が方形状をなし、口縁内面の縁辺部に窪みを持つもの。(第37図9)

同図9は口縁端部で釉薬がふき取られている。

口縁部内面には自然釉がかかる。口径11.6cm、NO-21地区第IIb層出土。

VI類 口縁端部が方形状に肥厚するが、口縁部の厚さに比べ胴部は薄く輶轤による成形痕が明瞭に残る。(第37図10)

同図10は頸部内側まで釉薬が施されている。口唇部には重ね焼きによる目跡が残る。口径11.0cm、NO-31地区第IIb層出土。

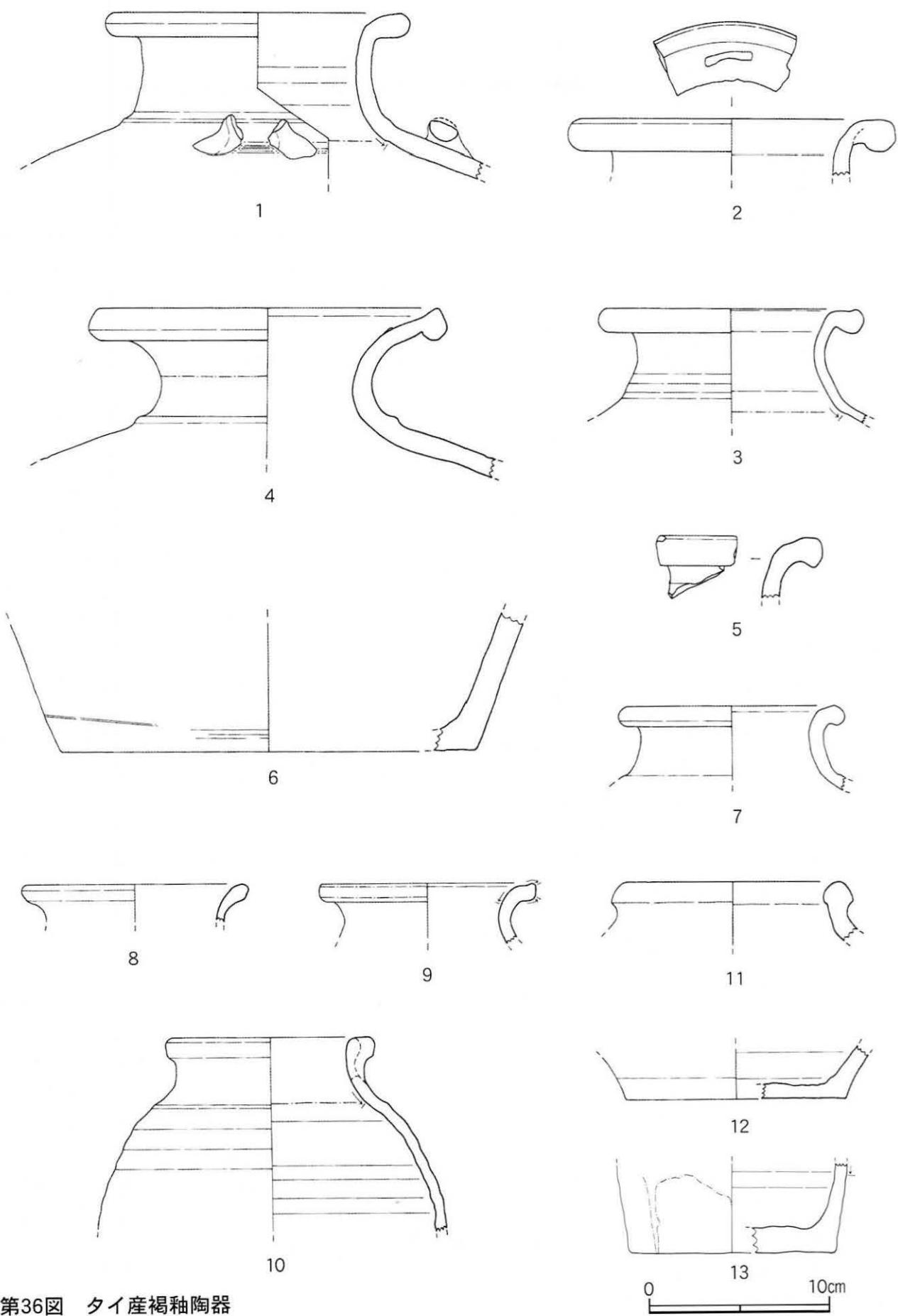
VII類 頸部が短く、口縁部は垂直方向にわずかに立ち上がり玉縁状に成形する。同図11は内外面に緑色がかった釉薬を薄く施す。口径12.0cm、JK-13地区第Ib層出土。

同図12・13は中型褐釉壺の底部資料である。12は底径11.2cm、表採。図13は底径12.3cm、PQ-14地区第IIab層出土。

(3) 小型褐釉壺

小型の褐釉壺と思われる資料が3個体検出された。全て胴部資料であるため、口縁部及び底部の形態を窺い知ることはできない。胴部下位で施釉が止まるため底部は露胎になると考えられる。胎土は灰白色で堅緻であり、混入物として黒色の粒が多く含まれる。

第37図1はNO-22地区第IIb層出土。同図2はJK-15地区第II層溝より出土。同図3はPQ-31地区第IIb層出土。



第36図 タイ産褐釉陶器

2. 鉄絵合子

身の破片が6点、蓋の破片が2点検出されてた。身の部分の資料から少なくとも3個体が確認できる。これらの中から4点を図示した。

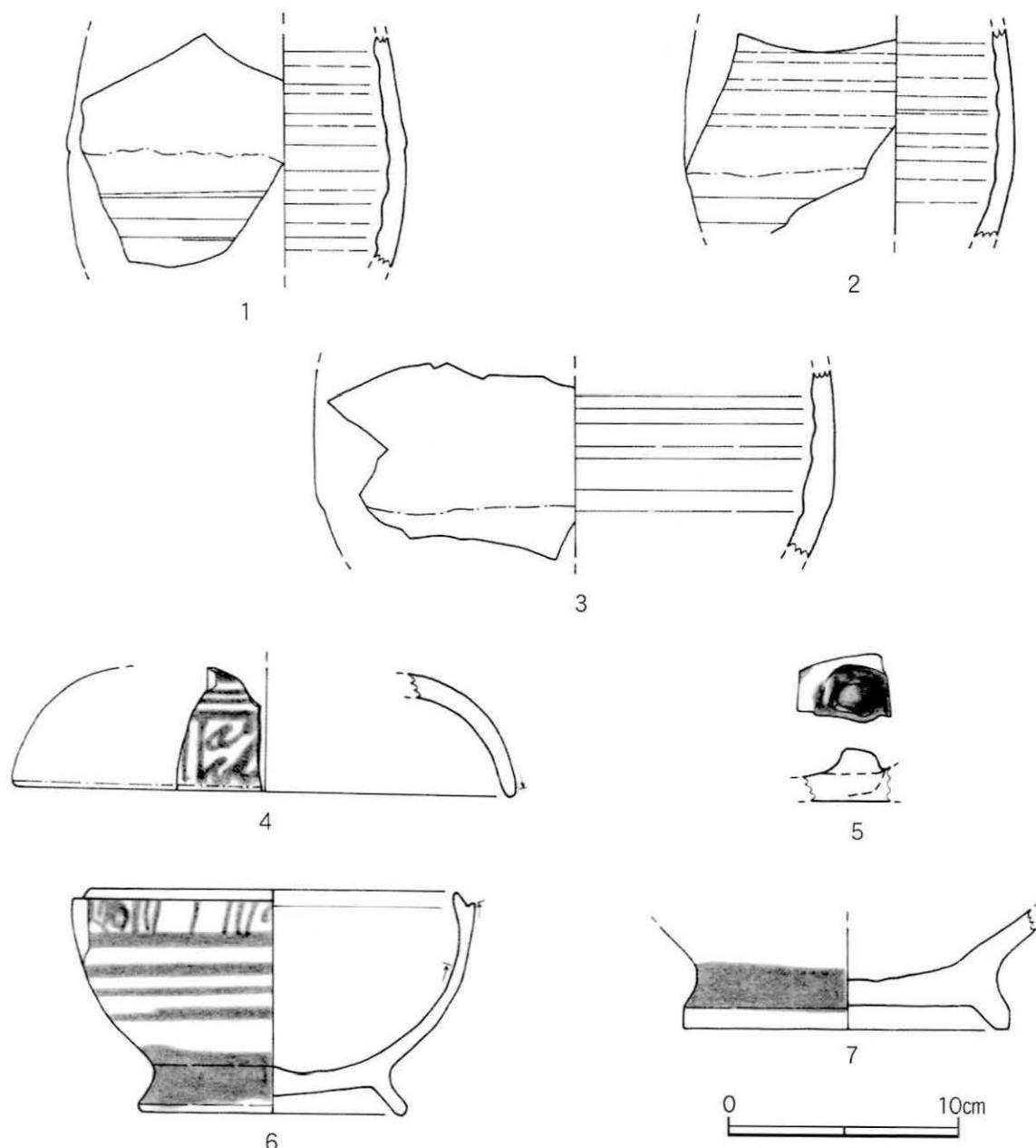
第37図4は蓋の部分である。外面を施釉し、内面、合わせ口とも露胎である。胎土には黒色の粒が含まれる。文様は外体面の上面に重円文、側面には窓枠状の2本の縦線とその中に文様を描くが判然としない。合わせ口の径は推算で11.0 cm、PQ-31地区第IIb層出土。

第37図5は蓋のつまみ部にあたると考えられる資料である。胎土は灰白色で堅緻、黒色の粒

を含む。HI-22地区第IIa層出土。

同図6は身の部分である。高台が「ハ」の字状に開く。胎土は灰白色で堅緻、黒色の粒を含む。高台の外面には太い線がめぐる。底径7.1cm、NO-29地区第IIb層出土。

同図7は身の部分である。高台が「ハ」の字状に開く。胎土は灰白色で堅緻、黒色の粒を多く含む。文様は、高台外面に太い線をめぐらし、中央部に重円文、口縁部に数本の縦線と曲線を描くが判然としない。底径5.8cm、NO-31地区第IIb層出土。



第37図 タイ産褐釉陶器・鉄絵合子 (S = 1/3)

第14節 本土産陶磁器

本節で扱う本土産陶磁器とは、備前産や肥前産（薩摩系の陶器を含む）の陶磁器を含めて取り扱った。備前産の陶器については、岡山県古代吉備文化センターの伊藤晃氏。肥前産の陶磁器については、佐賀県陶磁文化館の家田淳一氏・藤原友子氏に資料を見て戴く機会を得た。

なお、明治期以降の本土産磁器については本報告では割愛する。

A 備前産陶器

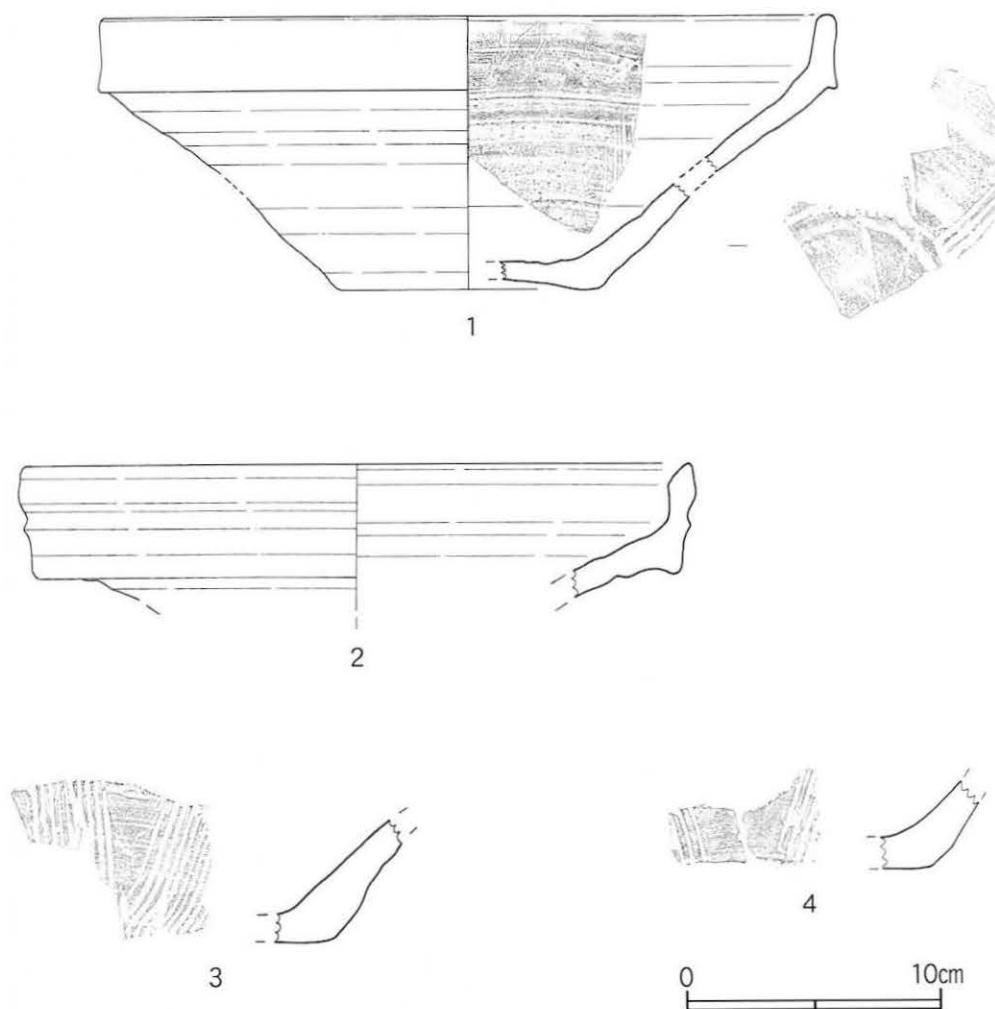
備前焼の擂鉢が4個体相当検出された。第38図1は、間壁忠彦氏の備前編年表(注1)のIV期末(16世紀初頭)に位置づけられる資料とみられる。内対面に9条を1単位とする擂り目を、見込み脇から胴上部にかけて施している。外体面には水引き痕が明瞭に残る。推定復元により、口径28.4cm、器高10.7cm、底径10.2cm。NO-18地区、第II b層とRS-14地区、第II a層ほか出土。同図2は、真壁編年V期に位置づけられる資料

と見られる。少破片のため内対面に擂り目は確認できない。口径26.2cm、LM-27地区、第II b層出土。

同図3・4は備前焼の底部資料で、前者はH I-22地区II b層、後者はF G-36地区、H I-31地区II a層出土。

註

註1 間壁忠彦 「備前」『世界陶磁器全集 3 中世日本』
小学館 1994



第38図 備前陶器・すり鉢 (S = 1/3)

B 肥前陶器

1、唐津鉄絵皿 (第39図1~3)

推定個体数は5点を数える。その内3点を図示した。見込みには胎土目の跡が残る。16世紀末。

同図1は、底径4.2cm、TU-35地区Ⅱb層出土。同図2は、底径4.2cm、TU-14地区、Ⅰa層出土。同図3は、底径4.4cm、RS-14Ⅱ地区b層出土。

2、唐津碗 (第39図4)

推定個体数は1点。胎土目の跡はみられない。同図4は口径13.2cm、器高6.7cm、底径5.0cm。PQ-28地区Ⅱb層。16世紀末。

3、唐津徳利 (第39図5)

推定個体数は2点数える。同図5は底径8.6cm。PQ-26地区Ⅱb層出土。16世紀末。

4、黒釉素面手茶碗 (第39図6)

腰部の破片が1点のみ検出された。内面及び外面下位まで鉄釉を施した後に、体部に白釉の盛上がった線で連続した「*l*」字状の文様を描く(註1)。同図6はNO-29地区Ⅱa層出土。17世紀前半。

5、唐津掛分水注 (第39図7)

同図7は肩部に藁灰釉が掛かる。唐津掛分手付水注に類似する(註2)。17世紀末。口径10.0cm、PQ-15地区Ⅱa層出土。

6、唐津大皿 (第39図8~11)

大皿は二彩手刷毛目文大皿、鉄絵大皿、二彩大皿の3つに分けることができる。

唐津二彩手刷毛目文大皿は、推定個体数は5点を数える。その内2点を図示した。17世紀代。8は口径19.6cm、TU-15地区Ⅰb層出土。9は口径33.0cmNO-29.30.31地区Ⅱa・Ⅱb層出土。

唐津鉄絵大皿は、1個体相当確認された。10は口径26.2cm、RS-15地区Ⅰb層出土。

唐津二彩絵大皿は、2個体相当確認された。11は口径31.0cm、LM-14地区Ⅰb層出土。17世紀後半。

7、唐津擂鉢 (第40図12~15)

武雄系の擂鉢は、口縁部の形態から2種類に分けることができる。

同図12・13は17世紀前半に位置する資料で、

3個体相当の資料が確認された。12は口径26.5cm、PQ-28地区Ⅱb層ほか出土。13は口径29.4cm、NO-29地区Ⅱb層出土。

14は、17世紀後半に位置づけられる資料である。口径29.8cm、HI-22地区Ⅱa層出土。15は底径10.4cm、RS-24地区Ⅱb層出土。

8、青緑釉碗・皿 (第40図16~20)

内野山系の青緑釉碗と皿が検出された。推定個体数は碗が13点、皿が15点を数える。17世紀後半。

同図16は口径11.0cm、RS-38地区Ⅱb層出土。同図17は口径12.1cm、器高3.4cm、底径4.5cm、PQ-31地区Ⅱa層出土。同図18は口径13.9cm、TU-15地区Ⅰb層出土。同図19は口径11.1cm、PQ-31地区Ⅱa・b層出土。同図20は、PQ-16地区Ⅱb層出土。

9.薩摩系 (第40図21・22)

薩摩系と考えられる資料が碗、瓶の2種が出土した。同図21の碗は内外面に茶褐色の釉薬を施し、外底面は露胎、見込みに目跡はない。胎土は灰白色の粗粒子。鹿児島県の山元古窯跡出土の資料に類似している。(註2)。口径10.8cm、器高6.3cm、底径4.2cm、NO-30、Ⅱa層出土。図22は瓶、TU-39、Ⅱa層出土。

C 肥前磁器 (第40図23~25)

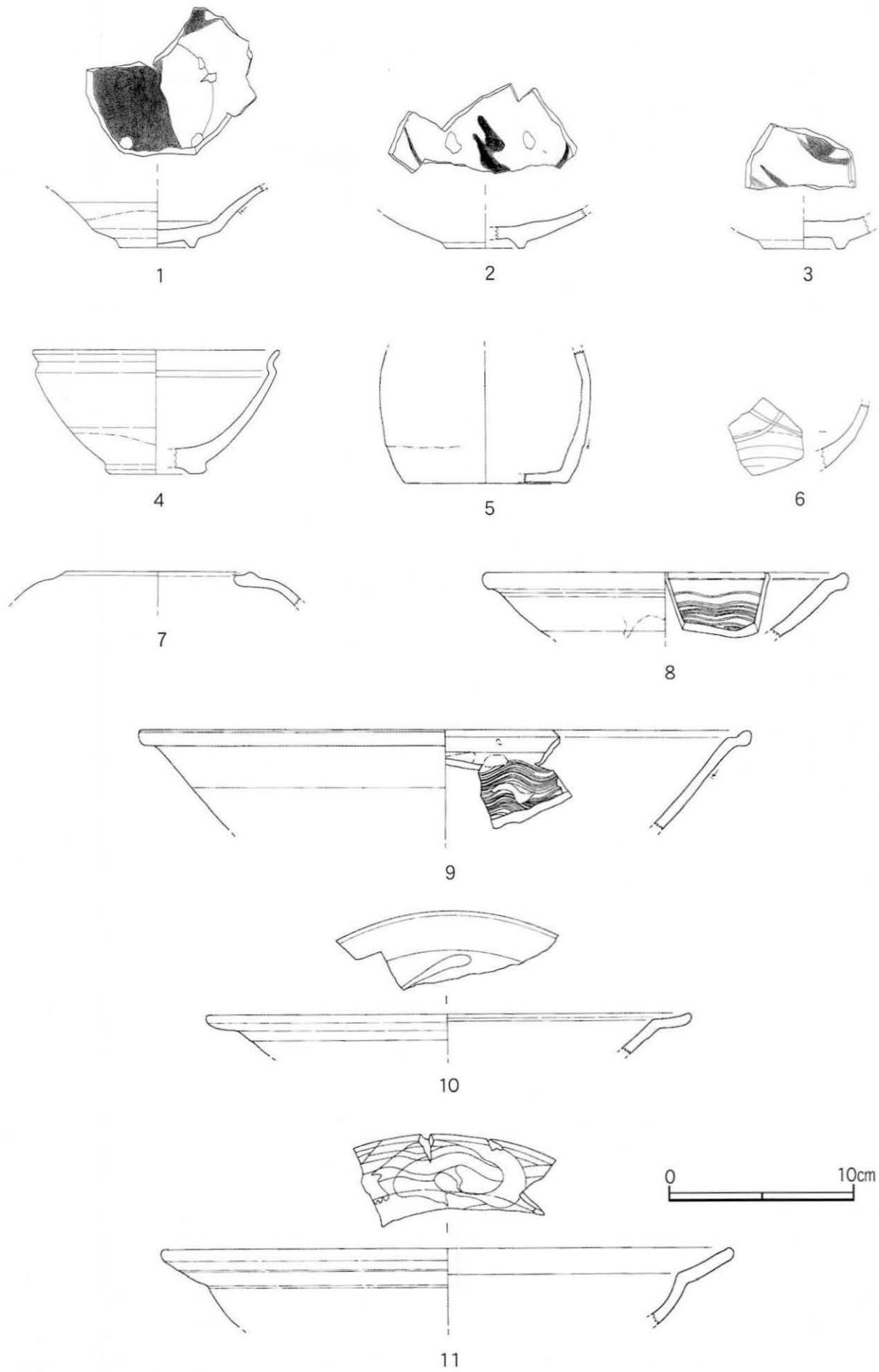
肥前系の磁器として瓶や碗がみられるが、分類及び集計については行っていない。そのため特徴的な3点を図示した。23は口径13.4cm、NO-28地区Ⅱb層出土。24は底径4.8cm、PQ-14地区Ⅱa層出土。25は底径5.6cm、PQ-31地区Ⅱb層出土。

D 関西系陶器 (第40図26)

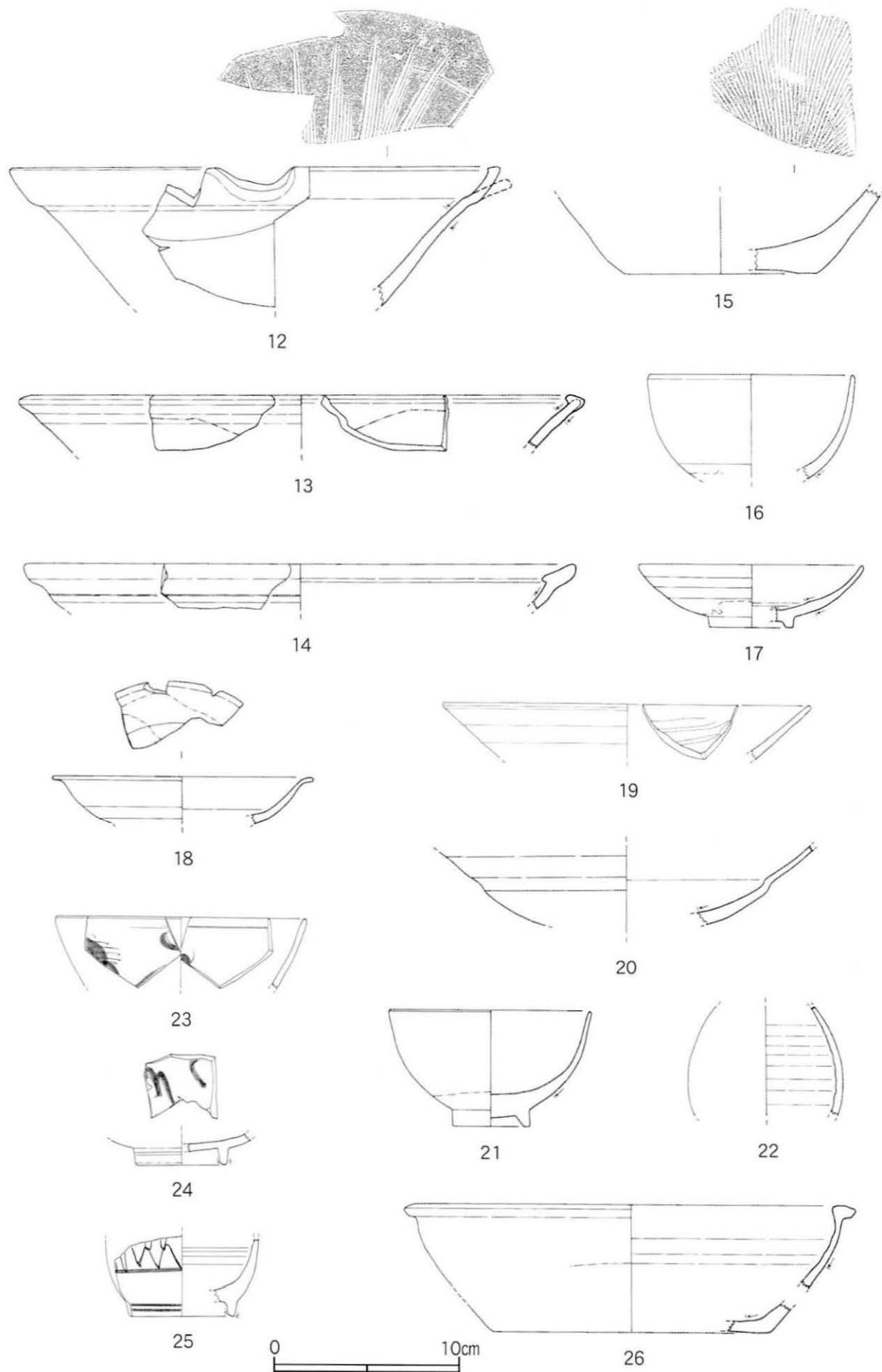
同図26は関西系の浅鉢である。釉薬を内面から外対面半ばまで施すが、見込みは拭き取られている。口径23.4cm、器高(推算)6.9cm、底径14.9cm、PQ-16地区Ⅱa層出土。

註

- 註1 佐賀県立九州陶磁器文化館『名品図録』1996
註2 佐賀県立九州陶磁器文化館『国内出土の陶磁』1984
註3 鹿児島県姶良郡加治木町教育委員会『山元古窯跡』
加治木町埋蔵文化財発掘調査報告書1 1995



第39図 肥前陶磁器①



第40図 肥前陶磁器② (S = 1/3)

第15節 産地不明陶磁器

本節で扱う産地不明陶磁器とは、前節までに扱った陶磁器や沖縄産陶器に含まれないと考えられる陶磁器を対象とした。以下、図示した13点について概述する。

1. 第41図1・2

底部が碁笥状をなし、口縁部がやや内彎する皿である。図示した底部と口縁部の他に底部資料が4点出土している。外底面と見込みは釉薬が及ばず露胎となる。釉色は灰緑色を呈し、焼成は良好。素地は灰白色で堅緻。1は底径3.6cm、RS-17地区第IIb層出土。2は口径9.6cm、TU-15地区第Ib層出土。

2. 第41図3

口縁部が外反する碗で、1個体のみの出土である。灰白色の釉薬を施すことから白磁に含めて良いかと考えられるが、白磁にみられるいすれのタイプとも異なるためこの節で取り扱った。外底面と見込には釉薬が及ばず露胎となる。露胎となる見込み部は赤褐色を呈する。素地は白色で堅緻。口径12.2cm、器高4.7cm、底径4.2cm、NO-31地区第IIb層出土。

3. 第41図4

袋物の底部資料と考えられる。1個体のみの出土であり口縁部の形態は不明。内外面に透明釉がかかり、高台内は露胎となる。外面胴部には一部鉄釉が認められる。素地は淡灰白色を呈し、黒色の粒を含む。この素地の特徴はタイ産の鉄絵合子にみられる特徴と同様であり、本資料もタイ産の可能性を持つと考えられる。底径6.1cm、JK-13地区第Ib層出土。

4. 第41図5・6

図5は瓶の口縁部資料である。釉薬は外面から頸部内面に及ぶ。釉色は光沢のある茶褐色を呈し、天目茶碗にみられる色調に類似する。素地は淡灰白色を呈し、精選され堅緻である。口径3.8cm、TU-13地区第Ib層出土。

図6は小型の壺と考えられる。外体面から頸部内面まで釉薬を施した後、口唇部と頸部内面を拭き取っている。釉色は茶褐色を呈する。素地は図5と同様の淡灰白色を呈し、精選され堅緻である。口径6.4cm、RS-12・13地区のみぞ内出土。

5. 第41図7

小型壺の底部と考えられる資料である。残存部に釉薬は確認できない。素地は灰色を呈し、堅緻である。底径9.4cm、NO-31地区第IIb層出土。

6. 第41図8

8は甕あるいは壺の胴部資料である。轆轤成形後、叩きの手法を用いた調整を行っている。器壁の内側は同心円状の刻みをいたれた円形の当て具を、表面には斜線を刻んだ叩き板を用い器面を叩き締めている。内外面に茶褐色の釉薬を施し、素地は淡褐色の陶質である。RS-14地区第IIa層出土。

7. 第41図9

9は壺の胴部資料と考えられる。残存部には施釉は確認できない。素地は暗赤褐色を呈し、精選され堅緻である。JK-13地区第Ib層出土。

8. 第41図10・11

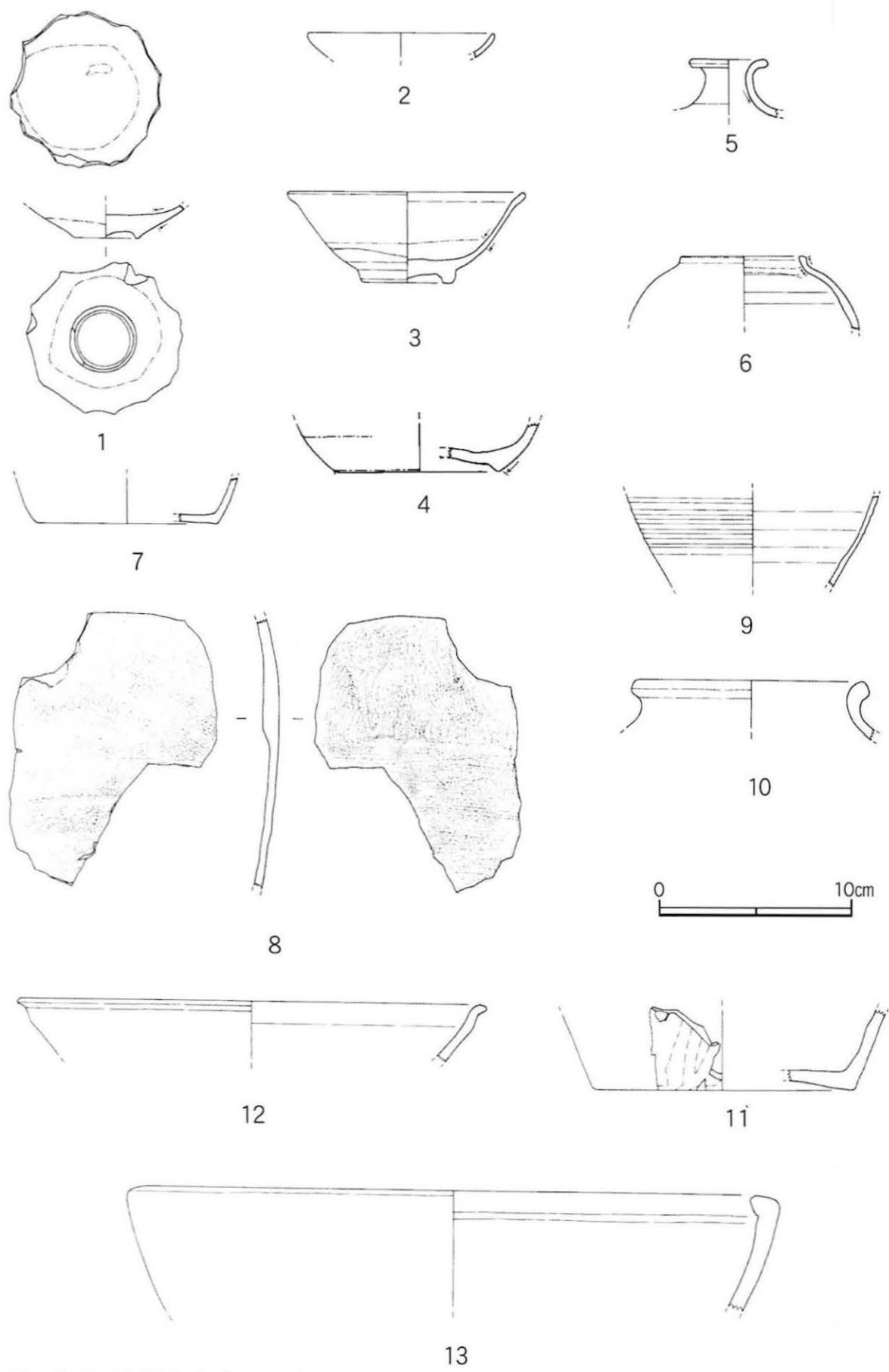
10・11は同一個体の壺である。口縁部、底部の形態はタイ産の壺と類似するが、褐釉ではなく白色の釉薬がかかる。11の底部外面には白色の釉薬が網目状に施される。素地は灰色を呈し、堅緻である。口径11.7cm、底径13.5cm。図10はPQ-18地区第IIab層、図11はPQ-17地区第IIab層出土。

9. 第41図12

12は口縁部が外反する皿である。内外面に灰緑色の釉薬を薄く施す。素地は灰色で堅緻。中国福建省泉州窯系の磁器である可能性が示唆される。口径24.0cm、RS-14地区第IIa層出土。

10. 第41図13

13は鉢の口縁部資料と考えられる。釉薬は施されず、素地は灰色を呈す。口径31.8cm、TU-15地区第Ib層出土。



第41図 産地不明陶磁器 (S=1/3)

第16節 高麗系瓦

高麗系瓦とは、浦添城跡や首里城跡を中心に出土する還元焼成炎で焼かれた古瓦を称する。取り分け平瓦は凸面に「癸酉年高麗瓦匠造」、「大天」、「天」銘及び格子状模様の叩き目痕を有するものが特徴とされている。丸瓦は玉縁の付く模骨巻きの二枚割り造りで、両瓦とも凹面から切り込みを入れて分割する造瓦法でなされている（註1）。

名護市内においては本遺跡と隣接する屋部川河口（註2）、名護城からの出土が報告されている（註3）。本遺跡出土の古瓦を上原靜氏に見て戴いたところ、軒丸瓦（鎧瓦）、軒平瓦（字瓦）、丸瓦（男瓦）、平瓦（女瓦）、有段式平瓦、役瓦の6種が確認された。

1. 軒丸瓦（第42図1）

軒丸瓦は1点のみの出土である。第42図1は大川清分類の浦添1類に該当する（註4）。ただし、最近の上原靜氏の研究によりAタイプとBタイプの二種類に細分することが可能となっているが、本資料は小破片のためいずれのタイプに属するかは不明である（註1）。中心部と外縁を欠落し、灰色を呈す。TU-12地区IIb層出土。

2. 軒平瓦（第42図2～4）

軒平瓦は瓦当面が3点、平瓦部が1点得られた。瓦当面は大川清分類の浦添第3類A～Dに相当すると考えられる。

同図2は瓦当面に花弁がみられる。胎土は灰色。FG-22地区II層出土。

同図3は瓦当面と平瓦部分の取り付き部分の資料である。瓦当面には花弁と唐草の蔓がみられる。胎土は灰色であるが、外面は二次的に変色しており茶褐色を呈す。LM-13地区IIb層出土。

同図4は一方の側面が丁寧に整形されていることから、瓦当面の端部になる資料と考えられる。唐草の蔓の一部が認められる。胎土は灰色。PQ-17地区IIa層出土。

3. 丸瓦（第43図6～8）

第43図6は丸瓦の玉縁部の資料である。凸面には微かに羽状文が、凹面には布目が認められる。色調は外面が褐色で、胎土は灰色。NO-28地区IIb層出土。

同図7は玉縁部の資料である。色調は外面が褐色、胎土は褐色。NO-22地区IIbc層出土。

同図8は丸瓦の狭端部資料である。端部は箇削りにより薄くなり、側面には分割面が残る。

凸面には羽状文が認められる。色調は外面が褐色、胎土は灰褐色。PQ-18地区IIab層出土。

4. 平瓦（第43図9～12・第42図5）

最も多く出土した種類がこの平瓦である。凸面の叩き目に注目すると、「格子模様瓦」が45点、「大天」が4点確認され、「癸酉年高麗瓦匠造」及び「天」の文字を持つ瓦は確認されなかった。

同図9は凸面に格子模様を持つ平瓦である。側面には分割面、凹面には布目と糸切り擦痕が残る。胎土は灰色。表採。

同図10は凸面に格子模様を持つ瓦である。凹面には布目と糸切り擦痕が残る。胎土は褐色。FG-23地区IIb層出土。

同図11は凸面に「大天」の文字を持つ平瓦である。側面には分割面、凹面には布目と糸切り擦痕がみられる。胎土は褐色。PQ-31地区柱穴No.2内及びNO-31地区IIb層出土。

同図12は平瓦の製作過程において、粘土板を桶巻きした際に生じる合目（継ぎ目）部分にあたると考えられる資料である。胎土は褐色。NO-17地区IIa b層出土。

第42図5は平瓦部の端部になるとされる資料である。端部は箇削りにより細くなり、側面は丁寧に整形される。凸面には微かに羽状文の叩き文が認められる。胎土は灰色。LM-12地区井戸内出土。

5. 有段式平瓦（第44図13・14）

13は平瓦に鍔がつく形態をした有段式平瓦である。凸面に羽状文がみられ、凹面には布目と糸切り擦痕が残る。胎土は灰色。FG-15地区IIb出土。

同図14は玉縁部を欠く有段式平瓦である。凸面には羽状文、凹面には糸切り擦痕がみられるが、側面を整形するに伴いなで消される。胎土は灰色。LM-15地区II層溝内より出土。

6. 役瓦（第44図15・16）

これまでの軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、有段式平瓦のいずれにも属さない瓦を役瓦として扱った。役瓦は3点検出された。

同図15は平瓦などにみられる凸面や凹面をもたない。両面ともほぼ平坦である。直角に隣り合う側面は両面とも丁寧に整形されており、本来の形態は不明だが角の部分になる資料と考えられる。胎土は灰色。PQ-27地区IIb層出土。

同図16は断面を見ると、若干弧状をなす。側面の1面は本来の面を残しており、丁寧に整形されている。胎土は灰色。NO-29地区IIb層出土。

第9表 高麗系瓦集計一覧

瓦種	部位	表採・表土層	I b層	II a層	II b層	II c層	II d層	不明	計
軒丸瓦	瓦当部				1				1
軒平瓦	瓦当部			1	2				3
	筒部							1	1
丸瓦	玉縁部		1		5			1	7
	筒部	1	2	6	7		3	1	20
	筒部側面		1		3		1		5
	狭端部				1				1
	狭端部角				1				1
平瓦	広端部		2	10	10			2	24
	筒部	6	23	77	119	9	8	16	258
	筒部側面	4	2	9	10	1		1	27
	狭端部		3	7	20			3	33
	広端部角				5				5
有段式平瓦	狭端部角	1		1	11			1	14
	玉縁部			1	4			1	6
	筒部							1	1
	筒部側面							1	1
役瓦	端部				1				1
			1		2				3
不明	筒部	2			2			1	5
合計		14	35	112	204	10	12	30	417

第10表 平瓦「大天」銘と格子模様集計

在銘・叩き目痕	部 位	表採・表土層	I b層	II a層	II b層	II c層	II d層	不明	小計	合計
平瓦	格子模様	筒 部	1	1	7	18	1	1	29	42
		筒部側面	2	1	3	5	1	1	13	
	大天	筒 部			1	1		1	3	4
		筒部側面				1			1	
	合 計		3	2	11	25	1	2	2	46

註

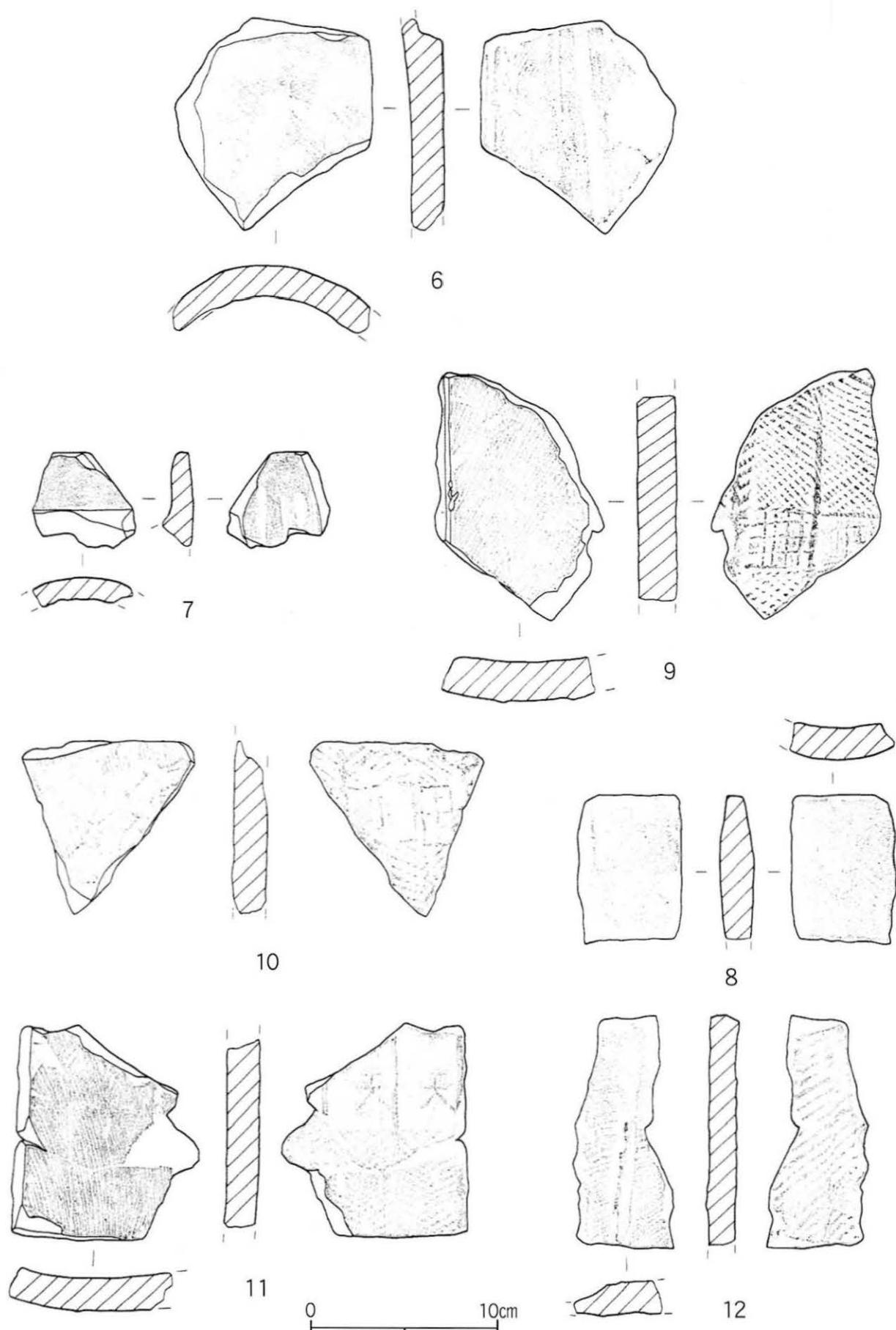
- 註1 上原 静 「第V章第15節 屋瓦」『首里城跡-京の内跡発掘調査報告書(1)』沖縄県文化財発掘調査報告書第132集 沖縄県教育委員会 1998
- 註2 多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」『文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会 1956
- 註3 名護グスク「名護城遺跡を視察」-沖縄考古学会メンバー-琉球新報 1990年1月23日
- 註4 大川 清 「琉球古瓦調査抄報」『沖縄文化財調査報告書』 1978

参考文献

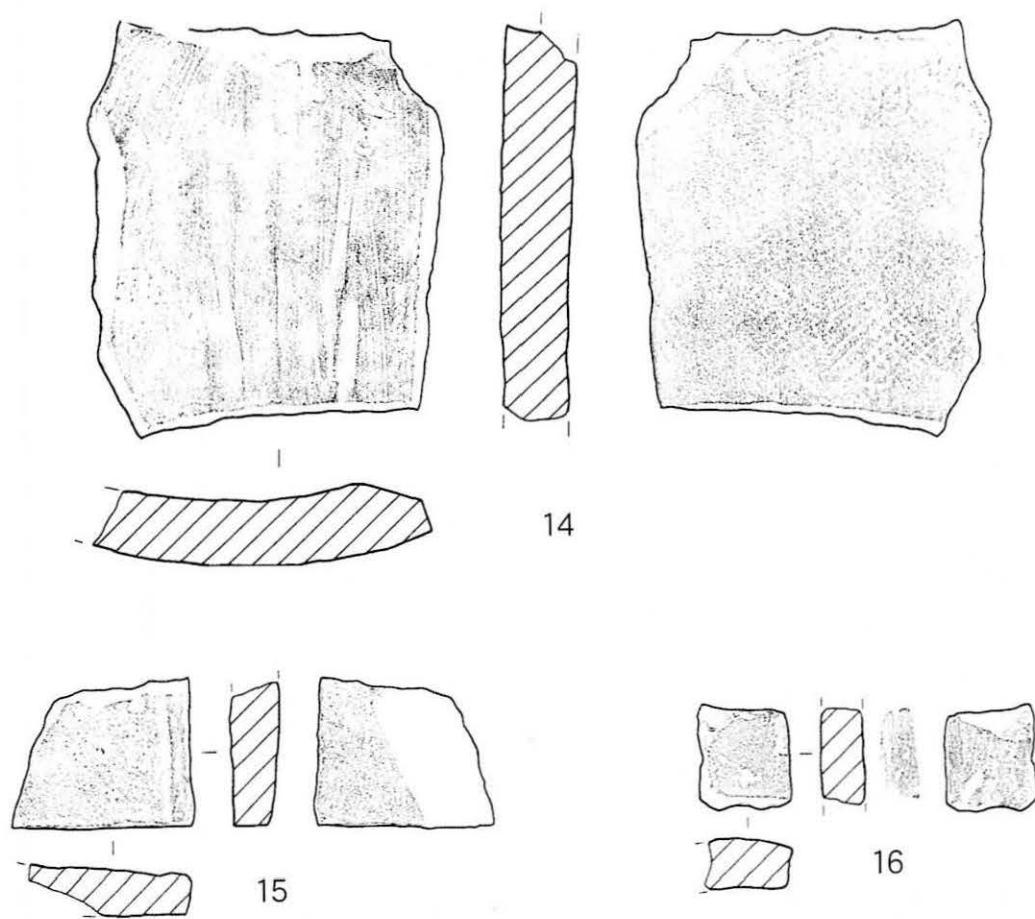
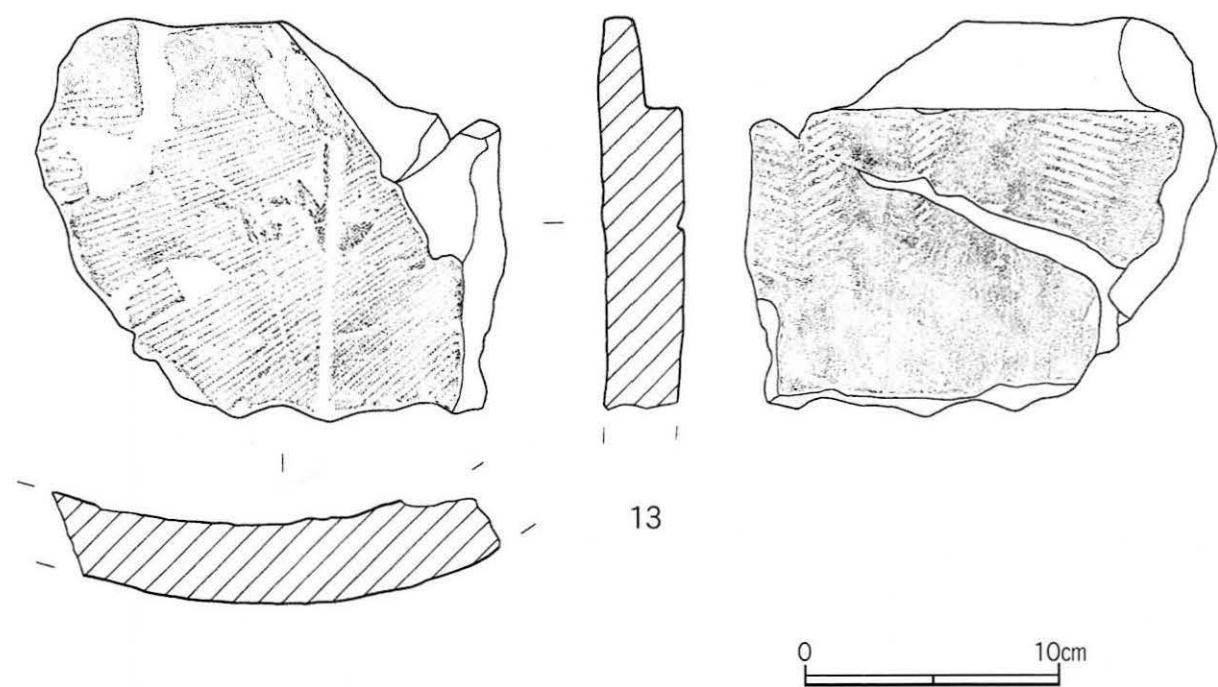
- 下地安広 「高麗系瓦の製作技法考察(1)」『南島考古』第10号 沖縄考古学会 1986



第42図 高麗系瓦① (S=1/3)



第43図 高麗系瓦② (S=1/3)



第44図 高麗系瓦③ (S=1/3)

第17節 沖縄産陶器

本節で扱う沖縄産陶器には、無釉陶器（アラヤチ）、施釉陶器（ジョウヤチ）、陶質土器（アカムン）に加え、瓦質土器の4種が含まれる。以下、各種ごとに項目を設け概述する。

A 無釉陶器

ここで扱う無釉陶器とは、沖縄で一般に荒焼（方言でアラヤチ）と称される無釉焼き締めの陶器である。本遺跡では擂鉢、壺、水鉢、水甕、火炉、瓶子、皿、碗、香炉の9器種が検出された。以下、分類基準を概述し、個々の資料については第12表の観察表にまとめた。

1. 擂 鉢

擂鉢は各資料に共通して口縁部を外に折り曲げ、水平ないしは若干内側に傾くものである。器形によりI～V類に分類した。

- I類 胴部がやや膨らみを持ち、外に開きながらゆるやかに立ち上がる。口縁下部がくびれ、その下に凸帯が二条めぐる。
(第45図1～2)
- II類 I類に比べ胴部の膨らみが無く、直線的に外へ開くもの。口縁下部がくびれ、その下に凸帯あるいは稜がめぐる。
(同図3～5)
- III類 口縁部が「逆L字」状に水平に折れ、口唇部に一条の凹線が巡るもの。
(同図6・7)
- V類 高台を持つ底部。
(同図9・10)

2. 壺

- I類 頸部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、口縁部を外に折り曲げ端部の断面が方形状になる壺。
(第46図11～13)
- II類 口縁部がわずかに外反し、端部が丸みをもつもの。口縁部の折り曲げ方により、aとbに細分した。
- II a 成形の際、口縁部を外側に折り曲げ肥厚させるもの。
(同図14・15)
- II b 成形の際、口縁部を内側に折り曲げ肥厚させるもの。
(同図16)
- III類 口縁部がわずかに外反し、端部を玉縁状に肥厚させるもの。
(同図17・18)
- IV類 口縁部が玉縁状に肥厚する大型の壺。一般的に肩部に耳が付くものである。
(同図19)

3. 水鉢

いわゆる「ミジクブサー」と称されているもの。基本的に、胴部上位の文様が横位の沈線と櫛描きによる数条の波状沈線によって構成されるが、この文様構成を全く有しないものもある。口縁部の形態と文様の有無によりI類とII類に分類した。

- I類 頸部をつくり、口縁部を外へ折り曲げ肥厚させるもの。胴部上位に櫛描きによる波状沈線がめぐる。
(第46図23～第47図25)
- II類 頸部をつくり、口縁部を外へつまみ上げたような形態になるもの。文様は施されない。
(第47図26)

4. その他器種

第47図27～31は甕で口縁部形状によって数種ある。同図32・33は火炉。第48図34～40は瓶子口縁部、胴部、底部で細首の瓶。

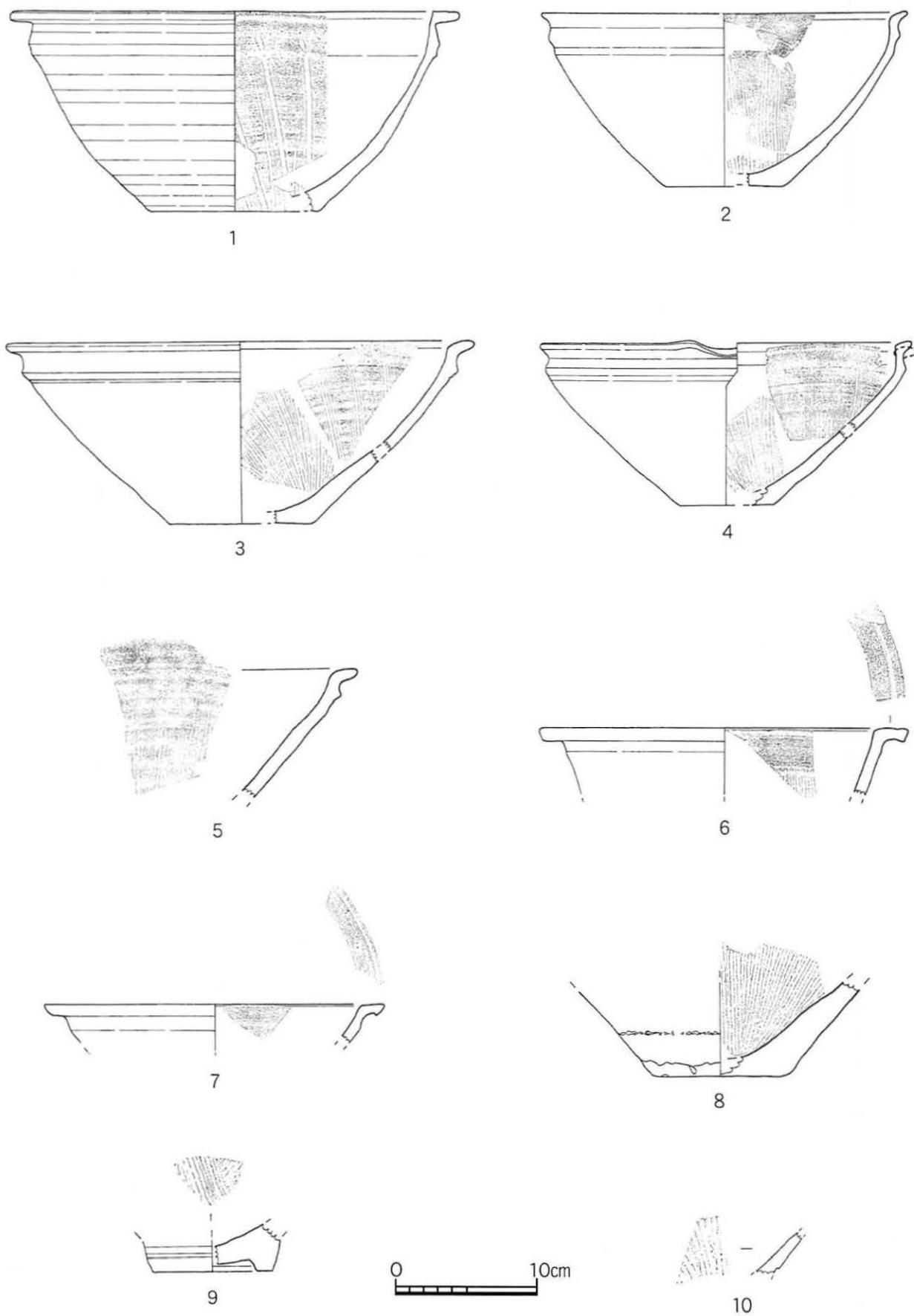
第48図41～43は皿、同図44は碗の口縁部資料。同図45は香炉の口縁部資料である。

参考文献

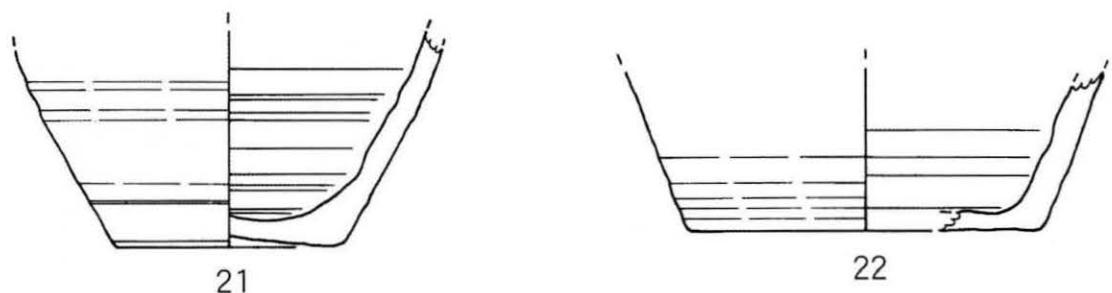
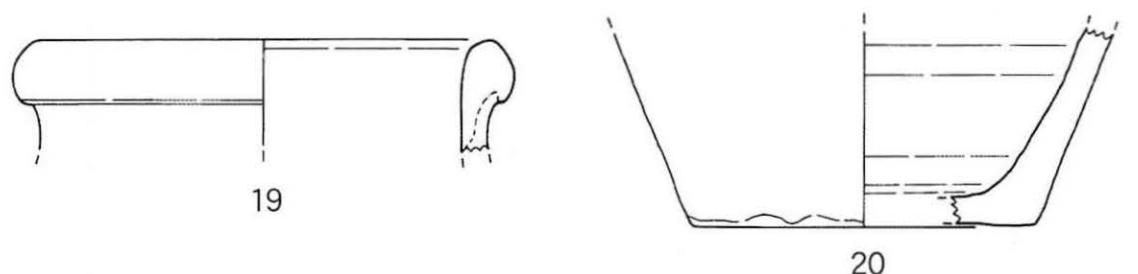
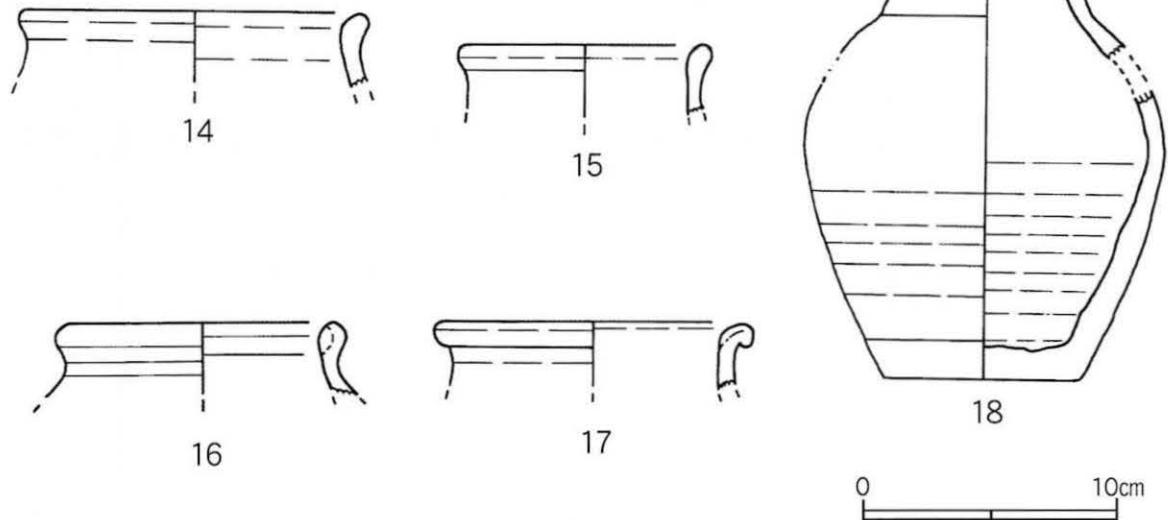
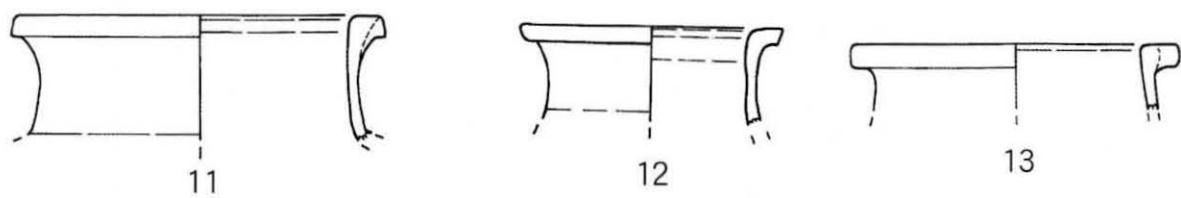
- 沖縄県教育委員会『湧田古窯跡（II）』
沖縄県文化財調査報告書第121集 1995
- 那覇市教育委員会『壺屋古窯群I』
那覇市文化財調査報告書第23集 1992
- 佐賀県立九州陶磁文化館『沖縄のやきもの』 1998

第11表 沖縄産無釉陶器観察一覧

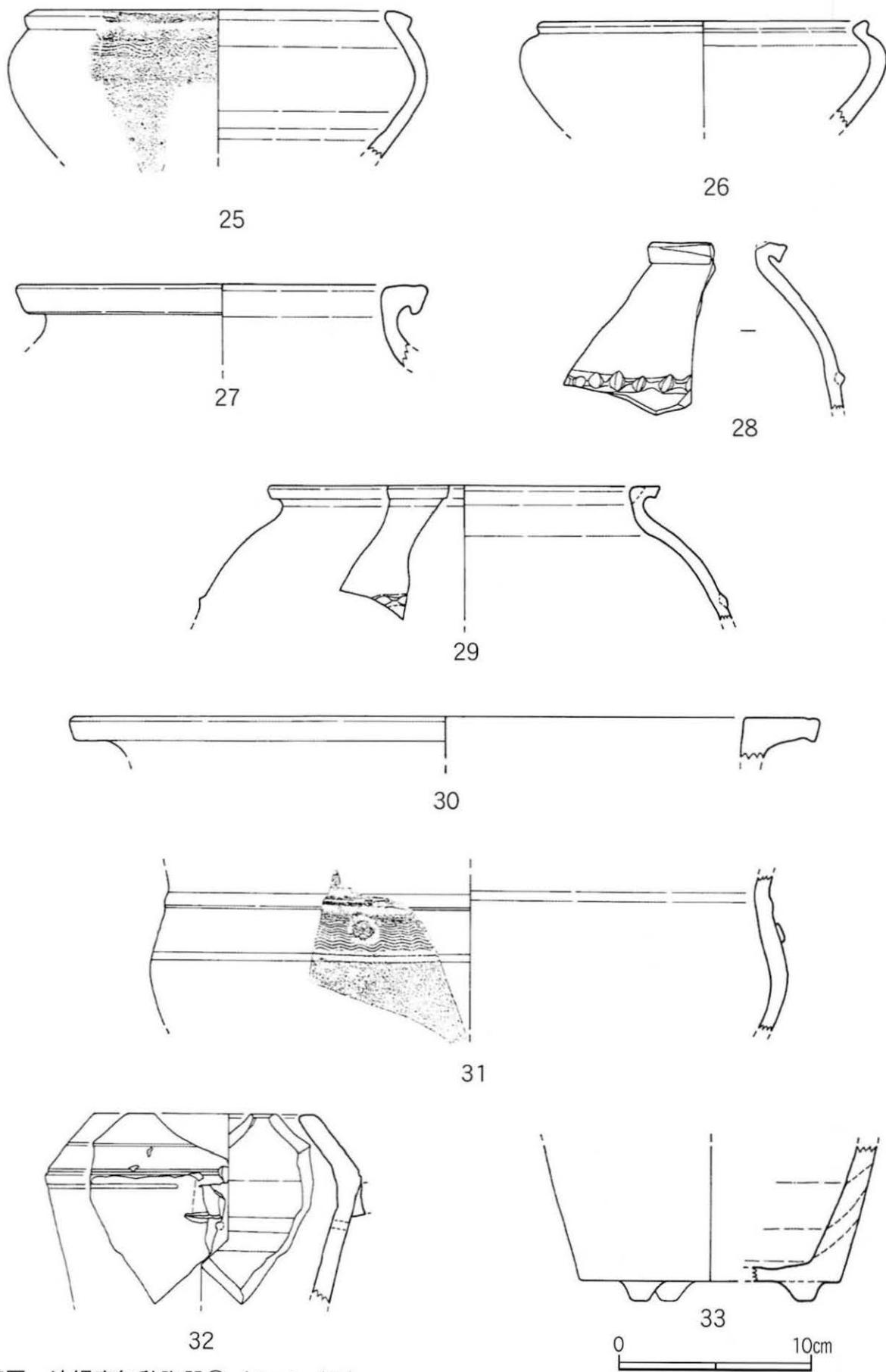
挿図番号	類	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	特徴	出土地点
第45図1	擂鉢 I	31.4	14.1	11.8	10条1組の擂り目を間隔を空け施す。素地は赤茶褐色で堅緻。	PQ-31、II a
第45図2	擂鉢 I	26.0	12.3	8.4	8条1組の擂り目を間隔を空け施す。素地は赤茶褐色で堅緻。	LM-26、II b
第45図3	擂鉢 II	31.4	12.9	10.2	7条1組の擂り目を間隔を空け施す。素地は赤茶褐色で堅緻。	NO-31、II a
第45図4	擂鉢 II	26.2	11.5	6.8	12条1組の細かい擂り目を間隔を空け施す。素地は赤褐色で堅緻。	PQ-31、II a
第45図5	擂鉢 II	-	-	-	12条1組の細かい擂り目を間隔を空け施すが、口縁部下位でナデ消す。素地は朱色。	PQ-31、II a
第45図6	擂鉢 III	25.8	-	-	口唇部に沈線を1条施し、擂り目を口縁部下位でナデ消す。擂り目の単位は不明。	表採
第45図7	擂鉢 III	25.0	-	-	口唇部に沈線を2条施し、擂り目を口縁部下位でナデ消す。擂り目の単位は不明。	RS-13、II a
第45図8	擂鉢	-	-	9.1	7~8条1組の擂り目を施す。素地は朱色を呈し、瓦質に近く脆い。	RS-15、I b
第45図9	擂鉢 IV	-	-	8.4	高台を持つ底部。擂り目は10~11条1組で粗い。素地は灰褐色で堅緻。	PQ-16、II a
第45図10	擂鉢 IV	-	-	-	高台を持つ底部。擂り目は大きく粗い。素地は赤茶褐色で堅緻。	RS-12、不明
第46図11	壺 I	14.4	-	-	内外面は赤茶褐色。素地は赤茶褐色を呈し、精選され堅緻である。	PQ-28、II b
第46図12	壺 I	10.4	-	-	内外面は赤茶褐色。素地は赤茶褐色を呈し、精選され堅緻である。	表採
第46図13	壺 I	12.6	-	-	内外面は赤茶褐色。素地は赤茶褐色を呈し、精選され堅緻である。	HI-30、II a
第46図14	壺 II a	13.6	-	-	内外面は黒褐色。素地は赤褐色を呈し、精選され堅緻である。	表採
第46図15	壺 II a	9.4	-	-	内外面は黒褐色。素地は暗赤褐色を呈し、精選され堅緻である。	NO-30、II a
第46図16	壺 II b	10.6	-	-	内外面は黒褐色。素地は暗赤褐色を呈し、精選され堅緻である。	RS-17、II b
第46図17	壺 III	12.0	-	-	内外面は黒褐色。素地は暗赤褐色を呈し、精選され堅緻である。	PQ-30、II b
第46図18	壺 III	8.0	-	7.8	内外面は赤褐色。素地は暗赤褐色を呈し、精選され堅緻である。	JK-13、I b
第46図19	壺 IV	17.6	-	-	内外面は茶褐色。素地は赤褐色を呈し、精選され堅緻である。	PQ-31、II a
第46図20	壺	-	-	13.7	内外面は黒褐色。外面には自然釉がかかる。素地は赤褐色を呈し、精選され堅緻。	PQ-27、II a
第46図21	壺	-	-	8.8	外面は暗赤褐色、内面は黒褐色。素地は赤褐色を呈し、精選され堅緻である。	RS-14、I
第46図22	壺	-	-	13.8	外面は暗赤褐色、内面は赤褐色。素地は赤褐色を呈し、精選され堅緻である。	LM-17、II b
第46図23	水鉢 I	14.2	-	-	肩部に6条1組の櫛描き文が巡る。内外面は暗茶褐色、素地は暗赤褐色を呈し堅緻。	NO-21、II a
第46図24	水鉢 I	12.6	-	-	肩部に5条1組の櫛描き文が巡る。内外面は暗茶褐色、素地は赤褐色を呈し堅緻。	不明
第47図25	水鉢 I	18.6	-	-	肩部に5~6条1組の櫛描き文が巡る。内外面及び素地は暗赤褐色を呈す。	NO-21、II b
第47図26	水鉢 II	17.0	-	-	外面は茶褐色、内面は黒褐色。素地は暗赤褐色を呈し、堅緻密である。	NO-12、II b
第47図27	甕	21.6	-	-	内外面は黒褐色であるが、外面には自然釉がかかる。素地は暗赤褐色で堅緻。	RS-38、II a
第47図28	甕	-	-	-	外体面に縄目文が貼付られる。外面は暗赤褐色、内面及び素地は朱色を呈す。	NO-21、II b
第47図29	甕	20.4	-	-	外体面に縄目文が貼付される。内外面及び素地は黒褐色を呈す。	表採
第47図30	甕	38.8	-	-	口唇部に沈線を1条施す。外面は茶褐色、内面及び素地は朱色を呈する。	HI-29、I b
第47図31	甕	-	-	-	内外面及び素地は朱色。外体面には櫛描き文とその上にボタン状のものが貼付られる。	表採
第47図32	火炉	11.4	-	-	外体面に方形の耳状のものが付き、その下に小孔を持つ。内外面及び素地は暗赤褐色。	JK-13、I b
第47図33	火炉	-	-	13.6	内外面及び素地は灰褐色を呈すが、外底面は朱色。	PQ-18、II ab
第48図34	瓶	6.8	-	-	内外面は茶褐色、素地は暗赤褐色を呈す。	LM-27、II ab
第48図35	瓶	5.2	-	-	内外面及び素地は赤褐色を呈す。	HI-31、II a
第48図36	瓶	5.5	-	-	内外面及び素地は灰褐色を呈すが、部分的に黄色の自然釉がかかる。	NO-21、II a
第48図37	瓶	-	-	-	外面は朱色、内面及び素地は灰褐色を呈す。	RS-24、I
第48図38	瓶	-	-	5.4	内外面は灰褐色、外体面に黄釉が施される。素地は暗赤褐色。	RS-13、II ab
第48図39	瓶	-	-	6.8	高台の付く瓶。外面は暗褐色、内面は灰褐色。素地は暗赤褐色を呈す。	NO-32、不明
第48図40	瓶	-	-	5.8	高台の付く瓶。内外面は灰褐色、素地は暗赤褐色。	NO-17、II b
第48図41	皿	10.6	2.6	4.2	内外面及び素地は朱色。口縁部には煤が付着する。	不明
第48図42	皿	10.2	2.5	3.7	内外面及び素地は朱色。口縁部には煤が付着する。	JK-32、II a
第48図43	皿	10.8	-	-	内外面は暗赤褐色。素地は黒褐色~朱色を呈す。口縁部には煤が付着する。	RS-15、I b
第48図44	碗	13.2	-	-	内外面及び素地は暗赤褐色を呈す。	LM-26、II b
第48図45	香炉	9.8	-	-	内外面は茶褐色を呈し、素地は暗赤褐色を呈す。	NO-13、I b



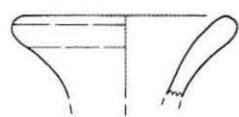
第45図 沖縄産無釉陶器① (S = 1 / 4)



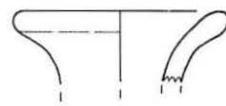
第46図 沖縄産無釉陶器② (S=1/3)



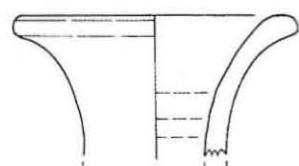
第47図 沖縄産無釉陶器③ (S=1/3)



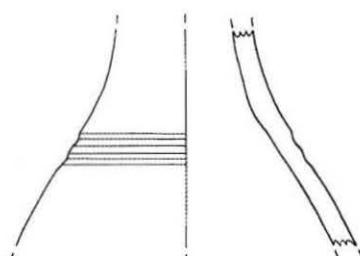
34



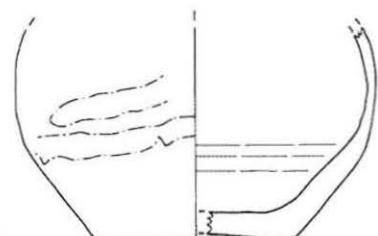
35



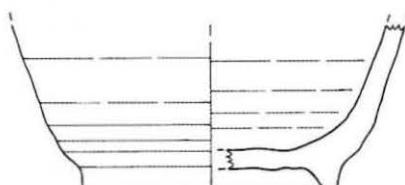
36



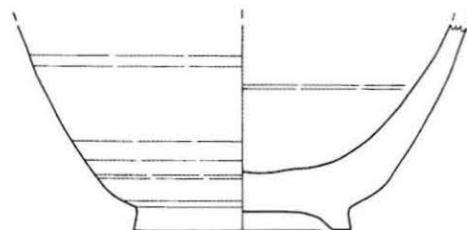
37



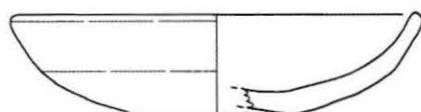
38



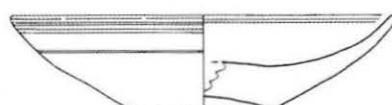
39



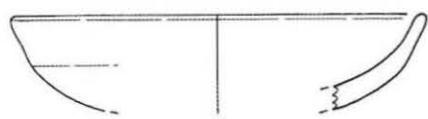
40



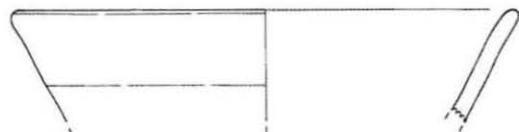
41



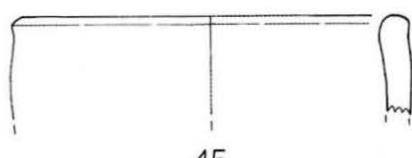
42



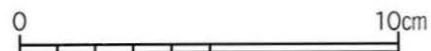
43



44



45



第48図 沖縄産無釉陶器④ (S=1/2)

B 沖縄産施釉陶器

沖縄産施釉陶器とは、器の表面に釉薬を塗布する陶器の一群をさす。沖縄では一般に上焼（ジョウヤチ）と称されている。ほとんどの資料は小破片であるが、碗類、鉢類、皿類、瓶類、蓋、灯明具などが得られた。

1. 碗（第49図1～6）

『壺屋古窯群（I）』の分類基準を参考にし、以下の3種に分類した（註1）。

I類 高台脇から口縁部へかけて斜めにほぼストレートに延びる器形である。釉掛けは通常内外面ともに上半部のみを対象に施釉するフィーガーキと呼ばれる技法を用いており、したがって器体下半部の見込みや高台部は露胎となる。釉薬は灰釉を用いる。

第49図1は透明感のある灰釉を施し、素地は淡灰白色で堅緻。口径13.0cm、器高5.6cm、底径7.0cm。RS-14、IIa層出土。

同図2はくすんではいるがやや透明感のある灰釉が施される。素地は黄白色で堅緻。

口径13.9cm、器高6.1cm、底径7.0cm。表採。

II類 高台脇から口縁部へかけて緩やかなカーブを描きながら膨らみ、口縁部で微弱な外反を示す器形である。I類よりも施釉範囲が広がり、高台脇付近までを対象とする。見込みには鉄釉で丸文を施し、蛇の目状になる。同図3は内外面で釉薬を掛け分けている。素地は黄白色。口径12.6cm、器高6.5cm、底径6.4cm。RS-13、IIa層出土。

同図4も図3と同様内外面で掛け分けがなされている。素地は黄白色。底径5.9cm。表採。

III類 高台脇から口縁部へかけて緩やかなカーブを描きながら膨らみ、口縁部で外へ大きく開く器形である。内外面に釉薬を施すし、外体面には呉須により文様が描かれる。

同図5は、口径14.6cm、表採。

同図6は見込み脇で釉薬が拭き取られている。素地は乳白色。口径14.8cm、TU-15地区第Ib層出土。

2. 小碗（第49図7・8）

同図7は内外面に白化粧のあと透明釉を施す。見込みは蛇の目状に釉薬を剥ぎ取っているが、

重ね焼きの痕が残る。疊付のみ露胎となる。素地は橙白色。底径4.0cm。表採。

同図8は外体面の腰部を笠で削り、六角形の面を作り出している。内外面に白化粧を施し透明釉を掛ける。疊付は露胎。素地は灰白色で、他に比べ堅緻である。底径3.3cm。表採。

3. 鉢（第50図9・10）

同図9は「ワンブー」と称される大型の鉢である。口縁部が外へ折れ曲がり鍔をつくる。外体面には黒褐色の釉薬を、内対面には白化粧のあと透明釉を施す。素地は黄白色。口径25.2cm。JK-32地区第IIa層出土。

同図10は小振りの鉢として扱った。口縁部には蓋を受ける部分がみられるが欠損している。内外面に褐色の釉薬を施す。素地は橙白色。口径15.9cm。NO-22地区第IId層出土。

4. 皿（第50図11・12）

同図11は、口縁端部に指圧を加えた稜花状の皿である。素地は黄白色。口径は推算で11.0cm。HI-31地区第IIa層出土。

同図12は大皿の底部資料と考えられる。素地は橙白色。底径8.0cm。RS-15第Ib層出土。

5. 瓶（第50図13・14）

同図13は内外面に茶黒褐色の釉薬を施し、素地は赤褐色をおびる。口径4.2cm。NO-22、IIb層出土。

同図14は花瓶の底部と考えられる。外体面には茶褐色の釉薬を施す。素地は赤色をおびる。底径4.4cm。NO-22第IIb層出土。

6. 水注（第50図15）

同図15は胴部が膨らみ、全体的に丸みをおびる。胴部上位には飛びカンナによる刻文を施し、その上から茶褐色の釉薬を掛けける。素地は灰色で堅緻。RS-14、IIa層出土。

7. 蓋 (第50図16)

同図16は外体面に黒釉を施し、内面は露胎となる。素地は赤色をおびる。口径9.1cm。JK-32、第Ia層出土。

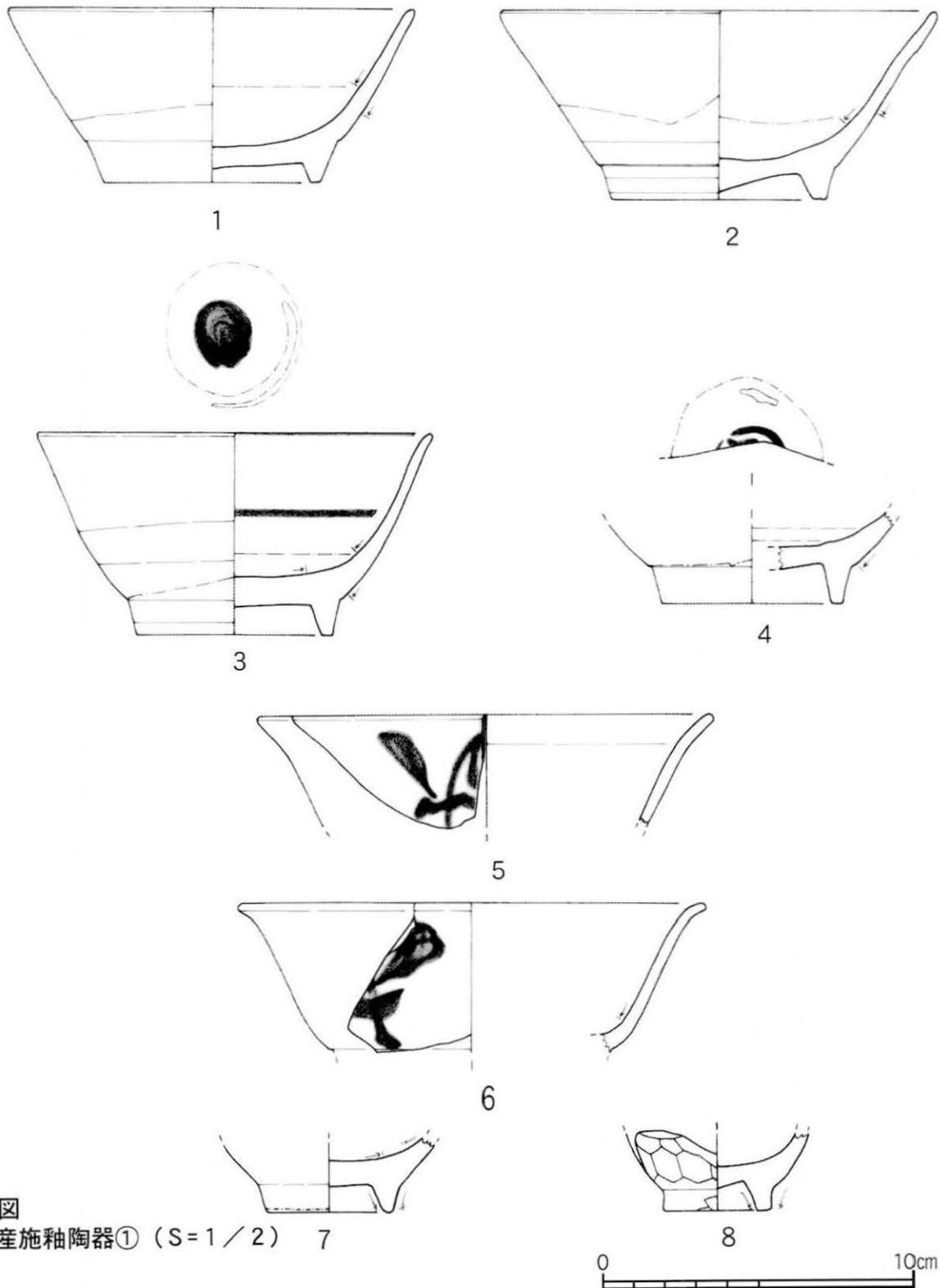
同図17は外体面に茶褐色の釉薬を施す。素地は黄白色。口径11.4cm。表採。

8. 灯明具 (第50図18)

同図18は秉燭である。内外面に茶褐色の釉薬を施す。素地は灰白色で堅緻。RS-14、IIa層出土。

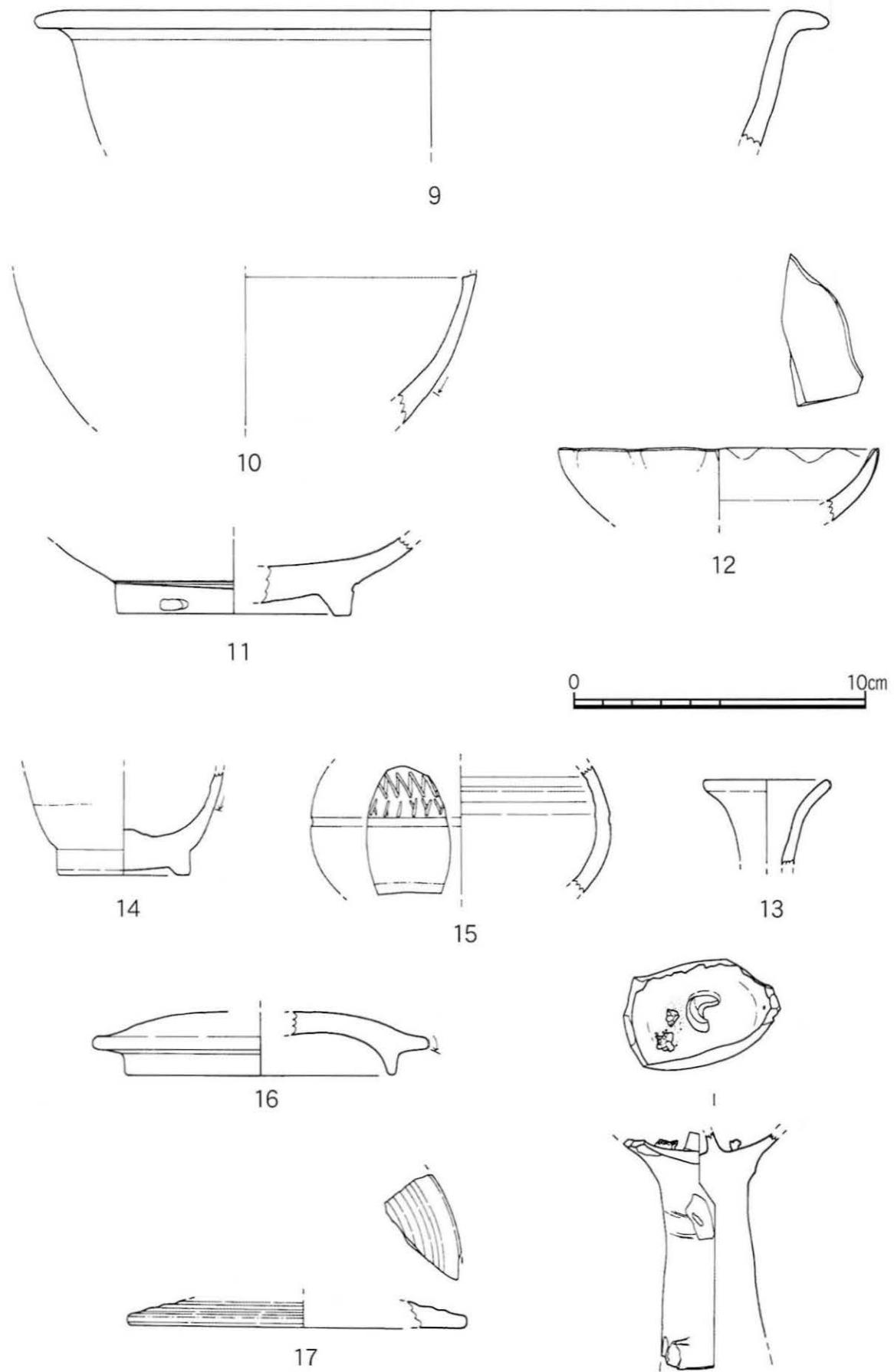
註

註1 那覇市教育委員会『壺屋古窯群(I) 一個人住宅建設に伴う緊急発掘調査』那覇市文化財調査報告書第23集 1992



第49図

沖縄産施釉陶器① (S=1/2) 7



第50図 沖縄産施釉陶器② (S=1/2)

18

C 陶質土器

細かい破片が145点得られた。器種は急須、火舎、鉢、蓋などである。出土集計表は第12表である。

第51図1は蓋の資料である。頂部から底にかけてゆるやかに移行する。口唇部が短く1mm程度である。内外面とも轆轤痕が残る。胎土はやや細かく、若干脆い。内外面ともにクリーム色を呈し、混入物は赤色粒が含まれる。器壁は5mm。RS-14地区第IIa層石列遺構内より出土。

同図2は手水鉢で口縁は内彎し、器壁は8mmを測る。内外面とも轆轤痕が認められる。文様は波状沈線が巡らされるが、雑な描きである。胴部はやや細かく焼成は良好で、細かい雲母や赤色粒が混入される。器色は内外面とも淡褐色。表採資料である。

同図3は底部資料であるが、器種は不明。高台内面は削り出しにより成形される。胎土は精選され、焼成も堅緻である。混入物はみられない。器色は胎土内は淡褐色で、内外面は釉をかけたような褐色を呈する。底面は5mm、立ち上がり部分は6mmを呈する。表採資料。

同図4は急須口縁部の小破片で、器壁が3mmと薄い。口唇部は垂直で強く屈曲し、肩部へいたる。内外面に轆轤痕がみられる。胎土は細かいが焼成はあまり良好ではない。細かい雲母が混入され、器色は淡黄褐色を呈する。LM-26地区第IIa層出土。

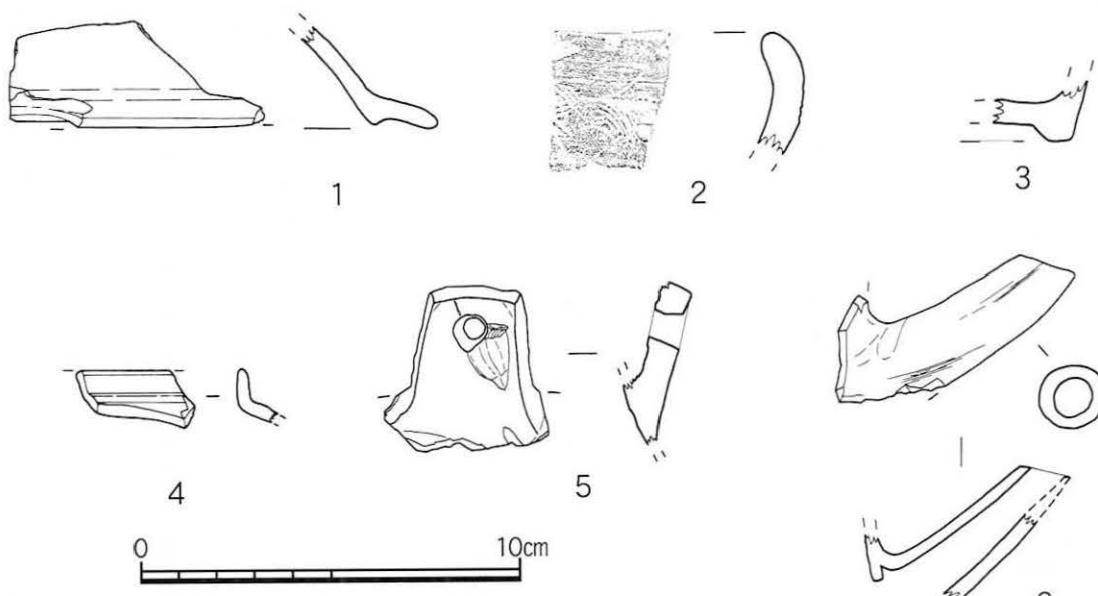
同図5は急須の身に付ける把手部分であり、

6~7mmの孔が穿たれる。器壁は8mmで身の部分は3mmと薄い。外面はナデにより丁寧な調整がなされているが、内面は凹凸がひどく雑な作りである。胎土は精選され、焼成は良好である。胎土に細かい雲母、赤色粒、石灰質砂粒が混入される。内外面とも淡褐色であるが、身の部分は褐色を呈する。部分的に煤が付着する。VW-24地区第IIa層出土。

同図6は注口の部分である。外面はヨコ方向の擦痕がみられ、丁寧な調整ではない。身内面は轆轤痕が残る。器色は内外面とも褐色を呈し、注口の横の部分に煤が付着する。胎土はやや細かく、焼成は良好。混入物に細かい雲母、石灰質砂粒を含む。器壁は3~4mmを測り、JK-18・19盛土表採である。

第12表 陶質土器集計一覧

器種	部位	I b	I b・II	II a	II b	II ab	VW・XY-38・39 石積み	表採	合計
急須	口縁部			1					1
	注ぎ口							1	1
	把手	1		2	1	1			5
火舎	胴部		3	1	1			1	6
手水鉢	口縁							1	1
蓋		1	1	3			1	3	9
不明	口縁部	1		2		1		1	5
	胴部	16	7	64	2	1	2	21	113
	底部	2		1				1	4
合計		21	11	74	4	3	3	29	145



第51図 沖縄産陶質土器 (S=1/2)

D 瓦質土器

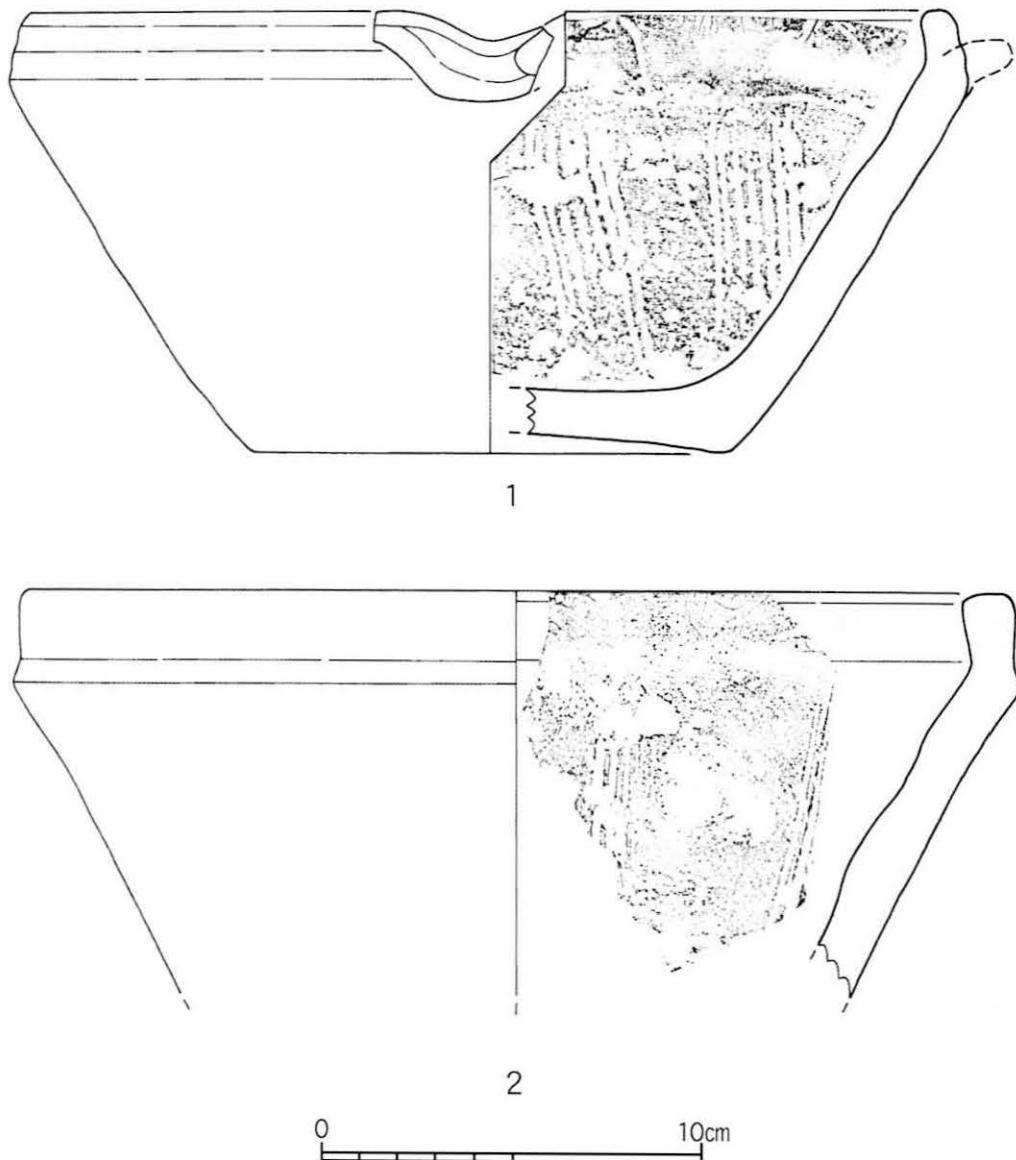
瓦質土器で確認された器種は擂鉢のみである。その数は図示した2個体である。両資料とも口縁部を内側に折り曲げ、やや内傾させる。同様の形態が湧田古窯跡から出土し、報告されている（註1）。

第52図1は内面に7本1組の擂り目を持つ。口径24.8cm、器高11.7cm、底径12.6cm。PQ-29地区第Ⅱa層出土。

同図2は内面に6本1組の擂り目を持つ。口径25.8cm、LM-17地区第Ⅱa層出土。

註

註1 沖縄県教育委員会 『湧田古窯跡（II）』 1995



第52図 沖縄産瓦質土器 (S=1/2)

第18節 石 器

石器は総数87点が得られた。種類は砥石、磨石、叩き石、石皿、石弾状石器、石錐がみられる。また、軽石を加工したものも見られ、出土状況は第13表のとおりである。以下、各器種別に記述する。資料の個々の観察は第14表にまとめ、表にないものは下記に記述した。

1. 砥 石

- A類 大型で基本的に置いて使用したと考えられる資料。材質、研ぎ面の数にバリエーションがみられるが、基本的に研ぎ面は平滑になり、面を1つ以上もつ。(第53図1)
- B類 小型で方形状を呈する。主に上端部に穴を穿ち、携帯したと思われる。いわゆる磨刀石といわれる製品と考えられる。5点みられるが、そのうち2点は孔がみられず、もう1点は他の資料に比べ若干大きめである。(第53図2~5)
- C類 砥石の範囲に含まれるが、何ヶ所かに切り込みの痕がみられる。7点の出土で、そのうち3点は小孔を穿ったような痕となる。(第53図6・7)

2. 磨 石

- A類 やや厚みのある楕円形の礫で、側面周縁部、上下面の中央に敲打痕を有する。(第54図11・12)
- B類 扁平の楕円を呈する礫。側面に研磨痕はみられない。表裏面のみに研磨面がみられる。(同図13)

3. 叩き石

敲打する面を主流とする。3点出土のうち割愛した2点は研磨面がみられず、円柱状を呈し、第54図8のみが円形を呈する。

4. 石 皿

大型で研磨面が1ないし2面みられる。砥石Aと区別がつけづらいが、石皿は研ぎのための擦痕がないことや皿の面のくぼみ状態で分類した。

5. 石弾状石器

第54図9の資料は完全な球形ではなく、断面が若干細い。研磨による成形ではなく、何度かの細かい敲打により作られる。タテ3.7cm、ヨコ

3.4cm、重量33.5gを測る。1点のみの出土のため性格ははっきりしない。LM-17地区第IIb層からの出土。

6. 石 锤

第54図15は雪だるま形をした石錐と思われる。上部にくびれ部分があり、そのくびれ部分中央に小孔を穿つ。孔の外径は8mm、内径4mmを測る。全面に細かいカットで整形された痕がみられるが、研磨面は正面の胴部のみである。上下端は丸みがなく平坦に作られる。石質は数条のすじがみられる。法量は最大長4.2cm、最大幅3.3cm、最大厚2.9cm、重量49.8gを測る。出土はNO-16地区第IIa層である。

7. 砥

第54図10の資料は硯の破片で、陸部の縁辺が残っている。1点のみの出土である。石製で暗茶褐色を呈する。全面研磨が施され、滑らかに仕上げられているが擦痕が残る。また、墨受け部から陸部側面にすり切ったような痕がみられる。別のものを作ろうとした感じである。墨受け部厚0.9cm、陸部厚1.4cm、重量36gを測る。出土はPQ-28地区第IIa層である。

8. 軽石製品

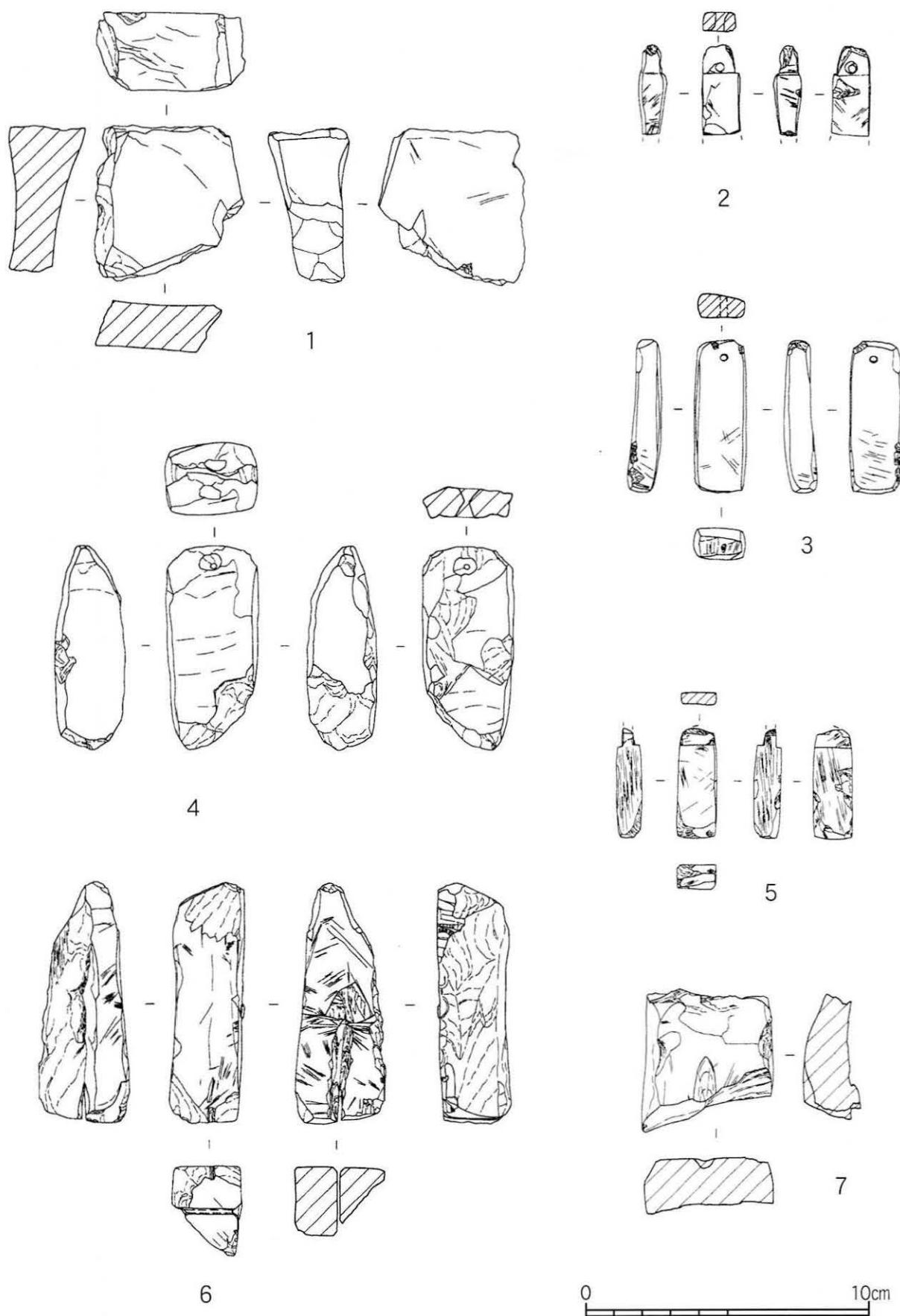
第54図14は用途不明であるが、ほぼ全面に加工痕あるいは刃痕がみられる。下部は角がなく丸みをおびる。具志頭グスク出土の軽石製砥石と同様の可能性あり。最大長7cm、最大幅3.7cm、厚さcm、重量28gを測る。黄褐色を呈し、出土はRS-17地区第IIb層である。図面を割愛したもう1点の軽石製品は隅丸の三角形を呈し、ガラス質の鉱物を含んだ黒色のもので、10の製品とは形も材質も違う。軽石特有のザラザラ感はあるが、丁寧に研磨されたものである。法量は最大長7.9cm、最大幅5.2cm、厚さ4.1cm、重量60gを測る。PQ-28地区第IIa層の出土。

第13表 石器集計一覧

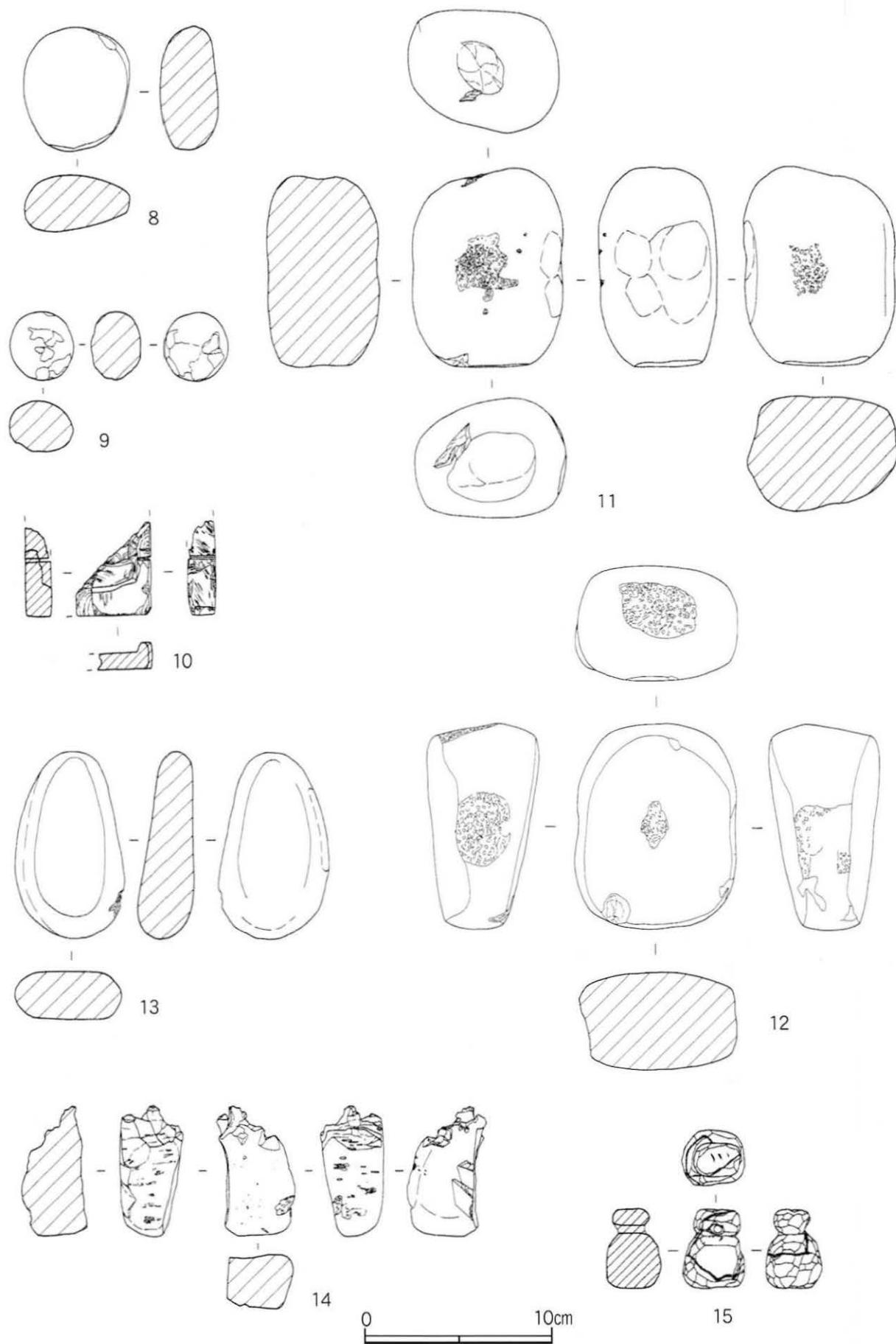
分類	出土場所	I b	II a	II b	II d	II ab	II bd	井戸跡内	表採	不明	合計
砥 石	A類		5	11	1	7	2	1	1	2	30
	B類		3	1		1					5
	C類		1	4	1		1				7
	不明		1	7		1	1				10
磨 石	A類			3							3
	B類	1	1	3							5
叩き石				1		1			1		3
石皿			3							1	4
石弾状石器				1							1
石錘			1								1
硯			1								1
軽石製品			1								1
不明		1		5	1	2	3		3	1	16
合 計		2	17	36	3	12	7	1	5	4	87

第14表 石製品観察一覧

挿図番号	種類	出土場所	法量(cm)				石質	特徴		
			最大長	最大幅	最大厚	重量(g)				
第53図1	砥石A	RS-13、II b	8.7	7.7	4.3	279	玢岩 (渡名喜石)	表裏面、右側面に研磨が残る。よく使用されたため断面形がバチ形となる。頭部は自然面であるが部分的に刃物で削られた擦痕がみられる。		
第53図2	砥石B	HI-36、II a	4.6	2.0	1.5	22	頁岩	頭部に有段がみられるが、左側は平滑面となる。頭部の孔は表裏面両方から丁寧に穿たれる。外孔0.6cm、内孔0.4cmを測る。		
第53図3	砥石B	TU-13、II b	8.1	2.8	1.7	60	角閃石安山岩	短冊形を呈し、全面に使用痕がみられる。頭部に直径0.4cmの丁寧な小孔を穿つ。		
第53図4	砥石B	PQ-18、II ab	10.6	6.8	3.4	246	玢岩	やや大きめの携帯用砥石。上端がやや細くすぼまり、小孔が穿たれる。内孔0.3cm、外孔1~1.1cmで両面から穿孔。		
第53図5	砥石B	PQ-15、II a	5.8	2.1	1.35	30	緑色千枚岩	頭部に有段あり。孔なし。全面に擦痕がみられるが、両側面は作製時の調整と思われる。		
第53図6	砥石C	RS-32、II d	7.4	6.9	2.5	195	"	4面とも砥石として使用されているが、右側面に刃痕が5~6条みられ、下端は切断するための切り込みがみられる。		
第53図7	砥石C	TU-13、II b 柱穴内	12.7	4.7	3.7	294	"	破損が著しい製品であるが、表面に研磨が部分的にみられる。表面中央に窪みがみられるが、砥石として使用したのか切断するためのものなのかはつきりしない。		
第54図8	叩き石	PQ-16、II ab	6.7	5.6	3.0	197	変輝緑岩	卵形を呈するが断面はやや細い。上部から右側面、下部に稜線がはつきりみられる。上下端に敲打部がみられるが顕著な使用痕ではない。		
第54図11	磨石A	LM-37、II b	10.6	8.1	6.4	1075	"	厚みのある石鹼形を呈する。表裏面に敲打による浅い窪みがみられる。右側面に3こ、左側面及び上下端に1この窪みが認められる。これも浅い。		
第54図12	磨石A	HI-22、II b	11.1	8.5	6.1	904	硬砂岩	表面形は方形、断面形はバチ形を呈する。研磨は弱い。両側面及び下端部の中央に窪みを有し、若干くびれる。上端の一部に煤が付着する。		
第54図13	磨石B	PQ-14、II a 柱穴内	10.5	5.7	2.6	199	安山岩	楕円形だが、断面は扁平、表裏面に磨面がみられる。上下端、両側面は細かい敲打により調整され、磨面は見られない。		



第53図 石器・石製品① (S=1/2)



第54図 石器・石製品② (S = 1 / 2)

第19節 煙 管

煙管の雁首と吸い口を合わせ完成品が36点検出された。これらは材質により石製、瓦製（高麗系瓦を二次加工する）、陶製、磁器製、金属製の5つに分けることができる。石製及び瓦製には、完成品の他に製作過程と考えられるものがみられる。以下、材質別に概述する。

1. 石 製

石製には大別して火皿部と羅宇接続部のみを持つものと、これに加え紐通し穴を持つものがある。第55図1～第56図5。

2. 瓦 製

瓦製の雁首は高麗系瓦を二次加工し製作している。第56図6～9は製作過程を示す資料である。同図10は完成品であり、瓦製の雁首はすべて紐通し穴を持たないこのタイプである。

3. 陶 製

陶製の雁首は、無釉陶器と釉薬のかかる施釉陶器に分けることができる。

同図11は外面を八角形に成形した無釉陶器の雁首である。同図12は火皿部が欠損しているが施釉陶器の雁首である。

4. 磁器製

磁器製の吸い口部と思われる資料が1点検出された。外面に藍色の釉薬を施し、素地は白色で堅緻である。同図13。

5. 金 属 製

金属製の煙管雁首と吸い口がそれぞれ2点検出された。同図14は雁首、15は吸い口である。

参考文献

沖縄県教育委員会 『古我地原内古墓』

沖縄県文化財調査報告書第85集 1987

沖縄県浦添市教育委員会 『浦添城跡発掘調査報告書』

浦添市文化財調査報告書第9集 1985

真栄平房昭 『煙草をめぐる琉球社会史』『新しい琉球史像』

琉球弧叢書3 榎樹社 1996

第15表 煙管雁首観察一覧

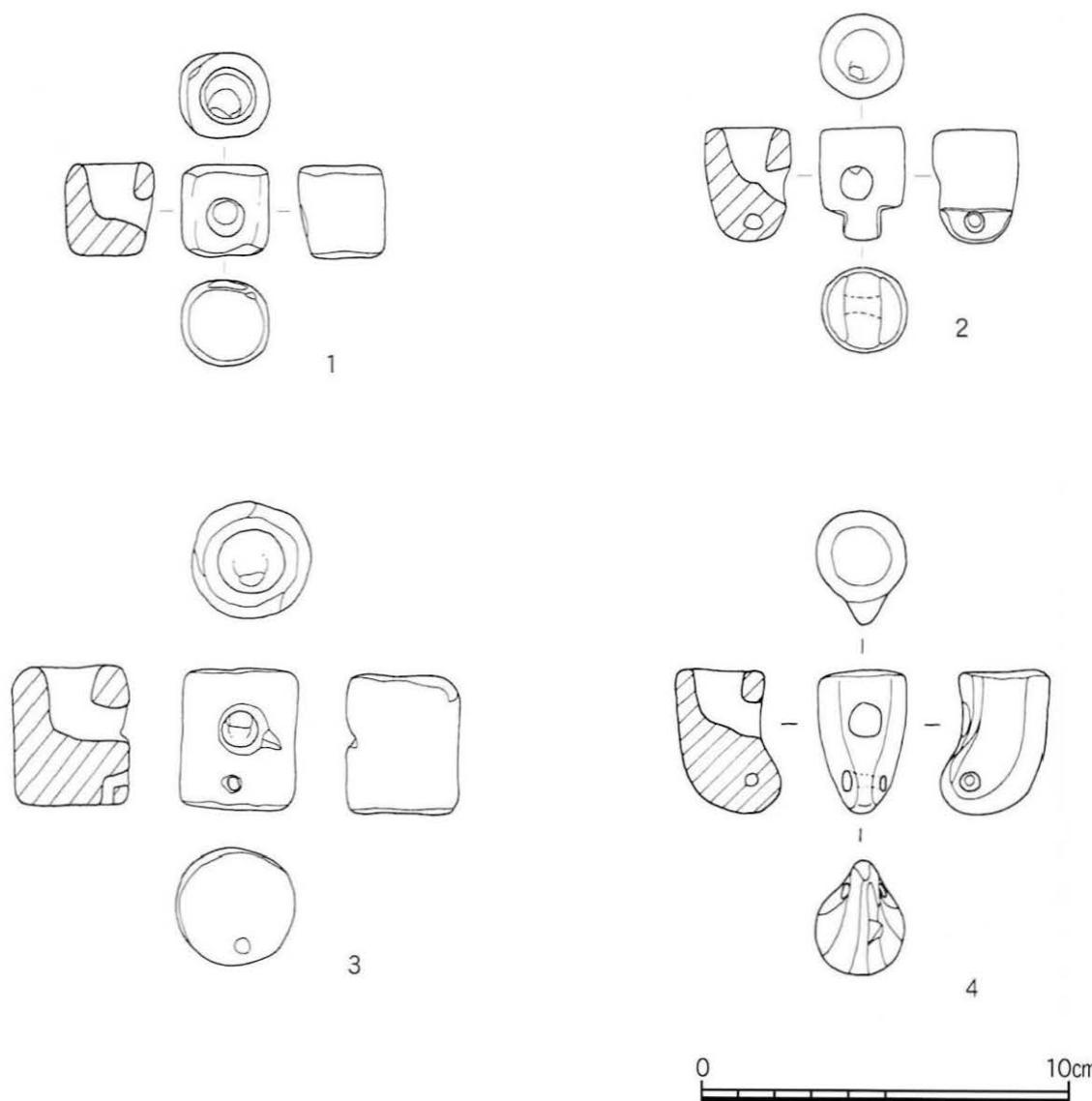
挿図番号	材質	全長(cm)	火皿 内径(cm)	羅宇接続 内径(cm)	現重量(g)	備考	出土地点
第55図 1	石製	2.55	1.5	1	18.0	火皿内に煤が付着する。	NO-21、IIa層
第55図 2	。	3.0	1.5	0.9	17.0	。	PQ-15、IIa層
第55図 3	。	3.9	1.8	1.0	50.0	。	PQ-31、IIa層
第55図 4	。	3.0	1.2	0.7	25.0	。	LM-27、IIab層
第56図 5	。	3.9	1.6	0.9	14.0	。	PQ-14、IIa層
第56図 6	瓦 製	5.1	-	-	51.0		
第56図 7	。	5.0	-	-	31.0		
第56図 8	。	4.9	-	-	29.0		
第56図 9	。	2.9	-	-	15.0		
第56図 10	。	3.4	1.8	0.9	19.0		JK-18、IIb層
第56図 11	無釉陶器	3.5	1.8	1.0	10.0		PQ-14、IIab層
第56図 12	施釉陶器	-	-	1.05	5.0		HI-30、IIa層
第56図 14	金属製	4.3	1.25	0.9	8.0		NO-31、IIb層

第16表 煙管吸い口観察一覧

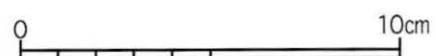
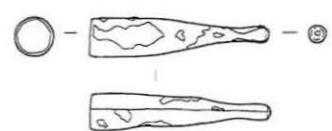
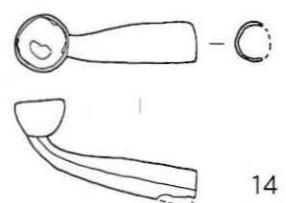
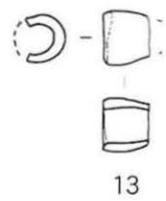
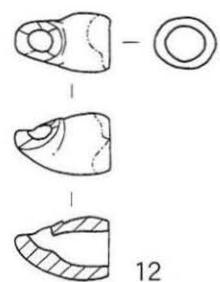
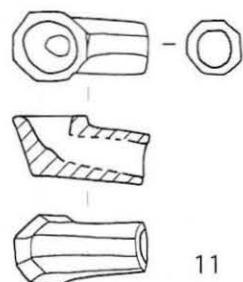
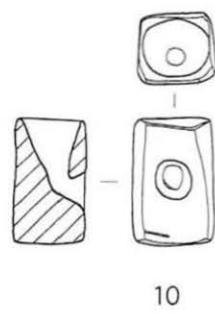
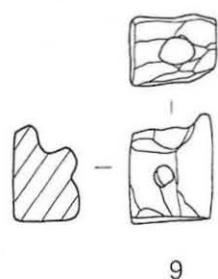
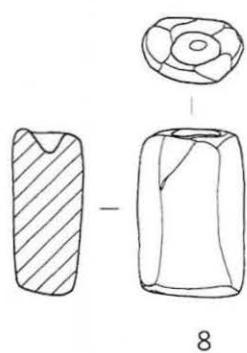
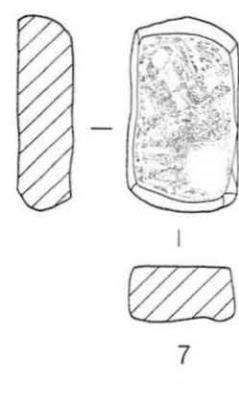
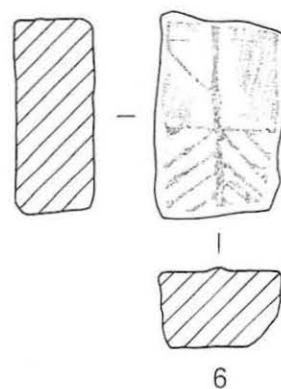
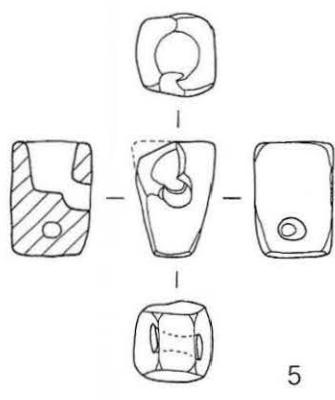
挿図番号	材質	全長 (cm)	吸い口(cm)	羅宇接続 内径(cm)	現重量(g)	備考	出土地点
第56図 13	磁器製	-	-	0.8	1.0		NO-31、IIa層
第56図 15	金属製	4.2	0.15	0.9	5.0		PQ-31、IIa層

第17表 煙管集計一覧

石 製		未完成品	瓦 製		陶 製		磁 器 製	青 銅 製		
完 成 品			完成品	未完成品	無釉陶器	施釉陶器	施釉磁器			
紐穴なし	紐穴あり									
雁首	雁首	雁首	雁首	雁首	雁首	雁首	吸い口	雁首	吸い口	
6	12	7	11	9	3	1	1	2	2	
25			20		4		1	4		



第55図 煙管① (S = 1 / 2)



第56図 煙管② (S = 1/2)

第20節 玉類

1. 勾玉

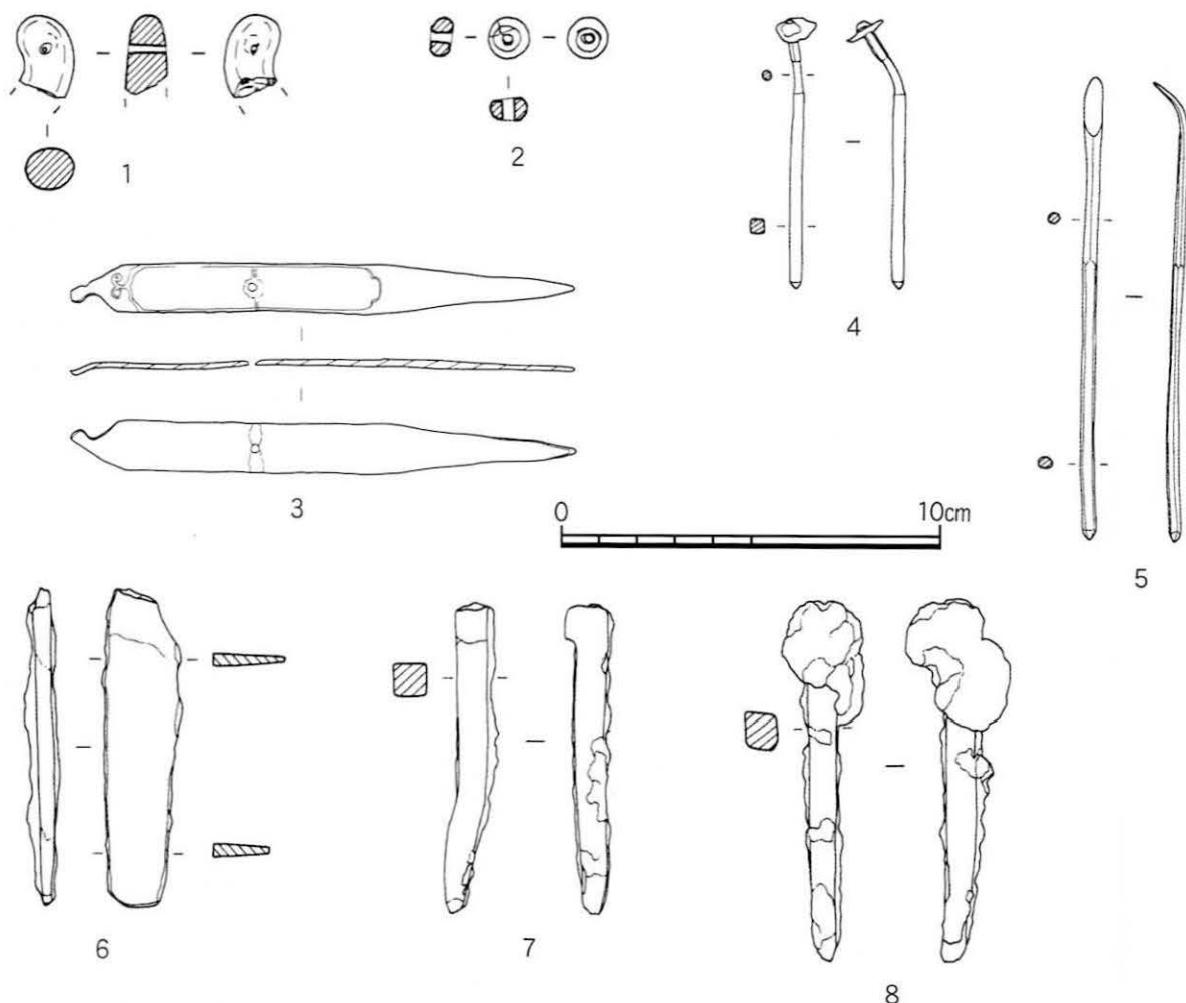
第57図1は勾玉の破片である。深緑色の石製品で、材質はチャート。全面光沢があるので程良く磨かれている。孔は一方から穿たれており、孔のまわりに製作した時の稜がみられる。残存部の法量は長さ2.2cm、幅1.3cm、厚さ1cm。重量5g、孔の表3~3.5mm、裏2mmを測る。RS-24地区第II ab層の出土である。

2. ガラス小玉

第57図2はガラス小玉。半透明であまり丁寧なつくりではない。裏面にカットした時のガラスの溜まりが若干みられる。裏面には弱い稜がみられる。法量は1.1×1.05cm、厚さ5~6mm、孔径は3~4mmをはかる。重量は1g以下のため計測不可能。出土はNO-21地区第II bd層である。

第21節 金属製品

金属製品として簪、刀子、釘などが検出されたが、時間的制約により分類、集計を行うにまで至っていない。そのため以下の6点を図示した。



第57図 玉類・金属製品 (S = 1/2)

第57図3は、青銅製の笄で長さ13.4cm、幅1.35cm、厚さ0.2cmを計る。RS-14第II層の出土である。

第57図4・5は、青銅製の簪で前者は長さ7.4cm、後者は長さ12.3cmを計る。前者はカブの部分が欠損する。NO-28第II層の出土である。後者は匙状を呈する。JK-19地区第I b II a攪乱層の出土である。

第57図6は、鉄製の刀子で基部を欠損する刃部のみの資料と考えられる。残存長8.4cmを計る。NO-28第II a層の出土である。

第57図7・8は、鉄釘で前者は長さ8.2cm、後者は長さ9.1cmを計る。いわゆる皆折釘で断面方形約0.8cmの太さの資料である。前者はLM-26地区第II a層の出土である。後者は、JK-16第I・II壁面清掃事の出土である。

第22節 錢 貨

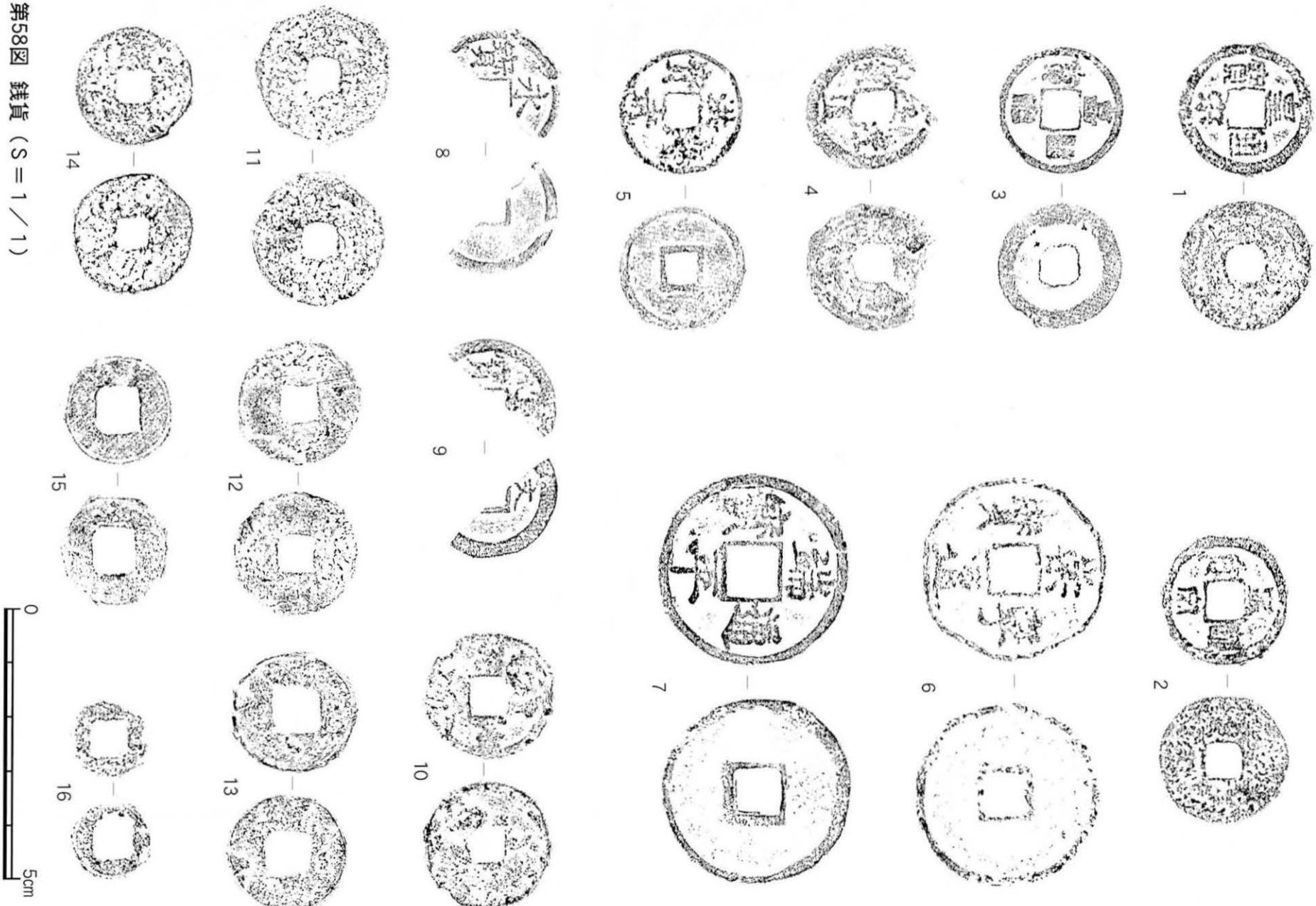
破片を含め27点が検出された。その内16点を図示し、下記の第18表にまとめた。

なお、錢貨名について「□」は欠損部を、「○」は摩耗が著しく文字が判読できないことを示している。

第18表 錢貨観察一覧

挿図番号	錢貨名	裏面	初鋳造年	備考	直径(cm)	重量(g)	出土地点
第58図1	皇宋通寶		1038年(北宋)	真書体	2.5	4.0	LM-26、第II b層
2	皇宋通寶		1038年(北宋)	篆書体	2.4	3.0	NO-13、第II層
3	嘉○通寶		1056年(北宋)	篆書体。「祐」が摩滅。	2.4	3.0	NO-29、第II層
4	元豊通寶		1078年(北宋)	行書体	2.5	2.0	HI-22、第II層
5	崇寧通寶		1103年(北宋)	当十錢	3.5	8.0	HI-15、第II層
6	端平通寶		1234年(南宋)	当三錢	3.6	13.0	RS-13、柱穴N0,
7	洪武通寶		1368年(明)	小平錢。「通」が摩滅。	2.4	3.0	NO-29、第II層
8	永□□寶		1408年?(明)	「樂」、「通」が欠損	2.4	0.5	RS-17、柱穴N0,
9	寛永通寶	文	1668年~(江戸)		2.6	0.5	NO-29、第II層
10	天○○○			摩滅が著しく、詳細不明	2.4	2.0	NO-21、第II層
11	無文錢				2.4	1.0	NO-21、第II層
12	~				2.3	0.5	NO-22、第II層
13	~				2.1	1.0	PQ-14、第II層
14	~				2.0	3.0	NO-21、第II層
15	~				2.0	1.0	DE-31、第I層
16	~				1.4	0.5	DE-31、第I層
図示省略	~				1.9	省略	TU-35、第II層
~	~				1.7	~	NO-21、第II層
~	~				2.0	~	LM-37、第II層
~	~				2.1	~	NO-17、第II層
~	~				1.8	~	DE-31、第I層
~	~				2.1	~	DE-31、第I層
~	~				1.9	~	DE-31、第I層
~	~				2.3	~	NO-21、第II層
~	~				1.9	~	HI-37、第II層
~	~				1.9	~	RS-32、第II層
~	~				1.9	~	RS-33、第II b層

第58図 錢貨 (S = 1 / 1)

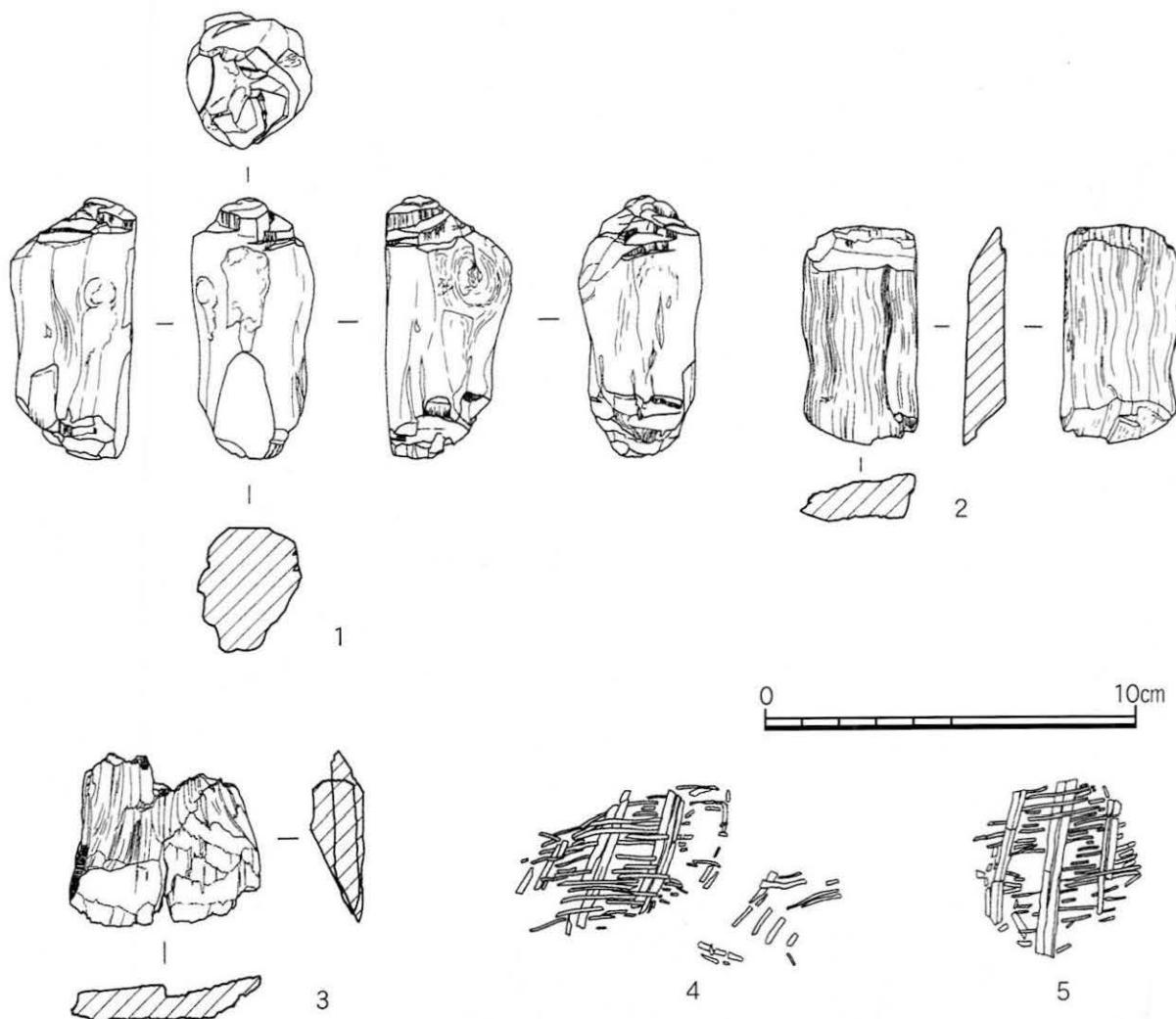


第23節 木 片

LM-12・13地区井戸内の青灰色混砂礫層より、バーキ（編み物製品）以外にもアダンの実や木の皮、木片が得られた。その中で8点の資料に加工痕のみられるものがあった。これらは木製品あるいは農具などを作製した時に取り扱われた枝類と削りとられた切りかすと思われる。

第59図1は枝の上下部に何度も刃をあてている。胴部分も皮がはがされており、小枝の部分もカットされる。しかし、部分的に皮が残る。下部より上部が丁寧に切りとられているようである。最大長7.1cm、幅3.3cm、厚さ3.4cmを測る。

同図2・3は木から削り取られたものと思われる。図2は上下共に何度もわたって削られる。3は下部に削った痕と縦方向に切断した痕がみられる。上部は刃物を使用せず、力まかせに折ったようである。法量は2が最大長5.9cm、幅3.1cm、1cm。図3は最大長4.7cm、幅5.3cm、厚さ0.6～1.2cmを測る。



第59図 木片 (S = 1/2)

第4章 まとめ

宇茂佐古島遺跡は屋部や宇茂佐の故地として伝えられ、古くから遺跡の存在が知られている。本発掘調査の直接の契機は、名護市宇茂佐第二土地区画整理組合設立準備委員会から区画整理事業に伴う文化財有無照会がなされた昭和62年（1987）にさかのぼる。その後平成2～3年（1990～91）に当該地域の範囲確認調査（名護市教育委員会1992）を実施し、遺跡範囲において開発を免れない当該範囲の緊急発掘調査を実施したのが本報告書に紹介してきた報告である。

緊急発掘調査は平成7～9年（1995～97）に、宇茂佐第二土地区画整理事業に伴う実施されたもので、前章までに明らかにしたように高倉の柱穴と思われるピットや、畑跡と思われる小穴群が確認されるとともに、遺物では15～17世紀の陶磁器を主に、屋部や宇茂佐のムラ移動を傍証する遺物が出土している。以下、前章までの内容をまとめ総括にかえたい。

遺跡の堆積層は大別してI a、I b、II a、II b、III層に分けられる。III層は遺物が含まれない地山層で、II層が主な遺跡の遺物包含層である。中でもII b層からは多くの遺物が回収されている。

遺構は、井戸跡、小ピット列群、建物跡、礫敷などが検出されている。中でも畑の遺構である可能性が推量された小ピット列群は、畑の耕作痕と思われる浅いピットが、調査区で列状に並んでIII層地山面で検出されたものである。覆土を分析した結果、ウスクサ属（ススキ属を含む）植物珪酸体が優占し、栽培種のイネ属が随伴して検出されている。今回調査区で確認できたピットは約660基を数えており必ずしも全てのピットに対して精度の高い調査を実施することはできなかったものの、畑の検出例として面的に把握することができたことは本調査の大きな成果の一つである。

遺物としては、14～17世紀頃に生産された陶磁器類を主体に、銭、石器、高麗瓦や煙管など多彩な遺物が出土している。陶磁器は、中国産の青磁、白磁、染付が出土。タイ、ベトナムから招来されたと考えられる陶磁器も少量ながら出土している。肥前陶磁器や備前焼などは16世紀後半以降の生産年代であることから総じて16世紀以降17・18世紀頃までの焼物が出土している。

特筆すべき遺物として、高麗系瓦と呼称される遺物が多出したことがあげられる。本遺跡の近傍を流れる屋部川河口で高麗系瓦が採集されることは研究者の間ではたびたび注目してきた。これまでの県内の高麗系瓦の生産年代は14世紀後半～15世紀前半頃と考えられているが、その正確な生産年代や生産地については明らかになっていない。当該遺跡から高麗系瓦が出土する理由は本調査でも明らかにするには至らなかったが、瓦製作地や流通ルートの解明などの観点から注目されている。その一助として本遺跡出土資料及び勝連城跡、首里城跡、銘苅原遺跡跡などの県内各遺跡出土の類似する瓦の胎土分析を行なった。この、結果多くの資料にチャートを含む資料が認められている。チャートは沖縄本島では本部半島に主に分布範囲が限られている。主な瓦の出土地が本島中南部にあることを考えれば、地質学的背景あるいは当該背景を持つ砂あるいは粘土を使っている可能性があり、宇茂佐古島遺跡の立地を考えると消費地と材料の一部資源の分布範囲との空間的関係が関連性のあるものに思えてくる。

この他にも、高麗系瓦や石等を加工して製作した煙管の雁首が出土しており、17世紀頃の喫煙の風

習を探る上で貴重な資料を提供している。また銭や石器なども当該遺跡における生業や経済行為等を探る上で注目される遺物であり、今後の研究の深化が期待される。この他にも年代を確定的位置づけることは難しいが、加工痕をもった木片やバーキ（編み物製品）などが出土しており、本遺跡を理解する上で貴重な資料を提供してくれている。

参考文献

名護市教育委員会『宇茂佐古島遺跡』名護市文化財調査報告-10 1992年

付 編



第1節 宇茂佐古島遺跡出土の哺乳類の歯について

琉球大学農学部亜熱帶動物学教室
川島由次・小倉 剛・仲本政貴

本遺跡における哺乳動物の種類は、ウシ・リュウキュウイノシシ（以下イノシシと略記）・ウマ・ヤギ・イヌそして小型歯クジラ（イルカ）の計6種であった。今回は歯に重点をおいて、動物種の同定と個体数の推定について検討した結果を報告する。「表」に動物種と検出した歯の種類と歯数を示した。

ウシの出土総数は213本で、6種の動物のうちでもっとも多く、大多数が臼歯であった。ウシにおいては上・下顎ともに前・後臼歯が各々6本づつ存在する（成牛の場合）。下顎の後臼歯が62本検出されたので、個体数は11頭と推定した。雌雄の区別は長骨などを精査してから判断したい。出土した歯は、すべて成熟したウシのものであり、幼牛はふくまれていなかった。

イノシシの出土総歯数は61本で、ウシに次いで多かった。イノシシにおいて「犬歯」に注目した理由は、雄で犬歯（キバ）が巨大に発達して「性的二型」が明確だからである。表に示したように、犬歯9本のうち雄のそれは1本のみで、他は雌の犬歯で幼獣のものも含まれていた。イノシシの犬歯は、上・下顎は2本づつ計4本出現するので、イノシシの個体数は雄成獣と雌成獣そして幼獣の計3個体と推定した。

ウマにおける総歯数は、雌で36本・雌で40本（犬歯が4本出現）である。表にあるウマの出土総歯数の27本は、ウマ1個体分に相当した。犬歯が検出されなかったので、本個体は雌と思われた。その他の動物としては、ヤギ・イヌが各1個体含まれていた。

今回の調査において、家畜の歯とは考えられない2~3cmの円錐型の歯が31本区別された。比較解剖学的には「同歯型歯」(ホモドント)といわれ、多くのケースで円錐型を呈するのである。ハ虫類(ワニなど)の歯はこのタイプであり、大型の哺乳類では歯クジラの仲間がこの型の歯を有している。イルカ類は総歯数が一定せず、オキゴンドウで16~22本、ハンドウイルカでは36~52本である。出土した円錐型の歯は小型だったので、小型イルカの1種と思われ、1個体分とするのが妥当と思われた。

本遺跡の年代的なレベルから、本報告でイノシシと記載した種は、家畜化されたブタの可能性があるのでは・・・という推論について論考してみたい。野生のイノシシが幼獣の時からヒトによって飼育された時、頭蓋・歯そして骨格などに大きな形態学的变化の出現することが確認されており、そのおもな点は下記の如くである。

- ① 頭蓋の前後方向の短縮
 - ② 頭蓋の最大幅と最大高の増大
 - ③ 犬歯（雄）の縮小（小型化）
 - ④ 隙間なく臼歯が生えそろい、とくに第三後臼歯の発達を抑制（小型化）
 - ⑤ 前・後肢における緻密骨と海綿骨の強度低下ならびに

組織学的変化（顕微鏡による検査を必要とする）

- ## ⑥ 出産回数の増加

今回は歯を中心とした調査であり、歯の例数が少ない点を考慮しなければならないが、今回の出土した標本に関しては

- ① 雄の犬歯のサイズを現生イノシシの標本と比較しても縮小の傾向は認められない。

- ② 第三後臼歯のサインにおいても現生標本と差異がない。

以上の2点より、本遺跡のイノシシが飼育されていた可能性はなかつたと判断された。

表 出土した歯の数と動物種

		ウ シ	イ ノ シ シ	ウ マ	ヤ ギ	イ ヌ	イル カ (?)
切	歯	25	6	5	—	3	
犬	歯	—	9	—	—	1	
上 顎	前白歯	37	10	5	1	—	31
	後白歯	48	12	12	3	—	
下 顎	前白歯	41	17	4	2	—	
	後白歯	62	7	1	4	—	
計		213	61	27	10	4	31

第2節 宇茂佐古島遺跡の自然科学分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

宇茂佐古島遺跡（屋部地区宇茂佐古島原・西兼久原所在）は東屋部川の東岸に位置し、丘陵に挟まれる2つの支谷内に本遺跡は分布する。これまでの発掘調査によりグスク時代後期～近世にわたる遺構・遺物が確認されている（名護市教育委員会、1982,1992）。

今回の発掘調査では、10世紀～17世紀前半の遺構・遺物が確認されているが、特にグスク時代（14世紀代）のピット状遺構が面的に数多く検出された。この遺構は東西方向に規則的に並んで検出され、発掘調査所見から畠跡の植栽痕ではないかと推定されている。

また、ピット状遺構より後代に構築された井戸も検出されており、底部には植物遺体を含む埋積物が認められた。この中には、当時の植生や栽培植物に関する情報を反映する微化石や種実遺体の包含が期待された。

今回の自然科学分析調査では、基本土層の堆積環境や遺構覆土の埋積過程、井戸の水質や埋積過程に関する情報を得るために珪藻分析を行い、本遺跡周辺の古植生変遷や栽培植物に関する情報を得るために花粉分析・植物珪酸体分析・種実遺体同定を行う。とくに植物珪酸体分析ではピット状遺構でのイネ・キビ類・ムギ類などの栽培植物、種実遺体同定では井戸埋積物内について栽培植物の情報の有無を調べる。また、ピット内の肥沃度に関する情報を得るために、リン酸含量・腐植含量・陽イオン交換容量（C E C）を土壤理化学分析により測定する。また、沖縄県内各地で検出される大和系瓦および高麗系瓦の産地を検討するために胎土薄片観察を実施する。

1. 基本層序と試料

（1）基本層序

本遺跡の基本層序は、大きくⅠ層～Ⅲ層に分層され、さらにⅠ層が腐植土（Ⅰa層）と耕作土（Ⅰb層）、Ⅱ層が遺物の包含状態によりa・b・c・d層に細分されている。また、Ⅱb層については岩質・色調・混入物などから、さらに細かく分層することが可能であった。

Ⅰ層：褐色シルト。かつては耕作土であり、キビ栽培が行われた。

Ⅱb層：暗褐色砂混じりシルト。17世紀前半の遺物が上部に包含される。

Ⅱb-2-1層：白灰色シルト。わずかに砂が混じる。

Ⅱb-2-2層：暗褐灰色シルト。

Ⅱb-3-1層：灰色粘土質シルト。おそらくピット状遺構内に入り込んだ土壤と考えられる。

Ⅱb-3-2層：灰色シルト質粘土。

Ⅲ層：黄灰色シルト質粘土（地山）。ピット状遺構の確認面である。

一方、ピット状遺構はⅢ層上面が確認面であり、おそらくⅡb-3-2層より掘り込まれ、覆土がⅡb-3-1層に相当するとみられる。また、内部に集石や焼土が認められるものもいくつかある。

（2）試料

土壤分析調査の対象は、畠構築面・ピット状遺構・井戸の各埋積物、遺構埋積物の対照試料とした

基本土層であり、この中から分析試料を選択した（表1）。

基本土層では、I層～III層より試料を採取し、II層とIII層を中心として分析試料を選択した。ピット状遺構では5基の遺構埋積物、畑構築面では試料採取地点3ヶ所（1～3）を設定し、それぞれ遺構構築面の表面を薄く削るように採取した。これらの試料から、植物珪酸体分析と土壤理化学分析を中心として珪藻分析や花粉分析も含めて分析試料を選択した。また、JK15Gridでは2本の溝が重複する土層断面が作成され、遺構埋積物と地山から試料を採取し、堆積環境に関する情報を得るために珪藻分析を行うこととする。さらに、距離的に離れたピット列から7列を選択し、各列のピット状遺構から1基を選んでその覆土も採取した。これらは植物珪酸体分析の対象とする。

井戸は砂礫層まで掘り込んで構築され、断面は円錐形を呈し、壁と底を石組みで補強している。井戸の底部には有機物に富んだ細粒の埋積物、中・下部には砂を主体とした埋積物、上部には流れ込みとみられる埋積物が認められる。試料は、地山の砂礫層、遺構埋積物の底部から中部にかけて各層から層位試料で採取した。この中から、珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体・種実遺体同定の分析試料を選択した。

一方、胎土薄片観察を行う試料は、沖縄県内から出土した高麗系あるいは大和系とみられている古瓦45点である。また、この対照試料として名護市為又から産する粘土が1点採取された。これら試料の詳細は結果とともに表10に示す。

以上、各分析項目と点数は珪藻分析18点、花粉分析12点、植物珪酸体分析24点、土壤理化学分析7点、種実遺体同定2試料（土壤試料水洗選別）、胎土薄片観察試料45点である。

表1 土壤分析試料の一覧

試料名		分析項目					備 考
		D	P	PO	土	種	
基本 土 層	I層						
	II b層	●	●	●			
	II b-2-1層	●	●	●			
	II b-2-2層	●	●	●			
	II b-3-1層	●	●	●	●		
	II b-3-2層	●	●	●			
ピット 状 遺 構	III層	●	●	●			
	NO17Gridピット状遺構1	No. 1		●	●		覆土上層より採取
		No. 2		●	●		覆土下層より採取
	NO17Gridピット状遺構2	No. 1					覆土上層より採取
		No. 2	●	●			覆土下層より採取
	PQ24Gridピット状遺構覆土		●	●	●		
	RS13Gridピット状遺構覆土		●	●	●		
	ピット状遺構覆土				●		
	畑構築面	1		●	●		
		2		●	●		
		3		●	●		
	JK15Grid	No. 1	●				溝覆土
		No. 2	●				溝埋積物か否か不明
井戸		No. 3	●				溝覆土
		No. 4	●				地山より採取
	HI地区14地点第II層ピット列第6列				●		
	HI地区16地点第II層ピット列第21列				●		
	JK地区14地点第II層ピット列第13列				●		
	JK地区17地点第II層ピット列第29列				●		
	PQ地区14地点第II層ピット列第40列				●		
	RS地区14地点第II層ピット列第45列				●		
	RS地区14地点第II層ピット列第51列				●		
	埋積物	No. 5	●	●	●		有機物含む
		No. 7	●	●	●		
		No. 8				●	有機物多く含む
		No. 9	●	●	●	●	有機物多く含む
		No. 10	●				井戸掘り方より採取
		No. 11	●				地山より採取
分析点数		18	12	17	7	2	

D：珪藻分析、P：花粉分析、PO：植物珪酸体分析、土：土壤理化学分析、

種：種実遺体同定

※：胎土薄片観察の分析結果一覧を参照

2. 分析方法

(1) 珪藻分析

湿重9g前後の試料について、過酸化水素水・塩酸処理、自然沈降法の順に物理化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に同定・計数する。種の同定はK.Krammer (1992)、K.Krammer and Lange-Bertalot (1986・1988・1991a,b)などを用いる。

同定結果は、海水生種、海水～汽水生種、淡水生種順に並べ、その中の各種類はアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。堆積環境の解析にあたり、水生珪藻が安藤 (1990)、陸生珪藻が伊藤・堀内 (1991)、汚濁耐性がAsai,K.&Watanabe,T. (1995) の環境指標種を参考とする。

(2) 花粉分析

湿重約10gの試料について、塩酸処理、水酸化カリウム処理、篩別(250 μ m)、重液分離(臭化亜鉛、比重2.3)、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理(無水酢酸:濃硫酸=9:1)の順に物理・化学的な処理を施して花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら、出現する全ての種類について同定・計数を行う。

結果は同定・計数結果の一覧表として示す。また、検出個数の多い試料については花粉化石群集の分布図として表示する。図中の各種類の出現率は、総花粉・胞子数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基数とした百分率で算出する。なお、図表中で複数の種類をハイフン(-)で結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

(3) 植物珪酸体分析

湿重10g前後の試料について、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理(70W, 250KHz, 1分間)、沈定法、重液分離法(ポリタンゲステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して永久プレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現する短細胞珪酸体および機動細胞珪酸体を、近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類と個数の一覧表で示す。また、検出個数の多い試料については植物珪酸体群集の分布図で示す。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

(4) 土壤理化学分析

風乾細土試料または微粉碎試料(風乾細土試料の一部を微粉碎し、0.5mm篩を全通させた試料)について、腐植(有機炭素)含量はアリソン重量法、陽イオン交換容量(CEC)はショーレンベルガー法、全リン酸は硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸法によりそれぞれ測定した(土壤標準分析・測定法委員会編, 1986; 京大農化教室編, 1957)。以下に分析項目毎の操作工程を示す。

<腐植含量(アリソン重量法)>

微粉碎試料約200mgをナス型フラスコに精秤し、硫酸第一鉄溶液約1mlを添加して、1分間煮沸する。冷却後、重クロム酸カリウム約1gを添加し、炭素測定装置に装着する。硫酸・リン酸混液25mlを添加し、10分間加熱する。加熱終了後、10分間バブリングした後、CO₂吸収管の重量を測定する。その測定値と加熱減量法で求めた試料中の水分から乾土あたりの炭素量(C%)を求める。

＜陽イオン交換容量(CEC)＞

風乾細土試料5.00gを浸透管に秤りとる。これをCEC測定用の土壤浸出装置に装着し、1N酢酸アンモニウム溶液(pH7.0)100mlを加え、4~20時間で置換洗浄する。置換洗浄させた試料に80%エタノール(pH7.0)50mlを加え、余剰な酢酸アンモニウム液を4~20時間で洗浄する。洗浄した試料に10%塩化カリウム(pH7.0)を加え、4~20時間で再び置換洗浄する。置換洗浄された液すべてを200mlメスフラスコに入れ、水で定容する。定容液の40mlを100ml三角フラスコに正確に採取し、ホルモール法によってアンモニア態窒素を定量する。この定量値から、試料のCEC(me/乾土100g)を求める(me:mg当量)。

＜全リン酸含量＞

風乾細土試料1.00gを200mlケルダールフラスコに秤りとる。はじめに硝酸5mlを加えて加熱分解し、放冷後に過塩素酸10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解液を水で100mlに定容した直後に、ろ過する。ろ液一定量を試験管に採り、リン酸発色液を加えて分光光度計でリン酸濃度を定量する。この定量値から、試料中の全リン酸量(P₂O₅mg/g)を求める。

(5) 種実遺体同定

試料約300ccについて、数%の水酸化ナトリウム水溶液に浸して泥化させる。0.5mmの篩を通して残渣を集め、双眼実体顕微鏡で観察して種実遺体を抽出・同定する。

(6) 胎土薄片観察

土器類の胎土分析には、蛍光X線分析や放射化分析のような分析機器を用いてその元素組成を分析する方法や偏光顕微鏡を用いて鉱物組成を分析する方法など様々な方法がある。対象とする土器の質(たとえば焼成温度や砂の含量など)により分析方法の選択が制限されることもあるが、いずれの分析でも多くのデータを集めて相互比較し考察するという方法がとられる。当社ではこれまでに、胎土中の砂分の重鉱物組成を胎土の特徴として捉える方法(胎土重鉱物分析)および胎土薄片を製作し薄片下において鉱物片や岩石片の種類や構成を中心に観察を行う方法(胎土薄片観察)などで土器の胎土分析を行ってきた。これら的方法は胎土中の地質学的情報を捉えることができるため、土器の産地に関する情報が得やすいといえる。今回の分析の対象となる瓦については胎土薄片観察を行うことにした。薄片は、試料の一部を切断して、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製する。この薄片を対象として偏光顕微鏡下にて鉱物片や岩石片の種類および構成を中心に観察を行う。

3. 古環境および植栽痕の分析

(1) 結果

a. 珪藻化石

結果を表2に示す。基本土層では、各層とも陸上のコケや土壌表層など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻が少ないながらも産出する。この中には、耐乾性の強い陸生珪藻A群の*Hantzschia amphioxys*, *Navicula mutica*, *N. contenta*などが検出される。

PQ24Gridピット状遺構、RS13Gridピット状遺構、NO17Gridピット状遺構2の各遺構覆土は、無化石に近い状態である。

JK15Grid溝の試料番号1～4でも、*Navicula mutica*, *N. contenta*などの陸生珪藻A群が検出され、この他に水域にも陸域にも生育する陸生珪藻B群の*Eunotia praerupta var. bidens*が産出する。

b. 花粉化石

結果を表3に示す。各試料からは、木本花粉のマツ属・コナラ属コナラ亜属・コナラ属アカガシ亜属、草本花粉のカヤツリグサ科・ヨモギ属・他のキク亜科、シダ類胞子の7種類が検出される程度であるが、シダ類胞子が比較的多く検出される。また、わずかに検出される花粉化石は保存状態が悪く、外膜が溶けて薄くなっていたり、壊れている。

c. 植物珪酸体

結果を表4・図1に示す。植物珪酸体は各試料から検出され、概して保存状態は良好である。

基本土層のⅢ層～Ⅱ b-2-2層では、栽培植物のイネ属、タケ亜科、ウシクサ族が検出され、その中ではウシクサ族の産出が目立つ。Ⅱ b-2-1・Ⅱ b層では、イネ属とウシクサ族が優占する組成であり、タケ亜科、キビ族なども認められる。イネ属の中には、稻粉に形成されるイネ属穎珪酸体も認められる。また、検出されたキビ族は形態から栽培種か否かの判別がつかない。

NO17Gridピット状遺構1のうち、試料番号2では基本土層Ⅱ b-3-1層と同様にウシクサ族の産出が目立ち、イネ属、タケ亜科、ヨシ属などが認められる。試料番号1では基本土層Ⅱ b-2-1・Ⅱ b層と同様に、イネ属とウシクサ族が優占する組成であり、タケ亜科、キビ族なども認められる。また、イネ属穎珪酸体も多産する。

PQ24Gridピット状遺構は、イネ属とウシクサ族が優占する組成であり、イネ属穎珪酸体も多産する。また、タケ亜科、キビ族なども認められる。

RS13Gridピット状遺構と基本土層採取地点付近のピット状遺構、畑構築面の3試料はほぼ同様な産状を示し、ウシクサ族の産出が目立ち、イネ属、タケ亜科、ヨシ属などが認められる。

d. 土壌の理化学性

結果を表5に示す。各試料ともに粘土含量が高く、土性は軽埴土(LiC)～重埴土(HC)である。対照試料の基本土層Ⅱ b-3-1層は腐植含量1.65%、リン酸含量1.52mg/g、陽イオン交換容量16.2me/100gである。

各ピット状遺構覆土と畑構築面の腐植含量は対照試料と比較して、RS13Gridピット状遺構覆土で0.93%と若干低く、他の試料で1.42～1.81%の範囲内にあり、顕著な差が認められない。

リン酸含量は、NO17Gridピット状遺構1覆土No.1・2で3.00～3.18mg/gと顕著に高い値を示すが、それ以外が1.02～1.28mg/gと対照試料よりも低い傾向にある。

また、陽イオン交換容量(CEC)は、RS13Gridピット状遺構覆土で8.7me/100gと低い値であるが、その他の試料が12.1～16.5me/100gの範囲内である。

(2) 考察

畑痕の植栽痕と考えられるピット状遺構について、調査結果を総合的に捉え検討する。基本土層でわずかながら検出される珪藻化石は陸生珪藻に限られる傾向があることから、調査地点の周辺は比較的乾いた環境であったと推定される。また、14世紀代の植栽痕と推定されているピット状遺構埋積物・溝埋積物中にわずかに含まれる珪藻化石も陸生珪藻に限られる傾向にある。したがって、これらの遺構の覆土も基本的に乾いた土壌に由来すると考えられる。このような状態であったために、花粉化石は分解・消失したと推定される。

畑の植栽痕とされるピット状遺構が掘り込まれたⅢ層では、栽培植物のイネ属に由来する植物珪酸体が検出されている。しかし、植物珪酸体の総数が少ないため、Ⅲ層堆積時に遺跡近傍で稲作が行われていたとは考えにくい。ここで僅かに検出される植物珪酸体は、後代の攪乱の影響により上位から落ち込んできた可能性が高い。Ⅱb層では、イネ属の短細胞・機動細胞珪酸体が多産し、しかも上位に向かい増加する。これより、本層準堆積時には調査地の近傍で稲作などの農耕が行われていたと考えられ、谷内部は生産域に相当していたと推定される。

一方、調査を実施した15基のピット状遺構覆土の植物珪酸体組成は、17Gridピット状遺構No.1覆土上部以外は出現率に多少の違いはあるものの、概ね類似した傾向を示した。すなわち、植物珪酸体の構成比では機動細胞珪酸体の占める割合が高く、各種類ではウシクサ族（ススキ属を含む）が優占し、栽培種のイネ属が随伴して出現した。このようにピット状遺構間で類似した組成を示すことは、ピット状遺構のほとんどが同様な状況下で埋積した、あるいは利用されていたことを示唆する。なお、No.17Gridのピット状遺構覆土上部ではイネ属珪酸体が多産しており、他の遺構とは明瞭に区別される。これは、組成からみて、上位を覆うⅡb層でイネ属が多産していることから、生物擾乱による落ち込みの影響を受けていると考えるのが妥当である。

ピット状遺構覆土から多産したウシクサ族機動細胞珪酸体は、短細胞珪酸体の種類構成からみて、ススキ属に由来するものが多いと推定される。ススキ属は開けた場所に生育する大型の草本植物であり、しばしば群落を形成する。ここでのススキ属の出現率は60%前後と極めて高く、ススキ属の草地が存在したことを示唆する。畑が構築された時期に畑内に生育していたとは考えにくい。そのため、その由来としては、1) 遺構が構築される前段階に調査地点がススキ属の草地となっており、土壌中に既に取り込まれていた、2) ピット状遺構内の栄養分の富化を図るため、綠肥として後述するイネなどとともにススキなどの植物遺体を混ぜた可能性が考えられる。基本土層における植物珪酸体組成の層位的変化を見ると、ピット状遺構の覆土に相当するⅡb-3-1層でもウシクサ族が高率に出現していることから、後者の可能性も充分考えられる。

ピット状遺構から検出された栽培種の種類はイネ属だけであり、栽培種を含むものはキビ族とオオムギ族であった。イネ属はほとんどのピット状遺構から検出されていることから、畑の耕作物であった可能性がある。ただし、畑の堆肥として稻藁が混入した可能性も充分考えられる。また、キビ族やオオムギ族には栽培種が含まれるが、植物珪酸体の形状からは種類を特定することができない。これらの種類も栽培されていた可能性もあり、今後、本遺跡ないしその近隣遺跡での炭化種子の確認調査などから検証していきたい。また、ピット状遺構の覆土については、微細構造を軟X線写真や土壌薄片で捉えることで明らかにしていきたい。

ところで、ピット状遺構堆積物からは樹木起源の植物珪酸体も検出された。これらの形態は、先述したように近藤・ピアスン（1981）の第Ⅲグループと第Ⅳグループに対比されるものである。第Ⅲグ

ループは、維管束細胞の節部がケイ化したもので大部分の樹木葉部に形成されるものである。第IVグループは維管束細胞の周辺部に形成されるものである。また、第IIIグループは、小笠原諸島、九州・沖縄地方の表層あるいは埋没土壤でしばしば確認されており、イスノキ属の樹木葉の維管束細胞に由来する珪酸体がこの形態と類似するとされている（近藤、1976）。これらから、当時の遺跡周辺にはイスノキ属などの暖温帶性の広葉樹が分布していたことが示唆される。

沖縄列島に分布する島尻マージ・ジャーガル・国尻マージと呼ばれる土壤の理化学性は久場（1993）を参考にすると、炭素含量が0.29～0.89%（腐植含量に換算すると0.5～1.53%）、リン酸含量が0.35～1.34mg/g、CECが8.8～21.1me/100gであり、今回対照試料としたII b-3-1層もほぼこの範囲に入る。一方、各ピット状遺構埋積物と基本土層を比較すると、NO17Gridピット状遺構1覆土No.1・2でリン酸含量が顕著に高い値を示す。沖縄の土壤では腐植の蓄積が困難であるために、土壤中に動植物遺体が混入した場合、腐植含量に比べてリン酸含量の方がより顕著な差となって現れる。また、陽イオン交換容量（CEC）の発現に対して大きく影響を与える要因として腐植と粘土鉱物があるが、沖縄の土壤は腐植含量が低いため、ほぼ粘土によって陽イオン交換容量（CEC）が発現していると考えられ、土壤の養分保持力は粘土含量によって規定されていると推定される。これらから、各ピット状遺構覆土または畑構築面の潜在的な肥沃度は大差がないものの、No17Gridピット状遺構1の内部にリン酸成分の集積が認められる。

以上のことから、分析調査したピット状遺構のうち、NO17Gridピット状遺構での植物珪酸体の産状やリン酸成分の集積は発掘調査所見を裏付けるものかもしれない。

また、RS13Gridと基本土層採取地点付近で検出されるピット状遺構では、他のピット状遺構と比較してイネ属の産状が悪く、しかも土壤の理化学性も基本土層と比較して低い。この要因として、いくつかの可能性が考えられる。ひとつは、ピット状遺構内で植物珪酸体が偏在した可能性である。これは、NO17Gridピット状遺構No.1でも試料番号1と試料番号2でイネ属珪酸体の出現状況が異なることから考えられる。もうひとつは、ピット状遺構間で栽培年数や構築時期などが異なっていた可能性である。これは、堆積物中にイネ属珪酸体の取り込まれる量が耕作期間などに影響されるためである。また、遺構内に混入している土壤がピットにより異なっていた可能性も考えられる。現段階では詳細は不明であり、ピットの大きさ・深さの異なる複数の遺構を対象として同様の分析調査を行い、今回の分析調査成果を比較・検討する必要があろう。

なお、検出されたキビ族は栽培種か否かの判別がつかず、RS13Gridでは産出もわずかであった。また、コムギなどのムギ類の植物珪酸体も全く認められなかった。そのため、キビやムギなどの栽培の有無は現段階では不明である。

また、イネ属の他に検出された植物珪酸体の種類から、本遺跡の周辺ではススキ属やタケ・ササ類なども生育していたと思われる。

4. 井戸に関する調査

（1）結果

a. 珪藻化石

結果を表6に示す。地山より採取された試料番号11と井戸を掘り込んだときの堆積物の試料番号10では無化石であり、井戸使用時の堆積物である試料番号9とその上位の試料番号7・5では産出した個体数が少ない。僅かながら産出する化石は壊れたり、溶解している。

産出種は陸生珪藻に限定され、産出分類群数も9属15種類と少ない。主な産出種は、基本土層やピット状遺構で検出された珪藻化石と同様に、陸生珪藻A群の*Amphora montana*, *Hantzschia amphioxys*, *Navicula mutica*、陸域にも水域にも認められる陸生珪藻B群の*Amphora normanii*、未区分陸生珪藻の*Pinnularia Schroederii*などである。

b. 花粉化石

結果を表7・図2に示す。井戸使用時の堆積物を含む3点（試料番号5・7・9）とともに、総花粉・胞子数に比較して木本花粉の占める割合は20%以下と低率である。木本花粉の中ではマツ属が比較的多く検出され、それ以外の種類はほとんど検出されない。

草本花粉は3点（試料番号5・7・9）を通じて高率に出現し、中でもイネ科・ギシギシ属・アブラナ科が高率に出現する。この他に、カヤツリグサ科・オオバコ属・キク亜科などを伴う。

c. 植物珪酸体

結果を表8に示す。植物珪酸体は井戸使用時の堆積物を含む各試料から検出されるが、検出個数は少なく、保存状態も悪い。

各試料からは、基本土層やピット状遺構試料と同様に、栽培植物のイネ属、タケ亜科、ウシクサ族が検出され、この中ではウシクサ族の産出が目立つ。また、イネ属の中には、穎珪酸体も認められる。

d. 種実遺体同定

結果を表9に示す。以下に、井戸埋積物より検出された種類の形態的特徴を示す。

- ・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

穎の破片が検出される。淡褐色で、大きさ3mm程度。残存しているのは、基部の部分にあたる。表面には、微細な突起が縦に配列する。

- ・オヒシバ (*Eleusine indica* (L.) Gaertn.) イネ科ズメガヤ属

種子が検出される。黒褐色で楕円形、大きさは1mm程度。背面基部には胚、腹面基部には小さい「へそ」がある。波状の斑紋が顕著で、種子全体を覆う。

- ・ギシギシ属 (*Rumex* sp.) タデ科

果実と花被の破片が検出される。花被は、褐色で大きさ3mm程度。外花被は小さいが、内花被は大きく薄い翼状になる。内花被の中筋は、こぶ状にふくれる。果実は、大きさ3mm程度。褐色、3稜形で、表面は薄くて柔らかい。先端は尖る。稜が鋭い。

- ・ナデシコ科 (*Caryophyllaceae* sp.)

種子が検出される。黒色で、大きさは1mm程度。表面には、荒い突起が密に配列している。

- ・アカザ科-ヒユ科 (*Chenopodiaceae* - *Amaranthaceae* sp.)

種子が検出される。黒色。側面観は円形で、上面観は凸レンズ形を呈している。大きさは1mm程度。側面に「へそ」がある。表面には、細胞が亀甲状に配列している構造がみられる。

- ・キイチゴ属 (*Rubus* sp.) バラ科

種子が検出される。褐色。大きさは、2mm程度。半月形で、一端に「へそ」が存在する。表面全体は、荒い不規則な網目模様でおおわれる。

- ・カタバミ属 (*Oxalis* sp.) カタバミ科

種子が検出される。黒色、楕円形で、大きさは約1.5mm。表面には、横軸方向に平行して数本の溝が走る。

- ・トウガン (*Benincasa hispida* Cogn.) ウリ科トウガン属

種子の破片が検出される。種子は褐色。推定される全体の長さは15mm程度。長楕円形をしており、種皮は厚くやや堅い。縁に段差があり、薄くなっている。

・不明A

褐色、長楕円形で、大きさ1mm程度。表面は薄くて柔らかく、弾力がある。

・不明B

黒色で、大きさ1mm程度。半月型で、球を6分割したような形状である。表面は堅く、波状の斑紋が全体を覆う。

・不明C

褐色で球状、大きさは3mm程度。一端に大きな「へそ」がある。表面はやや堅く弾力があり、ざらつく。

(2) 考察

井戸埋積物の底部と下部に含まれる珪藻化石は全般的に少なく、ほとんどが陸生珪藻であり、水域に生育する水生珪藻は極めて少なかった。これは、基本土層やピット状遺構と同様な傾向である。また、地山の砂礫層からは珪藻化石が全く産出しなかった。これらから、検出された珪藻化石は地山から混入したものではなく、井戸周囲から土壤とともに雨や風などにより井戸内に流入したと考えられる。また、井戸使用時の水質については、今回の珪藻化石の産状からは情報が得られず、現段階では不明である。

一方、井戸底部の埋積物からは草本類を中心とする種実遺体が検出された。このうち、トウガンとイネは栽培植物であり、これらが当時の食料に利用されていたと推定される。イネに関しては植物珪酸体でも検出されており、井戸付近で栽培されていた可能性がある。しかし、トウガンに関しては井戸内部にどのような経路をもって混入したか不明である。また、花粉化石でも検出されないことから、井戸付近で生産されていたか否か、判断がつかない。

これ以外の種実遺体は草本類に由来し、検出される種類も人里付近など開けた草地に生育する種類であることが特徴である。花粉化石群集も草本花粉の出現率が高く、さらに種実遺体と共に通する種類が検出されている。また、ピット状遺構試料と同様に、タケ亜科、ウシクサ族の植物珪酸体が検出された。これらから、井戸付近や畠周辺にはイネ科（タケ亜科・ウシクサ族など）・ギシギシ属・アカザ科・ヒユ科・アブラナ科・オオバコ属・キク亜科など、現在でもよく見かける草本類が生育していたと考えられる。このような植生は、人為的な影響を受けたために成立したと推定される。

なお、木本花粉ではマツ属が比較的多く検出される。ここで検出されるマツ属は、本地域の現存植生（宮脇編著、1989）を考慮すると、リュウキュウマツに由来すると考えられる。したがって、後背丘陵地などにはリュウキュウマツなどから構成される林分が成立していたと推定される。完新世後半にマツ属花粉が多産する群集は日本各地で認められており、それが伐採や植林など人間の直接的あるいは間接的な植生干渉に起因していることが多い。ここでのマツ属の多産も人間の植生干渉に起因している可能性もあるが、この点については花粉化石群集の変遷様式を明らかにした上で改めて検討したい。また、わずかに検出されるツバキ属やイボタノキ属は虫媒花であり、風媒花と比較して花粉の生産量が低く、しかも花粉の散布範囲が狭いため、比較的局地的な植生を反映することが多い。したがって、井戸付近にこれらの低木類が生育していたと思われる。

5. 胎土薄片観察

(1) 結果

観察結果を表10に示す。今回の観察では、胎土中の砂の量とその粒径の淘汰度（粒の大きさの揃っている程度）およびその最大粒径を示し、砂を構成している鉱物片や岩石片の種類を同定した。また、胎土の基質を構成している粘土は焼成によってガラス化するが、焼成状態によっては全てガラス化せずに粘土は残存する。ここでは、残存する粘土の量も定性的に把握した。以下に各遺跡ごとに観察結果を述べる。

・勝連城跡

大和系とされる5点の試料のうち4点（試料番号1～3、6）はともに砂の量が少なく淘汰は中程度である。残る1点の大和系瓦（試料番号7）も砂は中量でやはり淘汰は中程度である。これに対して高麗系瓦の2点のうち、試料番号4は他の大和系瓦同様に砂は少量で淘汰は中程度であるが、試料番号5は砂を多量に含み、淘汰も良好である。どの試料も砂を構成する主な碎屑物は、石英とカリ長石であるが、それ以外の碎屑物では試料ごとに違いが認められる。まず大和系瓦の試料番号1と2は、斜方輝石と白雲母を含むことが特徴であり、試料番号3は斜長石が比較的多いことが特徴である。また、試料番号4は単斜輝石と白雲母を含み、試料番号5は角閃石を他の試料よりも多く含むことが特徴といえる。高麗系瓦の2点の試料は角閃石とチャートを含むことが特徴である。

・首里城跡

高麗系瓦の3点（試料番号8～10）は、ともに砂を多く含み淘汰は良好、石英、カリ長石、斜長石を同量程度含み、他に角閃石とチャートを含むことが特徴である。これに対して大和系瓦の3点は、それぞれ特徴が異なっている。試料番号11は、砂を中量含み淘汰も良好、石英、カリ長石、斜長石を同量程度含み、他に酸化角閃石、白雲母、チャートを含む。試料番号12と13は、砂の量においてそれぞれ少量と多量で異なるが、どちらも淘汰は中程度であり、石英、カリ長石に比べて斜長石が少なく、他に角閃石とチャートを含む。

・宇茂佐古島

6点のうち5点は高麗系瓦であり、1点は大和系？とされている。5点（試料番号14～18）は砂を中量含み、他の1点（試料番号19）は砂を多量含む。淘汰は5点の試料のうち試料番号15のみが良好であり、他は中程度である。試料番号19は淘汰良好である。砂粒の構成は、石英、カリ長石、斜方輝石以外では、6点の試料ともに角閃石とチャートを含むことが特徴であるといえる。

・銘苅原遺跡

2点の試料ともに高麗系瓦であり、砂を中量含む。淘汰は試料番号20は中程度、試料番号21は良好である。どちらも石英、カリ長石、斜長石以外ではチャートを含むが、試料番号20ではさらに単斜輝石や角閃石、白雲母も含む。また試料番号20は基質粘土量も多い。

・那覇港周辺遺跡群旧東村地区

大和系瓦1点のみであり、淘汰が中程度の中量の砂を含み、石英、カリ長石、斜長石以外では角閃石が特徴である。

・海上遺跡

大和系瓦1点のみであり、淘汰の良好な砂を多量に含む。特に石英粒の多いことが特徴であり、他に白雲母を含む。

・牧志御願東方遺跡

高麗系瓦 2 点であるが、互いに特徴はやや異なる。試料番号24は砂は少量であり、淘汰も中程度、石英、カリ長石、斜長石以外では酸化角閃石とチャートを含むことが特徴である。試料番号25は、淘汰の良好な砂を多量に含み、石英、カリ長石、斜長石以外では角閃石、白雲母、チャートを含むことが特徴である。

・天界寺跡

高麗系瓦 3 点の試料は、ともに砂を少量しか含まずまた淘汰も中程度である。また、3点ともに酸化角閃石を含むことが特徴である。

・浦添城跡

17点の試料全てが高麗系瓦であるが、凸面の刻印の違いによってある程度胎土に傾向が認められる。まず「大天」の刻印のあるものは、砂を多量に含むものが多く、淘汰はどれも良好である。石英、カリ長石、斜長石以外では角閃石と白雲母およびチャートを含むことが特徴である。また、試料によっては基質の粘土量が中量または多量のものがある。「天」の刻印のあるものは、砂の量が中量程度のものが多く、淘汰は良好である。ただし、試料番号40のみは砂を少量しか含まず、その淘汰も中程度である。砂を構成する碎屑物の種類では、石英、カリ長石、斜長石以外ではどれも角閃石とチャートを含むことが特徴である。また、基質の粘土量も中量または多量であることも特徴である。「癸酉…」の刻印の試料は、砂の量は多量または中量であるが、淘汰は中程度のものが多い。砂を構成する碎屑物の種類では、石英、カリ長石、斜長石以外ではどれもチャートを含むが、試料番号41と42は酸化角閃石、それ以外は角閃石を含む。また、試料によっては基質の粘土量が中量または多量のものがある。

・為又の粘土

砂をほとんど含まない粘土。わずかに認められた砂は、石英、チャート、砂岩、雲母片岩などである。

(2) 考察

瓦胎土の薄片観察結果の一覧表全体を見ると大和系瓦と高麗系瓦との間では、それほど明瞭な違いを示すとはいえない。むしろ、どちらも角閃石とチャートを含むものが多いなどの共通点を見出すことができる。一方で、結果の項では、それぞれの遺跡において高麗系瓦と大和系瓦あるいは高麗系瓦の中でも刻印の違いごとに特徴を述べた。この状況はすなわち、大和系瓦も高麗系瓦も類似あるいは共通の地質学的背景を有する地域の砂あるいは粘土を使っている可能性があり、かつ、同じ高麗系瓦とされているものでも出土地あるいは刻印によって微妙に土の材質が異なっていることを示唆する。おそらく、これまで考えられているような朝鮮半島や本土および沖縄諸島というような大きな地質の違いを有する産地の違いではなく、より狭い地域内での産地の多様性があると考えられる。なお、今回の試料の多くに認められたチャートは、沖縄本島のなかでは本部半島に主に分布範囲が限られている。宇茂佐古島遺跡の位置との関連性も考えられるのではないだろうか。

今後は、より多くの分析例を蓄積するとともに、今回とは別の方法によるデータを取るなどの展開も有効と考えられる。

引用文献

- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, p.73-88.
- Asai,K.&Watanabe,T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p.35-47.
- 土壤標準分析・測定法委員会編 (1986) 「土壤標準分析・測定法」. 354p., 博友社.
- 伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, p.23-45.
- 近藤鍊三・佐瀬 隆 (1986) 植物珪酸体分析, その特性と応用. 第四紀研究, 25, p.31-64.
- Krammer, K. (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND26, p.1-353, BERLIN-STUTTGART.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1986) Bacillariophyceae,Teil 1,Naviculaceae. Band 2/1 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1988) Bacillariophyceae,Teil 2,Epithemiaceae, Bacillariaceae,Suriellaceae. Band 2/2 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991a) Bacillariophyceae,Teil 3,Centrales, Fragilariae,Eunotiaceae. Band 2/3 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991b) Bacillariophyceae,Teil 4,Achnanthaceae, Kritische Ergaenzungen zu Navicula(Lineolatae)und Gomphonema. Band 2/4 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
- 京都大学農学部農芸化学教室編 (1957) 農芸化学実験書 (第1巻). 411p.,産業図書.
- 久場峰子 (1993) 沖縄の農地の実態と土壤管理－土壤化学性とサトウキビ畑における施肥管理－. ペドロジスト, 37, 第2号, p.126-137.
- 名護市教育委員会 (1982) 名護市文化財調査報告4 「名護市の遺跡(2)分布調査報告」. 151p.
- 名護市教育委員会 (1992) 名護市文化財調査報告10 「宇茂佐古島遺跡－宇茂佐第二地区区画整理 事業に伴う埋蔵文化財範囲確認調査報告書－」. 107p.
- 宮脇 昭編著 (1989) 「日本植生誌 沖縄・小笠原」. 676p., 至文堂.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修 (1967) 「新版標準土色帖」.
- ペドロジスト懇談会編 (1984) 土壤調査ハンドブック. 156p., 博友社.

表2 珪藻分析結果

種類	生態性			環境指標種	II b					III層	PQ24	PQ13	No. 17	JK15				
	塩分	pH	流水		II b層	2-1層	2-2層	3-1層	3-2層		ピット状	ピット状	ピット状2	No. 2	Grid	1	2	3
<i>Achnanthes inflata</i> (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Amphora montana</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Eunotia praerupta</i> var. <i>bidens</i> Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB, 0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	1	4	
<i>Eunotia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA, U	5	2	2	-	3	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Navicula contenta</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA, T	1	1	1	-	-	-	-	-	1	1	-	-	1	
<i>Navicula mutica</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA, S	9	9	9	-	3	-	-	-	-	1	-	-	-	1
<i>Navicula symmetrica</i> Patrick	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Nitzschia amphibia</i> Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	S	3	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia brevissima</i> Grunow	Ogh-hil	al-il	ind	RB, U	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia borealis</i> var. <i>scalaris</i> (Ehr.) Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Pinnularia schroederii</i> (Hust.) Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
海水生種合計					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
海水-汽水生種合計					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
汽水生種合計					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
淡水生種合計					19	12	17	2	6	0	0	0	3	6	1	2	7	
珪藻化石総数					19	12	17	2	6	0	0	0	3	6	1	2	7	

凡例

H. R. : 塩分濃度に対する適応性	pH:水素イオン濃度に対する適応性	C. R. : 流水に対する適応性
Ogh-hil:貧塩好塩性種	al-bi:真アルカリ性種	l-ph:好止水性種
Ogh-ind:貧塩不定性種	al-il:好アルカリ性種	ind:流水不定性種
Ogh-hob:貧塩嫌塩性種	ind:pH不定性種	r-ph:好流水性種
Ogh-unk:貧塩不明種	ac-il:好酸性種	unk:pH不明種

環境指標種

O:沼沢湿地付着生種 (以上は安藤, 1990)
 S:好汚濁性種 U:広適応性種 T:好清水性種 (以上はAsai, K. & Watanabe, T. 1995)
 R:陸生珪藻 (RA:A群, RB:B群, RI:未区分陸生珪藻、伊藤・堀内, 1991)

表3 花粉分析結果

種類 試料番号	II b					III層	PQ24 ヒット状	PQ13 ヒット状	No. 17 ヒット状2 No. 2
	II b層	2-1層	2-2層	3-1層	3-2層				
木本花粉 マツ属	2	2	-	3	-	4	10	-	2
コナラ属 コナラ亜属	-	-	-	-	-	-	-	1	-
コナラ属 アカガシ亜属	1	-	-	-	-	-	-	-	-
草本花粉 カヤツリグサ科	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	-	-	-	-	-	-	2	-	-
他のキク亜科	-	-	-	-	-	-	1	-	-
不明花粉	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シダ類胞子	19	54	63	125	290	242	413	75	28
合計									
木本花粉	3	2	0	3	0	4	10	1	2
草本花粉	1	0	0	0	0	0	3	0	0
不明花粉	0	0	0	0	0	0	0	0	0
シダ類胞子	19	54	63	125	290	242	413	75	28
総計(不明を除く)	23	56	63	128	290	246	426	76	30

表 4 植物珪酸体結果

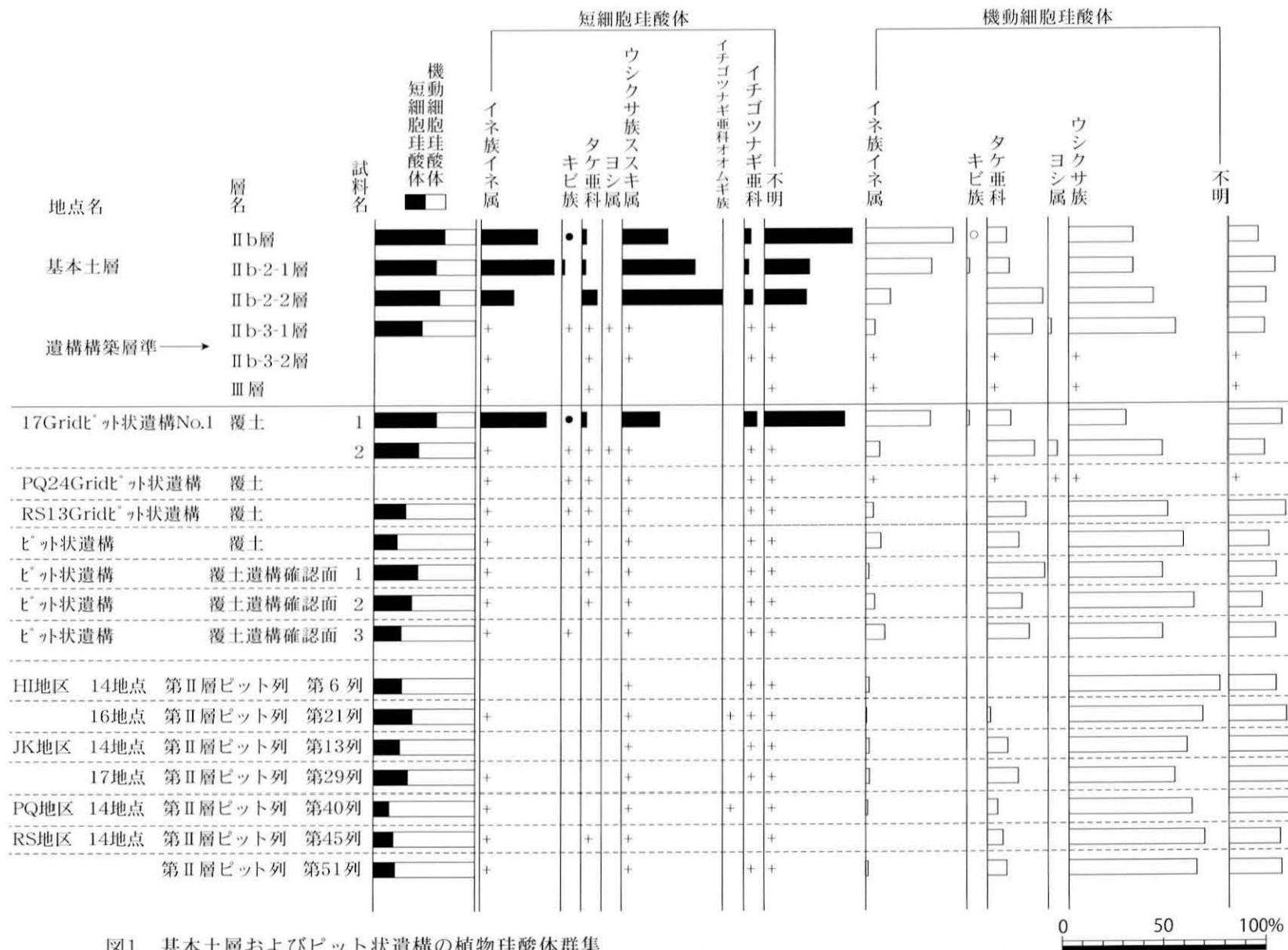


図1 基本土層およびピット状遺構の植物珪酸体群集

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。

なお、●○は1%未満の種類、+はイネ科葉部短細胞珪酸体で200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体で100個未満の試料で検出された種類を示す。

表5 土壤理化分析結果

試料名		土性	土色	腐植含量 (%)	リン酸含量 (mg/g)	CEC (me/100g)
基本土層	II b-3-1層	LiC	10YR4/2 灰黃褐	1.65	1.52	16.2
ピット状遺構	N017Gridピット状遺構1	No. 1	LiC	10YR4/1 黄褐	1.77	3.00
		No. 2	HC	10YR4/1 黄褐	1.81	3.18
	PQ24Gridピット状遺構覆土		LiC	10YR4/2 灰黃褐	1.42	1.28
	RS13Gridピット状遺構覆土		LiC	10YR4/2 灰黃褐	0.93	1.02
	ピット状遺構覆土		LiC	10YR4/2 灰黃褐	1.54	1.32
	畑構築面	1	LiC	10YR4/2 灰黃褐	1.67	1.09
注. (1) 土色: マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修, 1967)による。						
(2) 土性: 土壤調査ハンドブック(ペドロジスト懇談会編, 1984)の野外土性による。						
LiC…軽埴土(粘土25~45%、シルト0~45%、砂10~55%)						
HC…重埴土(粘土45~100%、シルト0~55%、砂0~55%)						

表6 井戸埋積物の珪藻分析結果

種類	生態性			環境指標種	井戸埋積物				
	塩分	pH	流水		5	7	9	10	11
Amphora montana Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	2	8	-	-
Amphora normanii Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	4	3	-	-
Caloneis largerstedtii (Lagerst.) Cholnoky	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	1	-	-	-
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O, U	-	-	4	-	-
Gyrosigma scalpoides (Rabh.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph		1	-	-	-	-
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA, U	3	24	14	-	-
Navicula confervacea (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	RB, S	-	-	1	-	-
Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA, T	-	-	8	-	-
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA, S	6	5	19	-	-
Navicula mutica var. ventricosa (Kuetz.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	RI	-	-	1	-	-
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-hil	al-il	ind	RB, U	-	1	-	-	-
Nitzschia spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	-	1	-	-
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	1	-	-
Pinnularia schroederii (Hust.) Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	1	3	-	-
Stauroneis obtusa Lagerst	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	1	-	-
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	-	-	-
海水生種合計					0	0	0	0	0
海水-汽水生種合計					0	0	0	0	0
汽水生種合計					0	0	0	0	0
淡水生種合計					13	39	64	0	0
珪藻化石総数					13	39	64	0	0

凡例

H. R. : 塩分濃度に対する適応性

Ogh-hil: 貧塩好塩性種

Ogh-ind: 貧塩不定性種

Ogh-hob: 貧塩嫌塩性種

Ogh-unk: 貧塩不明種

pH: 水素イオン濃度に対する適応性

al-bi: 真アルカリ性種

al-il: 好アルカリ性種

ind: pH不定性種

ac-il: 好酸性種

unk: pH不明種

C. R. : 流水に対する適応性

1-ph: 好止水性種

ind: 流水不定性種

r-ph: 好流水性種

unk: 流水不明種

環境指標種

O: 沼澤湿地付着生種(以上は安藤, 1990)

S: 好汚濁性種 U: 広適応性種 T: 好清水性種(以上はAsai, K. & Watanabe, T. 1995)

R: 陸生珪藻(RA:A群, RB:B群, RI:未区分陸生珪藻、伊藤・堀内, 1991)

表7 井戸埋積物の花粉分析結果

種類 試料番号	井戸埋積物		
	5	7	9
木本花粉			
マツ属	73	23	53
コナラ属アカガシ亜属	-	1	2
シイノキ属	-	1	-
ツバキ属	-	-	2
ウコギ科	-	-	1
ハイノキ属	-	-	1
イボタノキ属	-	-	4
草本花粉			
イネ科	144	145	83
カヤツリグサ科	7	3	4
ギシギシ属	23	71	25
アカザ科—ヒュ科	-	1	5
ナデシコ科	-	-	1
キンポウゲ科	-	-	1
アブラナ科	17	34	92
マメ科	-	-	1
アオイ科	-	1	1
アリノトウグサ属	-	-	1
オオバコ属	3	1	19
ヨモギ属	1	1	1
他のキク亜科	13	13	12
タンポポ亜科	-	-	3
不明花粉	3	6	8
シダ類胞子	165	22	49
合計			
木本花粉	73	25	63
草本花粉	208	270	249
不明花粉	3	6	8
シダ類胞子	165	22	49
総計(不明を除く)	446	317	361

表8 井戸埋積物の植物珪酸体結果

種類	試料番号	井戸埋積物		
		5	7	9
イネ科葉部短細胞珪酸体				
イネ族イネ属		3	-	1
ウシクサ族ススキ属		1	2	-
イチゴツナギ亞科		3	5	4
不明キビ型		2	6	2
不明ヒゲシバ型		1	-	-
不明ダンチク型		2	2	1
イネ科葉身機動細胞珪酸体				
イネ族イネ属		9	2	4
タケ亞科		3	-	1
ウシクサ族		10	6	4
不明		6	-	2
合計		12	15	8
イネ科葉部短細胞珪酸体		28	8	11
イネ科葉身機動細胞珪酸体		40	23	19
組織片				
イネ属穎珪酸体		2	-	1
イネ属短細胞列		1	-	1

表9 井戸堆積物の種実遺体同定結果

種類名	試料番号	8	9
イネ		1	-
オヒシバ		7	3
ギシギシ属		1	1
ナデシコ科		1	-
アカザ科—ヒユ科		2	1
キイチゴ属		1	-
カタバミ属		11	4
トウガン		-	1
不明A		32	-
不明B		1	-
不明C		3	-

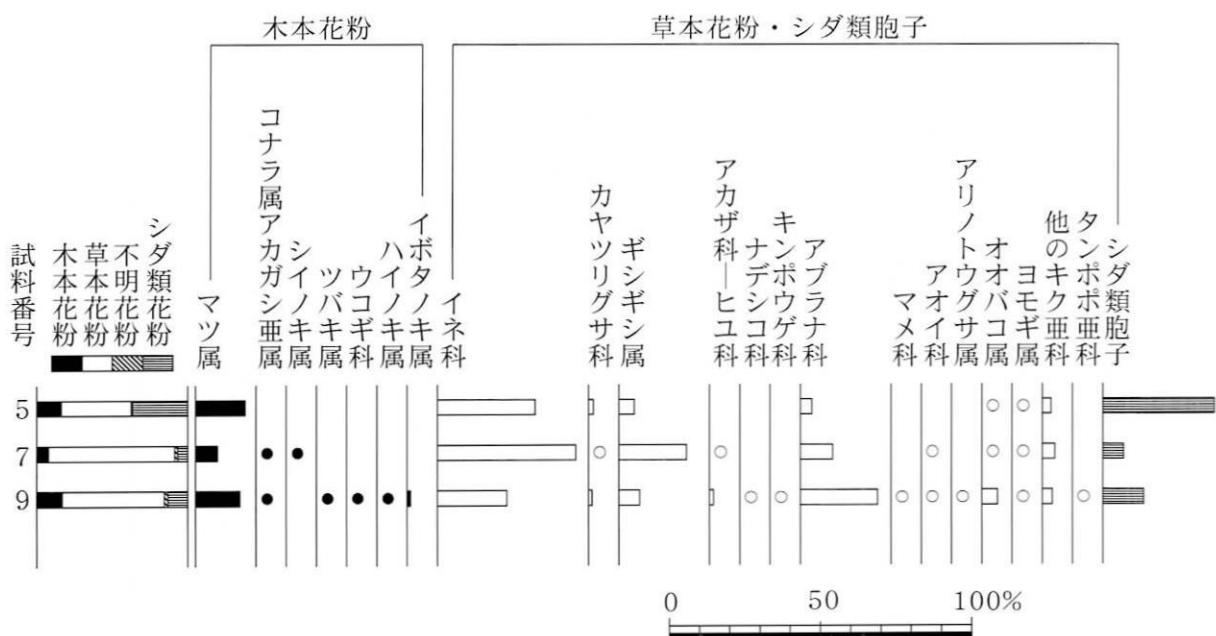


図2 井戸埋積物の花粉化石群集

各種類の出現率は、総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。
なお、○●は1%未満を示す。

表10 胎土薄片観察結果

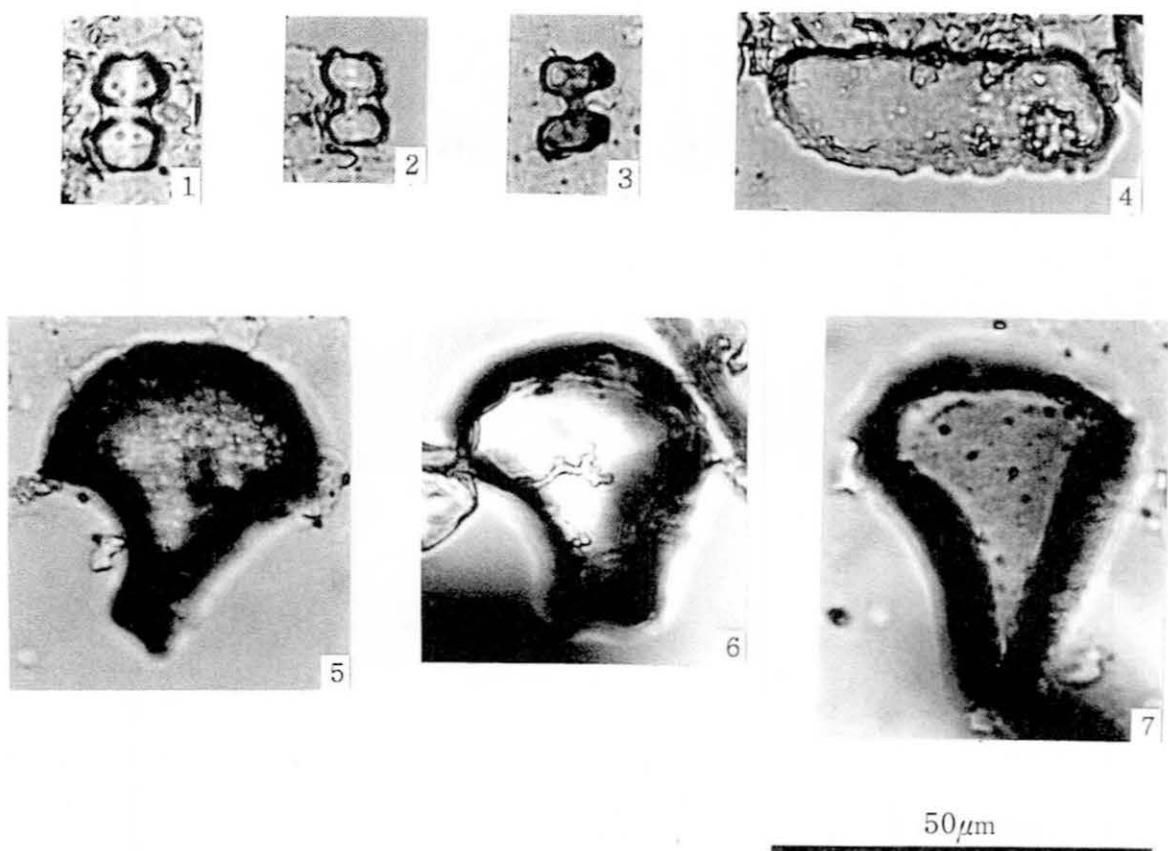
番号	遺跡名	出土地点・遺物番号など	系統	文種	種類	備考	砂粒			砂粒の種類構成										基質粘土量		
							全体量	淘汰度	最大径 (mm)	鉱物片					岩石片							
										石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	單斜輝石	角閃石	酸化角閃石	黒雲母	白雲母	緑レン石	砂岩	泥岩	閃緑岩
1	勝連城跡		X字斜格子	彌振丸			△	△	0.5	△	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	△	
2	勝連城跡	EC-1266	無文	平丸			△	△	0.4	△	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	△	
3	勝連城跡	KC-1266	無文	平丸			△	△	0.5	△	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	△	
4	勝連城跡	勝南 表探	羽状文	斜切り痕			△	△	0.5	△	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	△	
5	勝連城跡	勝南 SJ or SJ 221	無文	斜切り痕			△	△	0.4	△	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	△	
6	勝連城跡	勝南 表探	彌振丸き痕	繩目痕			△	△	0.5	△	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	△	
7	勝連城跡	KC-1266?	X字斜格子	丸丸			△	△	0.5	△	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	△	
8	音里城跡	音西アサB 10/20	羽状文	布庄痕			△	△	0.5	△	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	△	
9	音里城跡	音西アサB 29/30	羽状文	平丸			△	△	0.6	△	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	△	
10	音里城跡	音西アサB 30/40	羽状文	布庄痕			△	△	0.4	△	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	△	
11	音里城跡	音西アサB 70/110	4条の沈線	斜切り痕			△	△	0.3	△	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	△	
12	音里城跡	音西アサB 29/30	彌振丸き痕	布目痕			△	△	0.3	△	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	△	
13	音里城跡	音西アサB 29/30	羽状文	布目痕			△	△	0.5	△	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	△	
14	宇佐佐古島	2242LM17 II b あせ 70/70	羽状文	布庄痕			△	△	0.3	△	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	○	
15	宇佐佐古島	10899Q31 II d 65/70	高麗系	平丸			△	△	0.4	△	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	○	
16	宇佐佐古島	1626N021 II b d 75/80	高麗系	羽状文	布庄痕		△	△	0.8	△	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	○	
17	宇佐佐古島	1240LM27 II b 60/65	高麗系	羽状文	斜切り痕		△	△	0.3	△	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	○	
18	宇佐佐古島	1307LM16 II b 70/75	高麗系	羽状文	斜切り痕		△	△	0.5	△	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	○	
19	宇佐佐古島	1903FG15 II a b 55/65	高麗系	羽状文	斜切り痕		△	△	0.3	△	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	○	
20	鍋田原遺跡	G-103 3層 40/50	羽状文	斜切り痕			△	△	0.5	△	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	○	
21	鍋田原遺跡	F-91 表探	高麗系	羽状文	斜切り痕		△	△	0.5	△	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	○	
22	黒瀬港周辺遺跡群田東村地区	2区第2層 40/60 (最高) 15-16世紀	高麗系	羽状文	斜切り痕		△	△	0.5	△	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	○	
23	瀬戸濱跡	西黒色土下部 14~16世紀頃	高麗系	無文	斜切り痕		△	△	0.3	△	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	○	
24	牧志御廻東方遺跡	表探	高麗系	羽状文	斜切り痕		△	△	0.3	△	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	○	
25	牧志御廻東方遺跡	M-9 第6層	高麗系	羽状文	斜切り痕		△	△	0.4	△	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	○	
26	市天界寺跡	え-3 5層	高麗系	羽状文	斜切り・布庄痕		△	△	0.3	△	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	○	
27	市天界寺跡	え-2 5層	高麗系	羽状文	斜切り・布庄痕		△	△	0.3	△	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	○	
28	市天界寺跡	か-7 2層	高麗系	羽状文	斜切り・布庄痕		△	△	0.3	△	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	○	
29	浦添城跡 ようぞれ	970822 I うぞれ二番庭地区 P-41K表土黒色土 II 層コーラル層	高麗系	「大天」	斜切り・布庄痕		○	○	0.6	○	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	○	
30	浦添城跡 ようぞれ	970822 I うぞれ二番庭地区 P-41K表土黒色土 II 層コーラル層	高麗系	「大天」	斜切り・布庄痕		○	○	0.3	○	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	○	
31	浦添城跡 ようぞれ	ようぞれI うぞれ二番庭地区 P-41K表土黒色土 II 層コーラル層	高麗系	「大天」	斜切り・布庄痕		○	○	0.6	○	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	○	
32	浦添城跡 ようぞれ	ようぞれII 北石積 外側 勉強土中 (表土)	高麗系	「大天」	斜切り・布庄痕		○	○	0.4	○	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	○	
33	浦添城跡 ようぞれ	97ようぞれ崖下・すべり落ちた石積の周辺から採取 1-2	高麗系	「大天」	斜切り・布庄痕		○	○	0.6	○	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	○	
34	浦添城跡 ようぞれ	97ようぞれ崖下・すべり落ちた石積の周辺から採取 2-2	高麗系	「大天」	斜切り・布庄痕		○	○	0.4	○	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	○	
35	浦添城跡 ようぞれ	97ようぞれ崖下 表探	高麗系	「格子」文	斜切り・布庄痕		○	○	0.4	○	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	○	
36	浦添城跡 ようぞれ	970822 勇寧王陵前崖下 表探	高麗系	「天」	斜切り・布庄痕		○	○	0.3	○	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	○	
37	浦添城跡 ようぞれ	98ようぞれ中段アラス トレンチB 2層 (コーラル層)	高麗系	「天」 or 「大天」	斜切り・布庄痕		○	○	0.4	○	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	○	
38	浦添城跡 ようぞれ	98ようぞれ中段アラス Eトレンチ 周辺表土 黒色土	高麗系	「天」	斜切り・布庄痕		○	○	0.5	○	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	○	
39	浦添城跡 ようぞれ	98ようぞれ 表探	高麗系	「天」	斜切り・布庄痕		○	○	0.3	○	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	○	
40	浦添城跡 ようぞれ	98ようぞれ 崖下 表探	高麗系	「天」	斜切り・布庄痕		○	○	0.9	○	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	○	
41	浦添城跡 ようぞれ	98ようぞれ9709-0-3-P-3拡張区 コーラル層へ踏茶褐色土	高麗系	「天」	斜切り・布庄痕		○	○	0.3	○	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	○	
42	浦添城跡 ようぞれ	98ようぞれ崖下 表探	高麗系	「天」	斜切り・布庄痕		○	○	0.5	○	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	○	
43	浦添城跡 ようぞれ	98ようぞれ崖下 表探	高麗系	「天」	斜切り・布庄痕		○	○	0.3	○	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	○	
44	浦添城跡 ようぞれ	98ようぞれ崖下 表探	高麗系	「天」	斜切り・布庄痕		○	○	0.3	○	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	○	
45	浦添城跡 ようぞれ	98ようぞれ中段テラス 表探	高麗系	「天」	斜切り・布庄痕		○	○	0.3	○	△	△	△	△	△	+	+	+	+	+	○	
46	名護市	為文													粘土	対照試料	×	×	0.6	+		

凡 例
全体量 ○: 多 ○: 中 △: 少 ✕: なし

淘汰度 ○: 良 △: 中 ✕: 不良

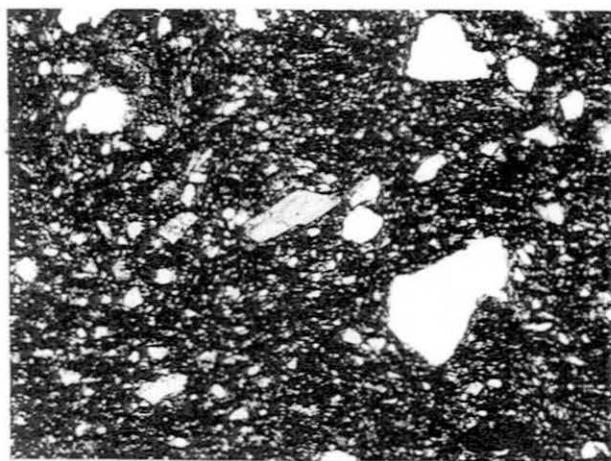
砂粒の種類構成・基質粘土量 空欄: なし +: 濃量 △: 中量 ○: 多量

図版1 植物珪酸体

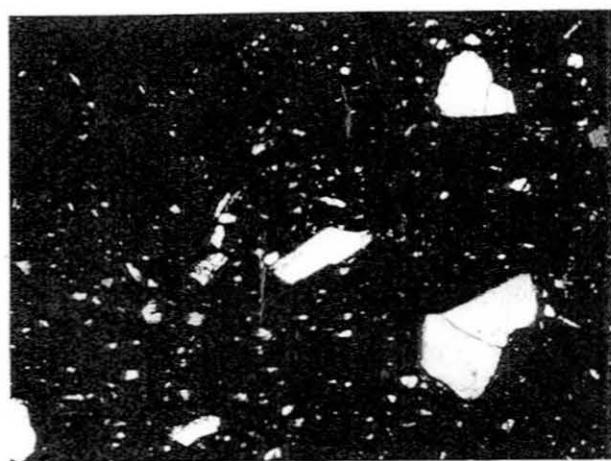


1. イネ属短細胞珪酸体 (H I 地区; 16地点; 第II層ピット列第21列)
2. イネ属短細胞珪酸体 (J K地区; 17地点; 第II層ピット列第29列)
3. ススキ属短細胞珪酸体 (J K地区; 17地点; 第II層ピット列第29列)
4. 才オムギ族短細胞珪酸体 (H I 地区; 16地点; 第II層ピット列第21列)
5. イネ属機動細胞珪酸体 (J K地区; 17地点; 第II層ピット列第29列)
6. イネ属機動細胞珪酸体 (R S地区; 14地点; 第II層ピット列第51列)
7. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (J K地区; 17地点; 第II層ピット列第29列)

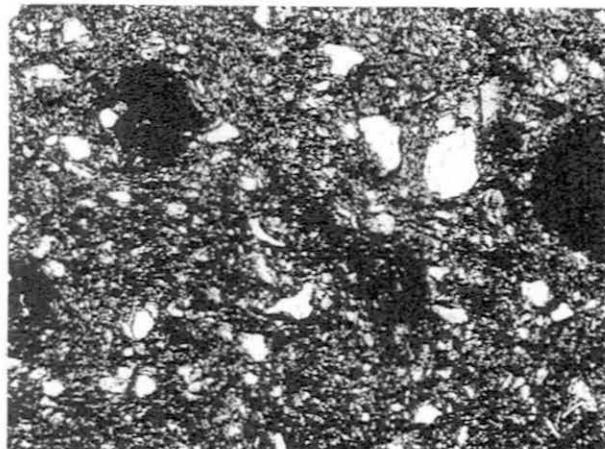
図版2 胎土薄片 (1)



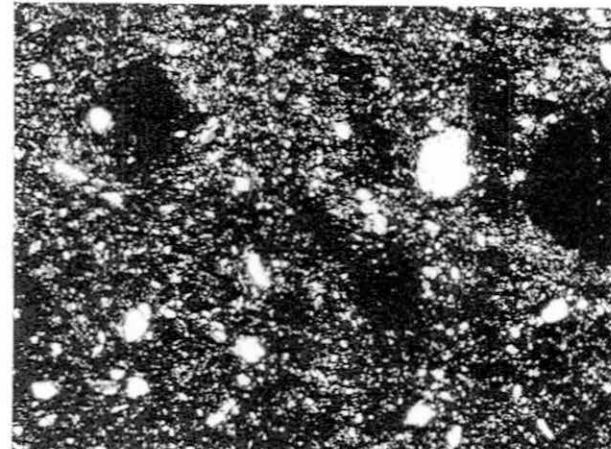
1. 勝連城跡 大和系 雁振瓦；1



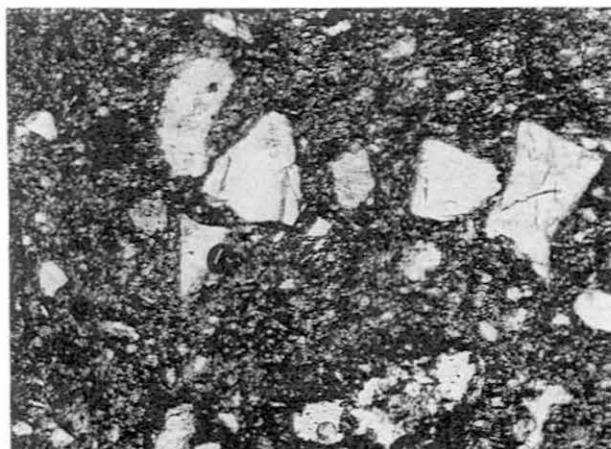
2. 勝連城跡 大和系 雁振瓦；1



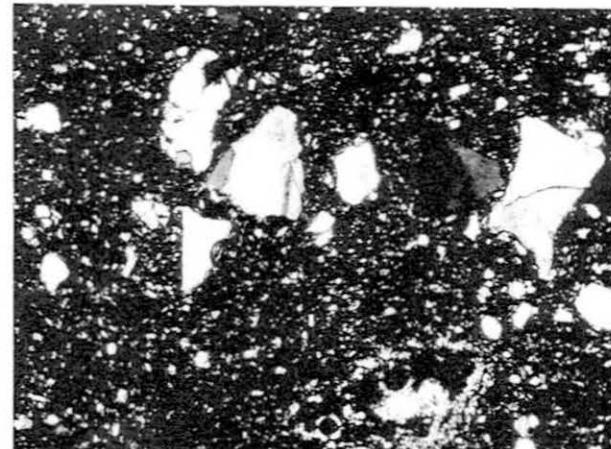
3. 勝連城跡 大和系 平瓦；2



4. 勝連城跡 大和系 平瓦；2



5. 勝連城跡 大和系 平瓦；3

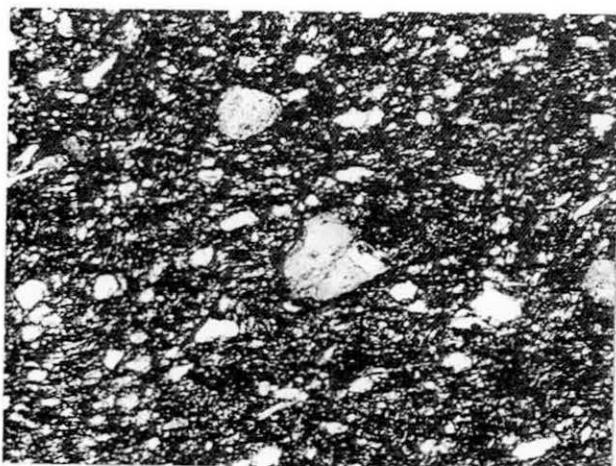


6. 勝連城跡 大和系 平瓦；3

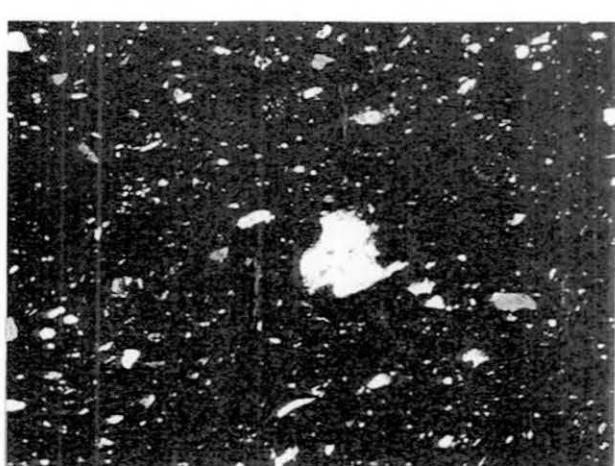
0.5mm

写真の左列は下方ポーラーのみ、右列は直交ポーラー下。

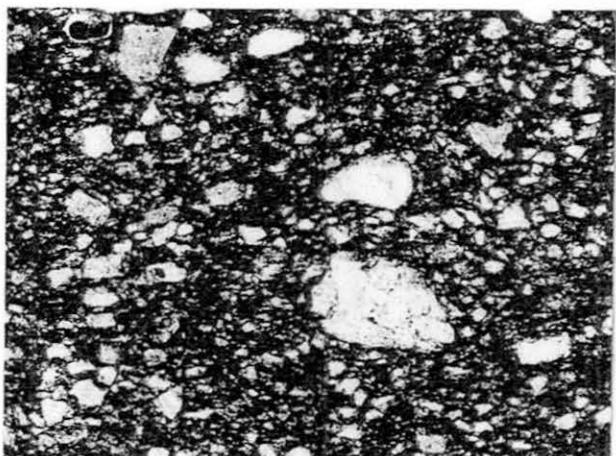
図版3 胎土薄片 (2)



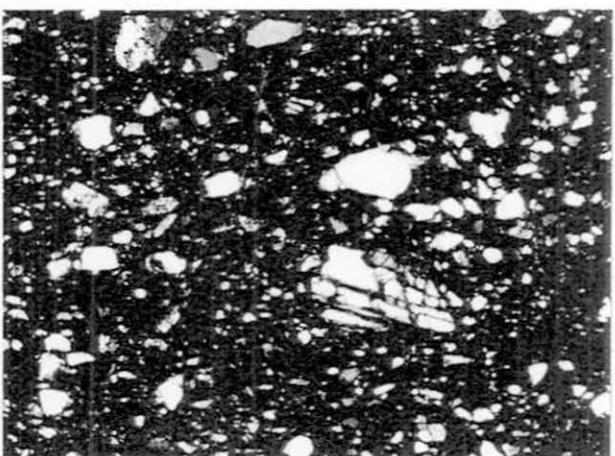
7. 勝連城跡 高麗系 有段平瓦; 4



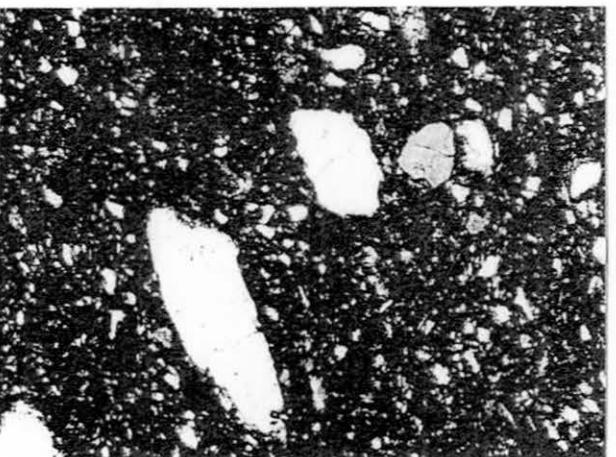
8. 勝連城跡 高麗系 有段平瓦; 4



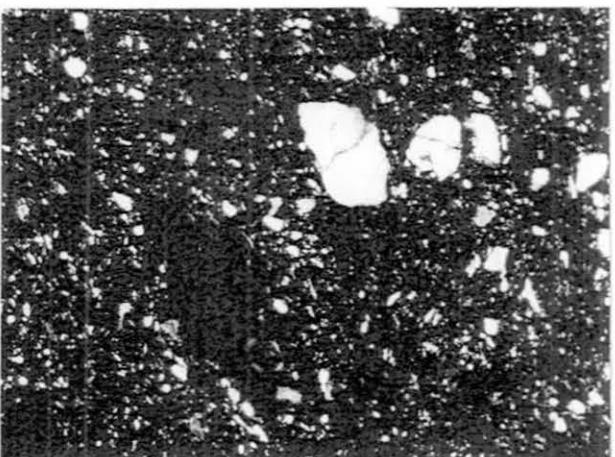
9. 勝連城跡 高麗系 有段平瓦; 5



10. 勝連城跡 高麗系 有段平瓦; 5



11. 勝連城跡 大和系 丸瓦; 6

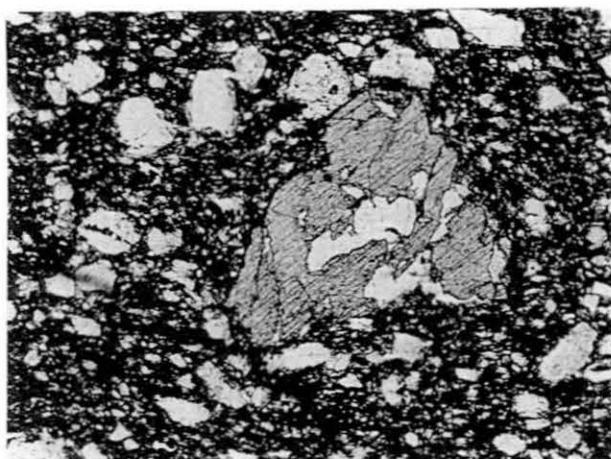


12. 勝連城跡 大和系 丸瓦; 6

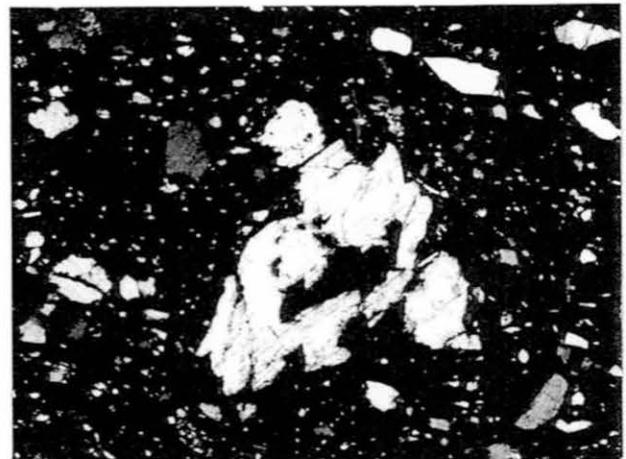
0.5mm

写真の左列は下方ポーラーのみ、右列は直交ポーラー下。

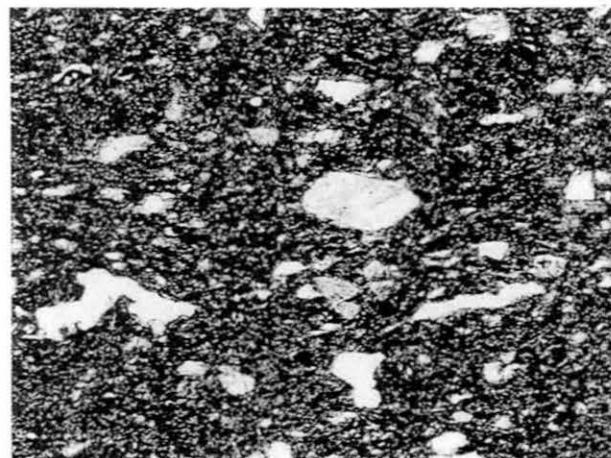
図版4 胎土薄片 (3)



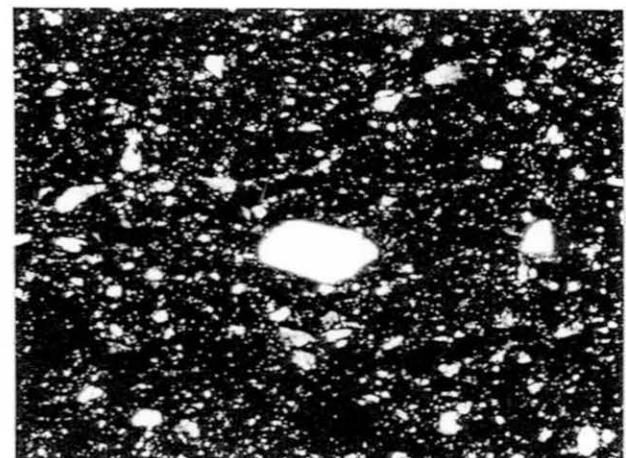
13. 首里城跡 高麗系 平瓦; 9



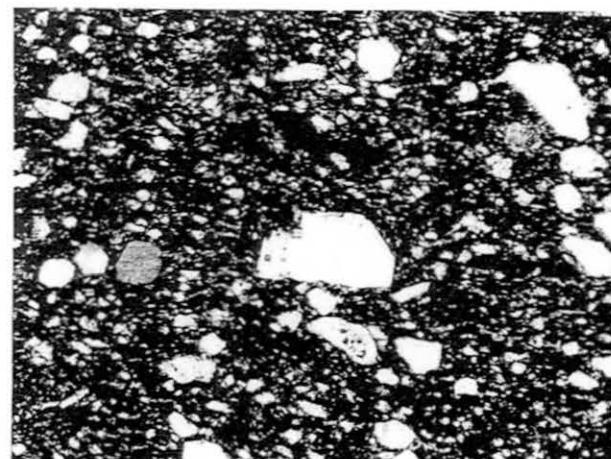
14. 首里城跡 高麗系 平瓦; 9



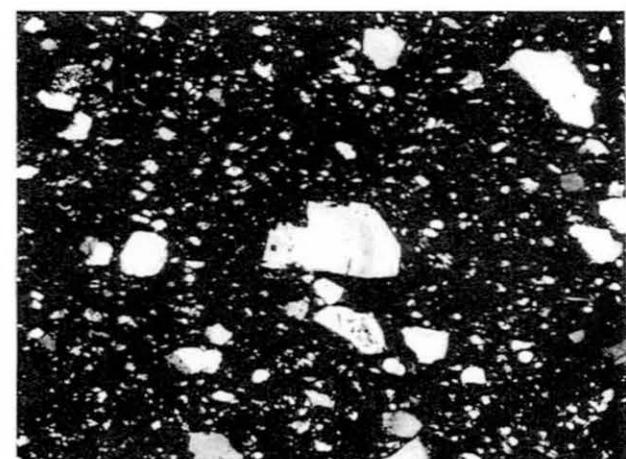
15. 首里城跡 大和系 丸瓦; 12



16. 首里城跡 大和系 丸瓦; 12



17. 宇茂佐古島遺跡 大和系？ 丸瓦; 14

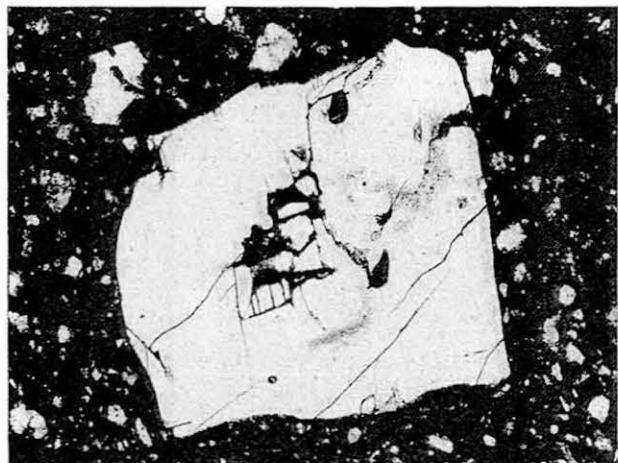


18. 宇茂佐古島遺跡 大和系？ 丸瓦; 14

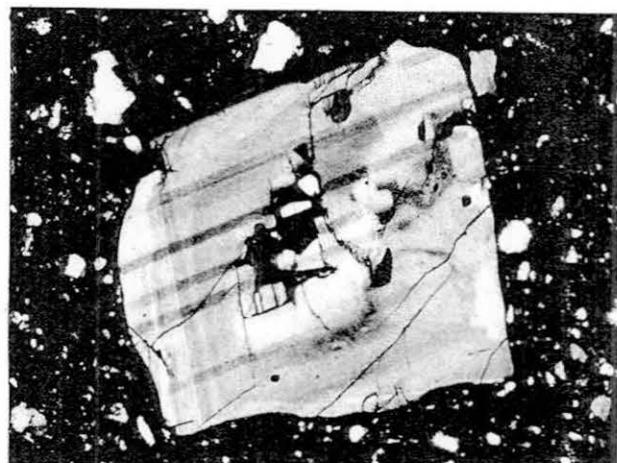
0.5mm

写真の左列は下方ポーラーのみ、右列は直交ポーラー下。

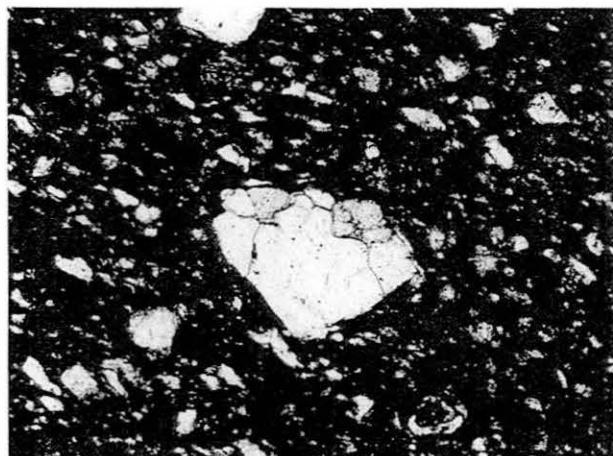
図版5 胎土薄片 (4)



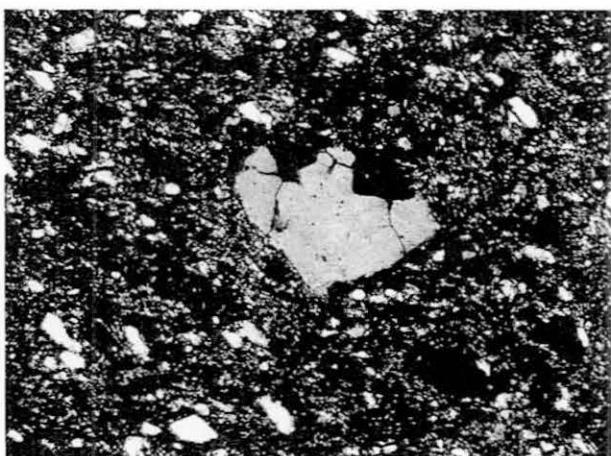
19. 宇茂佐古島遺跡 高麗系 平瓦;16



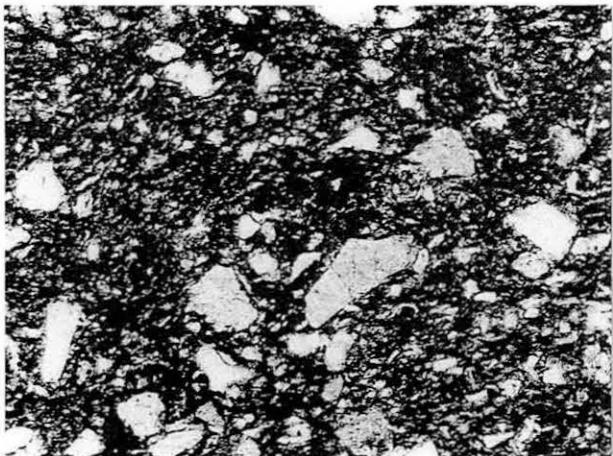
20. 宇茂佐古島遺跡 高麗系 平瓦;16



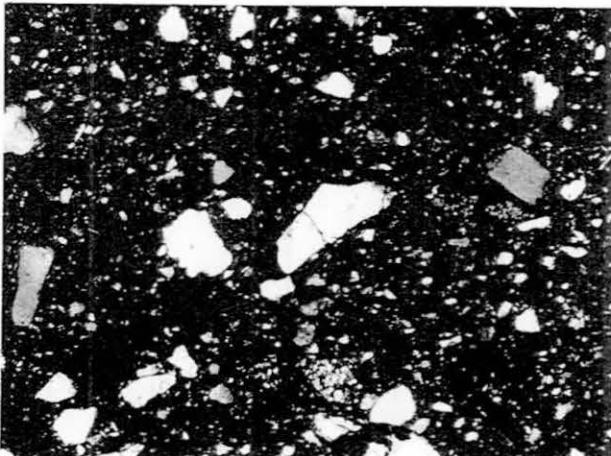
21. 銘苅原遺跡 高麗系 平瓦;20



22. 銘苅原遺跡 高麗系 平瓦;20



23. 那覇港周辺遺跡群旧東村地区 大和系 平瓦;22

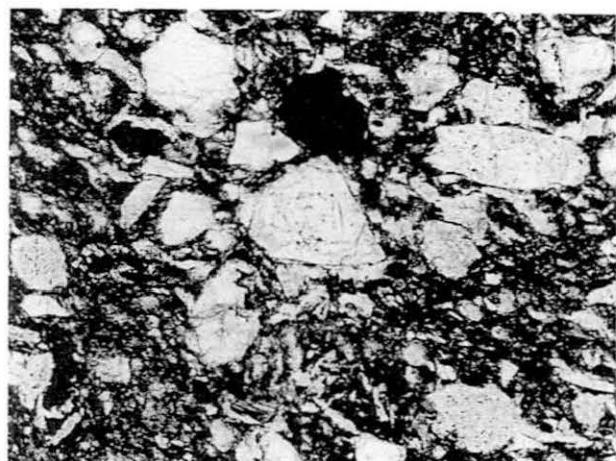


24. 那覇港周辺遺跡群旧東村地区 大和系 平瓦;22

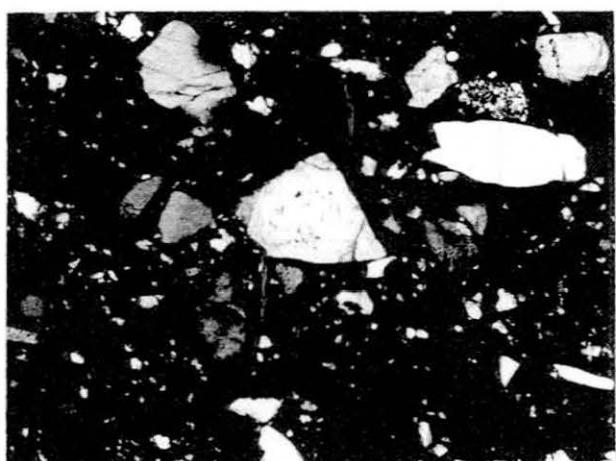
0.5mm

写真の左列は下方ポーラーのみ、右列は直交ポーラー下。

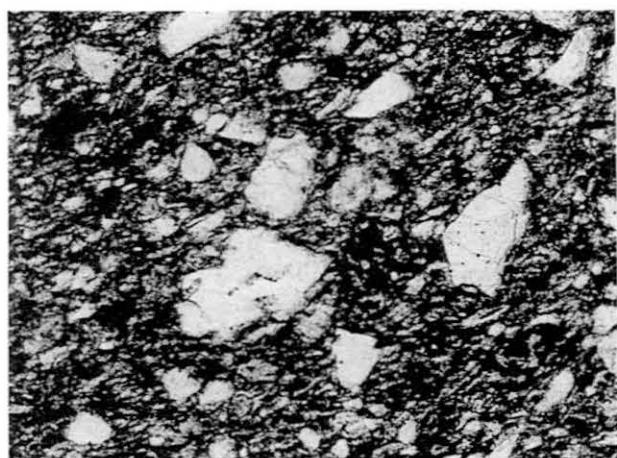
図版6 胎土薄片 (5)



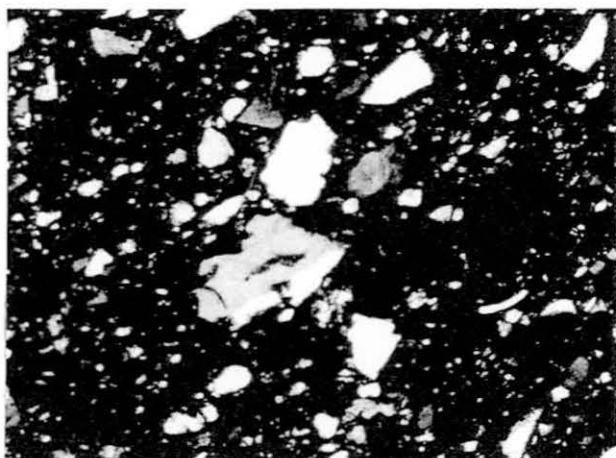
25. 波上遺跡 大和系 平瓦;23



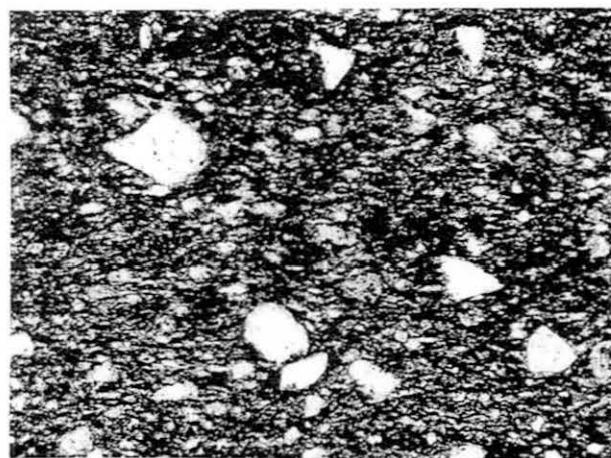
26. 波上遺跡 大和系 平瓦;23



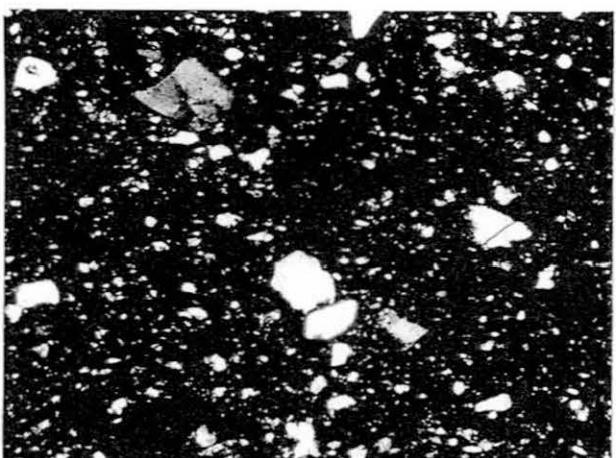
27. 牧志御願東方遺跡 高麗系 平瓦;25



28. 牧志御願東方遺跡 高麗系 平瓦;25



29. 天界寺跡 高麗系 平瓦;26

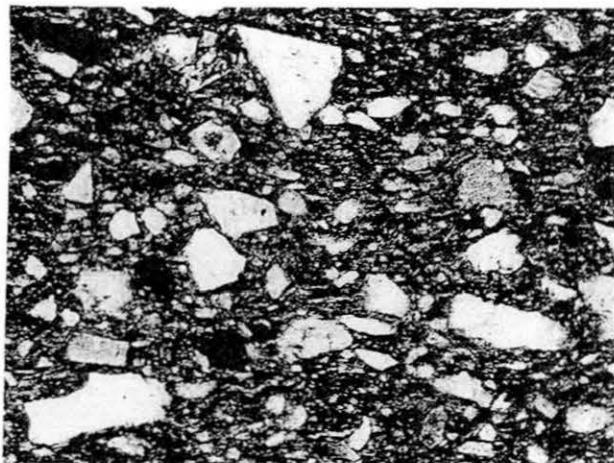


30. 天界寺跡 高麗系 平瓦;26

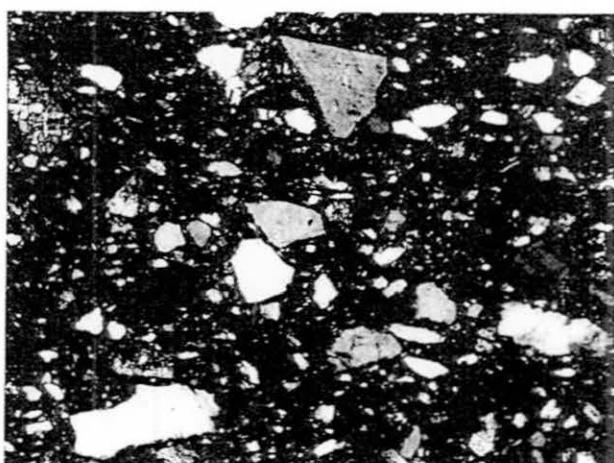
0.5mm

写真の左列は下方ポーラーのみ、右列は直交ポーラー下。

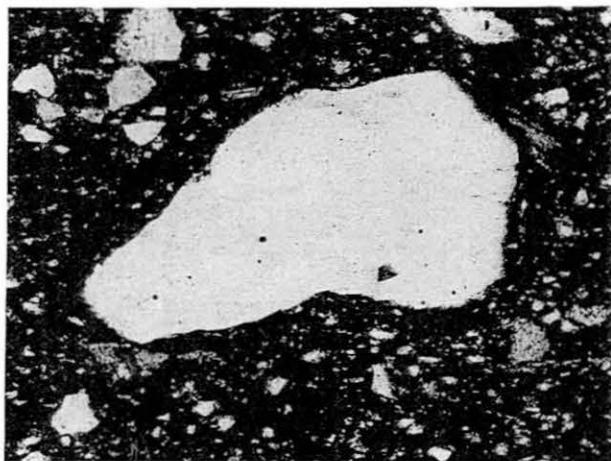
図版7 胎土薄片 (6)



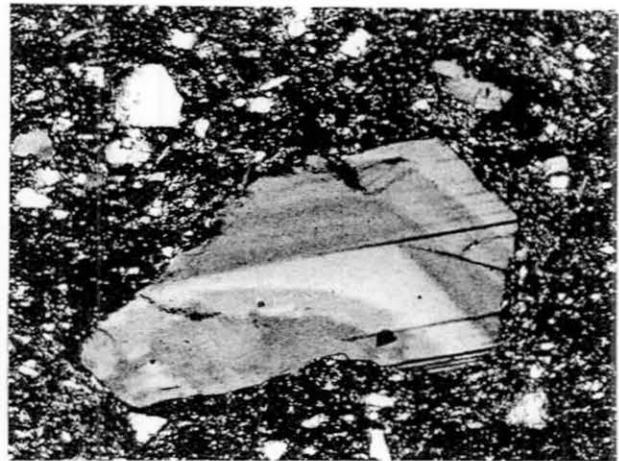
31. 浦添城跡ようどれ 高麗系 平瓦;31



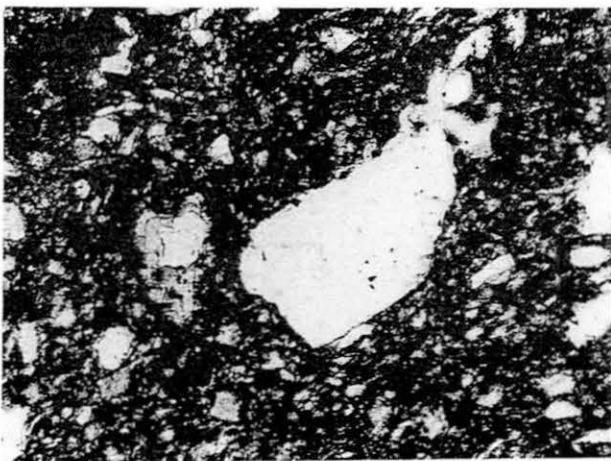
32. 浦添城跡ようどれ 高麗系 平瓦;31



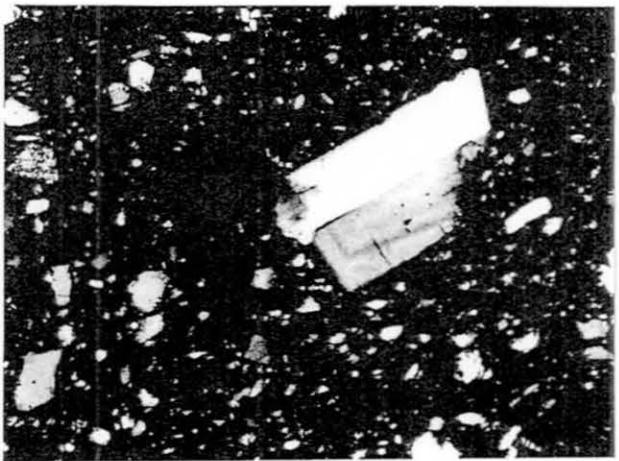
33. 浦添城跡ようどれ 高麗系 平瓦;40



34. 浦添城跡ようどれ 高麗系 平瓦;40



35. 浦添城跡ようどれ 高麗系 平瓦;44

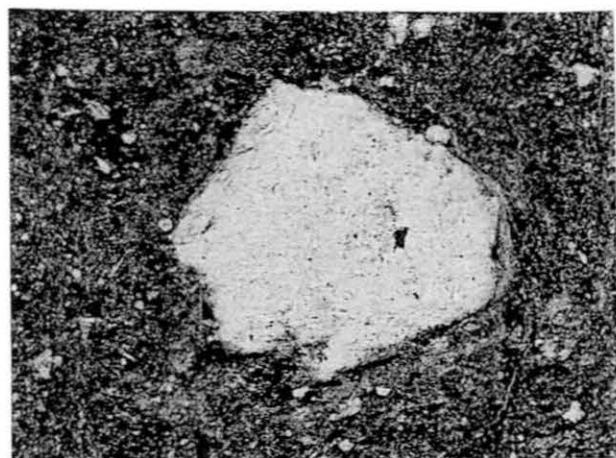


36. 浦添城跡ようどれ 高麗系 平瓦;44

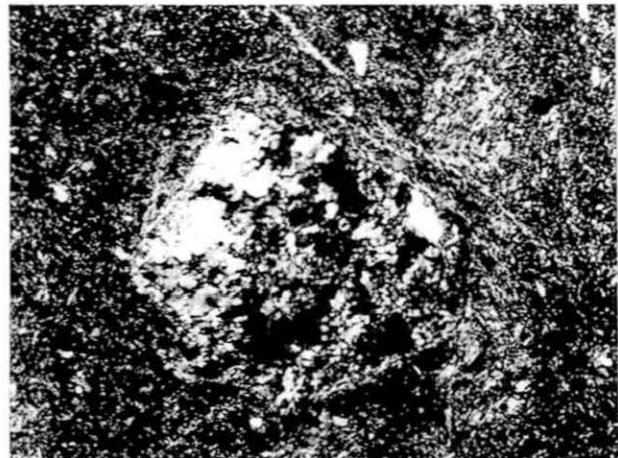
0.5mm

写真の左列は下方ポーラーのみ、右列は直交ポーラー下。

図版8 胎土薄片 (7)



37. 名護市 為又 粘土;46



38. 名護市 為又 粘土;46

0.5mm

図 版



宇茂佐古島遺跡出土の主な陶磁器



発掘前の宇茂佐古島遺跡



発掘中の宇茂佐古島遺跡

図版 1 宇茂佐古島遺跡全景

図版2 検出された遺構

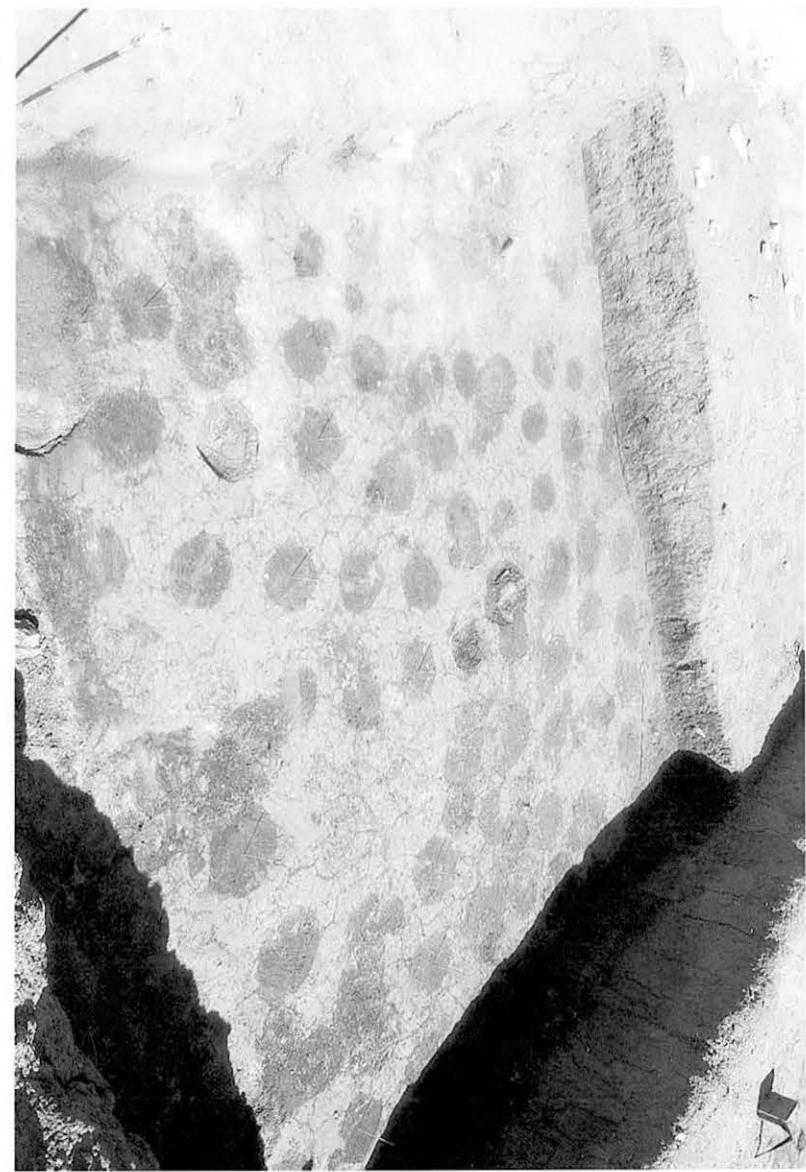
井戸と小ピット列群



柱穴



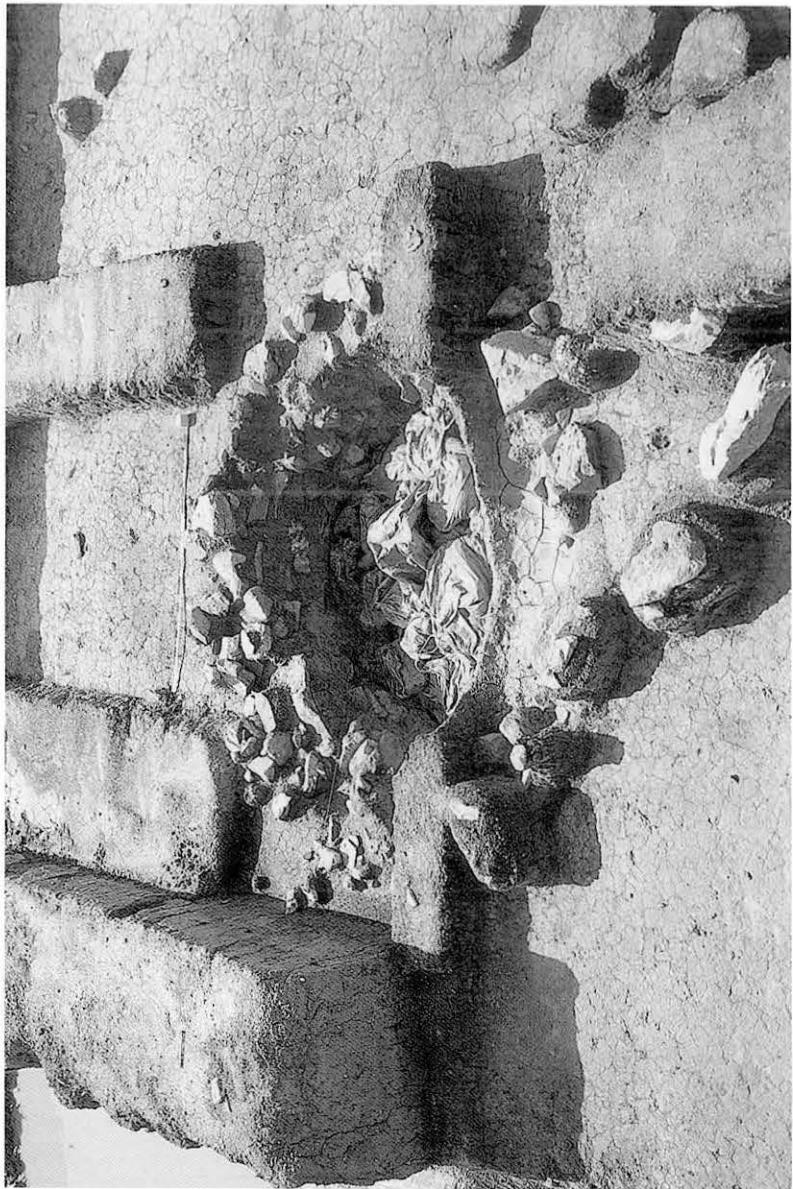
小ピット列群



小ピット列群／断面



図版 3 検出された遺構近景

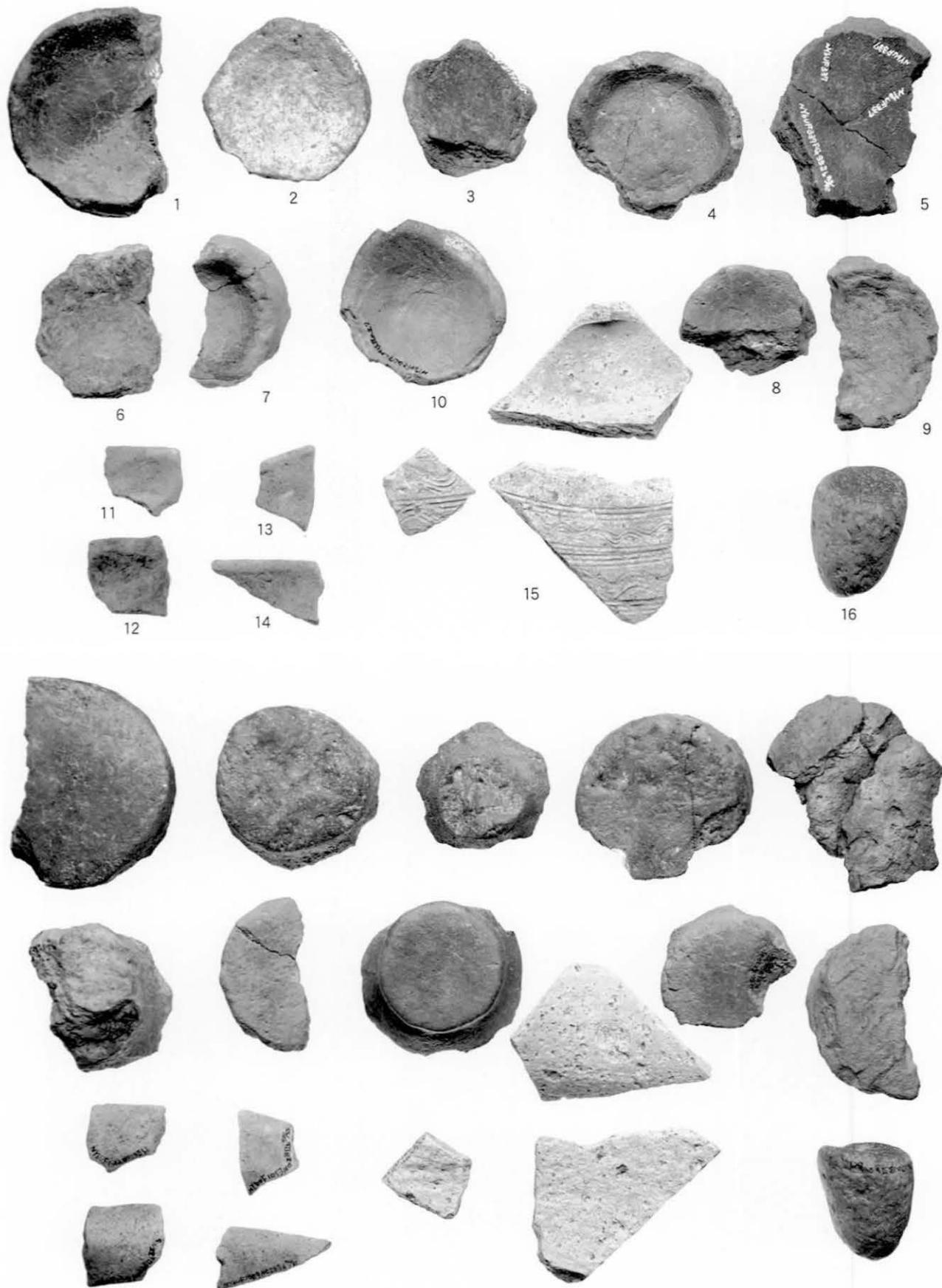


井戸

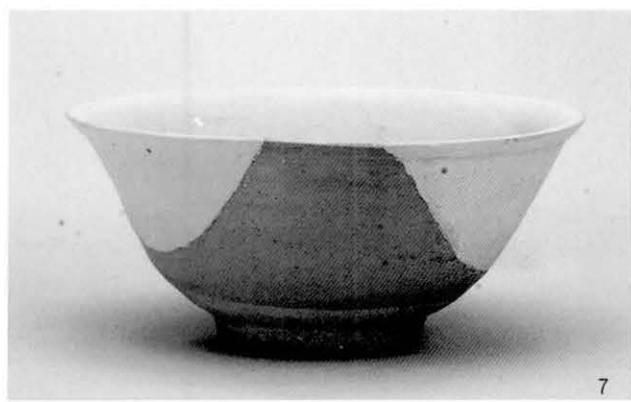


井戸／断面

図版4 井戸跡



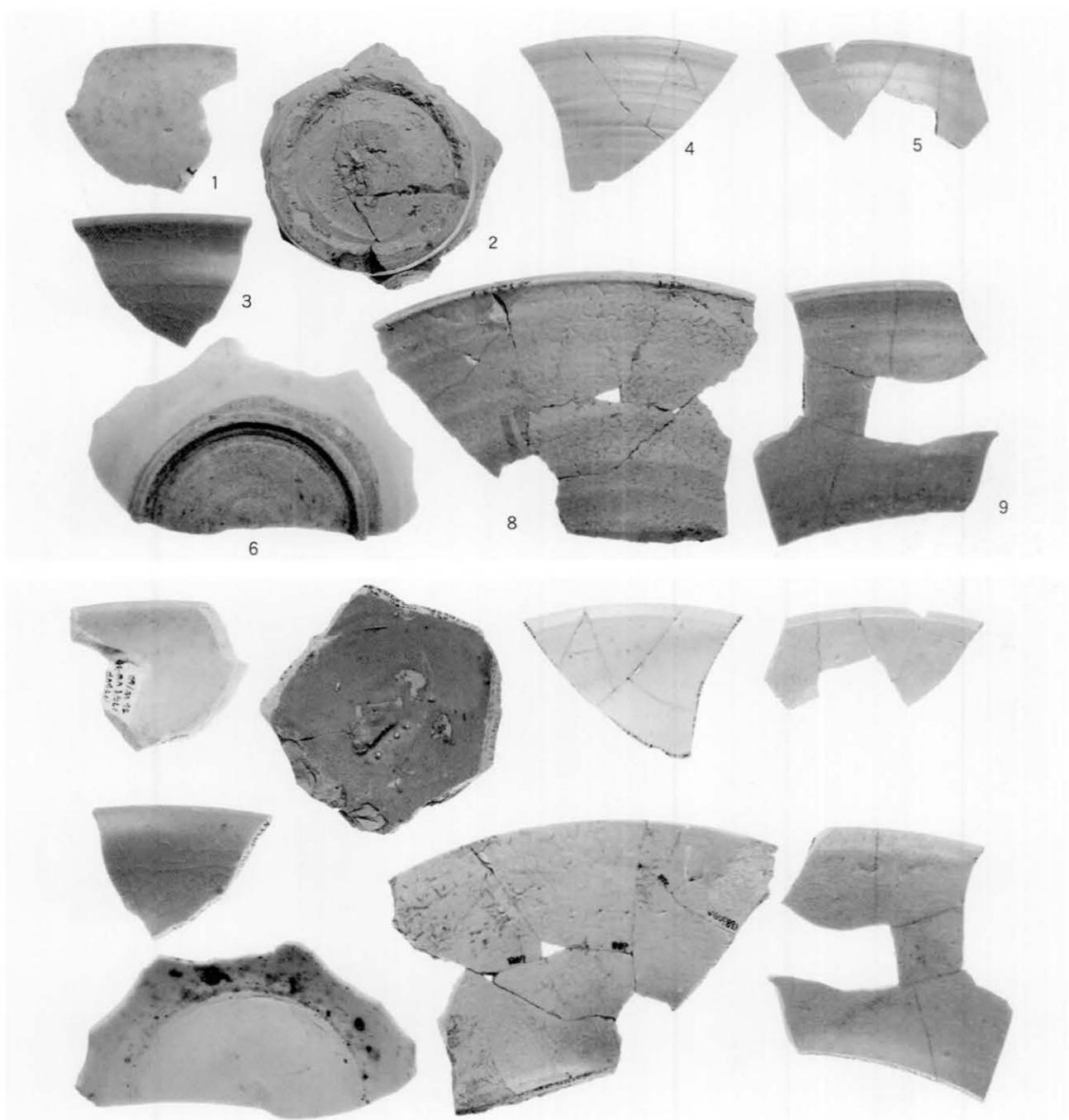
図版5 土器・土製品



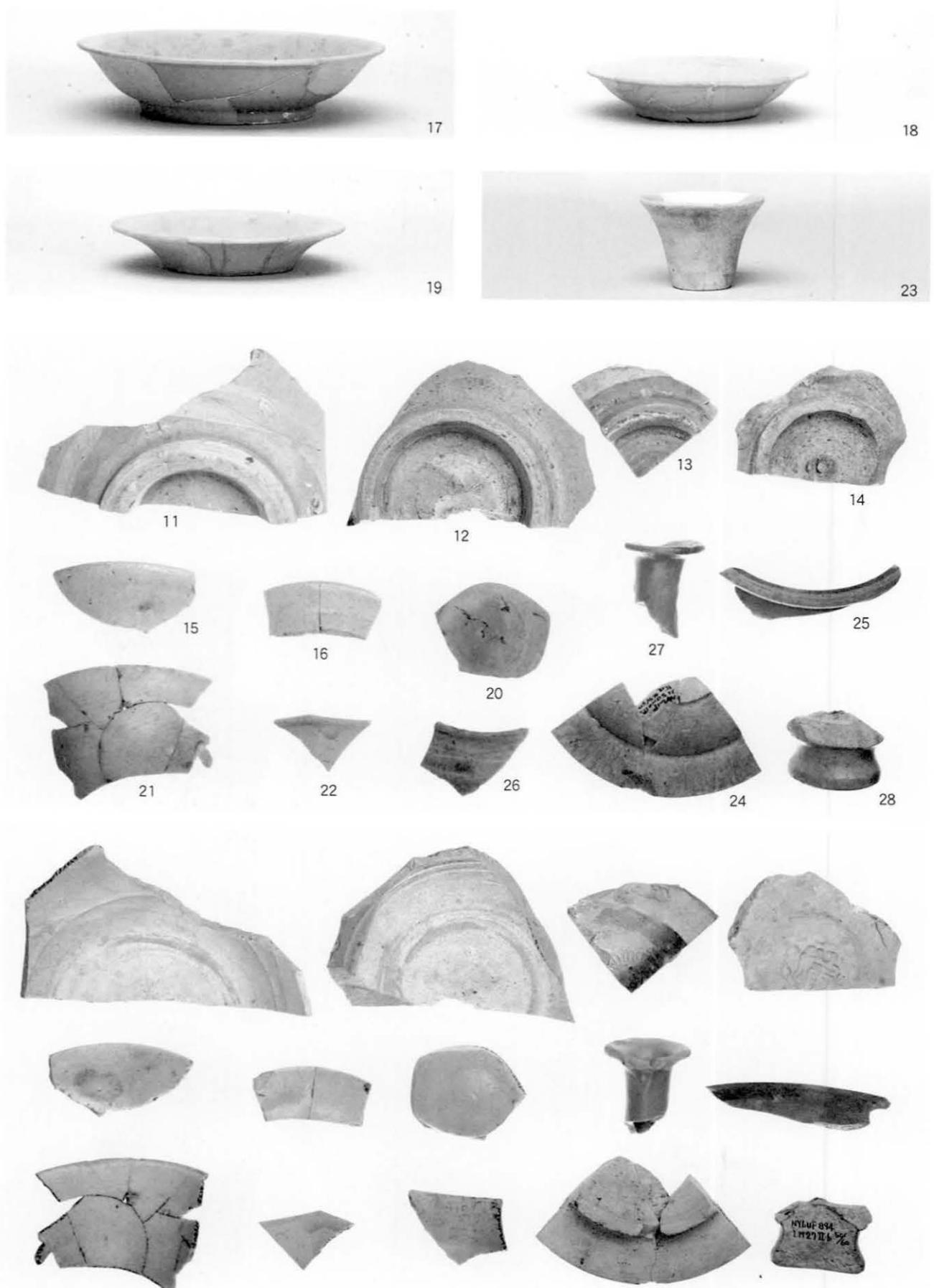
7



10



图版 6 白磁①



図版7 白磁②



13



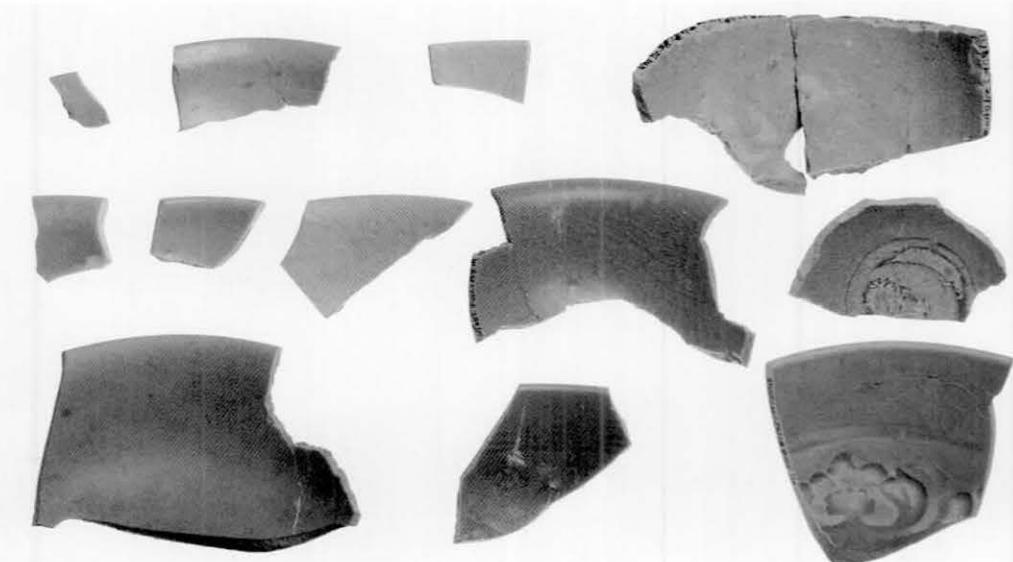
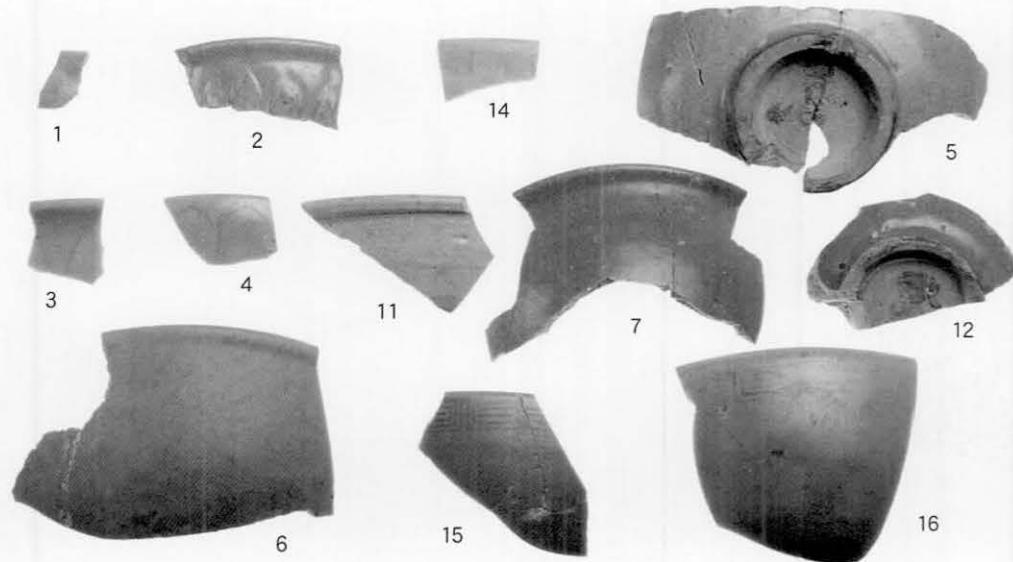
8



9



10



图版8 青磁①



25



19



24



27



17



18



20



21



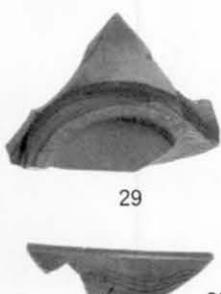
26



22



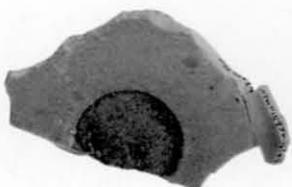
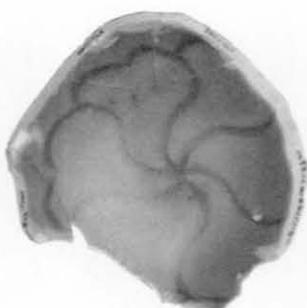
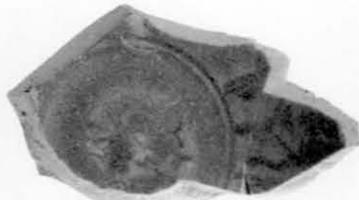
28



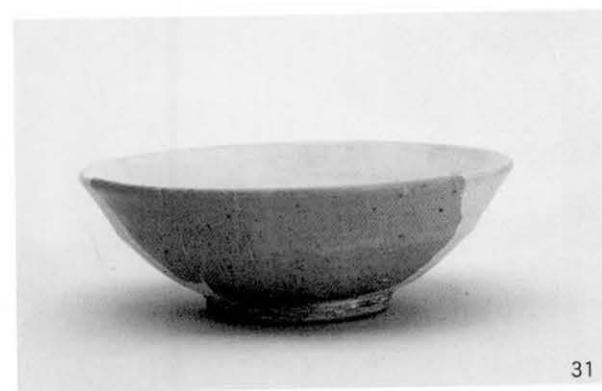
29



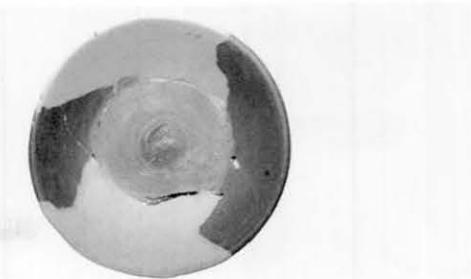
30



図版9 青磁②



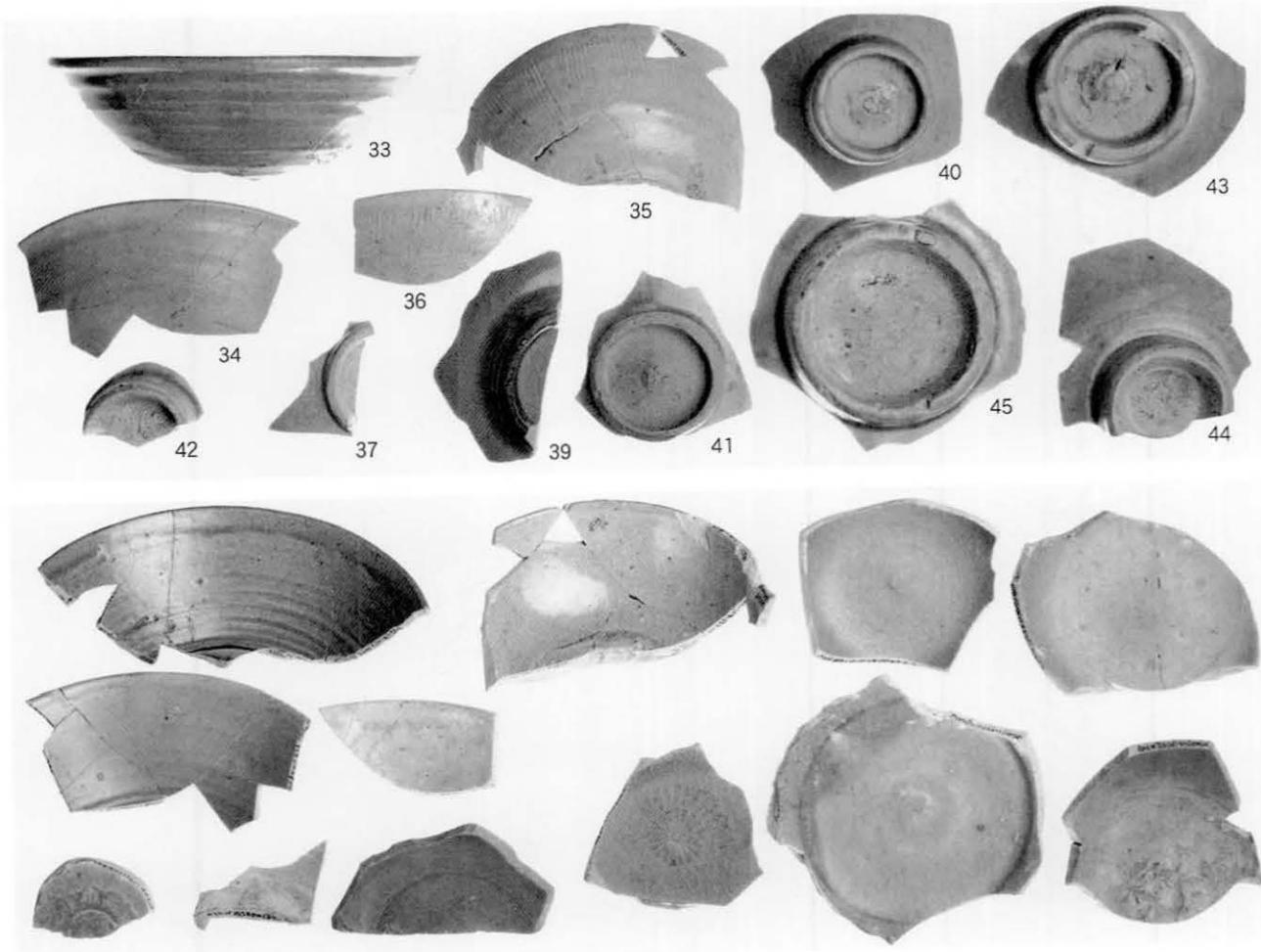
31



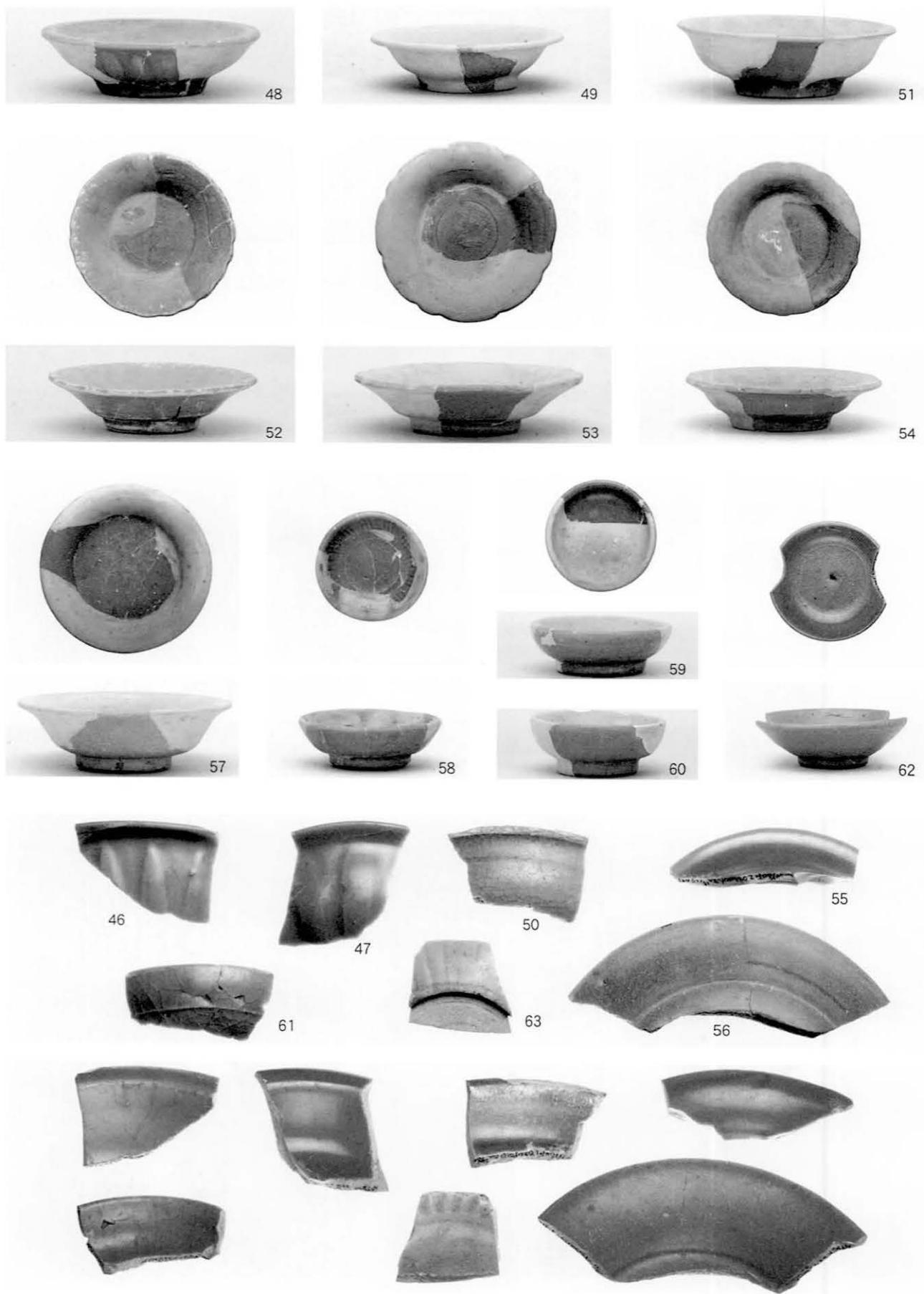
32



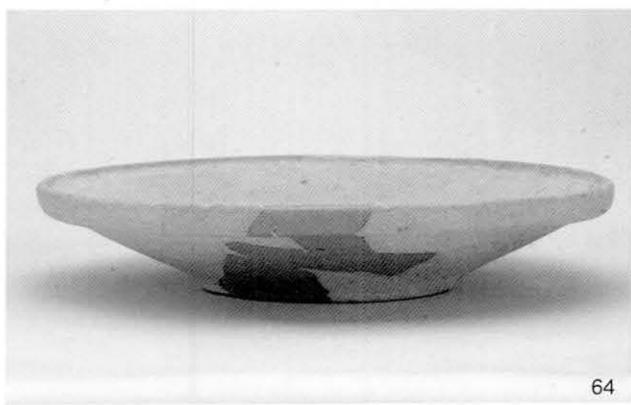
38



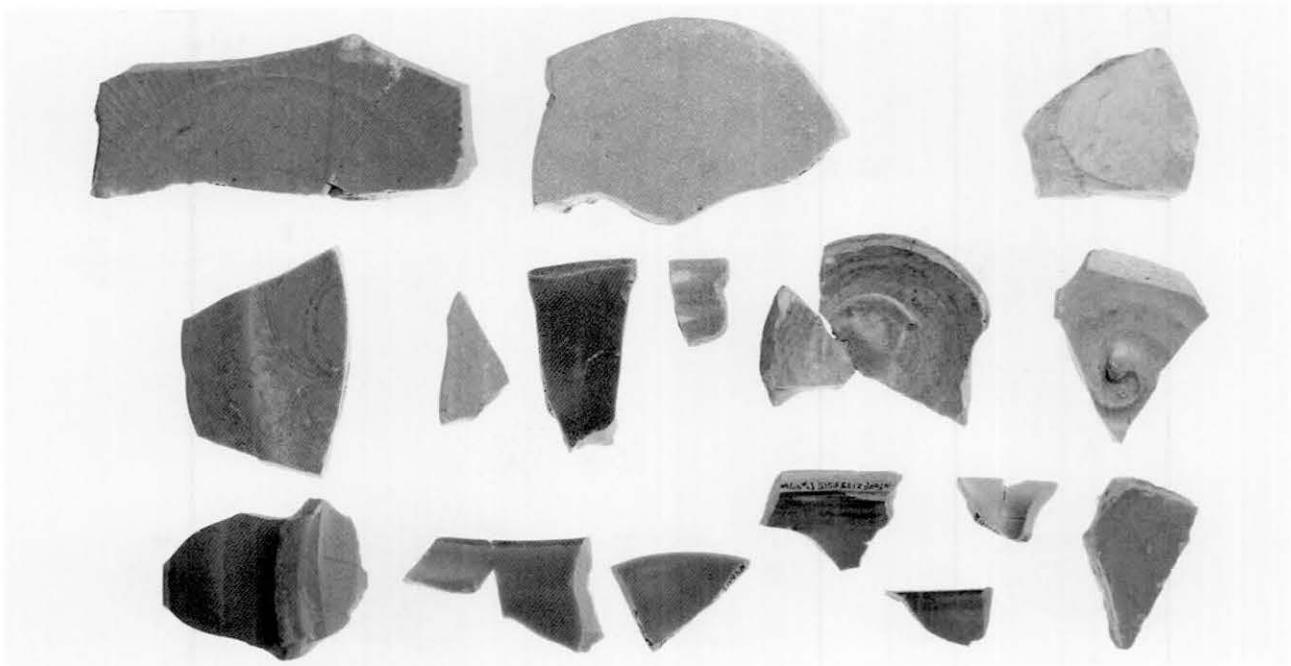
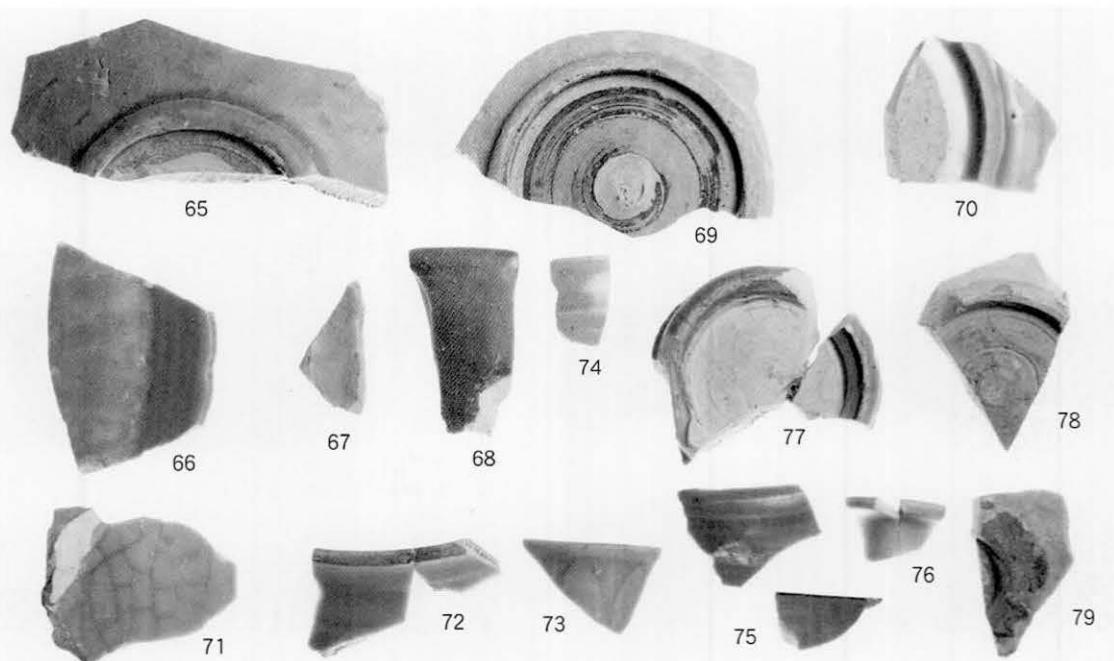
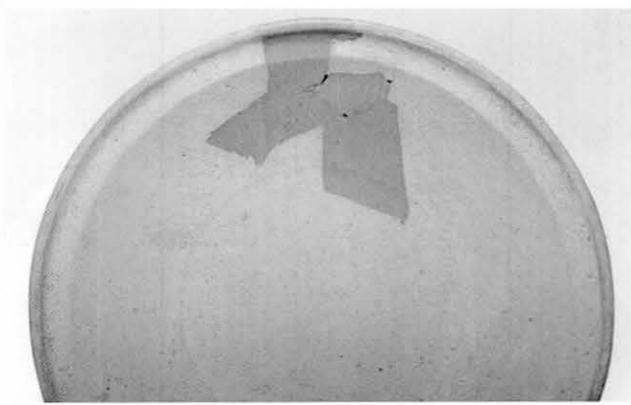
図版10 青磁③



图版11 青磁④



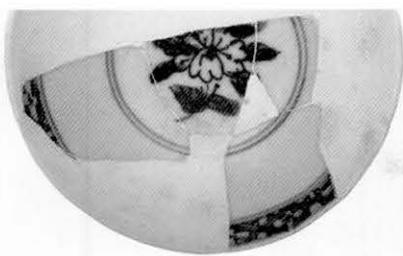
64



図版12 青磁⑤



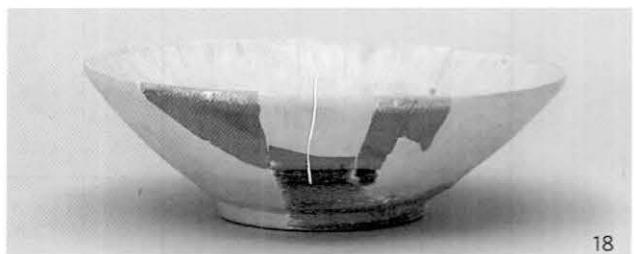
図版13 青花①



10



16



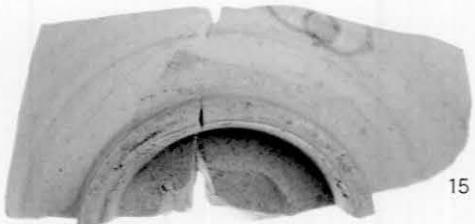
18



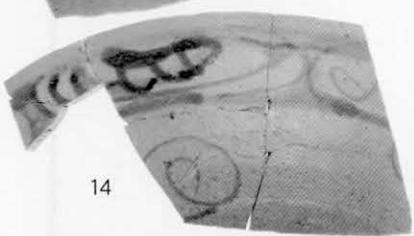
11



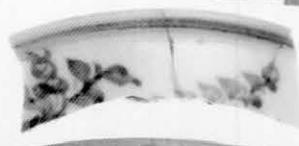
12



15



14



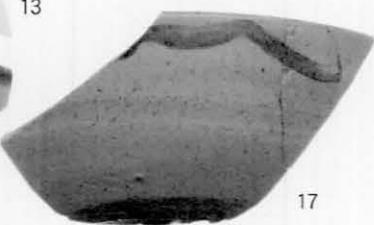
13



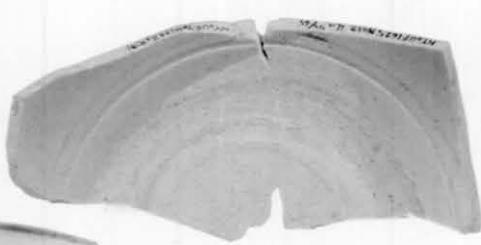
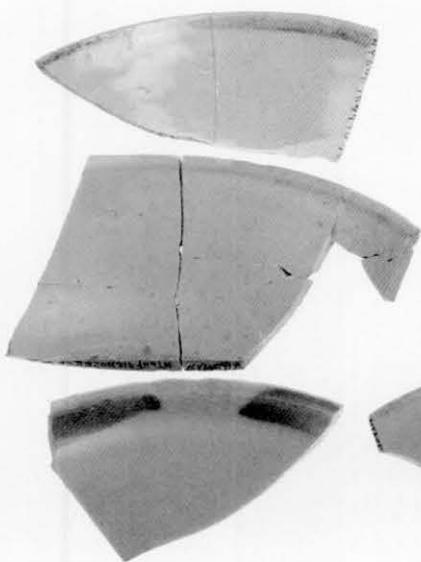
19



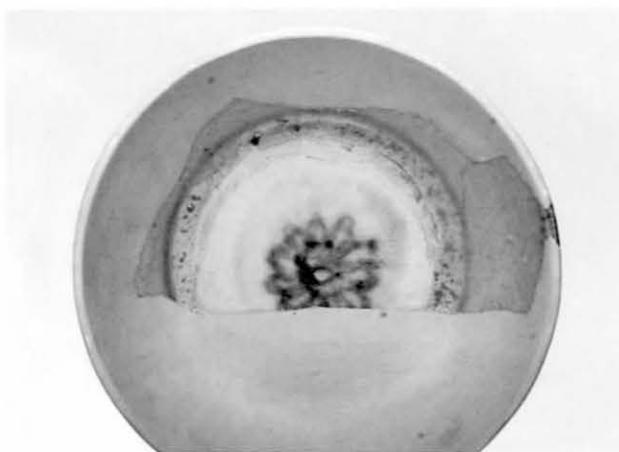
20



17

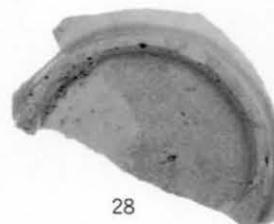
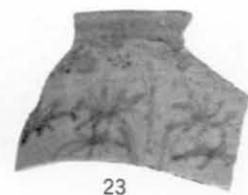


図版14 青花②



21

22



23

24

25

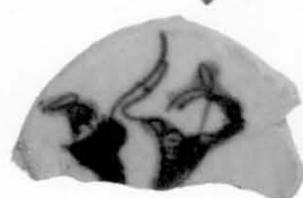
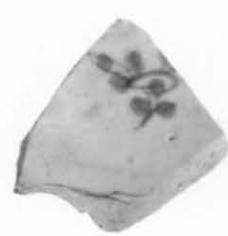
26

27

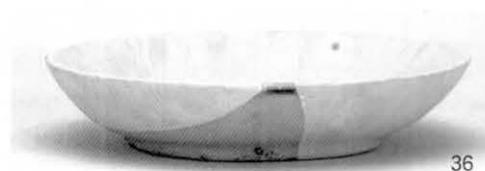
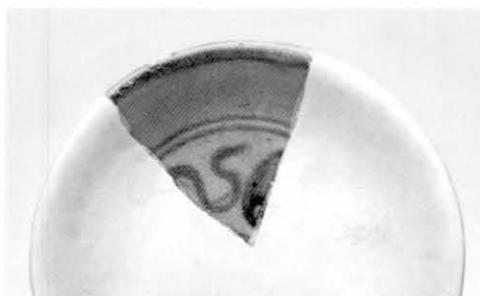
28

29

30

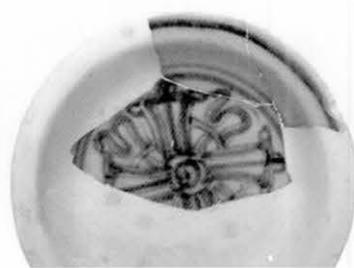
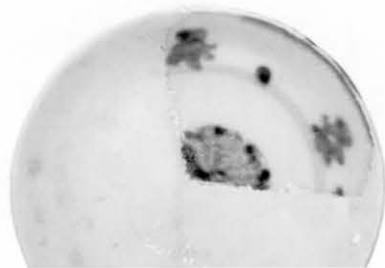


図版15 青花③



31

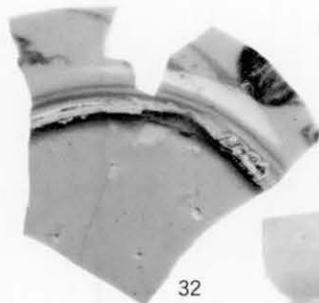
36



35

33

34



32

37

38

39

41



図版16 青花④



45



49



48



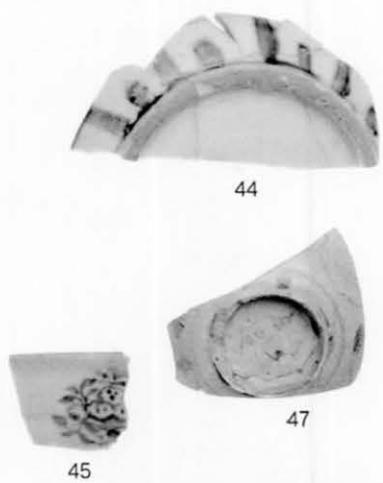
48



42



43



45



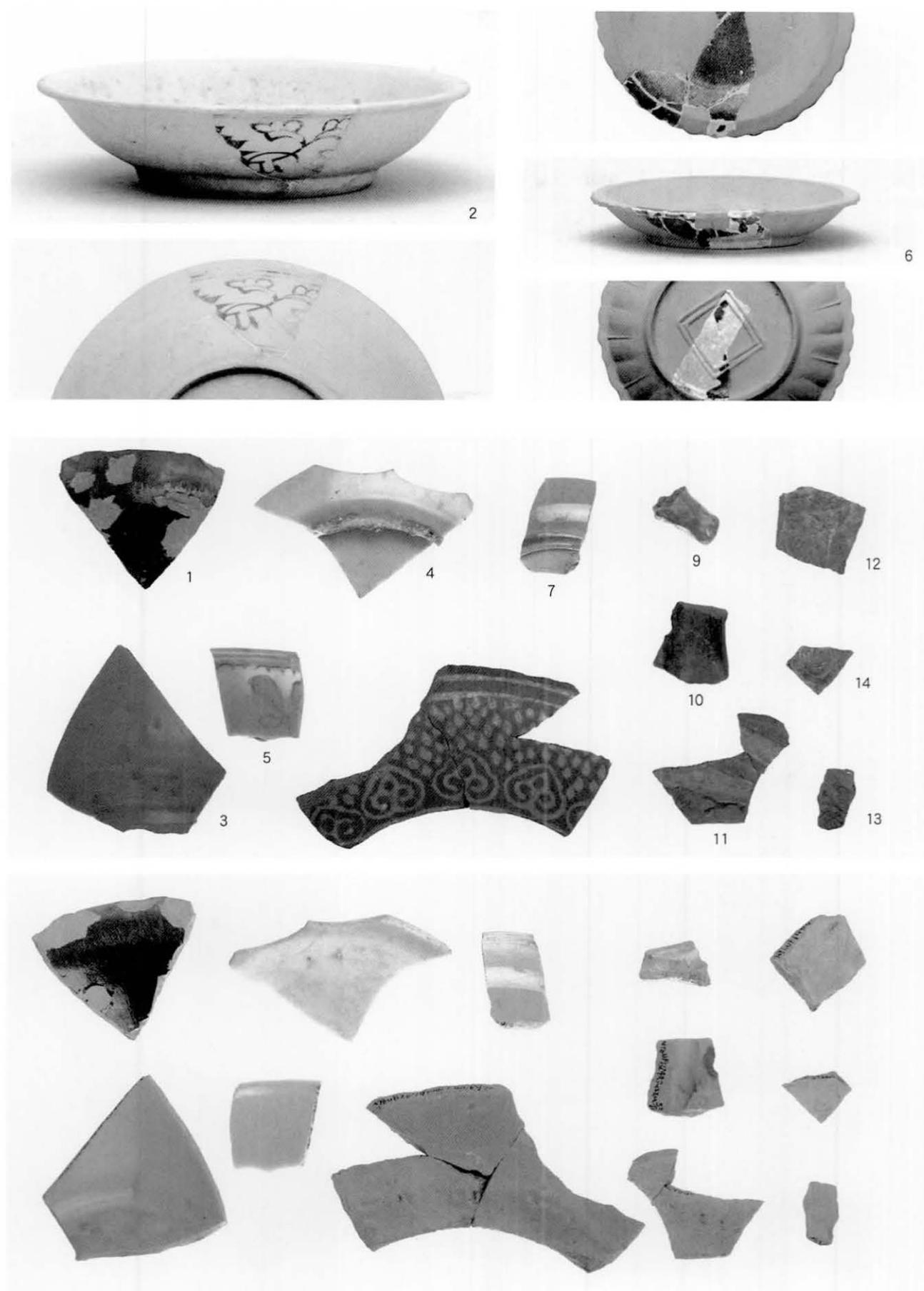
47



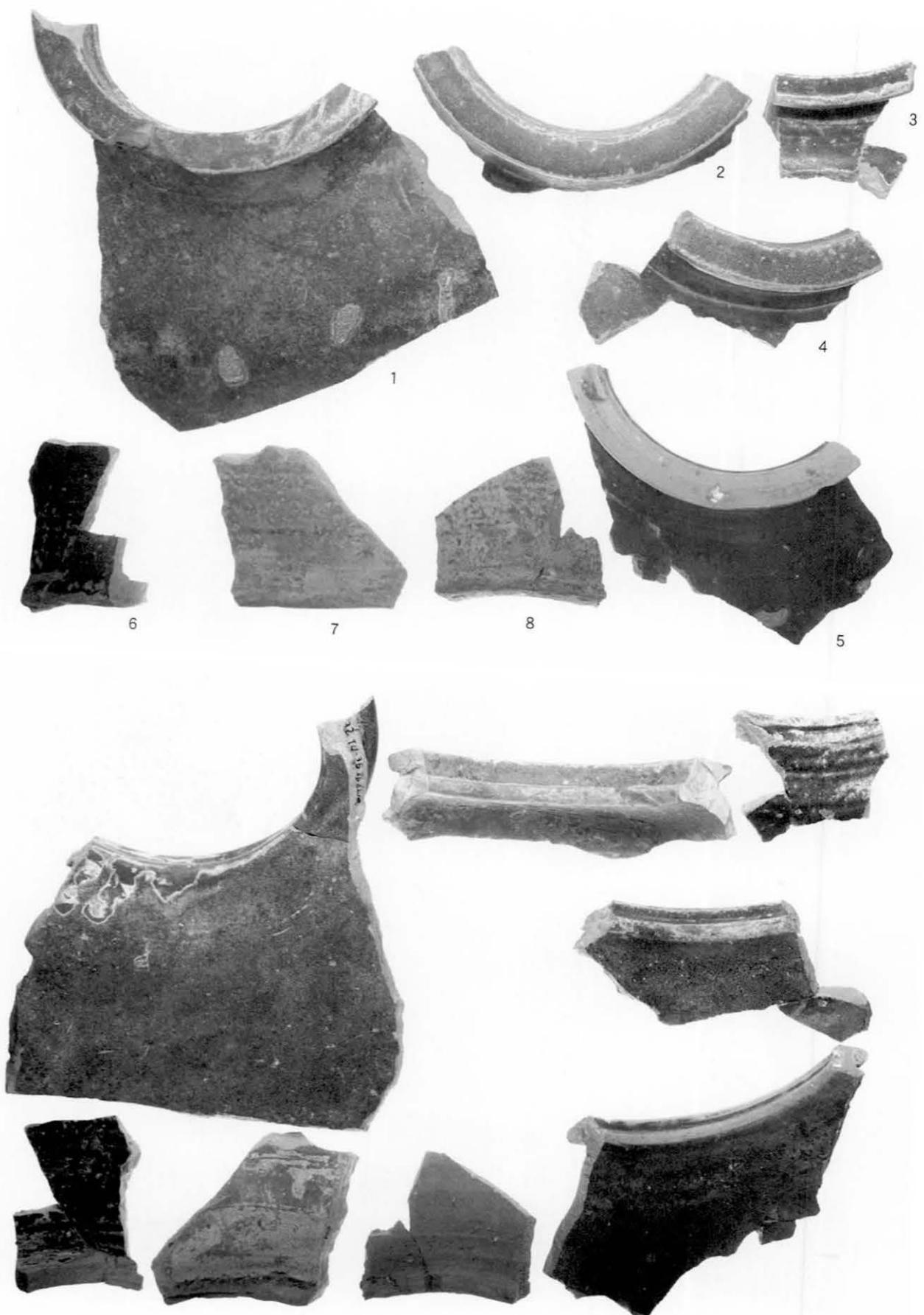
51



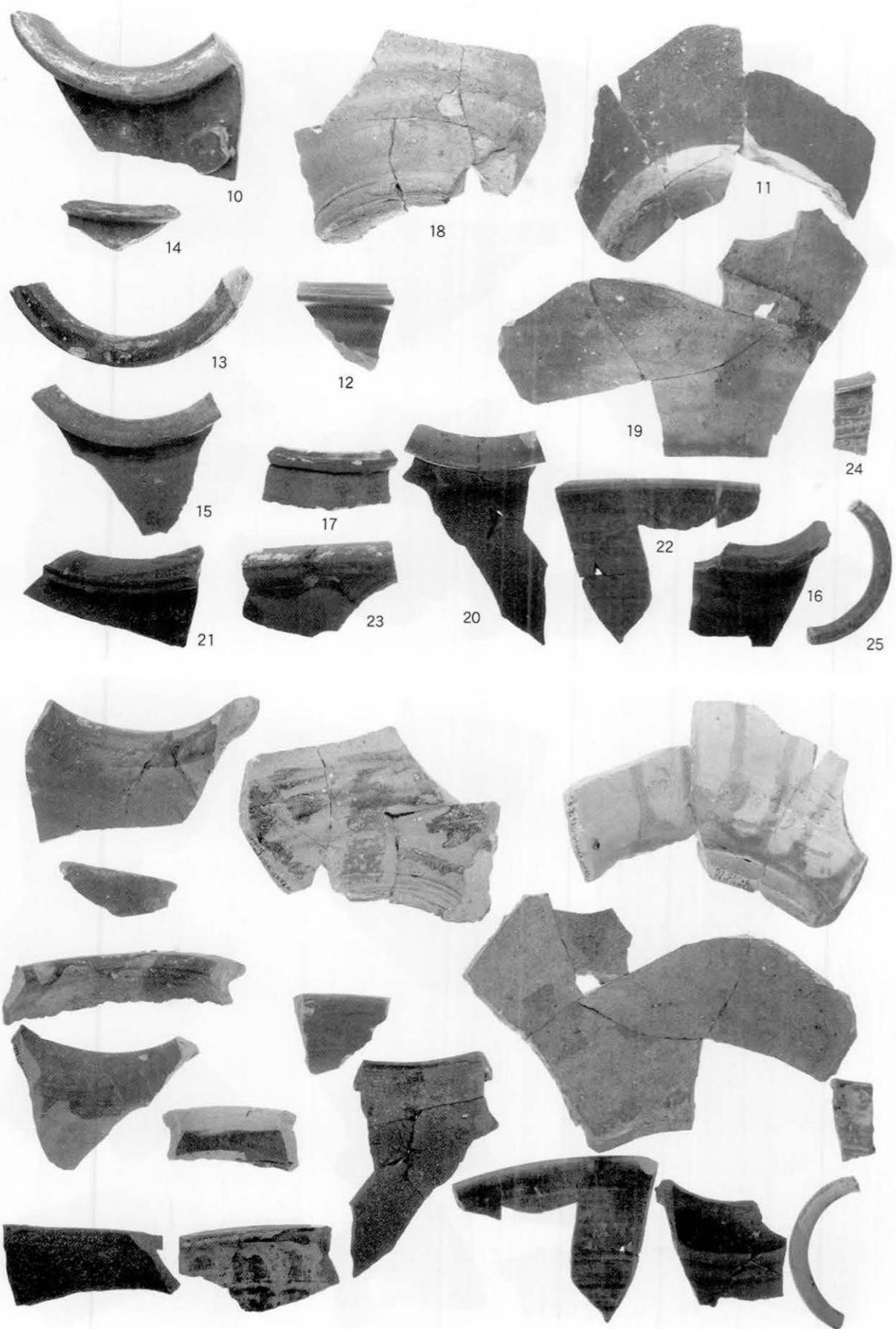
図版17 青花⑤



図版18 天目茶碗・赤絵・色絵・韓国産象嵌青磁・三彩



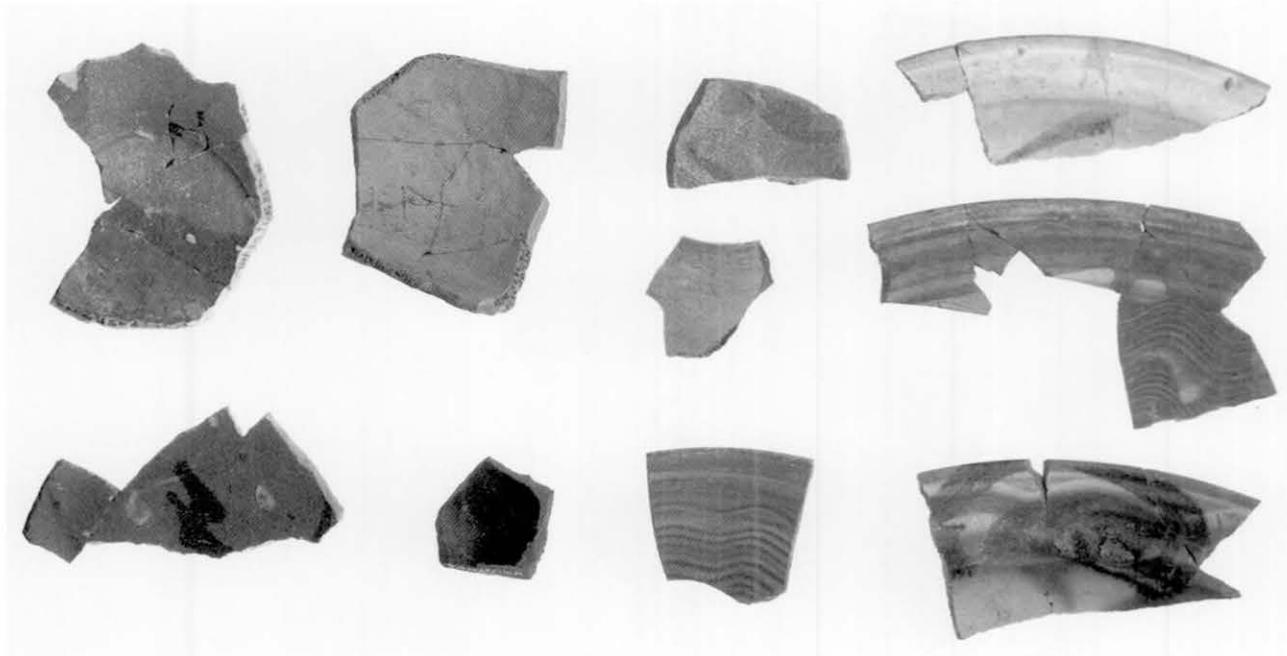
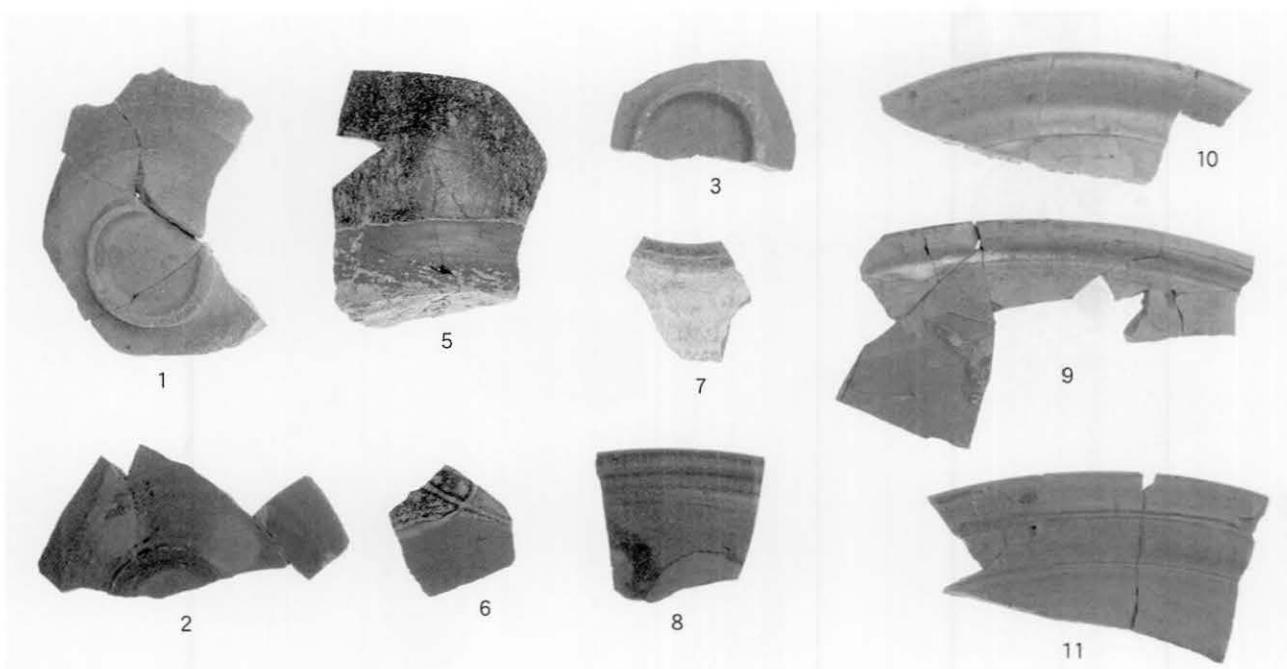
図版19 褐釉陶器①



図版20 褐釉陶器②



図版23 備前陶器・すり鉢



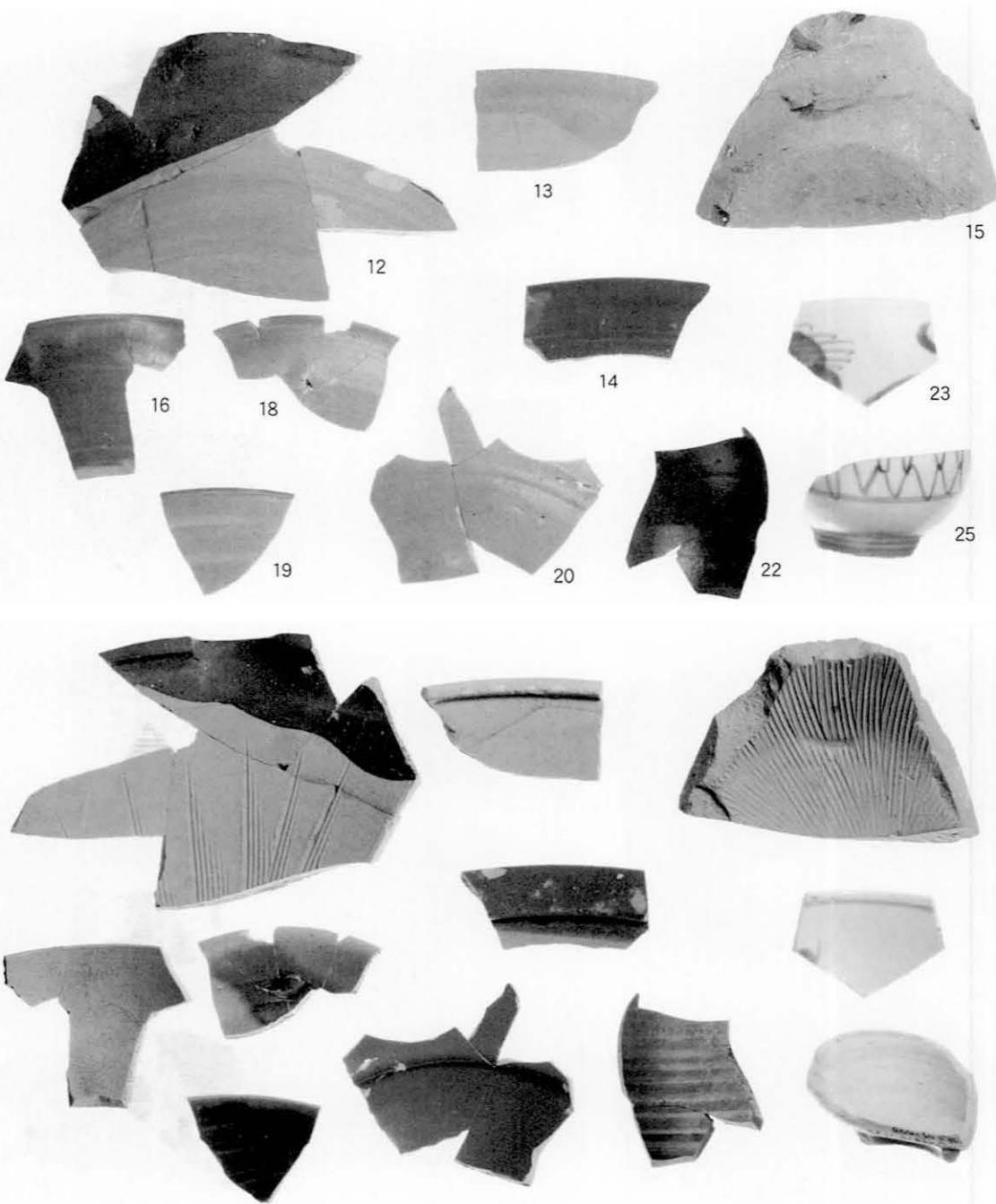
図版24 肥前陶磁器①



21



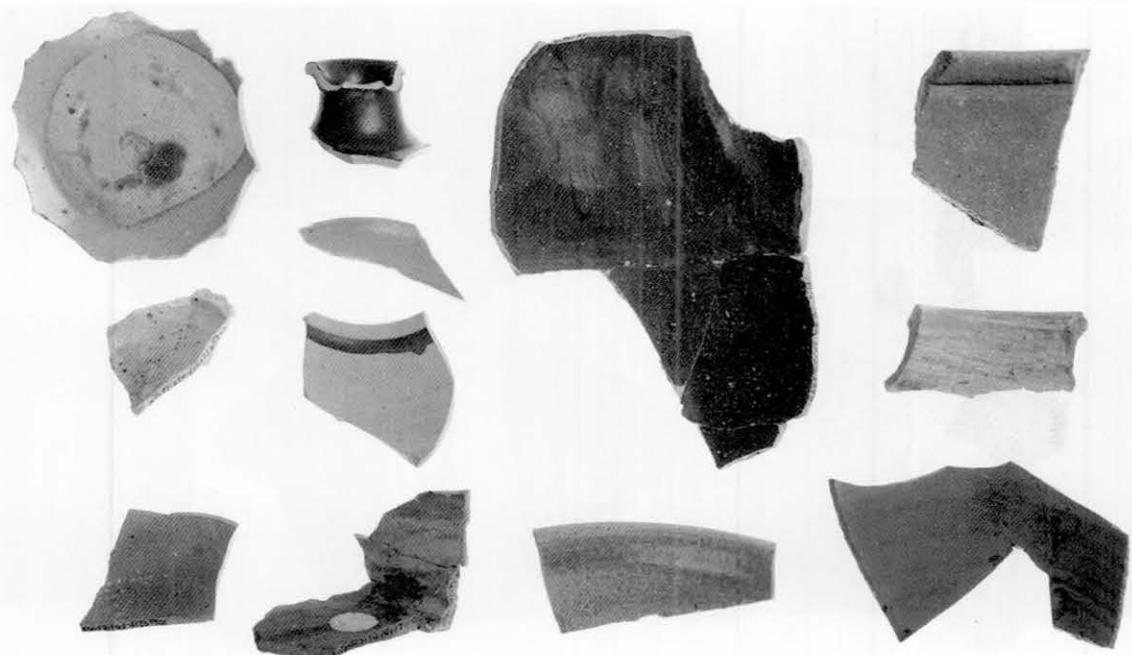
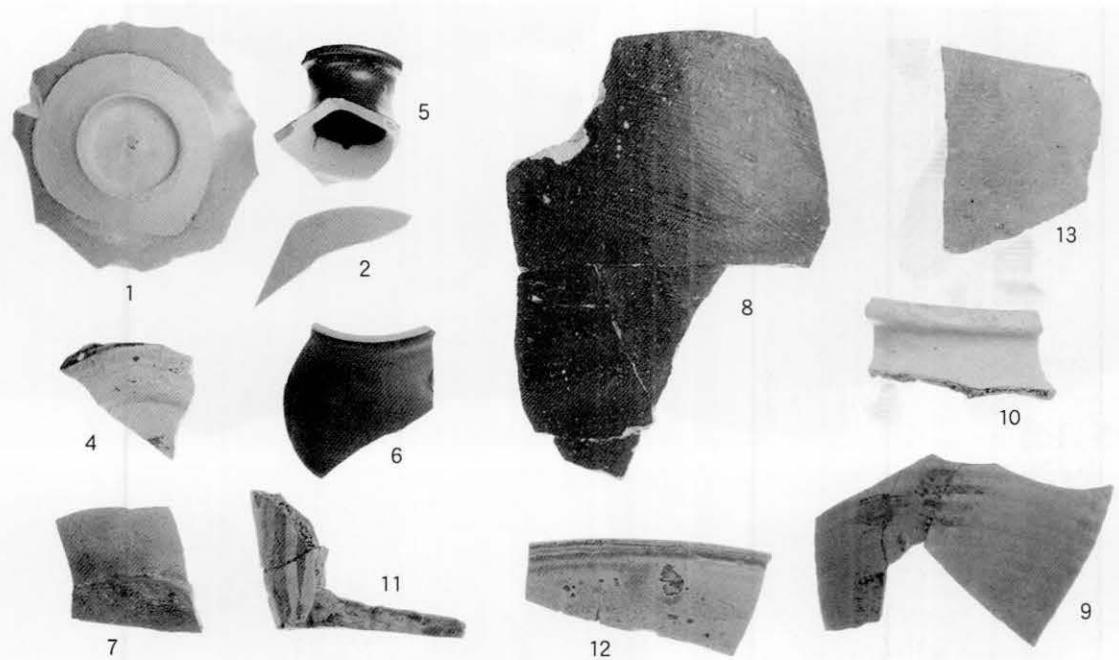
17



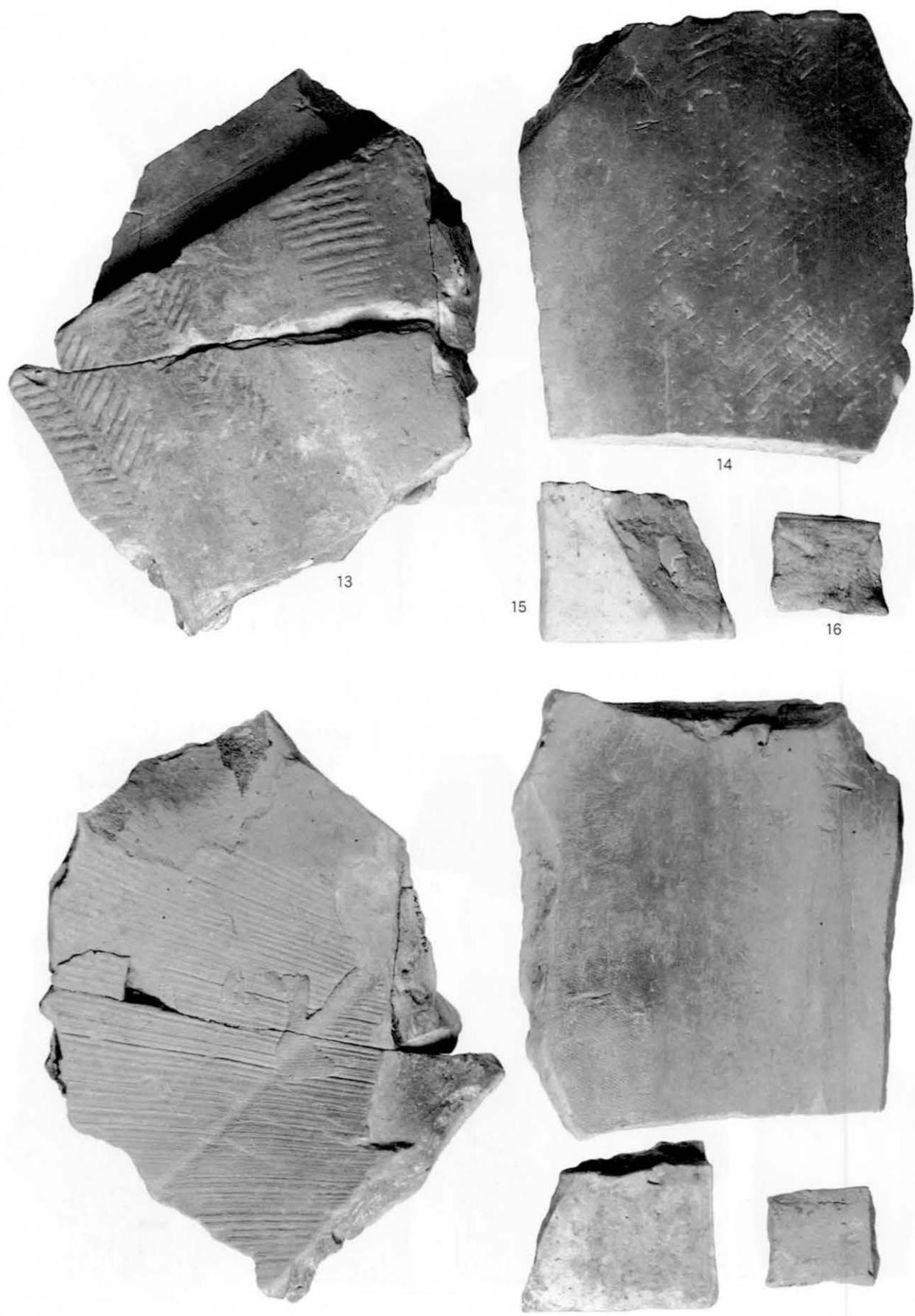
図版25 肥前陶磁器②



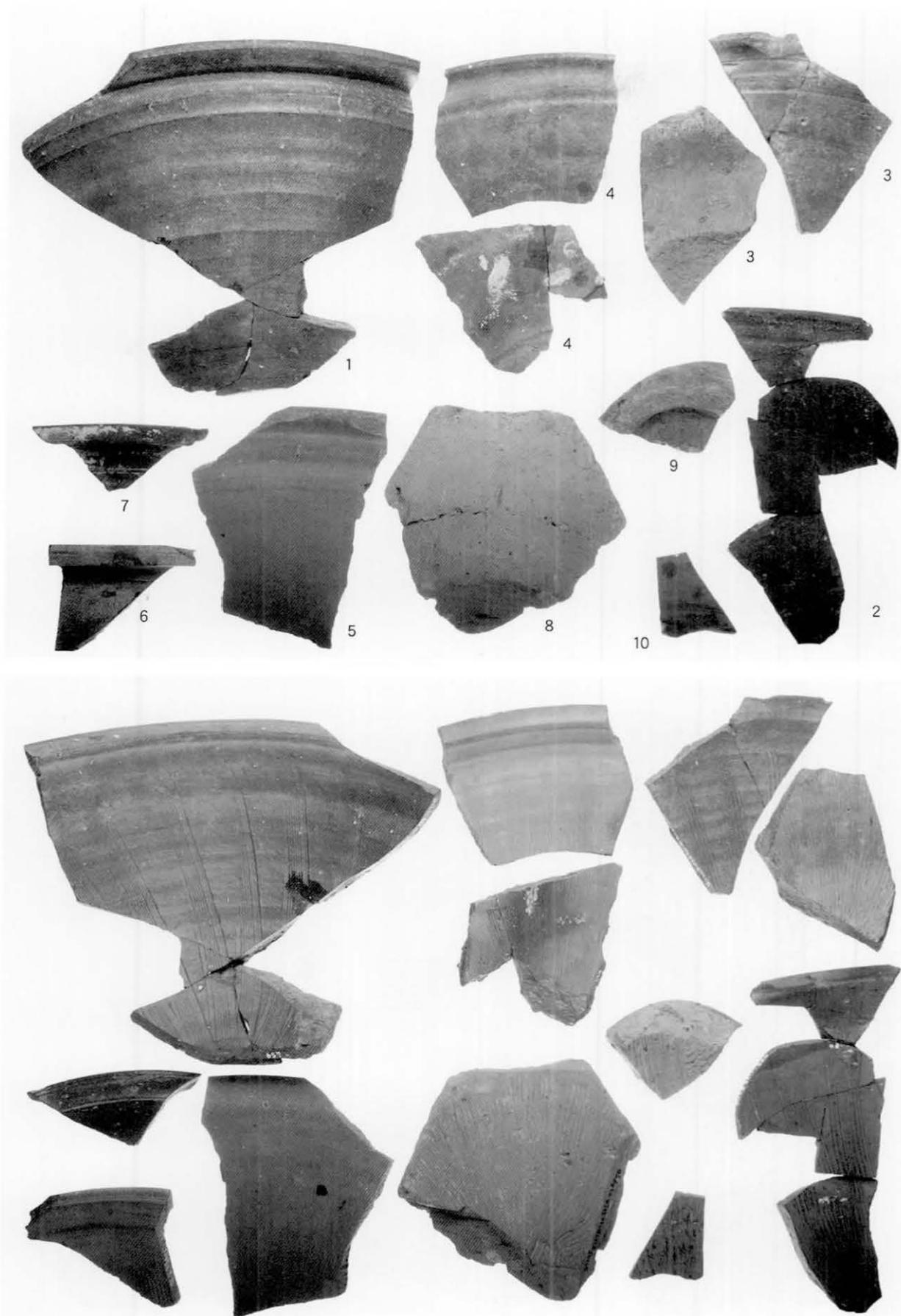
3



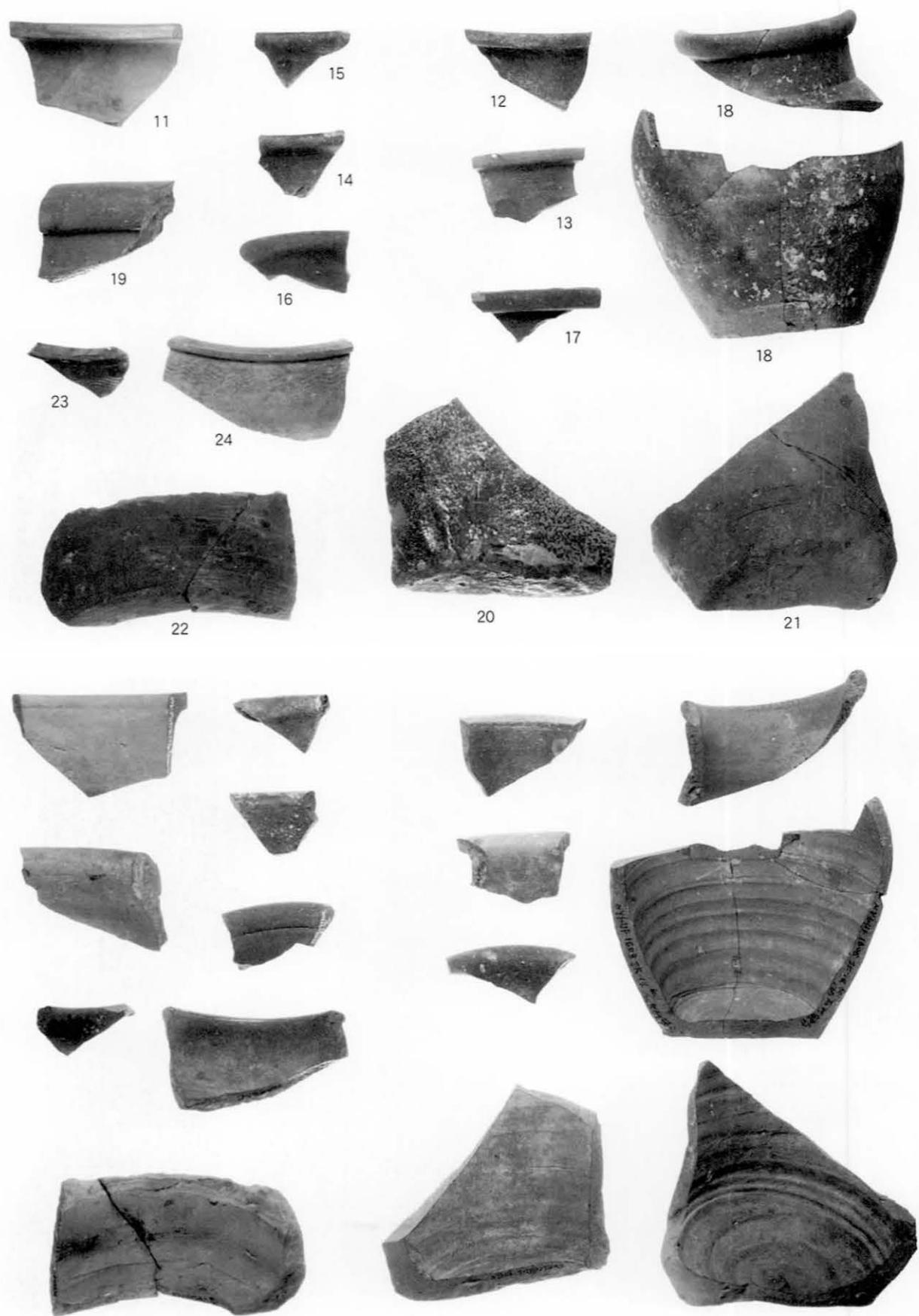
図版26 産地不明陶磁器



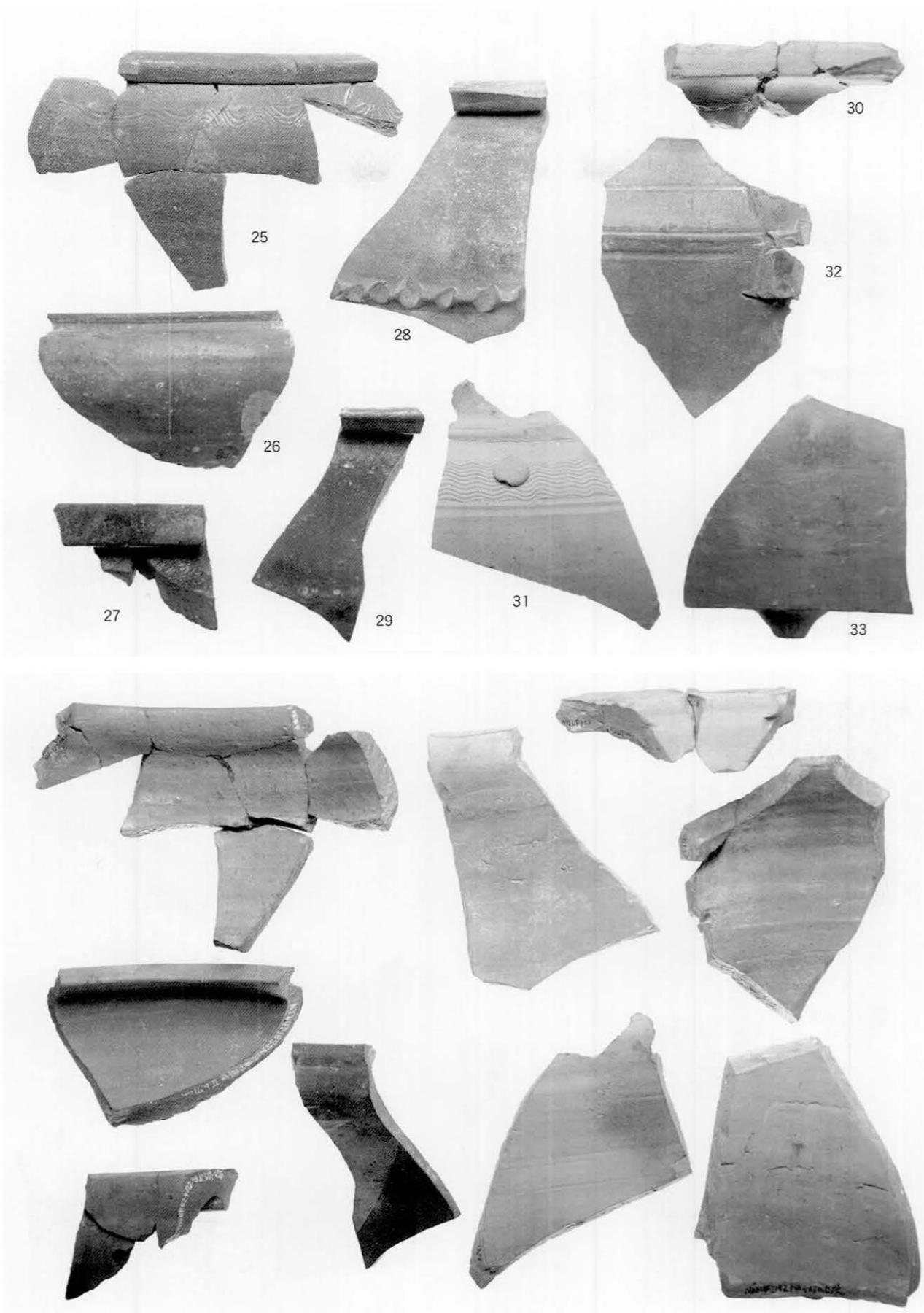
図版29 高麗系瓦③



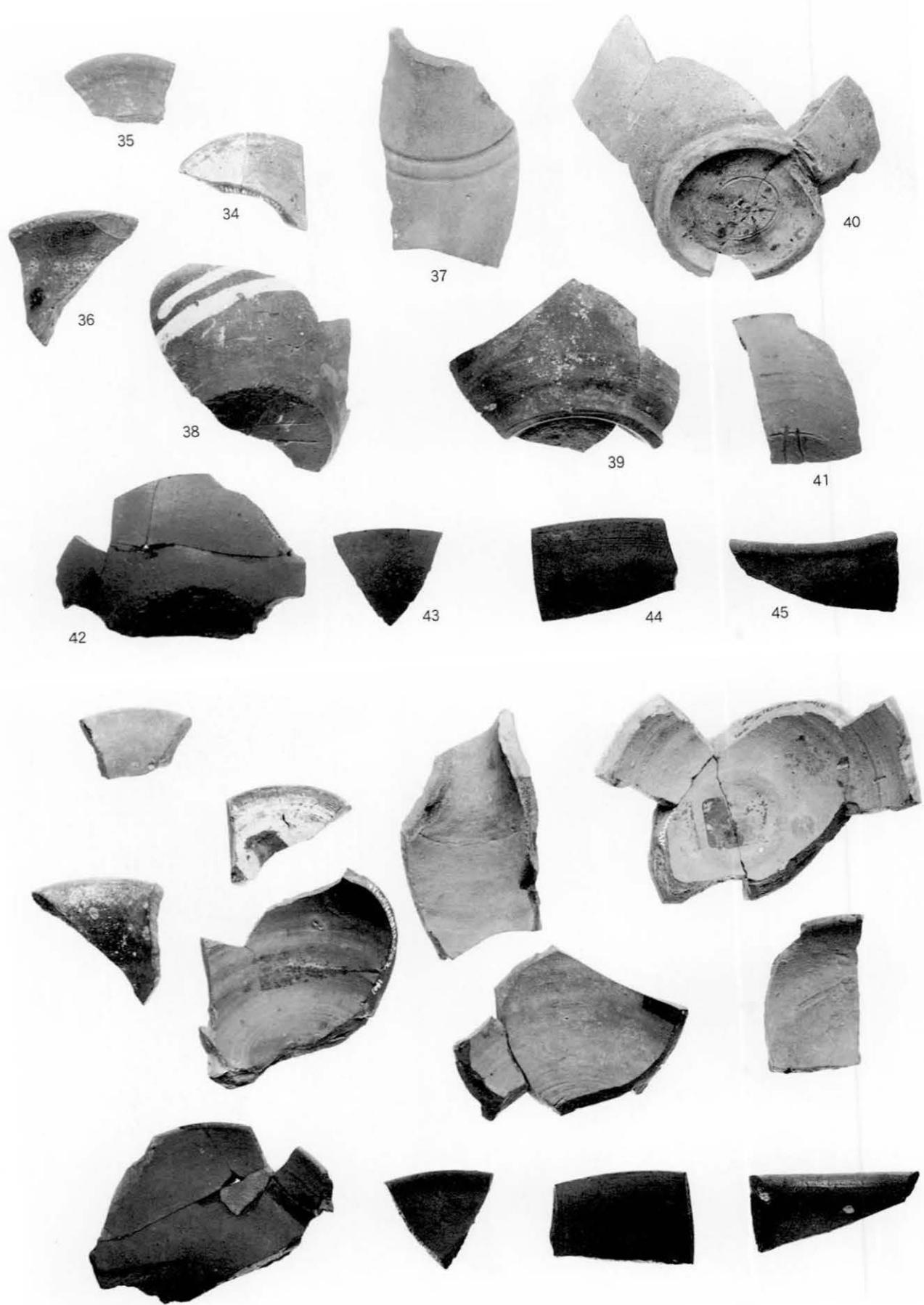
図版30 沖縄産無釉陶器①



図版31 沖縄産無釉陶器②



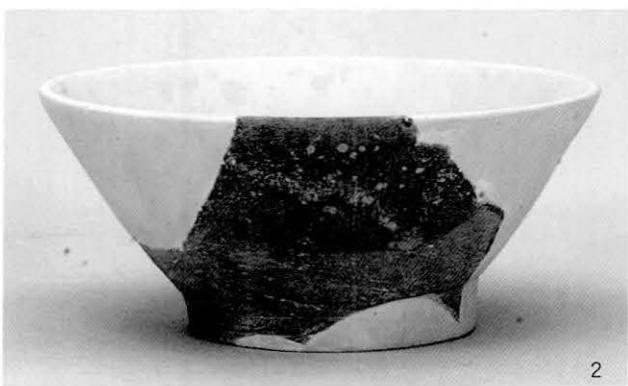
図版32 沖縄産無釉陶器③



図版33 沖縄産無釉陶器④



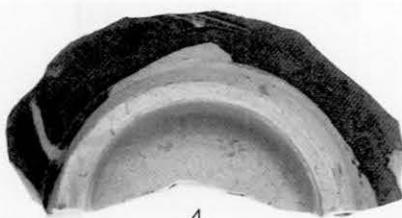
1



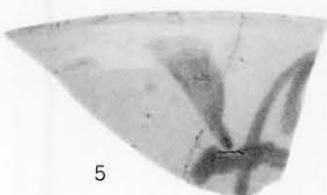
2



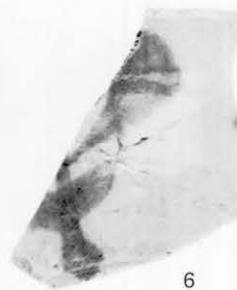
3



4



5



6



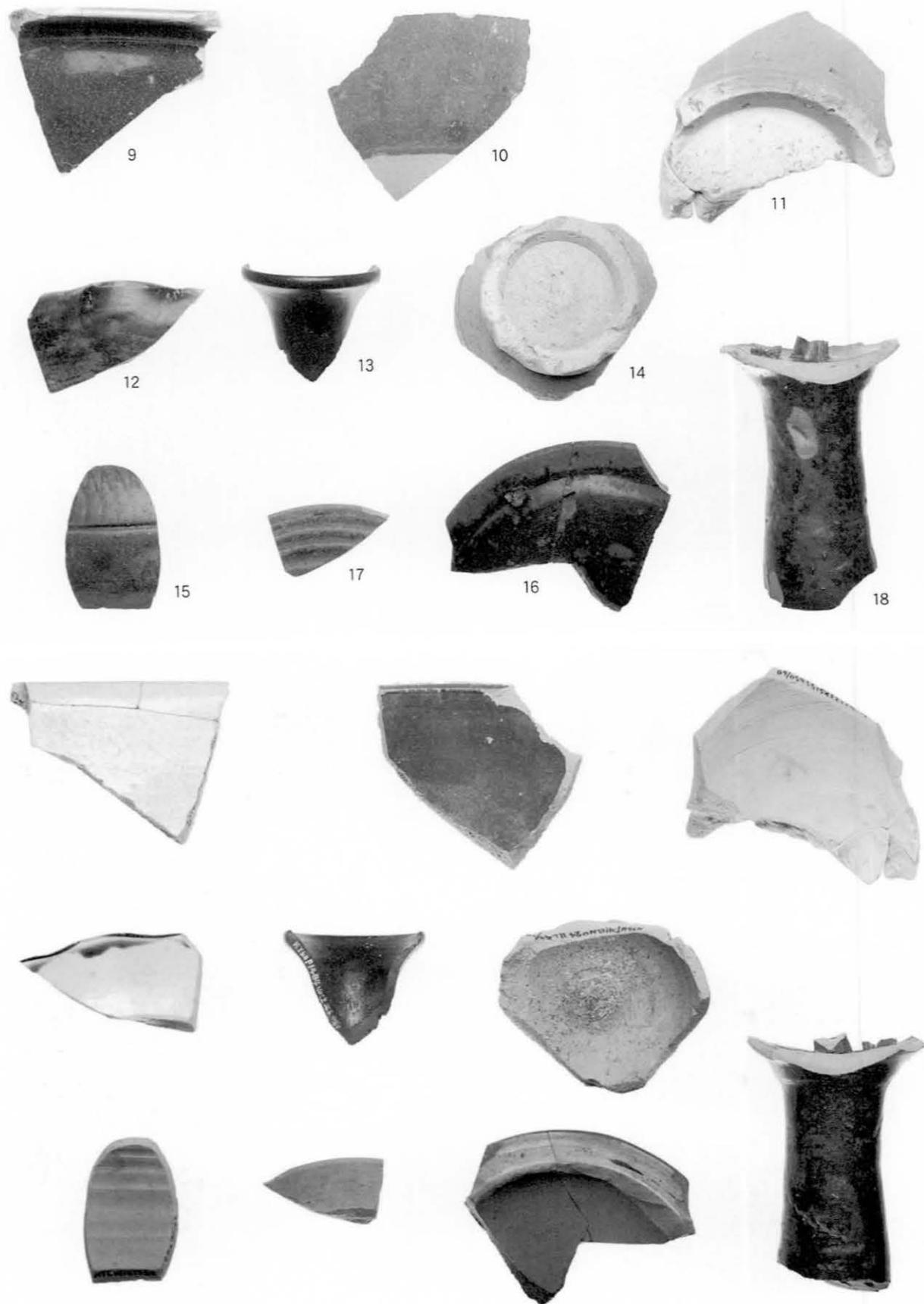
7



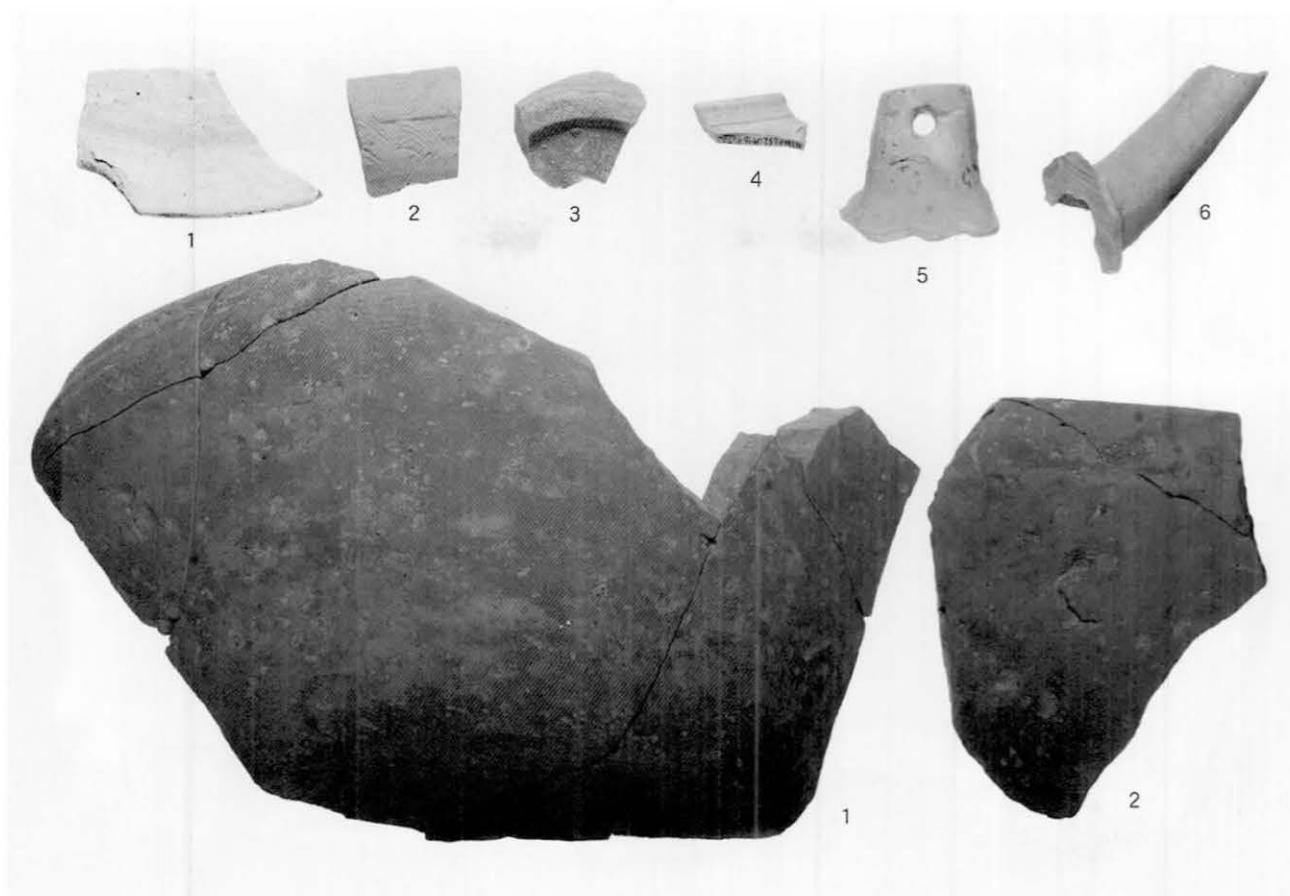
8



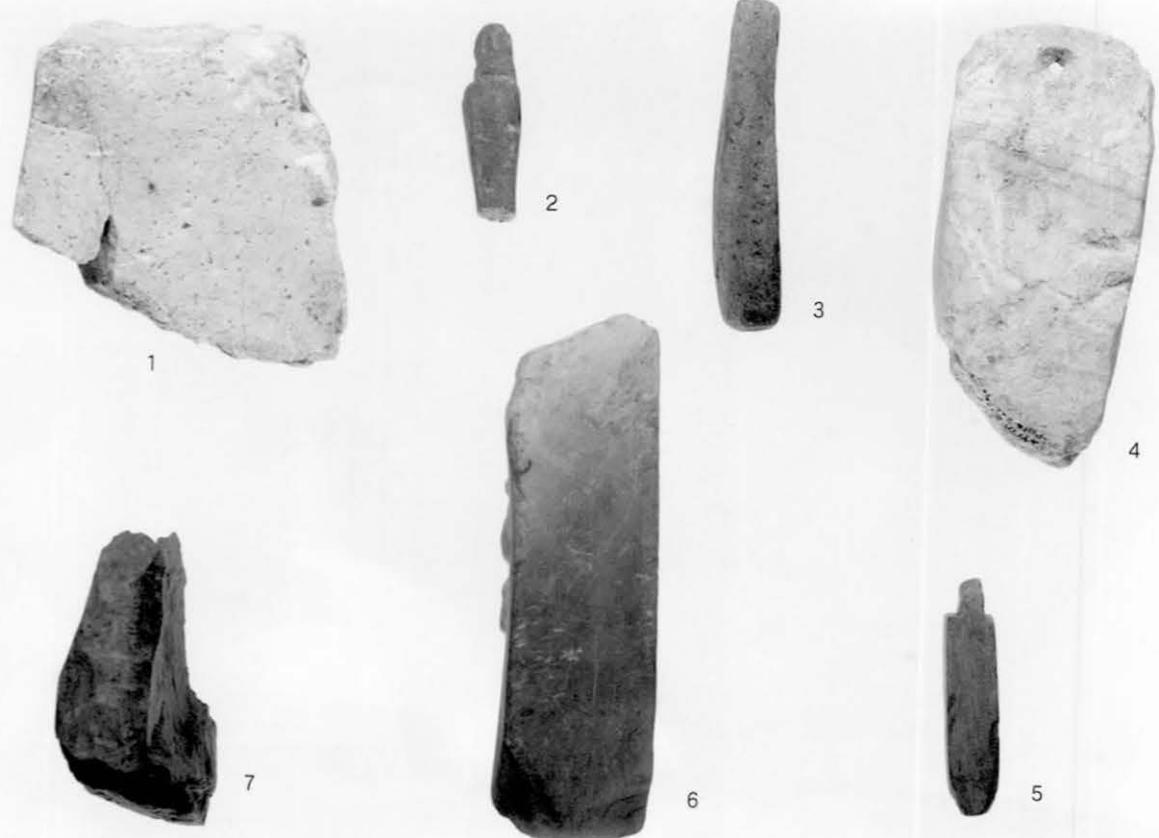
図版34 沖縄産施釉陶器①



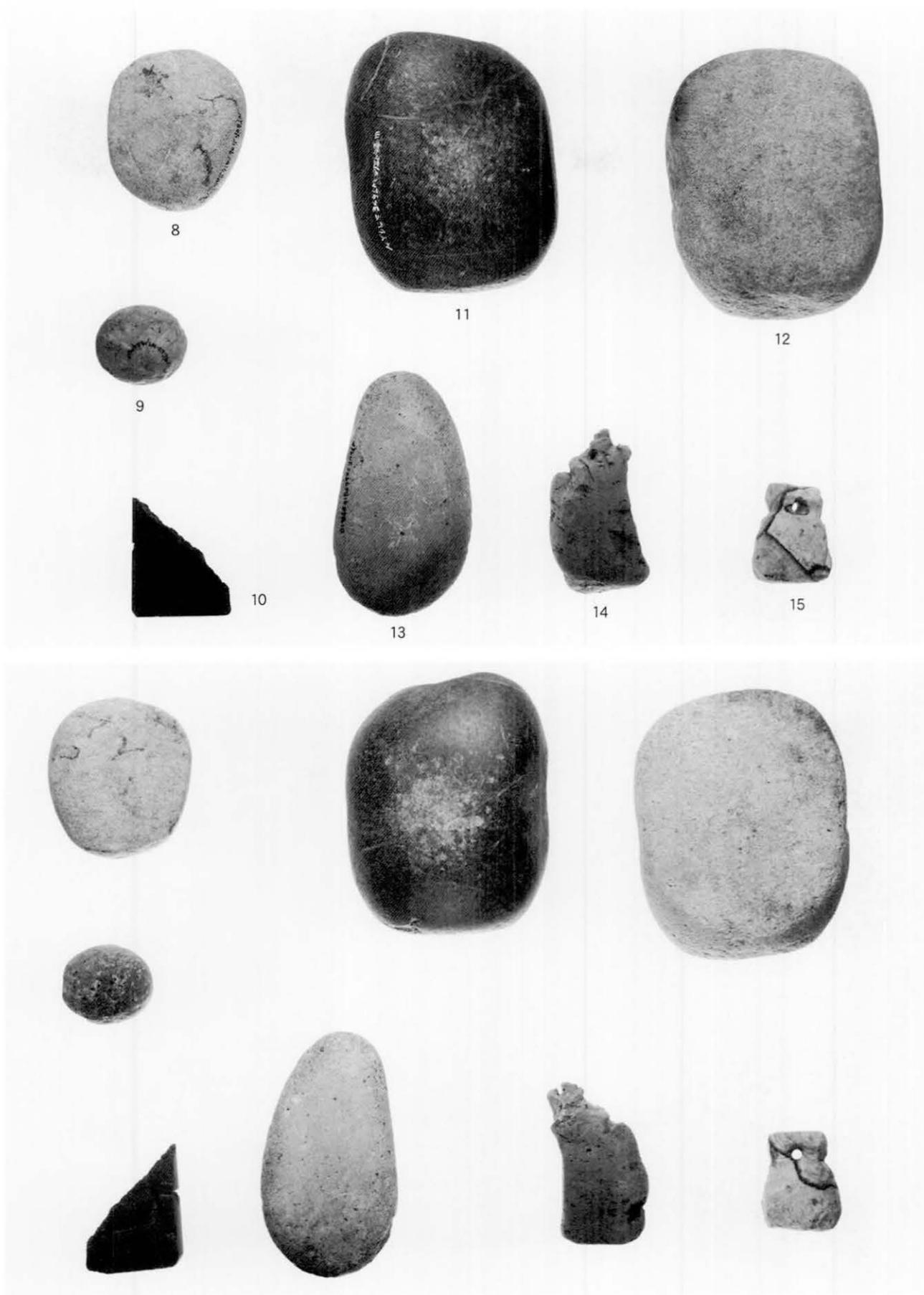
図版35 沖縄産施釉陶器②



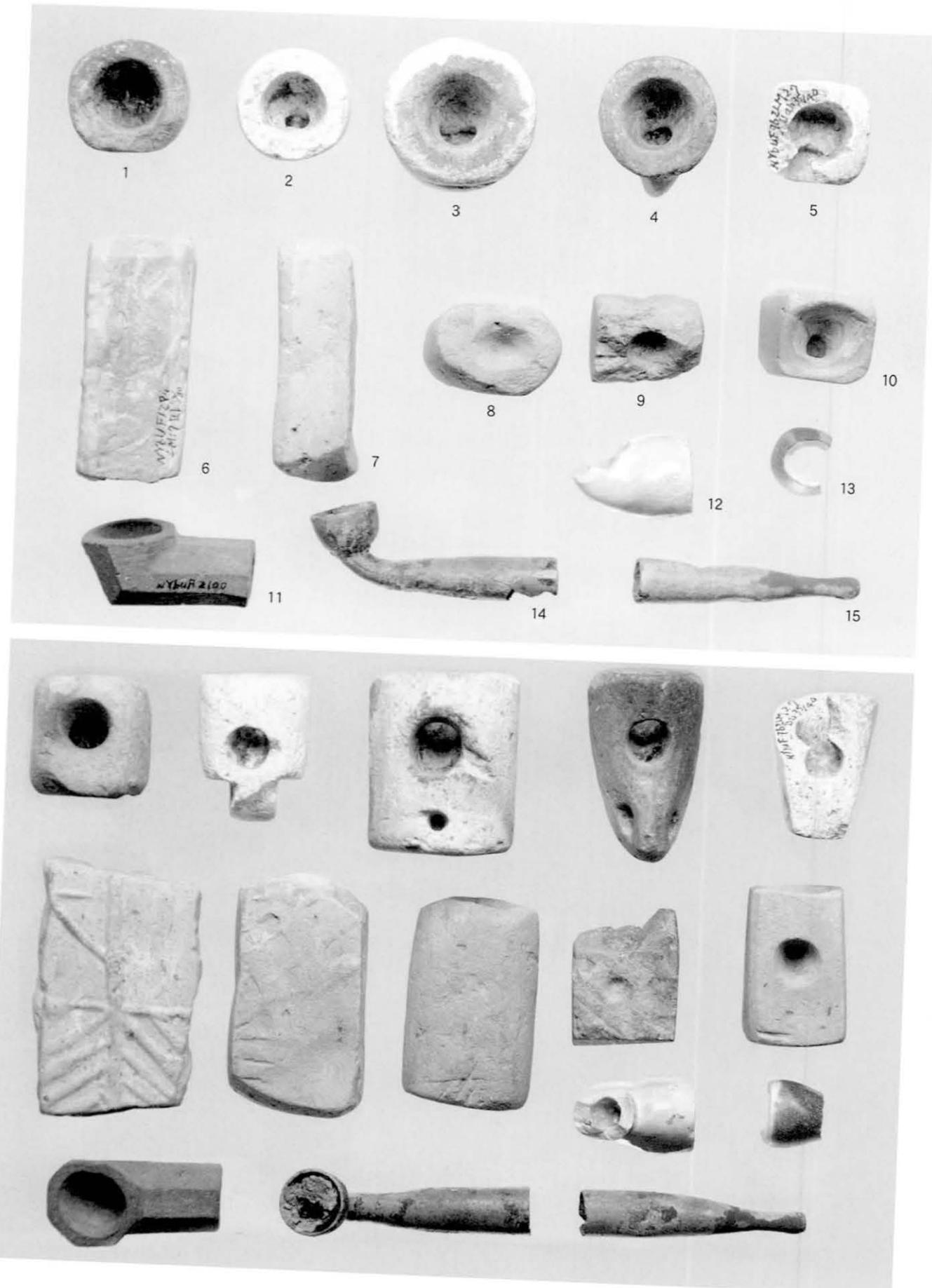
図版36 沖縄産陶質土器・瓦質土器



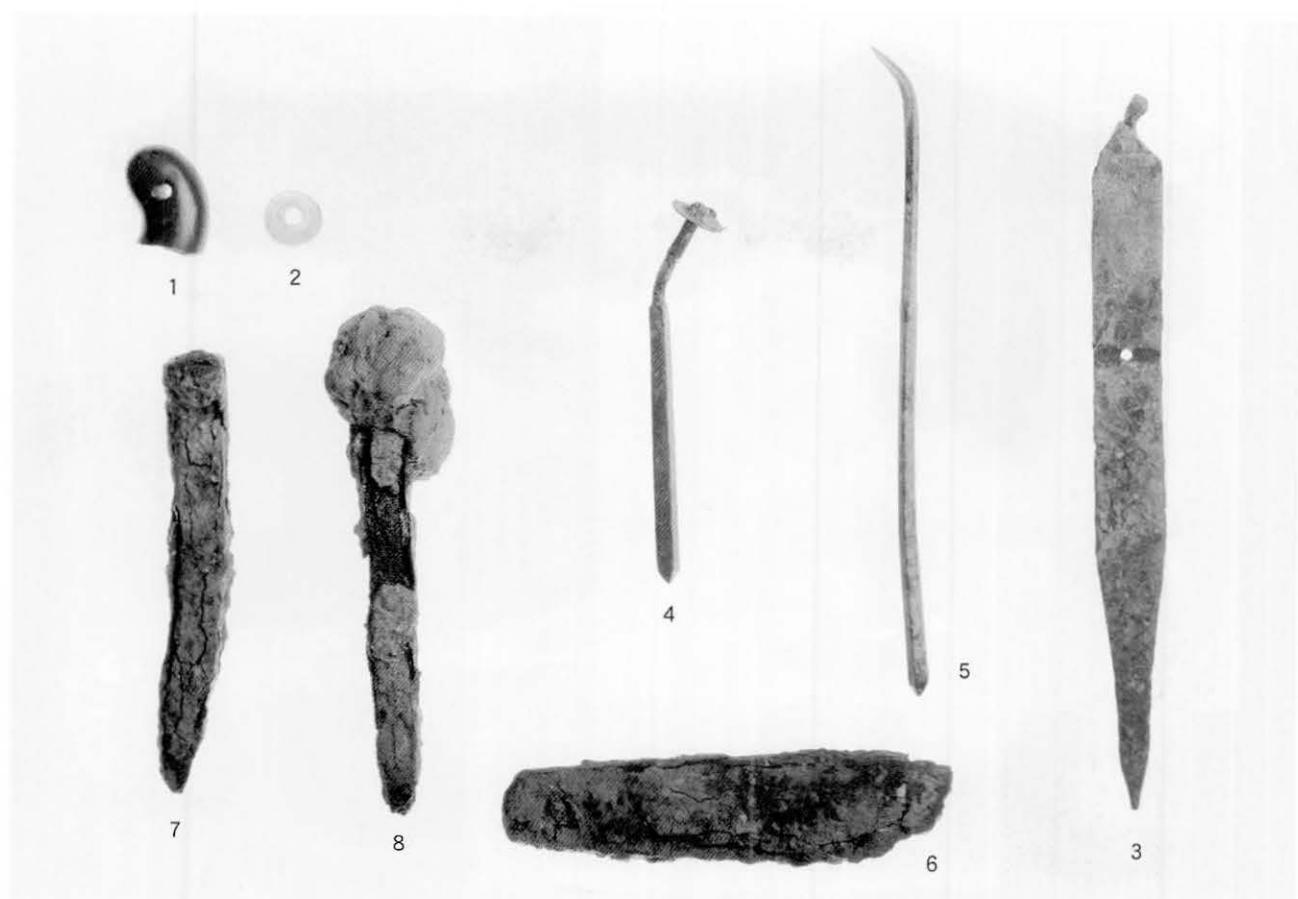
図版37 石器・石製品



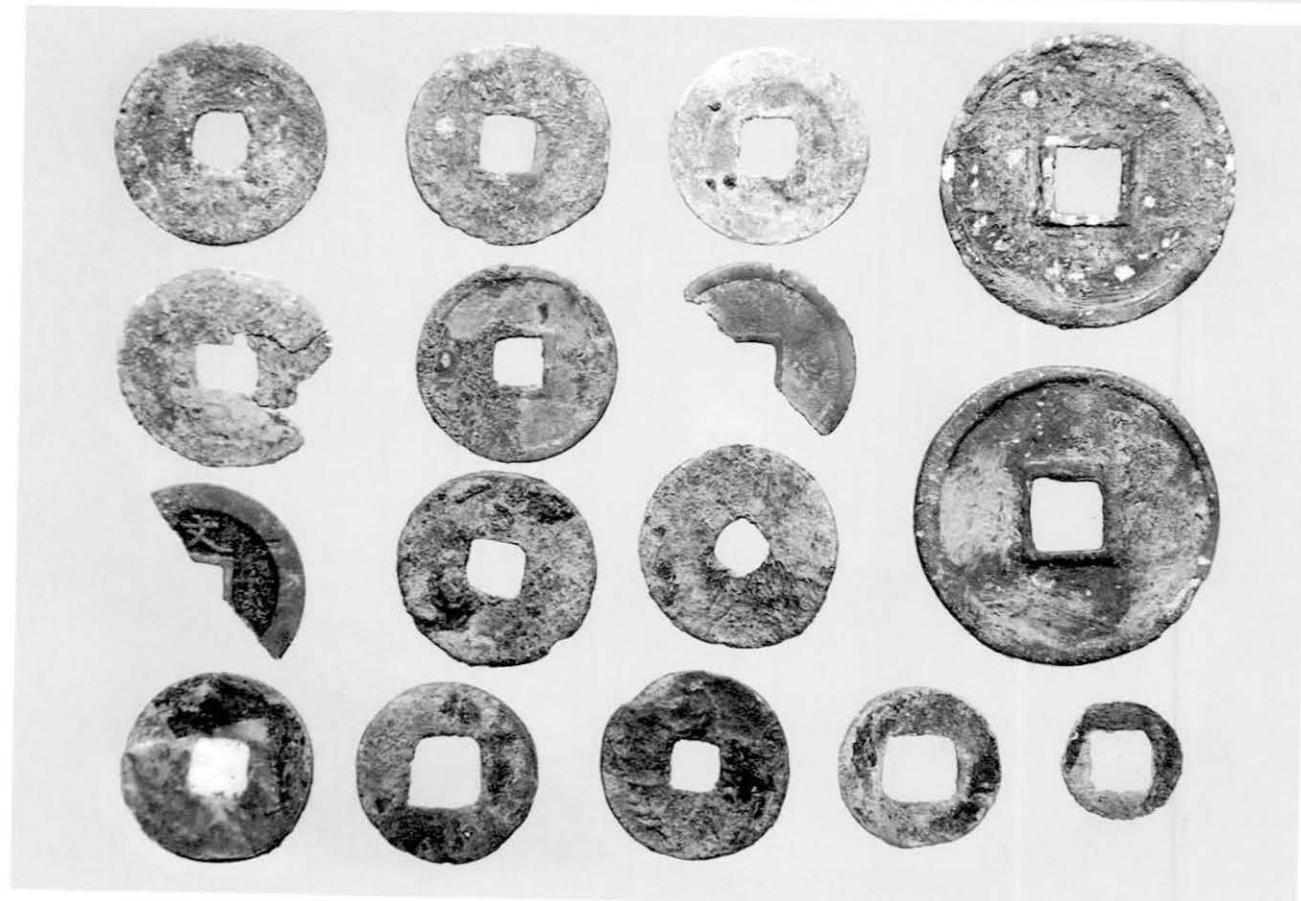
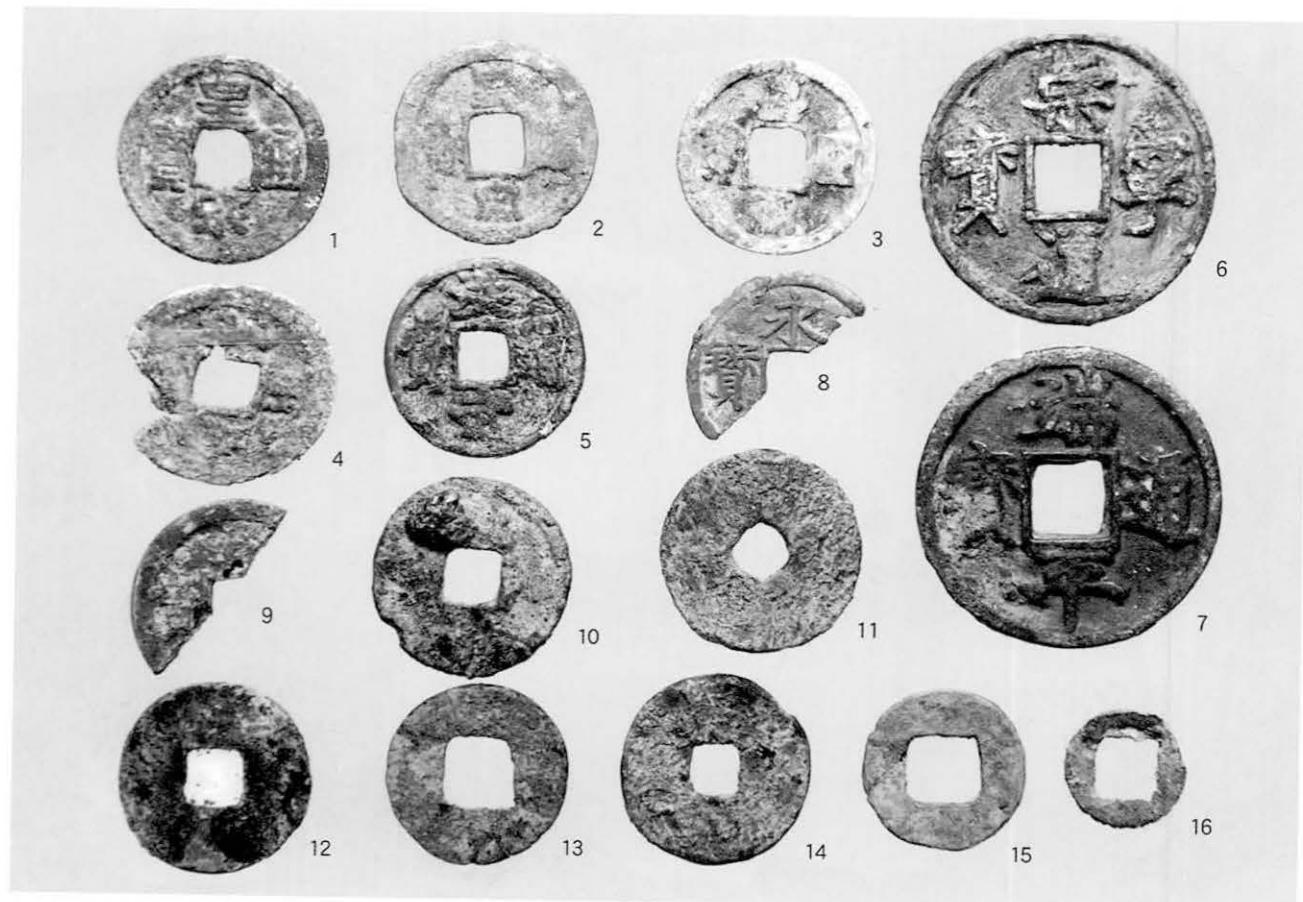
図版38 石器・石製品



图版39 烟管



図版40 玉類・金属製品



図版41



1



2



3



4



5

図版42 木製品

報告書抄録

ふりがな	うむさふるじまいせき							
書名	宇茂佐古島遺跡							
副書名	宇茂佐第二土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査							
卷次								
シリーズ名	名護市文化財調査報告書							
シリーズ番号	13							
編著者名	比嘉久 岸本利枝 仲宗根禎							
編集機関	名護市教育委員会社会教育課文化財係							
所在地	〒905-0014 沖縄県名護市港二丁目1番1号 TEL(0980)-53-5429							
発行年月日	1999年(平成11年)2月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うむさふるじまいせき 宇茂佐古島遺跡	おきなわけんなごし 沖縄県名護市	名護市 47209	『名護市の 遺跡(2)』 1982年 5-6	26° 35' 51"	127° 57' 26"	1995.10.23 ~ 1997.9.14	8,713m ²	土地区 画整理事業に 伴う緊急発掘 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記記事	
宇茂佐古島遺跡	古集落跡	室町～江戸時代 相当期 グスク時代末～ 近世琉球 15世紀～18世紀初	高倉跡 井戸跡 畑跡	在地土器 中国産陶磁器 タイ産褐釉陶器 韓国産象嵌青磁 備前播鉢 肥前陶磁器 沖縄産陶器 高麗系瓦 石器 煙管 銭貨				

名護市文化財調査報告書 — 13

宇茂佐古島遺跡

— 宇茂佐第二土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査 —

1999年2月26日

編集・発行 名護市教育委員会

名護市港2-1-1

電話 (0980) 53-5429
